

I CHING-SYSTEM



HANDBOOK

私家版易経へのアプローチ Ver 2.04

目次

第Ⅰ部	イントロダクション	1
第 1 章	はじめに	3
1.1	経緯と謝辞	3
1.2	本書について	5
第 2 章	クイックスタート	9
2.1	用意するもの	9
2.2	占い方	10
第 3 章	易システムとはなにか	17
3.1	易経の本体	17
3.2	占術の役割	20
3.3	偶然	21
3.4	自分のことは自分で	23
3.5	伝統的易経と易システムの関係	23
第Ⅱ部	Game of Changes	27
第 4 章	オーバービュー	29
4.1	なぜこの部が必要なのか	29
4.2	オーバービュー	31
4.3	本源	35
第 5 章	顕現	39
5.1	無極と本源	39
5.2	無極	40
5.3	両儀	41

5.4	四象	43
5.5	八卦	46
5.6	六十四卦	48
第 6 章	顕現の原動力	53
6.1	ツイストペア	54
6.2	マスターマトリクス	54
6.3	八卦はメタフィジカル	60
6.4	ミッシングリンク	61
6.5	フィボナッチ数列の探求	62
6.6	ツイストペア・ホイール	86
6.7	創造の 6 ステップ	96
第 7 章	帰還	107
7.1	ディレクトリとしての易システム	107
7.2	魂のテンプレート	109
7.3	OD をいかにして定めるか	118
7.4	ベゼルという概念	120
7.5	ベゼルから OD を導く	125
7.6	動的に変化するテンプレート	138
7.7	テンプレートをよむ	140
第 III 部	Book of Changes	157
第 8 章	得卦を読み解くカギ	159
8.1	陰陽	160
8.2	大成卦の一般構造	163
8.3	得卦の判断	173
8.4	派生卦	182
8.5	十二消長卦一般	188
第 9 章	八卦リスト	195
凡例		196
1:乾		198
2:兌		200
3:離		202
4:震		204

5:巽	206
6:坎	208
7:艮	210
8:坤	212
第 10 章 六十四卦リスト	215
凡例	216
11:乾	219
12:履	221
13:同人	223
14:无妄	225
15:コウ<女へんに后>	227
16:訟	229
17:遯	231
18:否	233
21:夬	235
22:兌	237
23:革	239
24:随	241
25:大過	243
26:困	245
27:咸	247
28:萃	249
31:大有	251
32:ケイ<目へんに癸>	253
33:離	255
34:噓ゴウ<口へんに盍>	257
35:鼎	259
36:未済	261
37:旅	263
38:晋	265
41:大壮	267
42:帰妹	269
43:豊	271
44:雷	273
45:恒	275

46:解	277
47:小過	279
48:予	281
51:小蓄	283
52:中孚	285
53:家人	287
54:益	289
55:巽	291
56:渙	293
57:漸	295
58:觀	297
61:需	299
62:節	301
63:既濟	303
64:屯	305
65:井	307
66:坎	309
67:蹇	311
68:比	313
71:大蓄	315
72:損	317
73:賁	319
74:頤	321
75:蠱	323
76:蒙	325
77:艮	327
78:剝	329
81:泰	331
82:臨	333
83:明夷	335
84:復	337
85:升	339
86:師	341
87:謙	343
88:坤	345

第 11 章 ツイストペアリスト	347
凡例	348
TP01	349
TP02	350
TP03	351
TP04	352
TP05	353
TP06	354
TP07	355
TP08	356
TP09	357
TP10	358
TP11	359
TP12	360
TP13	361
TP14	362
TP15	363
TP16	364
TP17	365
TP18	366
TP19	367
TP20	368
TP21	369
TP22	370
TP23	371
TP24	372
TP25	373
TP26	374
TP27	375
TP28	376
TP29	377
TP30	378
TP31	379
TP32	380

第Ⅳ部 その他のトピック・用語集・索引	381
易システムのバックボーン	383
さまざまなベゼル	393
デシジョン・メーカーとしての易システム	401
「20の銘板」と周易の用語対応	405
遺伝暗号と易卦の対応	411
7 : 7 : : 7 : 7の放射子の立方体と「63 : 既済卦」	423
用語集	429
索引	435
参考文献	437

第I部

イントロダクション

第 1 章

はじめに

1.1 経緯と謝辞

このハンドブックには「易システムハンドブック Ver2.0」という名前がついています。Ver「2.0」というからには、Ver1.0 があります。

日記によれば、著者自身が独自に理解し、利用している「易経」*1 を、はじめて他の方にお話させていただいたのは 2005 年の 9 月 28 日でした。そのとき、第 1 回目はおふたりの女性にお話をさせていただきました。

それ以降このあつまりは、多少のメンバーの増減はありましたが、毎回 2～3 名の方にコーヒーショップのオープンスペースでお話させていただくという、とてもこじんまりしたカタチで 1 年 8 ヶ月、全 12 回あまり続けました。また、はじめてすこしたったころ、著者のうちの近所でも話を聞きたいという人があらわれ、こちらはコーヒーショップとは別の場所で並行してお話させていただきました。

このあつまりはだいたい月 1 回のペースで比較的コンスタントに続き、2007 年 5 月 19 日に一応の区切りを迎えました。

とくにレクチャー（というのもおこがましい、ヘタなおしゃべりですが……ほかにいい言葉がないので使わせてもらいます）に必要不可欠というわけではなかったのですが、テキスト*2 以外に自分の考えをまとめるためと、ふだんもちあるいて使っていただくために、文庫本サイズの冊子をつくりました。

これが、「システムハンドブック Ver1.0」です。最初の Ver1.0 が完成したのは、2007 年 1 月のことでした。

その後、レクチャーの方はいままで聞いてくださった方々から、あたらしい方々へバトナタッチされるかたちでセカンドクールに入り、その過程で、10 冊作成した「易システム

*1 著者の独自解釈による、いってみれば「私家版の易経」を本書では「易システム」といっています。

*2 レクチャーのテキストはすべてパワーポイントでつくりました。テキストといっても読み物としてまとまっているわけではなく、要点だけの書類です。

ハンドブック Ver1.0」は配布完了となりました。

Ver1.0 は小数点以下1桁の「レベル番号」まで一応ふってありますが、レベルアップされることなく、セカンドクールでお話させていただく中で、Ver1.0の内容を取り込み、さらに拡張して「Ver2.0」を作成しました。

Ver2.0 は最初にレクチャーを聞いてくださった方々にまず配布し、その後、インターネットでリクエストをくださった方、その他希望される方々に少数部配布させていただきました。その過程でまちがいや、余分な記述の削除、ファミリーの概念における若干の修正を加え、現在に至っています。また、現在はこのハンドブックの続編である「風と羅針盤（仮題）」を作成中です。

月並みですが、著者が、自分の易を他の方々にお話させていただくという過程で、とても深く感じたのは、やはり人と人との「つながり」です。

自分の中に「出力」したいものがあるのはなんとなく感じてはいたのですが、聞いてくださる方がひとりもいなければ、この「出力」は決してカタチになることはありませんでした。

最初にレクチャーをはじめた頃は、カリキュラムすらなく、毎回次に話すことを考え、テキストをつくりながらの自転車操業でした。いったい全何回でこのコースは終わりになるのか、それすらわからない状態でのスタートだったのです。

くりかえしになりますが、ぼくが自分の考えをある程度まとめることができたのはつたない話を聞いてくださる方々がいらっしゃったからこそです。内容もわからないし、何回で終わるのかもわからない話を聞いてくれる人はそうそういません。

有形無形を問わず、この本の制作に関わってくれたすべての人々にこの場を借りてあらためて感謝したいと思います。

この本や、ぼくの考え自体が、たんなる自己満足にならないですんでいるのは「レクチャー」聞いてくださった方々と、今、この本を読んでくださっているみなさんのおかげです。

ありがとうございます。

感謝します。

磁気の月 青い共振の嵐の年（2012年8月）自宅にて

1.2 本書について

謝辞のところでも少し書きましたが、システムハンドブック Ver1.0 では、とにかく持ち歩いていただいて、易というシステムを「使って」もらうことを主眼として作成しました。サイズを最優先にして、内容はどちらかというとリファレンスに近いものでした。たとえば立卦法などは省略され、レクチャーを受けていただくことが暗黙の前提になっていたのです。

このシステムハンドブック Ver2.0 では、Ver1.0 の内容をふまえて、リファレンスというよりも易システムの内容をできるだけ詳しく知ってもらうために、伝統的解釈も含め、入れられる情報はすべて入れて、レクチャーを受けていない人でも（受けた人はもちろん）、これを参照すれば、ご自分でさまざまに応用してもらえるように作成したつもりです。

あたまから読んでくださってもかまいませんし、「第2章 クイックスタート（9ページ）」から入っていただいてもかまいませんし、必要な部分だけを読んでくださってもかまいません。本書の使い方にとくにルールはありません。

ただし、用語・述語に関しては原則として初めて出てきたところで説明し、それ以降は特に説明を加えずにそのままつづいていますので、意味のわからない言葉が出てきた場合は、前にもどってその語の説明がある部分を参照していただくか、「用語集（429ページ）」などを参照してください。

本書はイントロダクションであるこの部をのぞき、大きく分けて二つのパートからなりたっています。

ひとつは「Game of Changes」*3の部で、この部*4では、易システム全体を、わたしたちがくらすこの宇宙が創造されたプロセスのモデルとして考えた場合の、ひとつのとらえかたの例を説明しています。そういう意味では著者独自の「創作神話」ということもできるかと思いますが、ことさらそれをねらったわけではなく、このお話に人格神は登場しません。

もうひとつは「Book of Changes」の部で、こちらは、易システムのアプリケーションのひとつである「占術」に関する説明になっています。伝統的方法を中心に一般的に用いられる卦の読み方を紹介しています。八卦や六十四卦のリストはこの部に含まれます。

以下に、本書の概要を示します。

*3 易経は英語では「Book of Changes」といいます。「Game of Changes」はそれをもじったタイトルです。

*4 システムハンドブック Ver1.0 における上スピリットの上昇・下降の構造はこの部に含まれます。

- イン트로ダクション

- － はじめに

- 本章です。

- － クイックスタート

- まずは手っ取り早く、システムに触れていただく方法をご紹介します。易に触れるのがまったく初めての方はこちらからどうぞ。

- － 易システムとはなにか

- システムの基本原理——ただしくいえば著者の易や占術に関する見解——、本書で述べる易システムのどこが伝統的解釈にコミットしているか、どこが独自の解釈なのか、ということについて説明しています。

- Game of Changes の部

本書では、この宇宙の本源であると想定している「あらゆる可能性の場」が形をとり、微細なレベルから粗大なレベルへと現れてくる——展開してくるプロセスを「顕現」、一方、粗大なレベルから本源へとむかうプロセスを「帰還」と呼んでいます。

易システムの従来構造——伝統的な易経に示されている構造——を用いると「顕現」をモデル化することができますが、「帰還」を考慮しようとする、あたらしい構造が必要になってくるようです。

この部ではそのふたつの路について考えてみました。

- － オーバービュー

- 単純に占術として利用するだけなら、一見、この部写到あるようなことは必要ないかもしれません。ここでは、創造のプロセスを易の言葉をつかつてなぞることの意味や、以下のふたつの章に共通する事項について説明しています。

- － 顕現

- 易システムの従来構造だけを用いて、現在、一般的に認識されている宇宙の創造過程を考えてみました。

- － 顕現の原動力と帰還

- 易システムの従来構造から、新しい構造をみちびき、それを顕現と帰還における原動的な力のシンボルと想定し、上記、顕現の背後にある原理と本源へ至る過程を考えてみました。

- Book of Changes の部

- － 得卦を読み解くカギ

伝統的な解釈にしたがって、主に占術の観点から、すべての大成卦に共通する概念を説明しています。次のリファレンスの項目における各大成卦個別の意味を布地の縦糸とするなら、共通概念はその横糸です。一枚の大きな易システムという反物は、この縦糸と横糸が組み合わさってできています。

ー リファレンス（八卦リスト、六十四卦リスト、ツイストペアリスト）

八卦、大成卦、そして易システム（私家版易経）独自の概念である「ツイストペア」について、各個別の意味を説明をしています。易システムを使い続けるなら、もっとも頻繁に参照する部分になるでしょう。

最後に本書をお読みになるにあたって、いくつかの留意事項をあげておきます。

- 本書では、主に論理でなく^{イメージ}連想によってお話が展開しています。
- 本書では、論理はむしろ、^{イメージ}連想による^{みたて}基盤の後に利用されました。
- 上記の流れは、得卦（占って得られた易卦）を占断する際の一般的な流れでもあります。
- そのようなわけでリクツはしばらくわきに置いておつきあいいただければと思います。

第2章

クイックスタート

ここでははじめての方のために、最も簡単に占う方法をご紹介します。最低限必要な方法だけを説明していますので、ここで説明されている以外の立卦法^{*1}や、さらにくわしい解釈——リーディングの方法をお知りになりたい方は、易占に関する他の文献をあたるか、「III 部 Book of Changes (159 ページ)」を参照してください。

2.1 用意するもの

1. 八面サイふたつ（色違い）

正八面体のさいころをふたつ。1～8までの数字が刻まれているもの。何色でもかまいませんが、べつべつ色のものを用意してください。100 円ショップや玩具店で手に入ります。

2. 六面サイひとつ

正六面体＝立方体の普通のサイコロをひとつ。すごろくに使うようなサイコロでもかまいませんし、1～6までの数字が刻まれているものでも、どちらでもかまいません。

3. 本書

結果の意味を調べるのに使います。

^{*1} 【立卦法】 易で使われているシンボルを「卦」といいます（八卦、六十四卦など）。64 パターンある「大成卦」から、無作為にひとつの卦を取り出すことを立卦、その方法を立卦法といいます。

2.2 占い方

2.2.1 卦を立てる

1. 準備

色違いの八面サイをふって2桁のコード番号をつくりませんが、その際、どちらを十の位の番号にして、どちらを一の位の番号にするか決めておきます。

そして、一度決めたルールは以後、変えないでください。結果が出てから（サイをふってから）、どちらを十の位にしてどちらを一の位にするか決めたのでは、作為が入り込むことになるからです。

2. 問いを立てます。

どんな問いでも結構です。真剣な問いでも日常的な問いでもかまいません。ただ最初のうちは、なるべくなら YES か NO で答えられるような問いがいいでしょう。深刻な問いや、抽象的な問いは慣れないうちは避けたほうがいいと思います。

注：

おなじ問いについて、何度も占わないでください。

同じ問いで2回以上占うということは、最初の結果が「氣にくわなかった」からではないでしょうか。もしそうなら、「氣にくう」結果が別にあったということになります。「氣にくう」結果がべつにあるのなら、最初から占う必要などなかったのかもしれませんが。あなたはあなたが選んだその「氣にくう結果」に従えばいいのです。

同意を得るために占うこと……を、否定するわけではありませんが、同意を得るために占うのか、アドバイスを求めるために占うのか、意識しておく必要はあると思います。

アドバイスに従う気がないのなら、アドバイスを求めるような問いは避けてください。

それでも、どうしても同じ問いについて占いたい場合は、明らかに状況が変わったと思えるだけの十分な時間がたった後か、あるいは、質問の角度を変えるなどの工夫をしてください。

短時間に同じ問いについて何度も占うことは、単にあなたを混乱させるだけです。

3. サイをふります。

八面サイふたつと六面サイひとつをよくふって、同時に投げます。

リラックスして、深呼吸して、問いを心の中に思い描いて……

明確になったその刹那……エイヤッ！と八面サイをなげる！

そんな感じです。

できるだけ集中してください。

4. 結果をメモします。

たとえば、十の位と決めた八面サイが「6」、
一の位と決めた八面サイが「3」、
六面サイが「1」なら、

「6 3 - 1」

のようにメモします。
さらに、次の表を参照して、

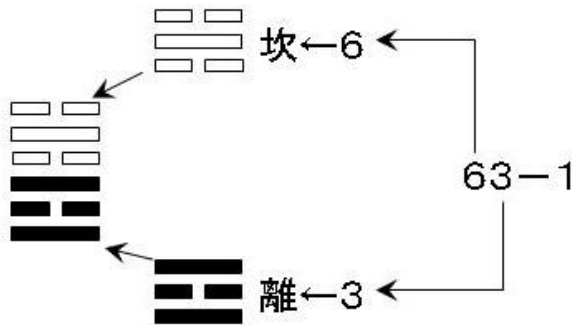
1	乾(けん)	
2	兌(だ)	
3	離(り)	
4	震(しん)	
5	巽(そん)	
6	坎(かん)	
7	艮(ごん)	
8	坤(こん)	

一番左の列のコード番号から、一番右の列の八卦のシンボルを確認します。真ん中の列は、各八卦につけられた名前とその読み方ですが、とりあえず今はあまり気にしなくてもいいでしょう。

一の位にあたる番号の八卦のシンボルを下、十の位にあたる八卦のシンボルを上にして重ね、合計六本の切れた線またはつながった線でできたシンボルをつくり、これもメモしておきます。

この一本一本の線を「爻こう」といい、切れた線であらわされる爻は陰、つながった線であらわされる爻は陽を意味しています。爻が六本重なってできたシンボルを「大成卦だいじょうか」といいます。

「6 3 - 1」の目が出た場合の例を次に図示します。



「63-1」の「1」、六面サイの目については「2.2.2 解釈する (12 ページ)」で説明します。

2.2.2 解釈する

基本の解釈

「2.2.1 卦を立てる (10 ページ)」で八面サイふたつをふってできた「コード番号」はそのまま、各大成卦のコード番号になります。「10 章 六十四卦リスト (215 ページ)」に、11～88までの各大成卦のリストがありますので、八面サイをふって出たコード番号に相当する大成卦のページを参照します。

たとえば、「63-1」の場合は、これは「63：既済 (303 ページ)」という名前的大成卦になります。

いくつか項目がありますが、「Overview」の項目が、問いに対する最も一般的な回答になります。

どうでしょうか。

それで答えになっていれば OK ですが、あくまで一般的に書かれたもので、著者の独自解釈であることもあり、かならずしもピタッとこない場合があるかもしれません。

そういうときは、「Keyword / Tips」や、「Image」の項目を参照します。

これらの項目に書かれているのは、「Overview」の項目に書かれていることのおおもとになる意味です。ここからあなたなりの『Overview』を組み立てなおして解釈します。

自由に連想して判断してかまいません。この占術に絶対的な解釈というのはありません。最初は多少こじつけっぽく思われることもあるかもしれませんが、それでもかまいません。とにかくながしかの判断をして、できれば記録しておいて、あとで結果を確認しましょう。これをくりかえしているうちに自然に連想が働き、自然に解釈できるようになります。

基本の占い方はここまでです。

何度かくりかえしてみてある程度なれたところで、次の「之卦をみる」「爻をみる」をためてみましょう。

之卦をみる

絶対必要というわけではありませんが、余力があれば、六面サイででた目をつかって「之卦」をチェックしておきましょう。

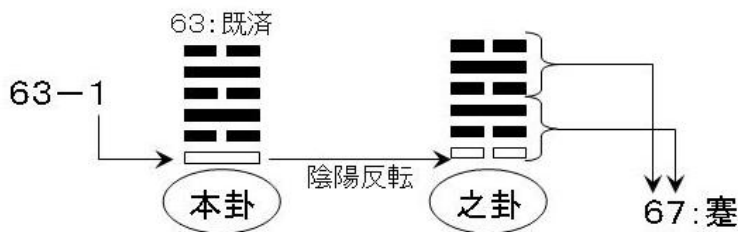
「基本の解釈」で、解釈した大成卦——問いに対する中心の回答になっている大成卦を本卦ほんかといいます。

この本卦から、ひとつの爻の陰陽を反転することによって得られるのが「之卦」です。

具体的には、下からかぞえてn番目の爻が、陰（切れた線）なら陽（つながった線）に、陽（つながった線）なら陰（切れた線）に変えて、あたらしい大成卦をつくります。

nは六面サイをふって出た目です。1なら一番下の爻、2なら下から二番目の爻……6なら一番上の爻を指します。

先の例では、「63-1」で、六面サイの目は「1」でしたから、一番下の爻の陰陽を反転します。図に示すと次のようになります。



八卦は爻3本でできています。大成卦は八卦のシンボルふたつが上下に重なってできています。この大成卦を構成する上の八卦を上卦じょうか、下の八卦を下卦げかといいます。

例では一番下の爻が反転しましたから、下卦が変化することになります。そこで今度は、変化した下卦のシンボルから逆に、コード番号を調べます。次の表を今度は逆に、シンボル（一番右の列）からコード番号（一番左の列）へたどるわけです。

1	乾(けん)	
2	兌(だ)	
3	離(り)	
4	震(しん)	
5	巽(そん)	
6	坎(かん)	
7	艮(ごん)	
8	坤(こん)	

そうすると、例では下卦＝3、離が、下卦＝7、艮に変化したことがわかります。結局、63：既済が、67に変化したことになり、67を「10章 六十四卦リスト」で調べると、311ページの、「蹇」という大成卦であることがわかります。これが求める之卦です。

さて、この之卦をどう解釈するかですが、「10章 六十四卦リスト (215 ページ)」を参照しながら本卦とおなじように解釈します。

ただし、之卦の場合は、問いに対する「重み」が本卦ほどありません。あくまでも本卦の「コメント」ととらえるようにしてください。

どのような「コメント」ととらえるかは、なにをどのように問うたのかによります。ケースバイケースです。

たとえば、本卦が現在の状態であり、その現在の状態を継続していった場合に引き起こされる将来の結果かもしれません。

あるいはまた、本卦の背景や過去の説明かもしれません。

本卦の回答がわかりにくいものであれば、それを補足する、まさにコメントかもしれません。

「之卦は『いついかなる場合も』将来を意味する」、といった具合に固定的に考えずに、柔軟にとらえるようにしてください。その意味では、ただしくは「之卦は将来を意味することもある」となります。

ふとした思いつきやひらめきがかぎになることもあります。之卦の意味からどのようなコメントなのかを判断し、本卦の意味を帰納的に探っていくとわかる場合もあります。

ただし、問いに対する回答の中心、核、メインは、あくまで本卦であるという原則は外さないでください。

さらにくわしいリーディング方法は、「III 部 Book of Changes (159 ページ)」を参照してください。

爻をみる

さらに余力があれば、「10 章 六十四卦リスト (215 ページ)」の「Legacy」の項を参照して、よりくわしく結果をみることができます。

人により感じ方はさまざまだと思いますが、「Legacy」の項目における記述は、そのものズバリといったストレートな意味が書いてあるわけではありません。

たとえば、ある種の公案^{*2}のようなものです。公案ですから、たいがいは回答をストレートに指し示すことはなく、たとえ——隠喩的な表現になっています。

この部分の記述は易経の経文（爻辞）を意識したものです。漢字（漢文）や読み下し文のいいところもたくさんあるのですが、意味を確認するのに時間がかかってしまいますと、理性、分析的思考、といった、自我の機能が立ち上がり、介在してしまう可能性が高くなります。

最初の印象をつかむプロセスにおいては、これはあまり好ましい状況とはいえません。

ぱっとみてさっと印象をつかむ。

最初の印象——ひらめきさえきっちりつかめば、後は理性なり論理なり分析的思考なりをどんどん活用してもらってストーリーを組み立てていってもらえればいいと思います。

「Legacy」の項目のみかたですが、「Legacy」と書いてあるすぐ下の文は、その卦の全体につけられた文です。卦全体の意味になります。

これは、本卦、之卦ともに参照してください。問いに対するメインの回答が本卦、コメント的な回答が之卦、というのは「之卦をみる」の項で説明したとおりです。

「Legacy」の項目には、○または●印が先頭に記された^{*3}、初、二、三、四、五、上という項目があります。

これらの項目ひとつひとつに文がついていますが、これを爻辞といいます（ただしくは爻辞の意識）。

先に「Legacy」のすぐ下の文は全体状況を示しているといいましたが、この「初、二、三、四、五、上」という項目は、その全体状況内の段階を示しています。すなわち、初が状況のはじまりであり、上が状況の終わりです。

「之卦をみる」のところで使った六面サイで出た目は、この段階を示しています。

初は1、上は6とします。そうすると、自分の問いにたいする回答が、全体的な状況のどの段階に相当するかがわかるわけです。1（初）なら発端、3、4あたりはちょうど状況のヤマ場、6（上）なら、そろそろその状況も終わり……といったところです。

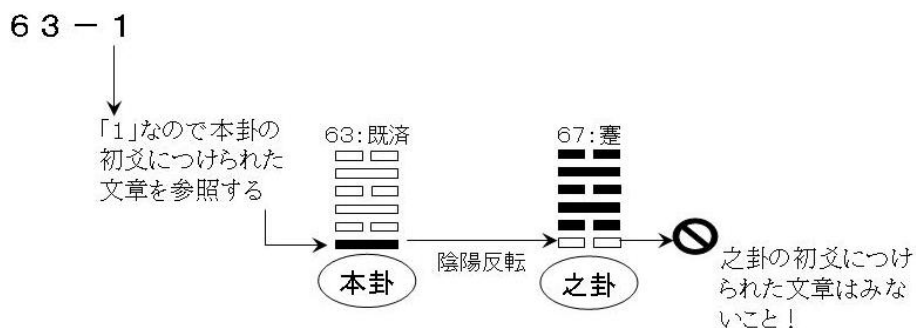
そういったことを踏まえて、本卦の文章を参照してください。

^{*2} 【公案】 禅宗で（主に臨済宗）、参禅者に示して坐禅工夫させる課題。古徳の言行を内容とする難問が多い。[39]

^{*3} ○は陽爻、●は陰爻を示しています。

まちがっても之卦の文章を参照しないように。

まとめると、最初に、八面サイふたつと六面サイひとつをエイヤッ！とふったわけですが、八面サイふたつで問いにたいする大成卦＝本卦がみちびかれ、六面サイがその本卦が示す状況のどの段階にいるのかを示し、その段階の爻が変化すると之卦がみちびかれるという構図になっています。



第3章

易システムとはなにか

3.1 易経の本体

「^{えききょう}易経^{*1}」は、ひとことでいうなら占術の書ですが、つかわれているシンボルの単純さにおいては、おそらく他に類を見ないでしょう。

おおもとが、「陰」と「陽」という、素朴な要素からはじまっているからですが、この陰と陽という単位を複数組み合わせることで単純な表現からだんだん複雑な表現に向かっていく構成になっています。

使われているシンボルの最小単位を「^{こう}爻」といいますが、これは陰を示す切れた線か、陽を示すつながった線のどちらかであらわされます。この爻を6本積み重ねて、ひとつのおおきなシンボルができており、このおおきなシンボルを「^{だいじょうか}大成卦」といいます。

ひとつのおおきなシンボルに、陰か陽を示す線が6本あるわけですから、 $2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2$ で、64とおりのおおきなシンボルがあることになります。

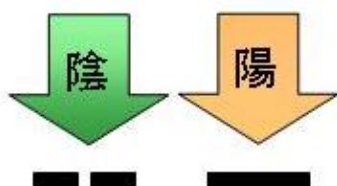


図 3.1 陰陽

^{*1} 【易経】 古くは周易といいます。これは周代に、いま伝わっている形に整備されたからですが、「易経」という呼称は漢代に儒家の経典とされて以降のもので [31]。儒教では、基本経典とされる、「詩経、書経、礼経、楽経、春秋経」の筆頭にあげられていました。

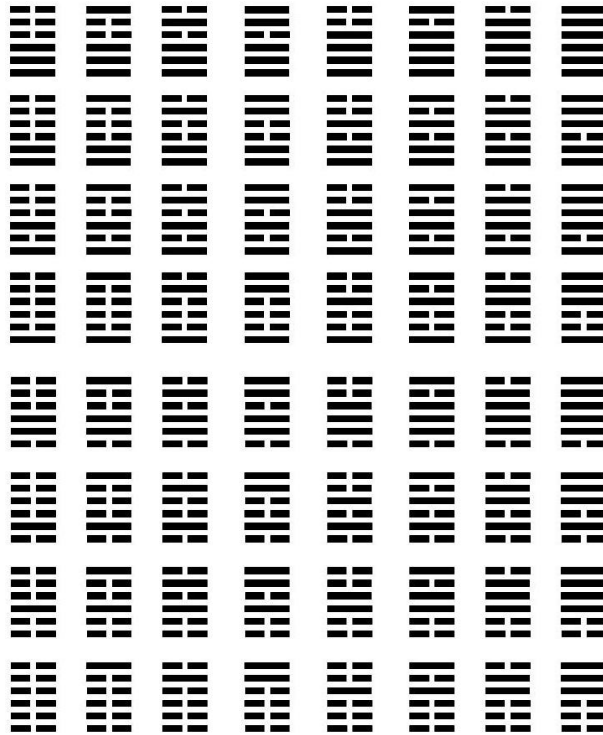


図 3.2 大成卦

易経という古典は、64 種類ある大成卦、そして、全体で $6 \times 64 = 384$ 本ある爻それぞれに言葉をつけたもので、大成卦それぞれにつけた言葉を「象辞」・「象辞」、爻それぞれにつけられた言葉を「爻辞」といいます。

最初にも述べたとおり、易経はまずもって占術の書としてまとめられており、シンボルにつけられた言葉には「吉凶悔吝」などの行く末を示す言葉がちりばめられています。しかし、後代になって陰陽五行学説や道教とむすびつくなどして、占術だけにとどまらず、さまざまな応用技術や思想を発展させました。

このような発展をたどったのは、ひとつには、易経のもつシンボル体系の柔軟性に負うところが大きかったからではないでしょうか。さまざまに応用することができる——いつてみればつぶしのきくシンボル体系であったということです。

コンピュータ・システムにたとえるなら、このシンボル体系が基本ソフト（OS）のようなものであり、東洋思想、東洋医学、東洋占術などの思想や技術は、OS 上に構築されたアプリケーションのようなものだ、ということもできると思います。

このように考えると、易経の本体は経典としてのテキストではなく、むしろそのシンボル体系そのものであると考えてもいいかと思います。

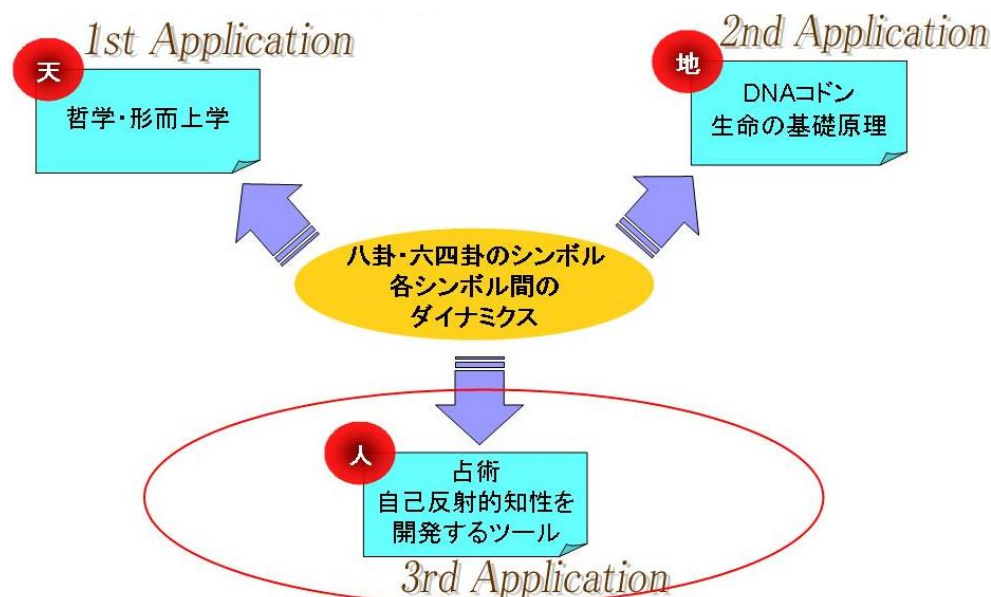


図 3.3 システム・コアとその応用

図 3.3 は、64 種類あるシンボル体系、および、爻が陰→陽・陽→陰と変化することによるエネルギーの動きと状態の遷移こそが、易経の本体であるという概念を示したものです。この概念のもとでは、易経のテキスト（経文）はシステム本体——システム・コアのコメントにすぎず、占術も、その応用技術のひとつにすぎないということになります。

それはまた、同じシステム・コアをつかって、これをお読みになっているみなさんが独自のアプリケーションを自由に構築してよい、ということにもつながります。事実、図 3.3 の右上、DNA コドンとしてこのシンボル体系をみたててことは、現時点ではもっともあたらしいシステム・コアの応用ということができでしょう（ホゼ・アグエイアス夫妻による銀河ツールと呼ばれる一連のシステム・スイート [25]、および [51]、[35] など）。

大成卦というこのシンボル体系は実のところ言語であり、言語には——さまざまな役割があるとはいえ、第一にコミュニケーション・ツールであり、言語は——ほかならぬあなたがストーリーを語るためにあるのです。このような、シンボルそのものがメインであるという考え方は、著者独自のものではありません。たとえば、[27] のような著書でも、易に対して同様のとらえかたをしており、独自の理論を展開しています。

3.2 占術の役割

先にみたように、易システムの応用技術にはさまざまなものがあるわけですが、占術は、易システムの応用技術のなかではもっとも古く、おそらくは……気が遠くなるような昔から人類とともにあった技術だと思われます。

そのようなわけで、易システムを考える場合、占術という技術をぬきにすることはできず、易システムの応用技術としては本書ではもっぱら、占術に焦点をあてています。

気が遠くなるような昔……医療技術も情報技術もマスメディアも……あったとしても現在のようなものではなかったでしょうから、占術もそれなりの対応をせまられていたはずで

す。

未来を予測する技術として。

病気を診断する技術として。

あるいはまた、五感以外でしかとらえられないものを識る技術として。

現在はどうでしょうか。三つのうち先ふたつについては、わたしたちは専ら占術以外の技術を利用します。

たとえば、明日の天気を知りたいければ、テレビをつけるかインターネットにアクセスするかして降水確率を調べるでしょうし、病気になれば病院へ行って医師の診断を受けることでしょう。

現在のところ、占術の役割は最後のひとつ、五感ではとらえられない——不可知なものを識る技術としての役割が最大のウエートをしめるようになってきていると思いますがいかがでしょうか。

では、不可知なものとはいったいなんでしょうか。

これもいろいろあると思います。五感がとらえることのできる周波数レンジはきわめて限られています。事実上大半の情報はとりこぼされている——というよりも、感覚上はなきものとしてオミットされているわけです。それを補うために、近代科学技術はさまざまな観測・測定機器をうみだしました。ただ、わたしたちは日常的にそれらの機器を使っているわけではありません。日常生活レベルではやはりかなり限られた範囲で感じ、判断し、活動しています。もちろん占術が、科学技術が生み出した機器の代わりになるというつもりはありません。不可知なものをさぐる技術であるということでは同じですが、その守備範囲がまったくちがうからです。

不可知なものとはいったいなんでしょうか。

不可知なものの中なかでもその最たるものは、心——心が自己と環境の間における相互作用であるとするなら、ひいてはその「自己」、ということになるでしょう。占術は（現代の占術は特に）、自己を識るための技術としての役割が、きわめて重要になってきているように思います（必然的に本書でもそこに焦点をあてています）。それというのも、科学技

術が生み出したさまざまな機器は「自己を識る」ためにおいては、ほとんど役に立たないように思えるからです*2。しかし、それは決して科学技術や機器のせいではありません。それらをつかって「自己を識ろうとする」ことは、野球のバットを持って柔道の試合に乗り込むようなもので、試合として成立しません。バットの性能は柔道の試合に直接の関係はありません。守備範囲が異なるのです。この種のあやまりをカテゴリー・エラーといいます。

未来を予測する技術については、まだ占術が有効である側面もあるようです。ではこの分野では、科学技術と占術がオーバーラップしているかといえそうですがそうともいえません。やはり守備範囲が異なる。占術は「自己の内面」——経験というものと大きく関連した側面について利用される技術だからです。

たとえば、天気予報の例でいえば、本当に知りたいのは「自分が経験する」天気であり、それは必ずしもその日にでかける予定になっている地域の降水確率とは一致しません。途中で行き先の予定が変更になるかもしれないし、いい天気、わるい天気、晴れ、雨、くもりといった区分は実際のところはあくまで個人的な体験であり、ひとそれぞれだからです。あきらかな土砂降りとはともかく、弱い雨のときに傘をさす人とささない人がいるのはその証拠です。

同様に、将来の展開という課題でいえば、知りたいのはこの先「自分がなにを経験するか」、それは「自分にとって」いいことであるか悪いことであるかであり、必ずしも来年の景気変動予測とは連動しません。

いずれにしても、占術と科学（技術）は、別々の分野に対応した別々の技術であるということを、はっきり区分しておく必要があるでしょう*3。この観点によれば「科学的な占い」といういい方は、完全なカテゴリー・エラーです。

それは……野球のような柔道が存在しないのと同じことです。

3.3 偶然

東洋の占術には大きく分けて命、^{ほく}卜、相の三つの種類があります。命は、相談者の生年月日やあるいは事物に関連した月日から人物や事物がたどるプロセスをあきらかにしようとする技術です。相は、手相、顔相、など、体格を含む人間の見た目の分析から状況や行く末を判断します。卜は、「偶然の現象」を利用して、比較的短期における進路予測を行うことを主眼とするものです。

占術として易システムを利用する方法は、おおざっぱに言えば、問いを立てたのち、64

*2 顕微鏡は？CTは？MRIは？自己を識る機器ではないのか？——それらは正しくは「肉体」という「自己の外面」を観測するための機器です。まあ、自己の外面も自己の一部であるわけですが……

*3 この手の区分方法にはいくつか方法がありますが、アメリカの理論家K・ウィルバー氏による「四象限」と呼ばれるダイアグラムはきわめて有効です。[9]、[10]、[8]

あるパターンのうち、あるひとつのパターンを無作為に取り出して判断に利用します。上記のわけ方でいえば易は「ト」にあたるわけです。また、広くみれば、タロットのようなカードを使った占いや、お茶を飲んだあとのカップに偶然に残った葉っぱの形を見て占う占いや、目を閉じて辞書や聖書を開いて偶然目にとまった文で占う、辞書（聖書）占いのような占いもこのカテゴリーに入るでしょう。

さて、「偶然の現象を利用する」と書きましたが、偶然とはなんでしょう。もしこれを、「偶発的に起こる意味のないこと」とするなら、「ト」は成立しません。意味のないことはいくら分析してもおそらく意味がないからです。辞書で「偶然」という語を引くと、さすがに「意味がない」とまでは書いてありませんでしたが*4、一般的には「意味がない」ととらえられています。

カードをひく、コインを投げる、筮竹をさばく、サイコロをふる……それらがなぜ、自身の将来や内面を語ることと関連するのか、理解されない理由はそこにあります。そういった現象には意味がない、とされているからです。そしてこれは一見、動かしようのない真実であるかのように思われているかもしれませんが、実はそうではありません。

強調しておきたいのですが、「偶然に意味がない」というのはあくまでもものの観方、世界観のひとつにすぎない、ということです。そして当然のことながら、易システムは「偶然に意味がない」という世界観には立脚していません。

学校で習ったこととは相容れないかも知れませんが、易システムは偶然には意味がある場合もあるという前提のうえになりたっています。もしくは、システムをつかわなければ「意味がない」とみなされてしまう現象から意味を導きます。その現象を卦というシンボル——言語にいったん変換し、その意味を理性と直観で読み取れるようにするしくみが易システム（ただし易システムのひとつのアプリケーションである占術）です。

誤解しないでいただきたいのは、ここで「偶然には意味がある。それが真実だ！」という教義^{ドグマ}をおしつけようとしているわけではなく、「偶然には意味があることもある」というのもひとつのもののみかたであり、世界観である、ということをいっておきたいだけです。

要は、あなたがどちらをとるかということです。選択の自由はもちろん読者であるあなたにあります。場合によっては両方採用するということもできるかもしれません。もし、「偶然には意味があることもある」という考えに接するのが初めてならば、そんなもののみかたを検討してみるのもいいのではないのでしょうか。

「偶然にはまったく、決して、断じて、あとにもさきにも、意味などない」というのであれば、この本はそういうあなたのために書かれたものではなく、並んでいる言葉もほとんどがまったくの空言^{ジョーゴン}、ということになります。

結局、「意味がある」「意味がない」というのは、それぞれ世界観のひとつであり、どち

*4 【偶然】「なんの因果関係もなく予期しない出来事が起こるさま」[39]

らがいい・わるい、ただしい・ただしくない、の問題ではないということです。どちらの世界観を採用するか（あるいは両方採用するか）は各自己——意識の選択です。一般に信じられているように、この世界は誰にとっても等しく、同様にあるわけではありません。一定不変、だれにとっても共通の世界観というのは幻想で、この世界を認識することのできる意識の数だけ世界観はあり、そんななかで各々の主観——自己が、どうにか折り合いをつけながらひしめきあっているというのが現状のようです。

3.4 自分のことは自分で

ひとに占ってもらうか、それとも自分のことは自分で占うか、ということですが、これはそれぞれに一長一短があり、どちらにしろ、一言でいうことはできません。自分で自分のことを占うよさもあるし、むずかしさもある。同様に、人に占ってもらうことのよさもあるし、むずかしさもある。そのそれぞれのケースをここで論じることはしませんが、ただ、本書のスタンスとしては、原則、自分のことは自分で占うことを推奨します。そのために必要な情報を提示するというのが、本書の役割のひとつでもあるからです。

だれそれが悪い、なにになにがイケナイ、と、ついわたしたちはなんでもかんでも原因を外部に求めがちです。しかしながら、あなたのように生き、あなたのように考える人は、あなたしかいないのです。あなたの人生に責任を取れるのは、友人でも親でも兄弟でもなく、あなただけです。あなたの外にある「ナニカ」ではありません。占い師は、あなたの代わりに生きてくれる人ではありません。

この本では、易という、航海の参考になるかもしれないシステムの運用方法を示すことはできますが、あなたがふったダイスの目は、あなたにしか、あなたの意味で読み取ることにはできません。こう考えると「ハズレ」という結果がありえないということもご理解いただけたと思います。あなたがあなた自身のためにあなた独自の解釈をするわけですから、原理的にはすべて「正解」なわけです。

あなたが行う占術は、いかなる問いを占うものであれあなた抜きには成立しません。仮に相談者がいて、その相談者独自の問題を占ったとしても、あなたは関係ない、ということになります。

あなたがその相談を受けて、占った時点であなたは相談者の問題に「参加」していることになるのです。

3.5 伝統的易経と易システムの関係

易経が、周易としてまとめあげられたのは、紀元前 1100 年くらいのことですから、今から 3000 年以上前のことです。3000 年前に突然現れたわけではなく、それ以前に原型はあったわけで、おおもとの河図、洛書などのダイヤグラムやそこから生まれたとされる八

卦は、伝説によれば一万年前から存在したといわれています。

起源が特定できないほど古いものですから、周易として編纂された頃にはすでに、テキストにはシステムの運用に必要な純粋な原理以外にさまざまな付加物がまざっていました。それが、たとえば図 3.4 に示したような、歴史的な記録や、時代背景、古代中国における風俗や習慣といったものです。古典としてはやむをえないとはいえ、現在のわたしたちが易を利用する上においては、不要と思われるものもあるので、それらはまず、易システムには含めないようにしました。

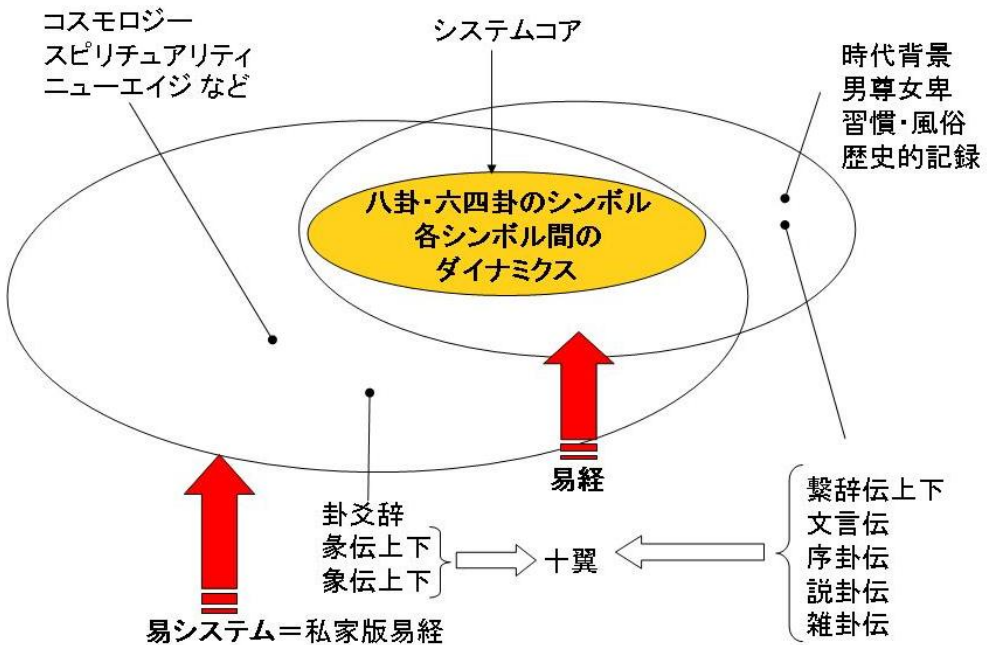


図 3.4 易システム（私家版易経）の守備範囲

また、易経には、本文である卦爻辞^{*5} 以外に、図 3.4 に示したように「十翼」という注釈書があります。これらも本文に近い、象伝・彖伝以外の注釈書については、その要素を取捨選択して易システムに含めています。

易システムはさらにそれに、現代的なコスモロジーやスピリチュアリティ、いわゆるニューエイジ的な視点を加えて独自につくったものです。伝統的な易経とは、多くの点で異なったものになっていることを、この場でおことわりしておきます。

参考までに易システムがどの注釈書——十翼にどのようにコミットしているか、表 3.1 に示します。ただしこれはあくまで参考です。実際にはオーバーラップしている部分もあ

^{*5} 【卦爻辞】 各大成卦および各大成卦における各爻につけられた言葉で、各大成卦や各爻の性質を定めたものということができます。システムを占術として用いた場合は、主要な判断材料となります。

り、表 3.1 のようにきれいにわけられません。

表 3.1 易システムがコミットしている経典

私家版易経との関連	経典名	概要
◎	卦辞（彖辞）・爻辞	易経本文。各大成卦卦名と各大成卦、各爻にわりあてられた文章。
◎	象伝（上下）	卦名と象辞を卦のカタチや六爻の組み合わせから解釈したもの。
○	象伝（大象・小象）	大象は、大成卦の二つの八卦の組み合わせから連想して、道徳・政治の要点を述べたもの。小象は、各爻の柔剛、位置、他爻との関連から、それぞれの爻辞を解釈したもの。
○	繫辞伝（上下）	卦爻辞の解説だが、易の生成原理や概論を述べるなど、独自の哲学を述べたもの。これにより、周易は、自然哲学・実践倫理を説く経典として位置づけられた。
△	文言伝	卦爻辞を儒家道徳によって拡大解釈。乾卦と坤卦だけにつけられている。
○	説卦伝	八卦の説明
△	序卦伝	六十四卦配列順序の説明
—	雑卦伝	六十四卦を 32 対のペアにして簡略説明したもの。雑卦伝のペアは倒卦（錯卦）の組み合わせであり、裏卦の組み合わせであるツイストペアとは異なる。

- ◎ コミットしている
- おおむねコミットしている
- △ 部分的にコミットしている
- コミットしていない

第 II 部

Game of Changes

第4章

オーバービュー

4.1 なぜこの部が必要なのか

4.1.1 気になる根拠

「1.2 本書について（5 ページ）」のところで書きましたが、純粋に占術を楽しむだけであれば、この部——「Game of Changes」の説明は必要ないかもしれません。

ひとによってわかれるところかもしれませんが、くりかえしこのシステムに占術というアプリケーションをとおして接していると、今度はその背後にあるものが気になってきます。

お約束してもいいと思うのですが、真摯に取り組みつつ、くりかえし占って、経験をつむとだんだん当たるようになってきます。とくに、易システムの場合は、基本的なルールはいたってシンプルですので（もちろん覚えなければならないことはありますが）、比較的簡単にシステムの言葉に慣れることができます。

当たるようになってくると、なぜ、どういうメカニズムで「当たる」のか、ということが気になってきます。相談者がいる場合はもちろん、そうでない場合も*1、「なぜこのシステムはこれほど直裁に自分のことを語るのか」ということがどうしても知りたくなるものです*2。

4.1.2 占いは統計ではない

よくいわれる話に「占いは統計である」という話があります。しかし、はたしてそうなのでしょうか。結論からいわせてもらおうと、それは少々ちがうような気がします。

*1 実際にはひとりで占うことの方が多いと思います。本書でもこちらを推奨しているのは「3.4 自分のことは自分で（23 ページ）」で書いたとおりです。

*2 スイスの精神科医・心理学者であったカール・グスタフ・ユングが、易経に関する同様の疑問から始まる研究により、シンクロニシティ——共時性の理論をみちびきだしたのは有名な話です。

ひとつには、何の統計をどのようにとれば占術に利用できるデータの根拠が得られるのか定めがたい、占術に利用できる統計情報をとることなど不可能なのではないか、ということ。

たとえば、生年月日から性格を観るような占術があったとして、まず性格というものの定義づけをどのようにするのでしょうか。それがはっきりしなければ統計をとることはできません。仮に定義づけができて、大規模な調査によって統計がとれたとしても、こんどはその結果と生まれ年の相関をとり、占術としてまとめあげなければなりません。ほんとうにそんなことができるのでしょうか。あるいは、昔からある生年月日を利用した占術は、はたしてそのようにして創られたのでしょうか。このような疑問は「占いは統計である」という話が、ちがうと考えられるもうひとつの理由につながります。

そのような膨大な統計情報を取って、それをベースにした占いなどそもそもないのではないか、ということです。統計という手法・学問の歴史についてはくわしく知りませんが、歴史的に見てもおそらく占術のほうが統計よりもはるかに以前からあったことでしょう。統計よりも占術のほうが古いとすると、統計以前の占術はいったいなにをよりどころにしていたのでしょうか。

4.1.3 背後にあるのは

占術には、その前提として世界観がなければならないのではないか、というのが著者の現在の考えです。最初にもととなる世界観があるのです。その世界観を記述する過程で、占術というテクニックが生まれたのではないかと考えています。

このシステムでは、世界をこのようにとらえていますよ、という考え——モデルが最初にあって、そのモデルにもとづいて森羅万象における判断をくだす——おおざっぱにいつてしまえば、それが占術というものの原理ではないかと思います。

占術は統計ではなく世界観がベースになってる——この考えにもとづくなら世界観が欠落した占術は占術とはいえません。

占術は統計ではありません。わたしたちが暮らしているこの世界のモデルにもとづいた実用技術なのです。ですから、もとになるモデルが、占術を利用しようとしている人の世界観とまったく共感するところがなければ、その占術から得られた結果はその人にとっては役に立たないか、ヘタをするとチンプンカンプン、といったことになるでしょう。あたるあたらないは、システムが描く世界観と、システム・ユーザー利用者の世界観がどの程度一致しているかによります。「3.4 自分のことは自分で」で、自分のことを自分の解釈で自分が占えば、原則的にハズレはありえない……といったことを書きましたが、それも両者の世界観がある程度一致していることが前提になります。

また、「3.3 偶然 (21 ページ)」のところで、実のところは人の数だけ世界観がある……といった話をしましたが、そういう意味ではすべてのひとが合意できるモデルにもとづい

た占術というのではないのかもしれませんが。

しかし、そういった方向をめざすことはできると思います。

この部で示したかったのは、できるだけ多くの人と共有できるような世界観を、易システムをつかって提示しようとする試みです。同意できるか否かは読んでくださった方次第ですが、それはそのまま、その人にとっての、システムの有用性にリンクします。

4.2 オーバービュー

4.2.1 すべてはここから

図 4.1 に示したのは、そう表明することが許されるのなら「マンダラ」です。[21] によれば、マンダラが持つ根本的な特性には、

1. 中心
2. 対称
3. 基本方位

の3つがあるそうです。

特にこの特性を意識して描いたものではありませんが、見たところ3つの特性がありそうですので、まあ「マンダラ」と呼んでもよさそうです。

思いつくものを思いつくままにつめこんでいったのでごちゃごちゃしていますが、中心は絵のまんなかではなく、中央下のほう、一番下にある「Body」と書いてある逆三角形です。これは文字どおりボディで肉体です。この同じレベルの左右にわたしたちが普段認識している世界が広がっています。

全体に逆三角形——V字がモチーフになっていますので、対称性はいちおうあります。方位は、上が天、下が地です。

天、地は、もちろん抽象的な意味でそのように名づけたもので、全体としては、カタチのないもの（エネルギーまたはポテンシャル^{*3} といってもいい）が、徐々に具体的なカタチをとるようになって、ついにはあなたという肉体を所有するに至った様子をあらわしています。上＝天がカタチのないもので、下へいくにしたがってカタチをとってくる……ということで、逆三角形の頂点があなたというボディであり、このマンダラの中心になっているわけです。

^{*3} 【ポテンシャル】 潜在能力、可能性。具体物ではないので言葉であらわすことができません。ポテンシャルは、それを指し示す仮の言葉で、同様の言葉はほかにもたくさんあります。

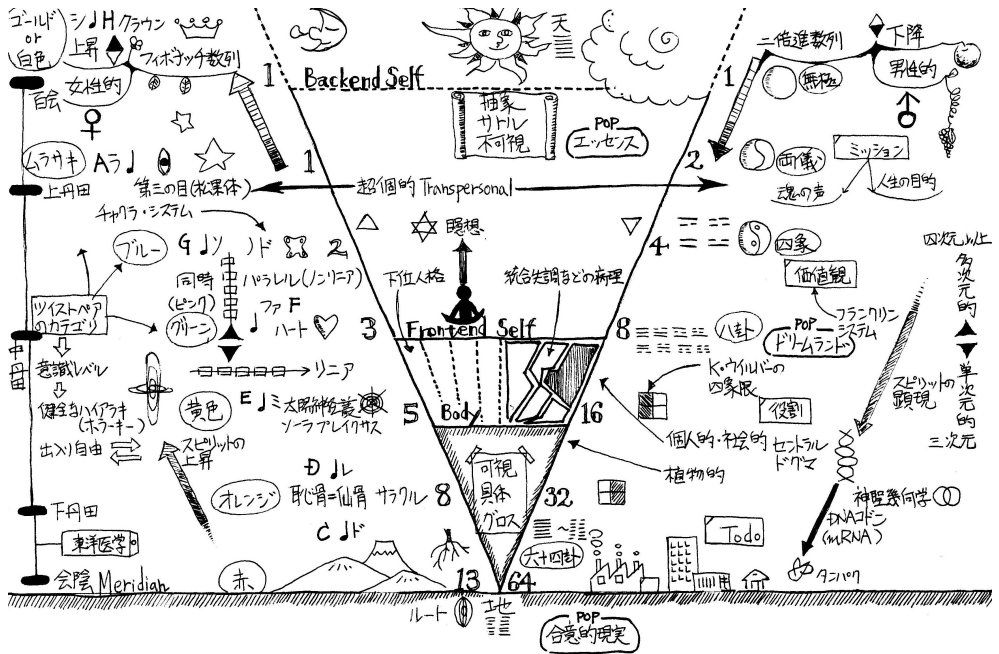


図 4.1 最初のマンダラ

マンダラ上で上から下へ向かう動きを、カタチがないものがカタチをとってあらわれるプロセスという意味で、「顕現」と呼ぶことにします。

また逆に、下から上へ向かう動きを、カタチあるものが自らの本質に気づいていくプロセスという意味で、「帰還」と呼ぶことにします。

思いつくままにいろいろなものをつめこんだので、それぞれについて説明することはできませんが、このマンダラを思いつきシンプルにしたものが、図 4.2 です。

4.2.2 基本の図

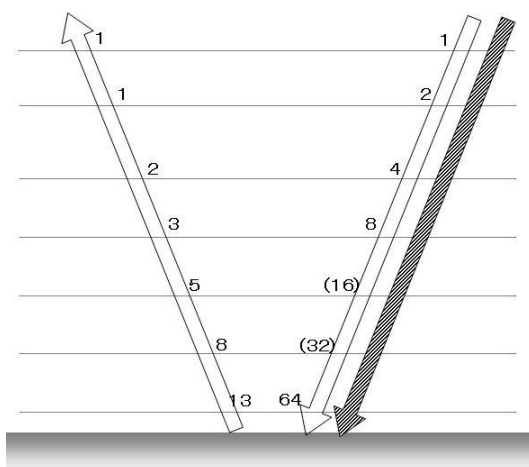


図 4.2 基本の図 1

図 4.2 の V 字の右側に並んでいる「1, 2, 4, 6, 8……」の数列は 2 倍進数、左側の「1, 1, 2, 3, 5……」はフィボナッチ数列*4 です。「フラワー・オブ・ライフ [18] [19]」という本のなかで、このふたつの数列について触れられています。

同書には 2 倍進数は男性原理で、フィボナッチ数列は女性原理と説明されていたので、分割、分割、分割……で細かく論理的分析的に推進されるプロセスである顕現の側面に 2 倍進数を、そのプロセスを包み込んで本源に気づいていくプロセスである帰還の側面にフィボナッチ数列を、それぞれあてはめました。

「フラワー・オブ・ライフ」にインスパイアされて、最初はあまり深い考えもなくマンダラに追加しましたが、これがきわめて重要な意味を持っていることに気づいたのは、このマンダラを描いてからずいぶんたったあとのことでした。

さて、図 4.2 には矢印が三つあります。

顕現（右、下降側）のサイドに 2 本、帰還（左、上昇側）のサイドに 1 本。この 3 本のうちハッチングされて黒っぽく見える矢印が、五感で感じられる（または機器を使って観測・測定できる）プロセスを示しており、ここが、「5 章 顕現 (39 ページ)」におけるテーマになります。では、ハッチングされていない白い方の矢印はなにかというと、顕現をうながす隠れた原動力……とでもいうものです。なぜ「隠れた」などというのかというと、

*4 【フィボナッチ数列】 どの項も、その前の 2 つの項の和となる数列。フィボナッチ数列の隣り合う 2 項の比は黄金比に収束する。（フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より）

五感で感じ取ることのできる範囲外のプロセスだからです。見ることはもちろん、触れることも、聞くこともできません。一般にメタフィジカル*5、と呼ばれるレベルの話です。

同様に帰還（左、上昇側）の矢印も白い矢印ですが、これは帰還のプロセスが物理的なものでなくやはりメタフィジカルなものであることを示しています。

帰還は「気づき」のプロセスであり、物理的な変化ではありません。物理的な変化は物理的なレベルの法則にしたがって別途進んでおり、メタフィジカルな気づきと同期しているわけではありません。気づきを得たからといって、急に肉体が変化することはふつうはないと思います。最終的にはメタフィジカル——形而上のプロセスも、フィジカル——形而下のプロセスも、おなじところ（「4.3 本源（35 ページ）」参照）をめざしているわけですが。

「6 章 顕現の原動力（53 ページ）」では、図 4.2 の右側の白い矢印で示したプロセスがテーマになります。「7 章 帰還（107 ページ）」では、図 4.2 の左側の白い矢印で示したプロセスがテーマになります。

システムハンドブック Ver1.0 では、図 4.2 の右側の下降する側面をスピリットの下降＝男性原理、左側の上昇する側面をスピリットの上昇＝女性原理と呼んでいました。

本書では、右側は分析的な側面でもあり、現在記録に残っている歴史上の流れは男性主導で推移してきたこともあるので、異論もあることではしょうが、とりあえずは男性原理という呼び方はそのままにしました。

問題は左側で、右と対比させて単純に「女性原理」と呼んでもいいのですが、どうもしっくりきません。こちらの側面は、右側の男性的なプロセスをふまえた上でさらに深く自分自身に目覚めていくプロセスですから、単に男性原理に対する側面というだけではすまわずに、調和原理、調和的側面と呼ぶことにしました。もちろんその根っこには、包括性、コミュニケーションのためのコミュニケーション、安定、平和、バランスといった女性的な原動力があるわけです。

以上のことを考慮して図 4.2 を書きかえると図 4.3 のようになります。

*5 【メタフィジカル（メタフィジカ：形而上学）】物理的なものが存在するその根拠についての議論であり（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より）、訳語としては「形而上」という言葉が当てられますが、形而上、形而下、という語は易経からとられたものです（「繫辭上伝」）。

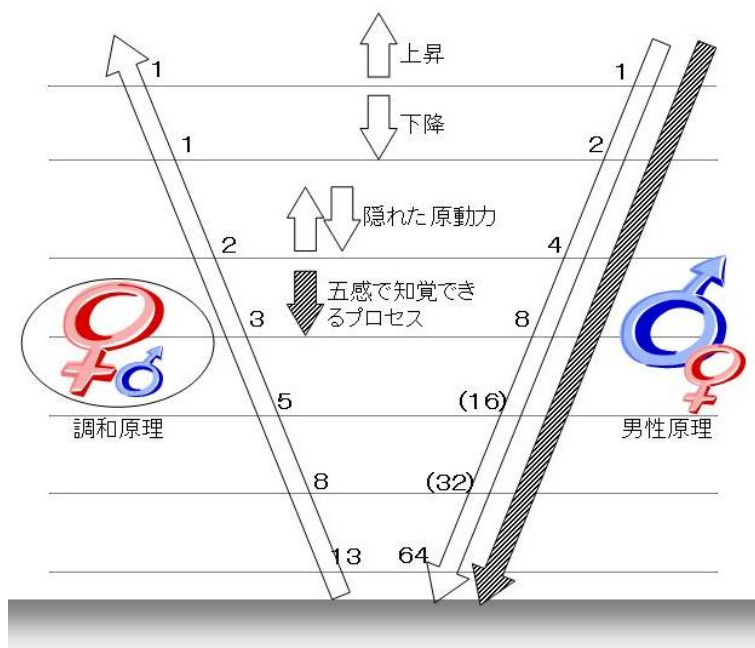


図 4.3 基本の図 2

4.3 本源

4.3.1 本源とは

おいなる一者。グレートスピリット。ワンネス。ワカンタンカ。大日。フナブク。道。ソース。普遍的宇宙精神……なんでもかんでもいっしょくたにするのはよくないかもしれませんが、洋の東西を問わず異なる伝統がおなじものを指していることがよくあります。

上の例も多分その類で、一般的にいえばスピリット、ということになるのですが、それではスピリットとはなんでしょうか。辞書をひくと、霊、霊気、精霊、精神といった言葉があげられていますが、そのままとらえるとどうもおどろおどろしい感じがします。

ただでさえ、たくさん言葉があるなかに、わざわざまた言葉を増やさなくてもいいじゃないかと思われるかもしれませんが、おなじものを指しているとはいえ、それぞれの言葉には独特の背景がへばりついているのも確かですので、本書ではそのおなじものを「本源」と呼ぶことにします。

それで、本源ってなんだという話ですが、要は一切合財すべての始まり、そしてここが

大事なところですが、今現在この瞬間もここにあるもの、です。一切合財ですから、その中には時間も空間も含まれます。あらゆる概念も、思想も、読者であるあなたも、著者であるわたしも、すべて。

本源は物質を含みますが、物質そのもの、本源イコール物質ではありません。

本源は時間を含みますが、時間そのもの、本源イコール時間ではありません。

本源はあらゆる概念を含みますが、それらの概念そのもの、本源イコール概念ではありません。

同様に普段意識している自分を含みますが、その自分そのもの、本源イコールその自分ではありません。

たとえば……シンプルなモデルですが、自分を図4.4のように3層にわけて考えたとなると……*6

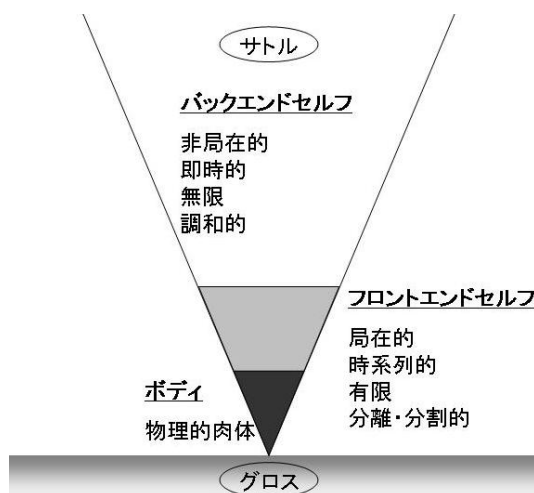


図4.4 自己の構造

このすべてが本源なのです。物理的な肉体をもつに至っているというある種の方向性を持っているように描かれていますが、この方向性も本源の一部です。*7 本書では、わたしたちの宇宙は、この本源の一部が特殊化したものと仮定しています。そういうわけで、「5章 顕現 (39 ページ)」「6章 顕現の原動力 (53 ページ)」「7章 帰還 (107 ページ)」のお話はすべて、この本源がベースになっています。基本の図に本源を追加すると図4.5のよ

*6 【3層の自己】直接そこからヒントを得て図4.4のようなモデルを考えたわけではありませんが、[11]は、これとほぼ等しい3層構造の自己モデルにもとづく、神秘の実践マニュアルとなっています。

*7 ある種の方向性：この宇宙における、本源の変化の方向性を本書ではフローと呼びます。

うになります。

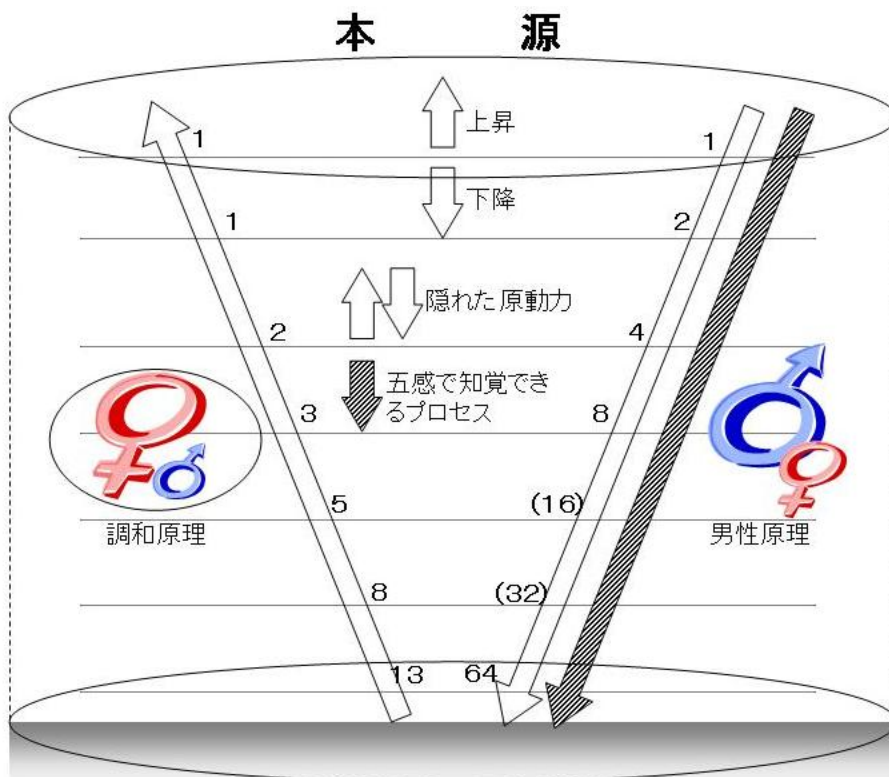


図 4.5 基本の図 3

4.3.2 まとめ

ちょっとごちゃごちゃしてきたのでまとめますと、本源は一切の基盤であり、本源以前とか本源より上といった階層はありません。

スピリットは本源がわたしたちの暮らす宇宙になるために特殊化したものです。それはすなわちわたしたちの宇宙そのものでもあります。

魂——ソウルは、スピリットがつくる物質という器に入り込み、人間（個人）という経験を得ますが、本源（オーバーソウル）の一側面です。

フローは、本書の文脈においては、スピリットが変転していくその方向性——ベクトルのことです。

図 4.6 にその様子を示します。

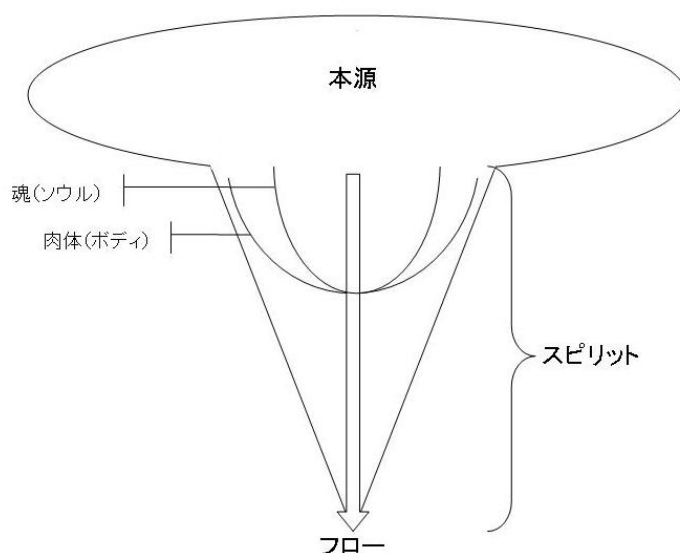


図 4.6 本源、スピリット、フロー

「図 4.4 自己の構造」との対応で言えば、フロントエンドセルフは、物質相のボディとほぼ一体の意識（人格）であり、私たちがふだん気づいている意識です。バックエンドセルフはソウルのレベルに相当します。スピリットは図 4.4 の三角形全体、フローはソウルが肉体をもつに至った方向、そしておそらくは、わたしたちが本源に気づく方向でもあります。

第 5 章

顕現

5.1 無極と本源

「4 章 オーバービュー (29 ページ)」では、この部でのお話の共通基盤として「本源」の説明をしました。この章では「無極」から話が始まります。無極は、「本源」が特殊化したものですが、この時点では本源とほぼおなじものだと考えてくださって結構です。

図 4.6 に無極を加えたとしたら次のようになるでしょう。

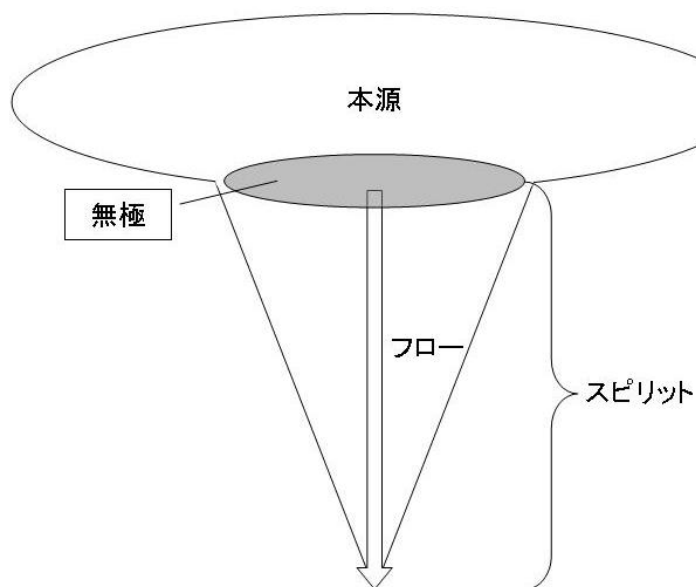


図 5.1 本源、無極、スピリット、フロー

5.2 無極

無極は、「なにもない」虚無的状态を表しているのではなく、そこにあらゆる可能性のある状態のことです。無限の可能性が、等しく傾向としてだけ存在しているため、一見なにもないようにみえているだけで、すなわち、よりどころ・つかみどころとする偏り——「極」が無いので無極と呼ぶわけです。

わたしたちの宇宙は、この無極に生じたかすかなゆらぎに始まり、粗大なレベルに展開していく（そしてまた本源へと収斂していく）プロセスといえます。

ここで大事なのは、宇宙がそのように展開していく過程で、無極がなくなってしまうということではないということです。

無極自身が粗大なものにその姿を変えるのではなく、無極はいつも変わらず「今現在」に存在し続けています。

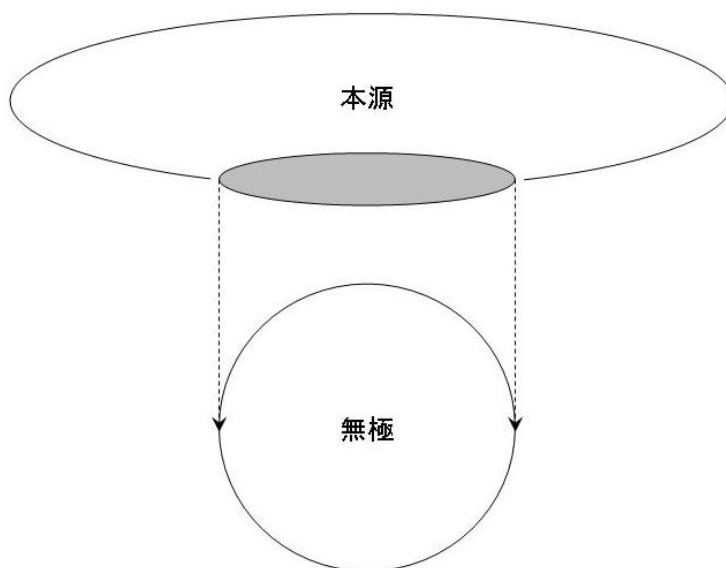


図 5.2 無極

無極は無極のままではなにも起こりません。ただただポカンと円があるだけでは進歩も発展ありません。

本源が無極を生み出したということはなにかを始めようとして（もしくはなにかが始まるか観察したくて）ステージを設定したわけでしょうから、ずっとこのままということはありません。

やがて最初の動きが始まりその動きは複雑化していくのですが、これからの節ではそう

いった「創造のプロセス」とそのプロセスに対応した易システムの構造が、何を意味するのか（とくに実際の占術上で）を並行にお話していきます。

5.3 両儀

5.3.1 創造のプロセス

結局、無極は無極のままではいられません。最初は無極に生じたかすかなゆらぎはやがてはっきりした動きになり、空間という入れもの——ステージと、物質というそこに入るもの——舞台装置や役者というカタチをとるに至ります。易システムでは物質と空間というこのもっとも基本的な素材は、陰・陽という単位にあてはめることができます。たとえば陰＝空間、陽＝物質というふうに——

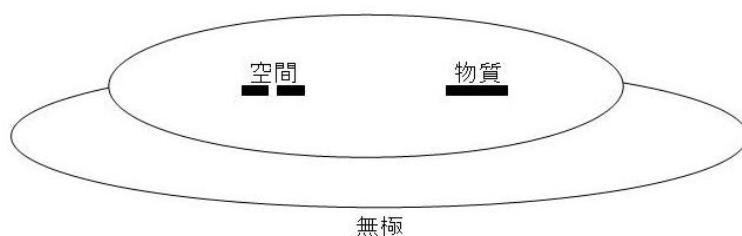


図 5.3 空間と物質

本源の計画としては、最初の動き——息吹とでもいい——が生じるところまでは予定のうちなのですが、そこから先、このよちよち歩きの宇宙がどのような発展をとげるか、具体的過程までは予定に入っていません。というより最初の動きから先は計画しようにも計画できるものではなかったのです。

とりあえず現段階では無極における無限の可能性の一部は、最初のゆらぎから空間と物質という舞台と素材に収束していきました。

5.3.2 両儀の実際上の意味

両儀は、ようするに陰と陽のことであり陰と陽は易システムのもっとも基本的な単位であるとともに、いちばん単純な意味をあらわす文字です。

光と影、右と左、男性と女性……およそすべてのものを陰陽で表すことができますが、それらは、以下の原則に従います。

1. 対等である（優劣を対置したものではない）。
2. 陰は陽に、陽は陰に、常に変転する。
3. 「あるひとつのもの」の別々の側面である。
4. 陰、陽、単独で存在することはできない。

つまりは、互いにささえあってひとつ、相互依存的、相対的で不可分な、この宇宙の構成要素なのです。

とくに3番目の項目は重要で、無極が陰と陽に「分離」したわけではありません。「5.2 無極（40 ページ）」でも述べたとおり、いかに宇宙の様相が複雑化しようと無極は常に今もここにありつづけるものです。

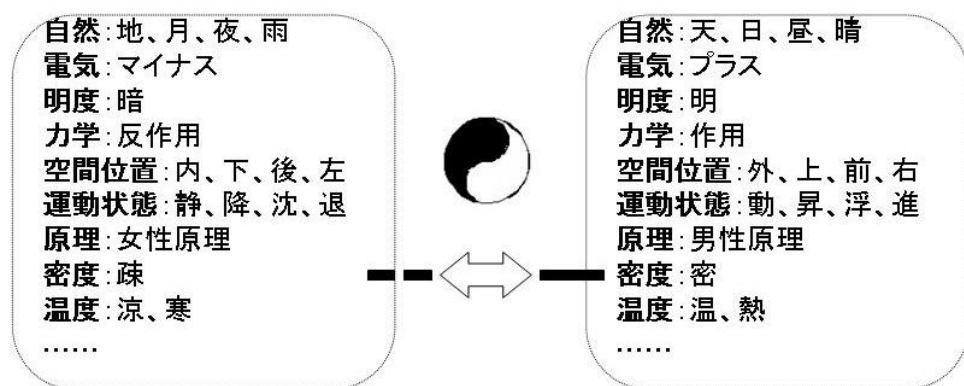


図 5.4 陰陽の具体例 [36]

注:

たとえば、図 5.4 の「密度」のところでは、陰＝疎、陽＝密、となっていますが、これはそのものの自体の性質——陰はやわらかい、したがって疎、陽は硬い、したがって密——からきたものです。「動き」に着目すると、密なものは重くて下降するから陰、疎なものは密度が低く軽くて上昇するから陽、といったとらえかたをすることもできます（「陰陽（160 ページ）」参照）。

5.4 四象

5.4.1 創造のプロセス

陰陽はそれらを材料としてさらに複雑な構造をつくりあげていきます。易システムでは両儀の次の段階として陰または陽を示す爻をふたつ重ねた構造を考えることができますが、これを四象といいます。

先に陰陽の原則の2番目として、陰は陽に陽は陰に常に変転する可能性をはらんでいることをあげましたが、陰と陽という単位だけでは、コインの裏表のように「どちらか」という状態しか表現できません。このままではスイッチのオンオフのように、陽は陰に、陰は陽にパチンと変転することしかできません。

四象という構造の出現で重要なのは以下の点です。

1. 陰と陽の爻をふたつ組み合わせることによって、その中間状態を表現できるようになった。
2. 中間状態が生じたことによって、陰→陽、陽→陰、のスイッチングではなく「^{サイクル}周期」が生まれた。

2については少し説明が必要でしょう。図 5.5 を参照してください。

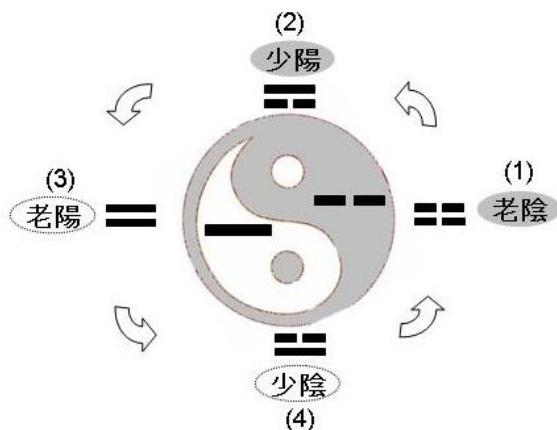


図 5.5 四象のサイクル

まず、ふたつの爻ともに陰の純粋な陰を「老陰 (1)」、ふたつの爻ともに陽の純粋な陽を「老陽 (3)」といいます。

いずれも、陰または陽の極点であり、老陰はそれ以上そのままじっと陰でいることはで

きずに、早晩、陽の要素に転じていきます。同様に、老陽はそれ以上そのままじっと陽でいることはできずに、やがて、陰の要素に転じていきます。

この変化がサイクルを生みます。すなわち、

1. 老陰 (1) は、やがてそのなかに陽の萌芽を生じ、少陽 (2) となる。
2. 陽の萌芽は長じていきやがて老陽 (3) となる。
3. 老陽はやがてその中に陰の萌芽を生じ、少陰 (4) となる。
4. 陰の萌芽は長じていきやがて老陰 (1) になる。

少陽 (2) は全体としては陰ですが、その中に陽の要素を含みます。少陰 (4) は全体としては陽ですが、その中に陰の要素を含みます。このサイクルは、わたしたちを含む宇宙がその役割を終えるまでつぎることなく繰り返されます。説明のため (1)~(4) としましたが実際には始まりも終わりも継ぎ目也没有ありません。

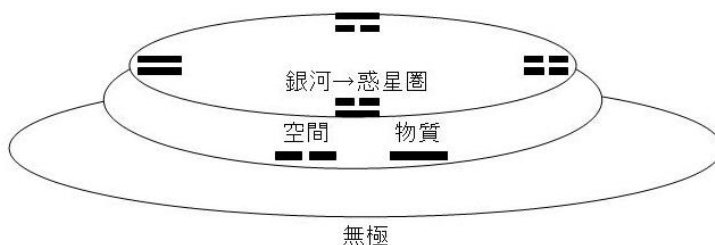


図 5.6 惑星圈の出現

創造のプロセスでは、物質が集まってガスになり、ガスはやがて銀河系、そしてわたしたちの太陽系を含む恒星系を創りだしました。

銀河系も惑星系も、惑星とその衛星もすべて「サイクル」をもっています。易システムにおける四象という構造は、次の構造である生命が出現するための舞台がととのった段階に相当するというわけです。

5.4.2 四象の実際上の意味

勉強不足で著者が知らないだけなのかもしれませんが、この四象という観方で実際の占術においてなにかを読み取る……とうことはまずないと思います。

爻の「位」として、初・二爻を「地」の位、三・四爻を「人」の位、五・上爻を「天」の位として観る三才観のような読み方や、乗る、承けるなど、ふたつの爻をあわせて観る方法がありますが、いずれもそこに四象の意味を観ているわけではありません [26]。

不思議なことに、四象の占術上における意味はほとんどないのです。

しかし、それでも次の段階である八卦に至る架け橋として、生命が生まれる基盤として、四象の存在は重要です。

図 5.7 で示すように、生命のゆりかごでもある惑星に四季が存在することも四象であらわすことができます。

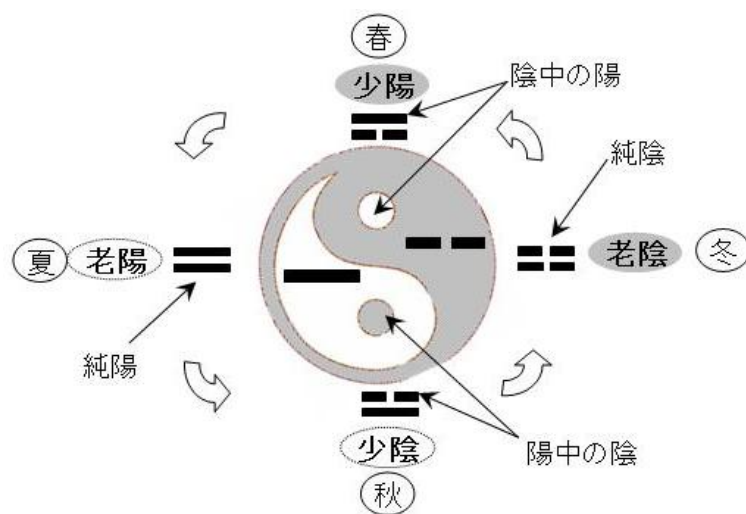


図 5.7 四季と四象

現代人には感じ取るのがむずかしくなっているかもしれませんが、サイクル——四象の力は惑星圏に生じた性質ですので、惑星圏を土台として生じた全生命には、いやおうなしに刻み込まれています。その微弱でかつ強い力は重奏低音のように、わたしたちの心身の奥底で鳴りつづけています。

注：_____

これは実際の占術で（たとえば大成卦上などで）、二つの爻をあわせて「季節」として観るということではありません。あくまで八卦の前段階としての四象の意味について説明しただけです。

5.5 八卦

5.5.1 創造のプロセス

四象の上にもうひとつ爻を追加すると三本の爻から成るパターンができます。ひとつの爻は陰と陽のどちらかなので、パターンとしては四象の4つのパターン×2で、8とおりのパターンができることになります（図5.8）。これが八卦です。

1	乾(けん)	
2	兌(だ)	
3	離(り)	
4	震(しん)	
5	巽(そん)	
6	坎(かん)	
7	艮(ごん)	
8	坤(こん)	

図 5.8 八卦：コード番号・八卦の名称・パターン

八卦はまず自然物にあてはめられました。

乾は空（天）。

兌はせせらぎ（沢）。

離は火（太陽）。

震は雷。

巽は風。

坎は水（太陰＝月）。

艮は山。

坤は大地（地）。

なにげなく「自然物」という言葉を使ってしまいましたが、いったいどこからが自然と
いうのでしょうか。辞書によると、人の手が加わっていなければ自然、ということになっ
ているようですから、*1 四象がシンボライズしている惑星圏も自然、したがって八卦もそ
こにふくまれるということになるのかもしれませんが。

*1 【自然物】人の手が加えられていない、自然界に存在する有形物。[39]

しかし、もし、物質だけでそこに生命のない世界があったとしたら、果たしてそこにひろがっているのは自然界なのでしょう—

意見のわかれるところではあると思いますが、わたしたちがふだん「自然、自然」というときは、暗黙のうちにそこに生命活動を含めて語っていることが多いような気がします。つまり生命活動こそ、四象がシンボライズする材料を使って創発（48 ページ）した新しいレベル——八卦が表現するもの、と考えたわけです。

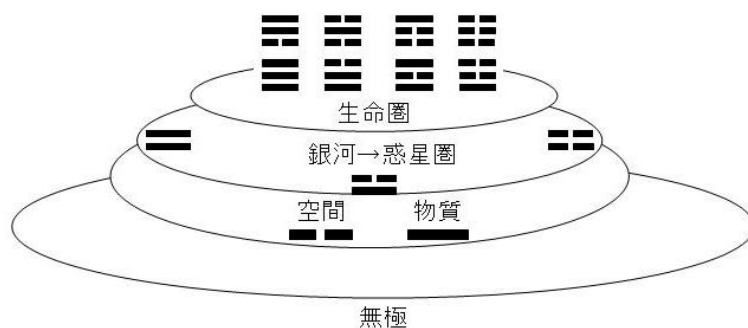


図 5.9 生命圏の出現

ここでいう生命とは、人間も人間以外も含む全生命という意味です。未だ地球以外の星に生命はみつかりませんが、もし他の星に生命が存在するとしたら、そんな地球以外の生命も含みます。

5.5.2 八卦の実際上の意味

くわしくは「9 章 八卦リスト（195 ページ）」を参照していただければと思いますが、八卦は、自然、動物、人物、時間、季節、色、それこそありとあらゆるものを象徴することができます。

占術上は、実質、基本単位ということができるでしょう。

陰と陽だけでも表現できることは多々ありますが、八卦という構造にすることによって、そこに表情、色、複雑な動き、といったものが生じることになります。

おそらく歴史上は、陰陽のあとすぐに八卦ができて、しばらくはそのまま使われていたのだと思います。人間が観察する対象としてのいわゆる「自然界の活動」という意味の森羅万象——を表現するというのなら、なんとか八卦だけでも充分だったのでしょう。

ただそれだけではどうしても表現できない事象もありました。

それは「心」です。

5.6 六十四卦

5.6.1 創造のプロセス

すでにあるものを材料にして、それまでになかった新しい秩序が生まれることを創^{エマージェンス}発^{エマージェンス}といいます ([9]、[10]、[8])。

両儀は四象を創発し、四象は八卦を創発します。

素粒子は原子を創発し、原子は分子を創発し、分子は生命を創発します。

いずれも原理は同じです。

八卦はさらにふたつずつ組み合わせることによって、六十四卦という秩序を創発します。八卦がふたつ上下に組み合わせられてできたシンボルですから、爻の数は6本、シンボルのパターン数は 8×8 で、64とおりあることになります。

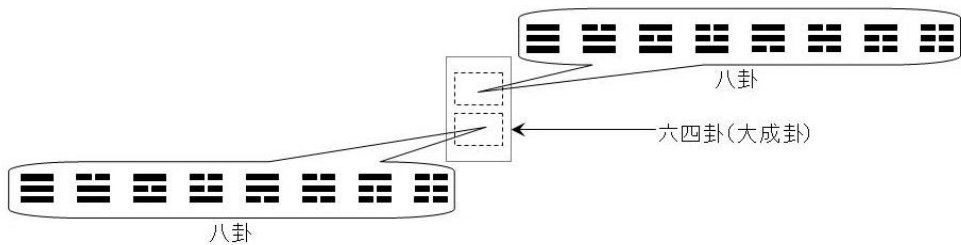


図 5.10 八卦から六十四卦へ

生命は進化という過程を経て、心という秩序を創発します。ここではとくに人の心を取りあげています。人間以外の、たとえば動物にも心はあるでしょうが、心というしくみをもって自分も含むこの宇宙を感じることができるのは、おそらくはヒトもしくはヒトと同等かそれ以上のレベルの存在に創発した心だけでしょう。

もとをたどれば心も宇宙の一部であるわけですから、ビッグバン説が正しいとすれば、宇宙は 137 億年^{*2} という途方もない時間をかけて、ようやく自分自身を感じ、探求するしくみを手に入れたということができるでしょう。

銀河系の直径は約 10 万光年。厚さは一番厚いところで 1 万 5 千光年。そのなかに含まれる恒星数約 1 千億個。

現在のところ観測できる範囲では、人間かあるいはそれ以上のレベルの知的生命体は見つかっていません。ひょっとしたら、この銀河系には物資レベルには私たち以外の知的生命体はいないのかもしれませんが。

^{*2} 137 億年：これを書いている現時点における数値です。このスケールはたびたび修正されています。

しかし、もしそうだとすると、時間的空間的なスケールにたじろぐことはまったくありません。そこに創発が起こらない限り材料はいくらあつまっても材料に過ぎません。それが何万光年の広がりだろうと、人間ひとりの深さ（複雑さ）がなければ、少なくとも物質レベルでは、宇宙は、宇宙自身を感じ、考えることができないのです。

いったい宇宙は、心を創発するためにどのくらいのタイムスケールとどのくらいの大きさの時空を必要としたのでしょうか。

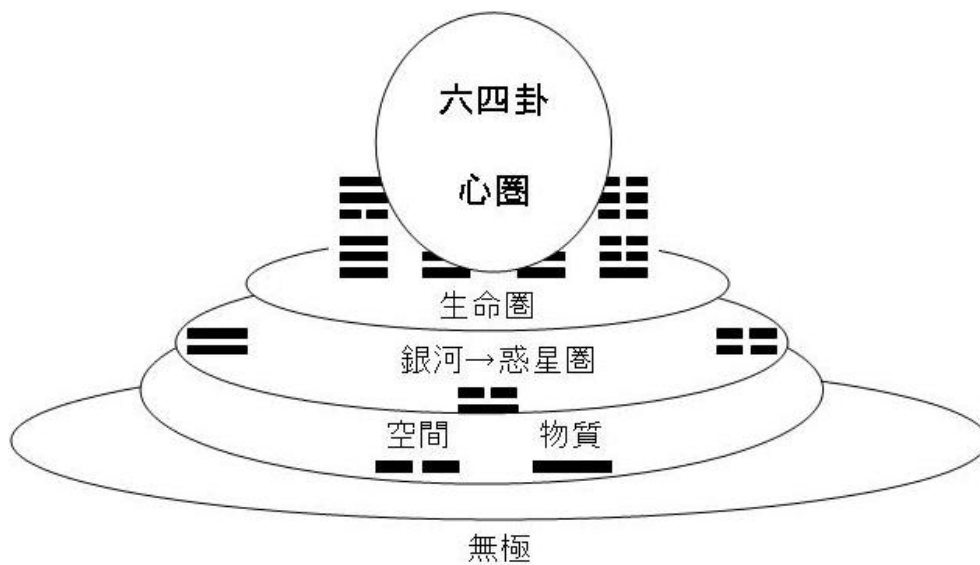


図 5.11 心圏の出現

5.6.2 六十四卦の実際上の意味

八卦はそこに心を含まない自然界の活動という意味での森羅万象をあらわす、というお話をしましたが、そこに心が加わるとどうなるのでしょうか。

森羅万象が、今度は人事百般を含むようになります。どこまでを「自然」とするかはいろいろ考え方があると思いますが、心の手前でゆるやかに区分するなら人一心と自然とのかわり、人一心の活動一般を、六十四卦はあらわすことになります。

この64のシンボルはそれまでの構造をすべて内包しています。

占術においては、問いをたてたのち64のパターンのうちひとつを無作為に取り出します。あなたによってとりだされたシンボルそのものが、その時点でのあなたという存在「すべてを」象徴する、と考えることもできるのではないのでしょうか。

易システムはここへきてはじめて、自然とあなたの心の間のコミュニケーション・ツール（言語）として成立します。

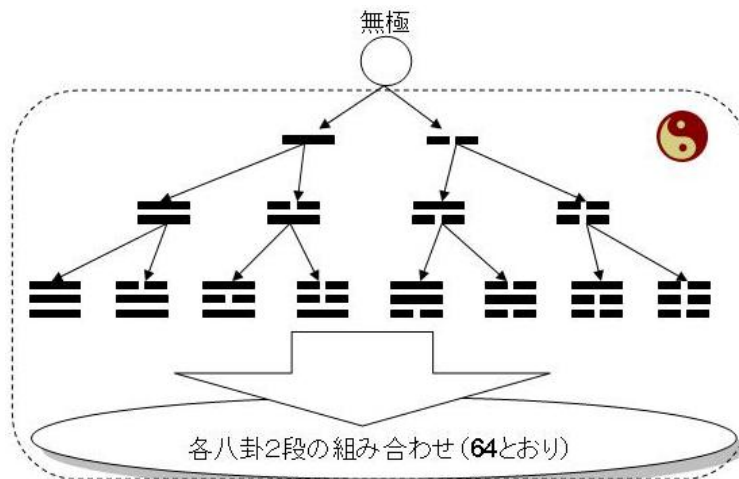


図 5.12 六十四卦の成立

易システム本来の構造としては、この六十四卦が最高レベルになります。

数理的には、6本から7本、7本から8本……という具合に爻を追加していけば、64から128、128から256……というふうに表現できるパターン数は倍倍で増やすことができます。そして歴史的にそのような試みもあったようですが、結局、64種類のパターンに落ち着きました。

64以上に増やしてもいたずらに煩雑になるだけで、おそらくは実用に供さなかったの

だと思います。60～70^{*3} 程度の数であれば、少し慣れれば大体の意味をおさえることができます。また、単位となるパターンの数が8で、マジックナンバー^{*4} に近いことも興味深いところです。

^{*3} 60～70：タロットカードの枚数もだいたいその辺の数です（78枚）。

^{*4} 【マジックナンバー】 人間が³短期的に記憶できる限界とされる数。「7」がこれにあたるとされる。（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より）

第 6 章

顕現の原動力

形而上の思考が快なのは、休息に似ている
自我による思考が不快なのは、労働に似ている

形而上は快である
形而上はそれ自体が快である
それは自分であることである
戻れば常にそこに在る
形而上を考えるのは、自分の家に帰るのに似ている

池田晶子 [43]

「5 章 顕現 (39 ページ)」では専ら、事象の目に見える側面——測定できるか、手にとってみることでできる側面にフォーカスしてお話をすすめてきましたが、それだけでは宇宙の半側面について語ったに過ぎません ([9]、[10]、[8])。

5 章には、「顕現」というタイトルをつけましたが、これはカタチのないものがカタチをとって現れる、という意味です。もともとカタチのない本源が、物質層に物質という衣を着けて現れる……その様相を易システムにあてはめて観てみたわけです。この領域は科学技術の領域でもあります。

この章では、反対側のもう半分、目に見えない、カタチのない、手にとってみるこのできない側面についてのお話です。こちらは科学技術の領域ではありませんので、五感やさまざまな観測機器は——ハイテクだろうとローテクだろうと——役に立ちません。

代わりに指針になるのは、「腑に落ちる」「共感できる」「バランスがいい」……といった内的感覚です。この領域において最も洗練され、かつ広く認められているツールは幾何学を含む数学や哲学ですが、あいにくと著者はそのどちらの専門家でもなくそのどちらの言葉も使えません。

頼りは自分の内的感覚だけ、表現は日常言語と若干のダイアグラム（と易システムのシンボル）という、いささか心もとない状況ではありますが、もしよろしければおつきあい

ください。

先に「物質層」という言葉を使いましたが、まず、時空間を含む物質次元は非常に限られた領域であるということを前提として話を進めています。

では「全体」はなにかということですが、これは「本源」という仮の名前をつける以上のことはできません。物質次元に限定された中では、直接的にそれを語る言葉も想像することもできないからです（「4.3 本源」参照）。

直接的にそれを語ることはできませんが、しかし、それを指し示す指はどこかにあるのではないか。そんな思いから最初に発想したのがツイストペアという構造でした。

6.1 ツイストペア

ツイストペアとは、互いにそれぞれの爻が陰陽逆の関係にある、大成卦の対のことです。たとえば、図の例では、44:震為雷と 55:巽為風というふたつの大成卦がペアを構成しています。

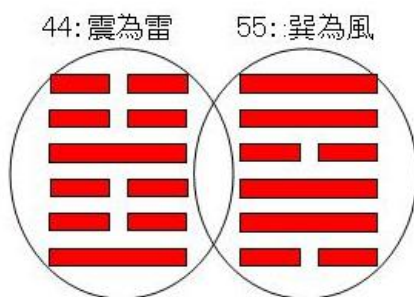


図 6.1 ツイストペアの例

大成卦ふたつでひとつのペアを構成していますので、 $64 \div 2$ で 32 のツイストペアがあることになりますが、本システムではこのペアにも、番号（1～32）と意味（キーワード）をつけていて、占断に利用することができるようになっています（11章 ツイストペアリスト（347 ページ）参照）。

いわばツイストペアは、従来の六十四卦の構造を材料として「創発した」わけです。

6.2 マスターマトリクス

六十四卦をよくみるとツイストペアのような対称性はいたるところに見られます。というよりも、システムにおけるシンボル全体が対称性でなりたっていると考えていいで

しょう。

たとえば八卦を「乾兌離震巽坎艮坤」の順に並べてみると、その中央から、各八卦に含まれる爻の陰陽を反転したペアどうしがなっているのがわかります（図 6.2）。

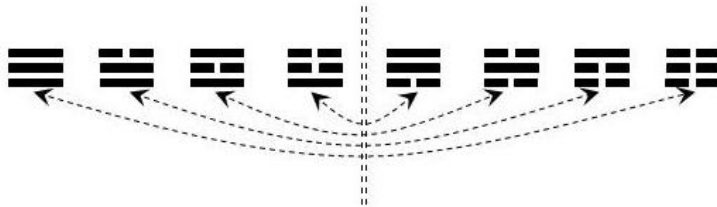


図 6.2 八卦のシンメトリ

考えてみればこれは当たり前の話で、おおもとが陰と陽との対であるわけですから、いくら爻が増えてもその対称性はひきつがれていくわけです（図 6.3）。

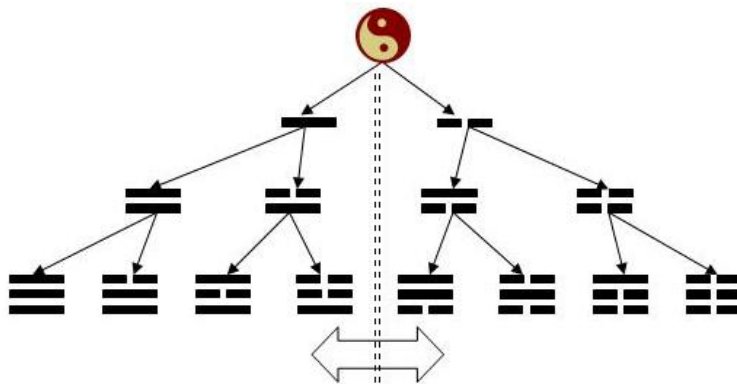


図 6.3 両儀から八卦へ

マスターマトリクスは、図 6.3 に示した「乾兌離震巽坎艮坤」という八卦の並びを、それぞれタテヨコに配置し、タテの並びの八卦を下卦、ヨコの並びの八卦を上卦として構成される大成卦による行列です。

上 下	1	2	3	4	5	6	7	8
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								

図 6.4 マスターマトリクス

先に述べたように、もともとの「乾兌離震巽坎艮坤」という八卦の並びが対称性を有していますので、マトリクス上では、上卦は中央タテのラインから左右に対称性があります。

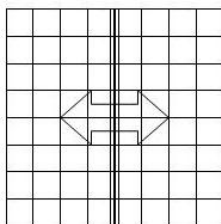


図 6.5 マスターマトリクス上の大成卦・上卦の対称性

同様に下卦は中央水平のラインから上下に対称性があります。

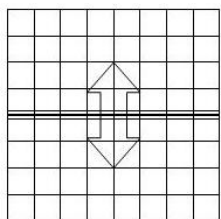


図 6.6 マスターマトリクス上の大成卦・下卦の対称性

ツイストペアはマスターマトリクス上では、マトリクスの中央の点（図では太極図で示される＝本源（道）の意味）を中心に対称に並びます。

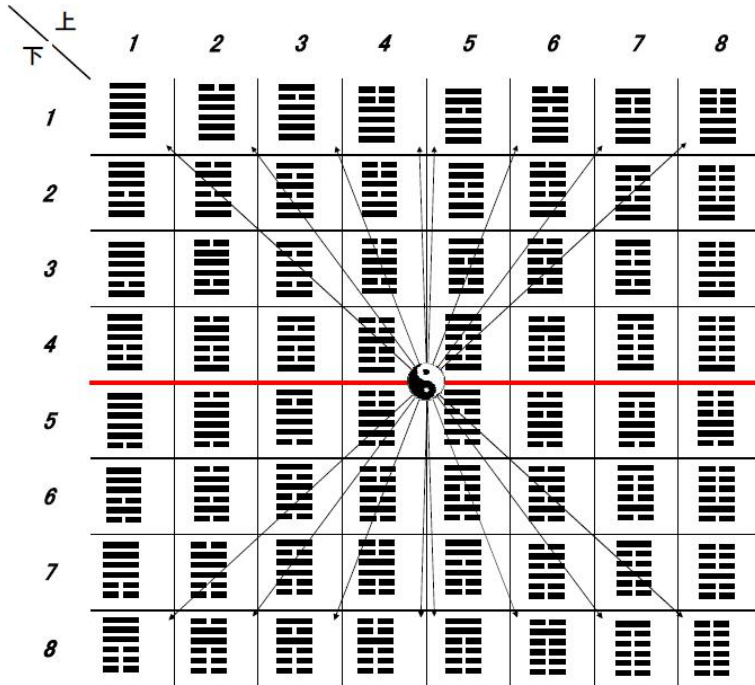


図 6.7 マスターマトリクス上のツイストペア

つまるところ、「ペア」とそこから導かれる「^{シンメトリ}対称性」——バランスの維持が、このシステムのいいことなのではないか、と思います。たまたま読んでいた本に同様の考えについての記述があったので、少し長いですが引用します。

この宇宙を考える場合、ネイティブ・モンゴロイドの聖なる伝統の根っこにあるコンセプトとして忘れられないことは、宇宙にあるすべての要素は、どこを探してもひとつで存在しているものではなく、必ずペア、一組で存在し、その二つが互いにバランスをとりあっているという認識である。

これはどういうことかと言うと、片方が限度を超えた途端に、当然バランスそのものも壊れるということなのだ。この考え方は、太平洋の西におけるいわゆる陰陽道（マクロバイオテック）の「易」と、寸分たがわないものと考えていいだろう。私は想像するのだが、「易」を作り出すもととなった考え方こそ、もともとこうしたネイティブ・モンゴロイドの聖なる宇宙観ではなかっただろうか。

引用の引用になりますが、[12] には以下のような記述があります。

対称性は、自然を支配しているというよりは、自然を説明する役割を果たしています。物理的な宇宙、あるいは生物学的な宇宙でさえ、理解が深まるにつれて、ますます複雑になるように見えます。数式はますます複雑になり、説明しなければならない対象がますます増えます。そこで、すべてを統一する原理が欲しくなります。そこに登場するのが対称性です。近代物理学に対称性を導入したのはアインシュタインの功績です。彼は特殊相対性理論、 $E = mc^2$ によってそれを成し遂げました。物理の法則が任意の系にあてはまるという説は知識の大幅な増大をもたらしました。光速は系の速度に関係なく不変である。それが相対論です。そのお陰で、対称性が実際に物事を大幅に単純化すること、対称性が物理学の数学あるいはあらゆる科学の数学のもっとも重要な基礎であること、対称性が自然の説明にエレガンスと美をもたらすことが、私のような、しがない実験物理学者にも非常に明確にわかるようになったのです。

レオン・レーダーマン [12]

前者は、ネイティブ・モンゴロイドの視点、後者は物理学者の視点ですが、同じことを言っているように思えるのは著者だけでしょうか。

6.3 八卦はメタフィジカル

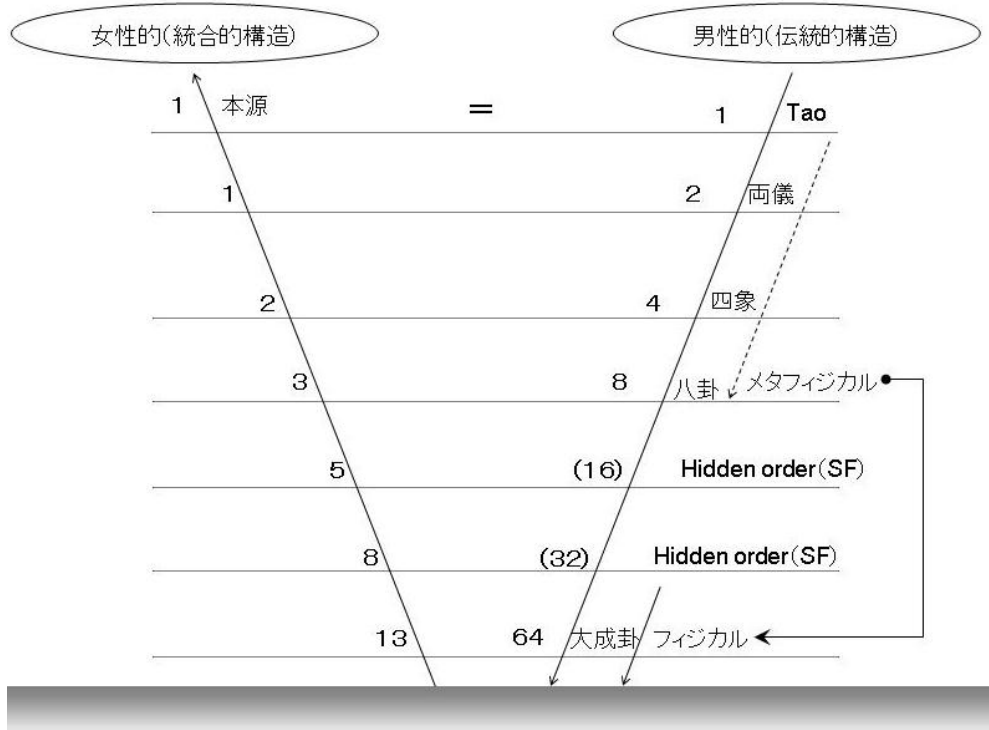


図 6.8 男性原理と統合原理

図 6.8 を参照してください。ちょっと復習しますと、右側の下降する矢印が本源から両儀→四象→八卦→六十四卦という構造を 2 倍進数で示した部分です。左はフィボナッチ数列で象徴される調和的原理です。

右側の下降する矢印の図の八卦から大成卦に至る部分で、「メタフィジカル→フィジカル」となっています。

「5 章 顕現^{ストーリー}」の内容では、両儀→四象→八卦→六十四卦という構造をすべて具体的なものにあてはめてご紹介しましたが、一方ではこの構造を、メタフィジカルなもの（前兆）がフィジカルなもの（具体的な事象）へと現れてくるプロセスととらえることもできます。

八卦には具体的な自然物も当てはめられていますが、1→2→4→8 と進んでくる流れみると、八卦はスピリットが具体的なカタチをとる直前のものあらわすシンボルと考えることもできます。

1 → 2 → 4 → 8 の系列の中では、もっとも地上＝粗大なレベルに近い単位ということになりますが、それでも手にとってみるできない抽象的なものであることには変わりはありません。

八卦はメタフィジカルなものなのです。

一方、六十四卦は占術における具体的情報でありフィジカル（粗大、具体的）なものと考えられます。1 → 2 → 4 → 8 と進んできたメタフィジカルな単位は、つぎの64 で初めて具体的な森羅万象というカタチをとります。1 → 2 → 4 → 8 → 「64」で、初めてスピリットはその姿を地上に現わすわけです。

八卦は、メタフィジカルな世界とフィジカルな世界をつなぐ^{リンク}輪と考えることもできます。これが、図 6.8 における右側の下降する矢印、「メタフィジカル→フィジカル」という表記の意味です。

6.4 ミッシングリンク

今一度、図 6.8 を参照してください。

図の右側をみていただくと「16」と「32」がカッコに入れています。これは易システムには「16」と「32」に相当する構造がないことを意味していますが、それはどうしてでしょうか。

答えは「5 章 顕現（39 ページ）」で説明したとおり、両儀 (2) → 四象 (4) → 八卦 (8) と来て、八卦が二段に重ねられて六十四卦になったからです。

両儀 (2) → 四象 (4) → 八卦 (8) の流れでは爻がひとつひとつ積み重なっていった構造が創発したわけですが、八卦→六十四卦の段階では爻が追加されずに、八卦そのものが組み合わさることにより、次の構造が創発したため、八卦からいきなり六十四卦が生じたというわけです。

と、ここまでは、「16」と「32」に相当する構造が欠けている「数理的な」理由です。

「16」と「32」に相当する構造が従来の易経にないということに、「どういう意味があるのか」という、意義を問う疑問に対する回答にはなっていません。

ここで気がついたのは、参考文献の [9]、[10] などにみられる「ストラクチャード・ファンクション」という考え方です。

これはもともと、創発を繰り返すことにより発展するホロン構造 ([5] 参照) としてとらえることのできる人間の脳における、現在の状態以上のホロン構造を示すために使われている言葉で、簡単にいえば、あらかじめ組み込まれた将来用の拡張領域であり、現時点では使途不明の機能です。^{*1}

^{*1} 【脳の利用率】これについては定義は困難であるようです。「人間は実際には脳の 10 % 以下しか使っていない」とはよく聞く話ですが、根拠がはっきりせず、これを否定する考え（ようするに全部使っているとする）もあるようです。いずれにしてもわからない部分だけであるのは確かです。

つまり、「16」と「32」は、従来にはない拡張用の構造を示すものと、とらえたわけです。こう考えるに至った最大の理由は、「32」という数字が、64を2で割ったツイストペアの数と一致していたことです。ツイストペアは従来構造から創発した（拡張された）新しい構造ととらえることができます。

6.5 フィボナッチ数列の探求

「32」がツイストペアをあらわしているとすれば、残った「16」はなにを意味しているのか。これが次の課題でした。

著者はこの答えを二倍進数の左側に対置したフィボナッチ数列に求めました。くりかえしになりますが、この上昇する矢印は調和的原理をあらわす、としました。「調和」であるからには、従来の構造をその中に含んでいるはずです。

まずはそれを確認することからはじめました。

6.5.1 フィボナッチ数列に含まれる従来構造

これについてはあれこれ言葉で説明するよりも図で示した方が早いと思います。

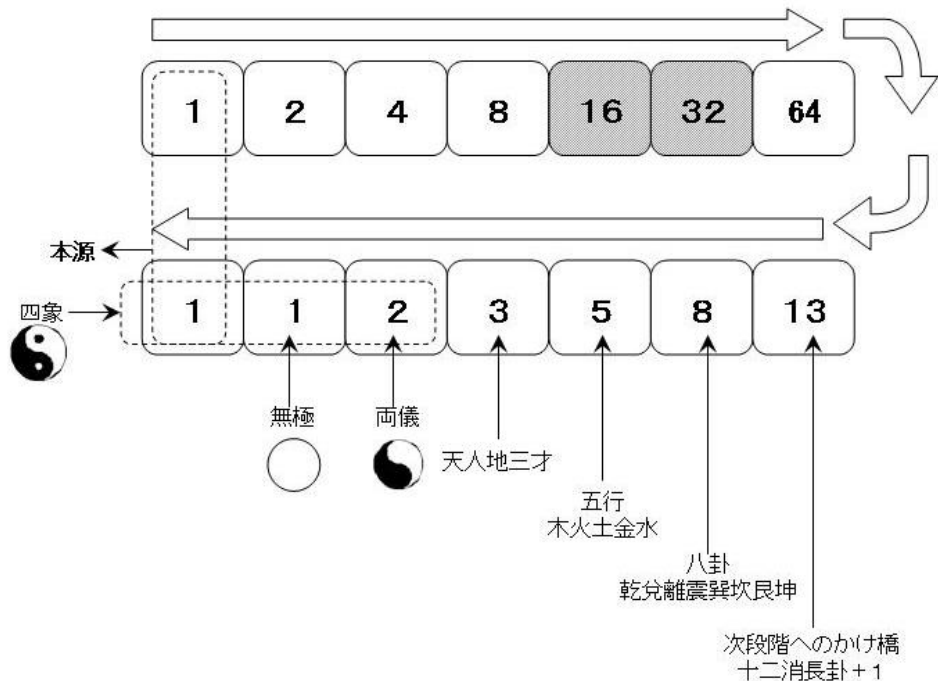


図 6.9 フィボナッチ数列に含まれる従来構造

図 6.9 では二倍進数とフィボナッチ数列が水平に描かれていますが、これは単に図 6.8 が横になったものと考えていただければいいと思います。横になった数列をたどる矢印は、進化の方向、「フロー」です。

すなわち、図 6.8 に則していえば、フロー——進化の方向は、天から地上に下り、地上での経験を踏まえて、さらにそこから上昇していくプロセスとして描かれているわけです。

十二消長卦

図 6.9 で「十二消長卦」という言葉がでてきましたので、ここで簡単に説明しておきます。十二消長卦についてのより詳しい説明については「十二消長卦一般 (188 ページ)」を参照してください。

十二消長卦は、易経の中では断片的に言及されていますが、もともとシステムの中に含まれていた考えではないのかもしれませんが、後代のどちらといえば秘教的な [50] のような文献ではくわしく説明されています。簡単に言ってしまえば、易システムの中に見られるサイクルをあらわす大成卦のグループで、全部で 12 の大成卦がこれにあたるため十二消長卦（または十二消息卦とも）と呼ばれます。

それぞれの大成卦が暦上における特定の月をあらわすこともあります。図 6.10 にその対応を示します。

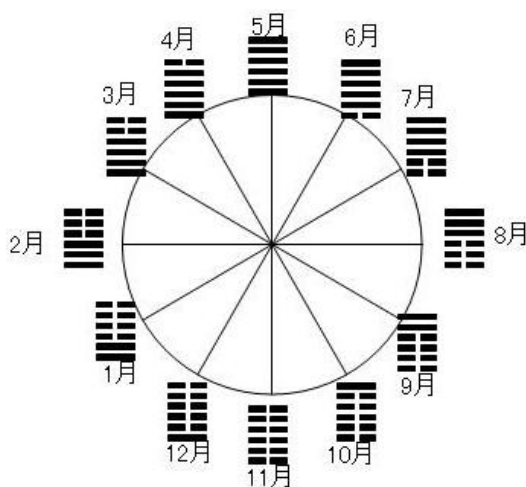


図 6.10 十二消長卦

図 6.10 をみると、12 月、冬至の月には初爻だけが陽になっています。陰の極致である（全部の爻が陰）11 月の卦の一番下が、陽に反転したわけです。

ここから右回りに 1 月、2 月、3 月……と進んでいくわけですが、そのたびに下から陽爻が増えていきます。5 月になるとすべての爻が陽になり、「陽」の極致となります。円

周上で5月は「陰」の極致である11月のちょうど対極になっています。

6月からは下から陰の爻が増えていきます。陽の爻が増えていった12月～5月と、今度は逆の変化をたどっていき、11月に至ってまた陰の極致に戻ります。陽が「長」じて陰が「消」え、陽が「消」えて陰が「長」じる……これが消長卦と呼ばれるゆえんです。

6.5.2 フィボナッチ数列にかくれていた「16」

さて、図 6.11 下段に示すのがフィボナッチ数列に含まれる調和的構造の全体像です。

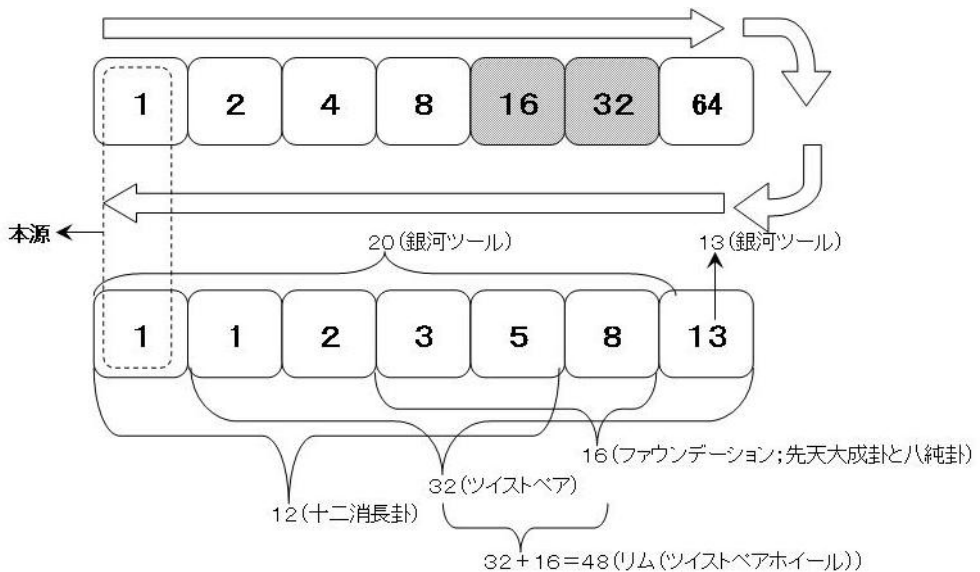


図 6.11 フィボナッチ数列に含まれる調和的構造

2倍進数ではかくれた秩序となっていた「16」は、図 6.11 に示したように容易にフィボナッチ数列に見出すことができます。数列上では「16」は「3」と「5」と「8」にわかれています。

「3」「5」「8」のうち「8」は八純卦をあらわすとしました。

純卦とは、上卦と下卦が同じ八卦で構成されている大成卦のことです。純卦はそのまま八卦に対応しますから、システムの64のシンボル中には八つの純卦があることになり、このグループ「八純卦」というわけです。

八純卦は、マスターマトリクス上では図 6.12 のように並びます。

上 下	1	2	3	4	5	6	7	8
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								

図 6.12 マスターマトリクス上の八純卦

また、十二消長卦は、マスターマトリクス上では図 6.13 のように並びます。

上 下	5月 1	4月 2	3	3月 4	5	6	7	8	
1									2月
2									1月
3									
4									12月
6月 5									
6									
7月 7									
8月 8									
				9月		10月	11月		

図 6.13 マスターマトリクス上の十二消長卦

図をご覧になっておわかりになると思いますが、八純卦も十二消長卦もマスターマトリクス上で、一定のうつくしさ——規則性・対称性があります。「うつくしさ」というのは主観ではありますが、自分が向かおうとしている方向のたしかさを裏付ける重要な内的感覚であると、著者は考えています。

そのようなわけで、これからのお話では、その構造を構成する要素がマスターマトリクス上で「うつくしく」並ぶか否かを、その構造を採用する根拠として考えていきたいと思っています。

これでわたしたちは調和的構造の探求にあたり、フィボナッチ数列とマスターマトリクスというふたつの羅針盤を手にしたことになります。

お話はフィボナッチ数列上にみいだされた2倍進数列上の隠れた秩序「16」に戻ります。数列上では「16」は「3」と「5」と「8」にわかれていて、「8」は八純卦であるとなりました。では、残りの「3」と「5」はなにを意味するのか、それを探るのが次の課題になりました。

6.5.3 「3」と「5」は先天図に

「3」と「5」がいったいどこにあって、なにを意味するのか。この答えに行きあたるまでは少々時間がかかりました。マスターマトリクスや、フィボナッチ数列を眺めていても、どうもちがいません。

そのまま何週間かが過ぎましたが、あるとき先天図をみていて「3」と「5」は先天図の中にあるのではないかと想いいたりしました。

先天図と後天図

先天図は、後天図と共に各八卦が各方位にどのように対応するかを示した図です。先天図に則っているとされるのが先天易で、先天易とは召*2雍（召康節：1011～1077）が唱えたもので、両儀から爻をひとつひとつ積み重ねていって六十四卦に至るとする説を含みます。[44]（加一倍法）。*3 この説に従えば、図 6.8 においてミッシングリンクとした「16」と「32」は存在することになります。[44]における図 6.14「伏羲*4 六十四卦次序図」にはたしかにその構造は示されていますが、16 ないし 32 の各卦には名称もつけられておらず、占術上意味があるものなのかどうか、著者にはよくわかりません。一般的にも——秘伝とか奥義、口伝を除き——少なくとも日本で行われている易占術で、16 または 32 の各卦を利用した手法があるということもきいたことがありません。

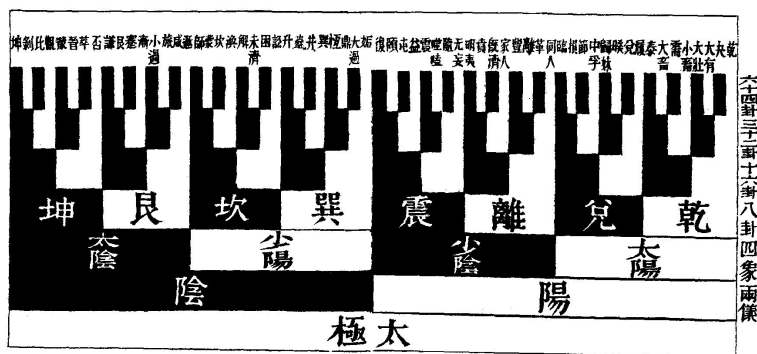


図 6.14 伏羲六十四卦次序図 [44] より

*2 「召」へんに「口」

*3 召康節は独自に「梅花心易」とよばれる易を創始したとされており、これが先天易です。この梅花心易の中には先天法、後天法などの手法があります。[42]、[41]

*4 【伏羲】古代中国の神話に登場する神または伝説上の帝王。伝説ではありますが、八卦を創ってさらにそれを重ねて六十四卦と創ったとされます。

そのようなわけで、現在一般的に易といえば周易＝後天易——文王 *5

の易のことで、これまでのお話も暗黙のうちに文王の易ベースであり、文王の易には文王の易の、各八卦の方位への対応があり、これを後天図といいます。

朱子（1130～1200）が記した「周易本義」[44] には、先天図・後天図が併記されています。

余談ですが、同書における「伏羲六十四卦方位図」の円の中の行列で、上下卦における「乾兌離震巽坎艮坤」の並びを反転させると、マスターマトリクスの配列になります。つまりマスターマトリクスと「伏羲六十四卦方位図」は、ちょうど行・列が反転したならびになっています。

「伏羲六十四卦方位図」の行列の外を丸く取り囲む大成卦は、下卦を先天図にしたがって、「乾兌離震巽坎艮坤」のならびで8つずつのグループとして配置し（下卦乾8つ、下卦兌8つ、下卦離8つ……）、上卦は各グループごとに「乾兌離震巽坎艮坤」の順番で各八卦が配当されています。円周上で向かい合った二つの大成卦は、ツイストペアを構成します。

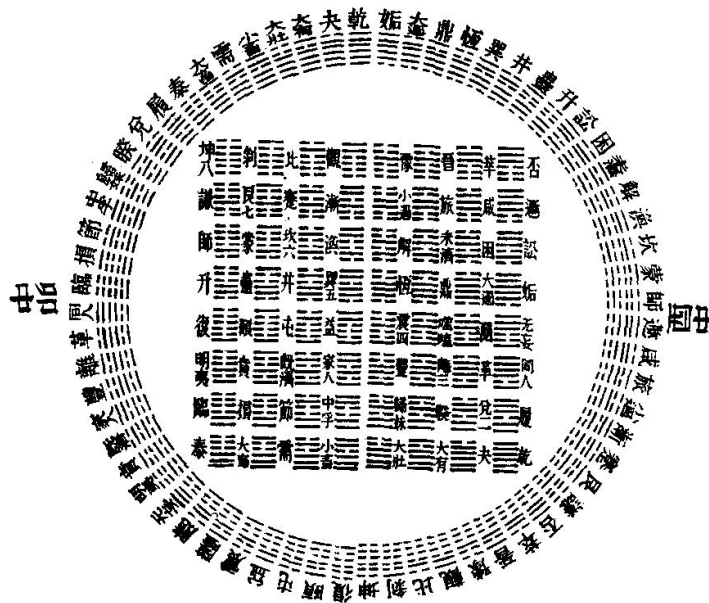


図 6.15 伏羲六十四卦方位図 [44] より

*5 【文王】中国周朝の始祖。周王朝のの創始者である武王の父にあたります。伝説ですが、卦爻辞を作ったとされます。

システムハンドブック Ver1.0 で、マスターマトリクスを提示させていただき、マスターマトリクスを円周上に展開する形で、「ツイストペアホイール」という、64 ある大成卦をすべて円周上にならべたダイアグラムを提示させていただきました。

あとからわかったことではありますが、結果的にそれらは、この「伏羲六十四卦方位図」の上下卦における「乾兌離震巽坎艮坤」の並びを反転させたものでした。

先天図、後天図を図 6.16 に示します。

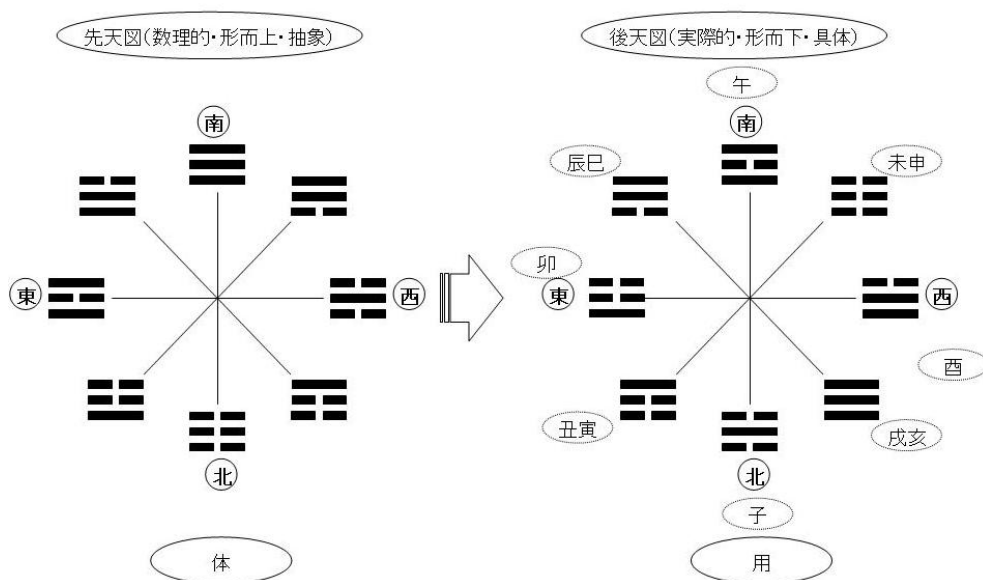


図 6.16 先天図・後天図

実際の占術で方位を見る場合にもちいられるのは後天図ですが、では、先天図にまったく意味がないかといえばそうではなく、たしかに占術に直接使われることはありませんが、後天図を導くもととなっているというのが一般的な理解のようです。

すなわち、先天図はこの地上にこのように森羅万象があらわれる原理、主体——メタフィジカルなものであり、後天図は先天的な要素が働いた結果——作用と考えるわけです。この原理の方を「体」、作用の方を「用」といいます。またこの意味で、周易本義[44]でも、先天図は後天図の前に提示されています。

先天図は、いわば車輪を回すモーターにあたります。後天図は、同じ八卦というシンボルをつかってその車輪がどう動くか——具体的な（フィジカルな、地上的な）プロセスがどう動くかを表現したもので、そういう意味では別の次元のものです（図 6.17）。

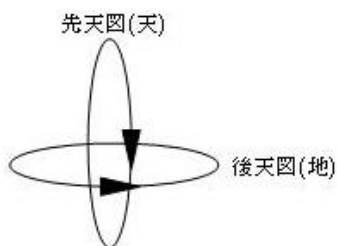


図 6.17 先天後天の概念

先天図の特徴

先天図には後天図にはない、さまざまな数理的な特徴があります。

なかでも先天図と後天図の決定的な違いは、先天図では、お互い正面にある八卦どうしは爻の陰陽を反転した、いわば八卦版のツイストペアの関係にある（図 6.18）のに対し、後天図では、一部を除き、そのような対称性は見られないことです（図 6.16）。

これからのお話の展開に必要なその他の特徴のいくつかを説明します。

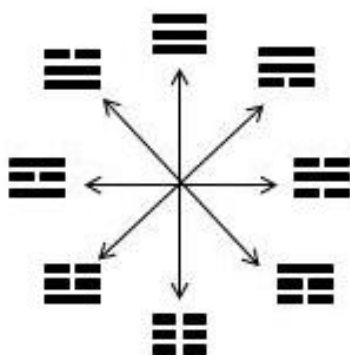


図 6.18 「八卦版」ツイストペア

十二消長卦は、特定の卦のグループであるとともに、

「爻を下から反転させていって、全部反転したら、さらにまた下から反転させていって最後に元の卦にもどす」

という操作子（オペレータ）としてとらえることもできます。このルールで先天図から八卦を拾っていくと図 6.19 のようになります。

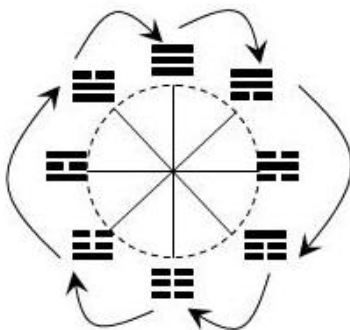


図 6.19 六つの消長卦としての八卦

さらに先天図上の四方位の卦をみると、八卦のうちでもかなり特徴的な卦がこの4点にくるのがわかります（図 6.20）。

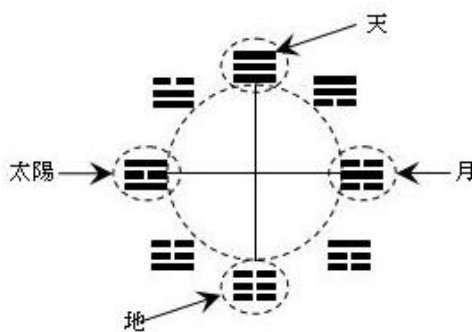


図 6.20 四正

この4つの方位を四正といいます。中心を自分とした場合の前後左右、というわけで最も基本となる方向です。方位としては、図 6.20 でいうと、天＝南（12 時）、地＝北（6 時）、太陽＝東（9 時）、月＝西（3 時）となります。^{*6}

^{*6} 現代の地図とは異なり、南が上になります。図 6.16 も同様です。

この四正は、実際の方位であるとともに、先天図における「体」と「用」もあらわしています。すなわち、天＝南（12時）と地＝北（6時）を結ぶ軸が「体」、つまりこの場合は私たちが暮らすこの宇宙の本体であり、その働きをもっともよくあらわすシンボルとなるのが、太陽＝東（9時）と月＝西（3時）の動きで、「用」になります。

周易参同契 [50] という古典には次のようにあります。

乾坤は、易の門戸にして、衆卦の父母なり。

坎離は匡郭<きょうかく>にして、轂<こしき>を運<めぐ>らし軸を正す。

鈴木由次郎 周易参同契 [50] 上篇第一章冒頭 より

ここで、匡郭は、天守閣のことで、乾坤で構成される軸——を守るものとして表現されています。轂は、車輪でいえばハブ（軸受け）のことです。つまり、乾坤という軸（体）を中心に、坎離という車輪がまわる（用）というわけです。

先天図と後天図は体用の関係にあります。同様の関係がまったく相似に、先天図自身の中にも組み込まれている、ということになります。

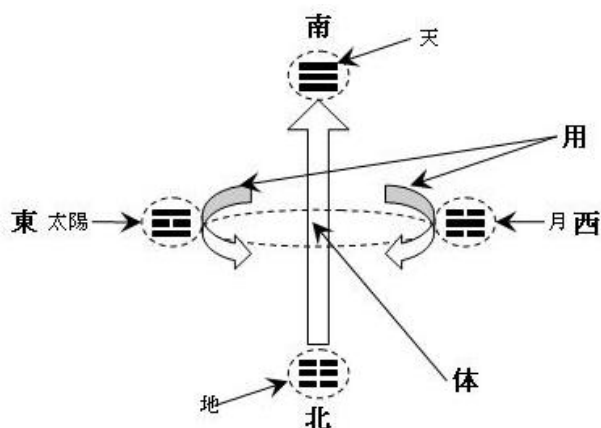


図 6.21 先天図における体用

「乾坤離坎」という卦をよく見てみると、図形的に上下対称であることがわかります（図 6.22）。

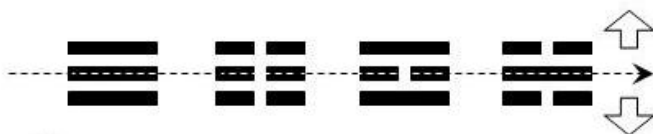


図 6.22 四正卦における対称性

これも「うつくしさ」のひとつのかたちであり、四正卦はシステムを中心である先天図のさらに中心ということができるとでしょう。

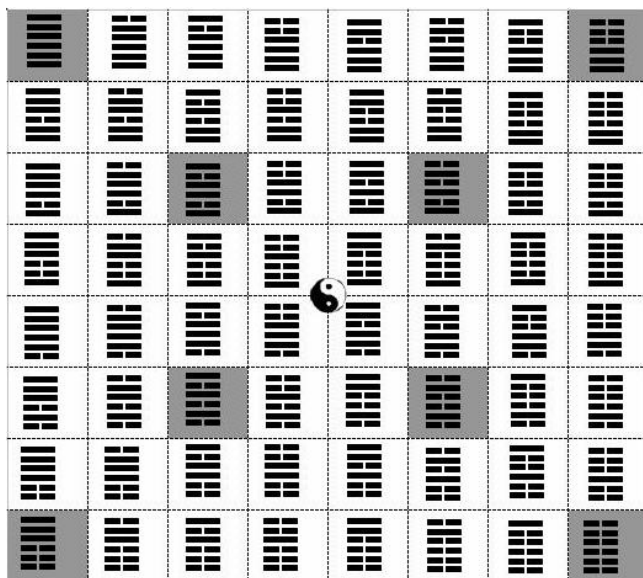


図 6.23 マスターマトリクス上の四正

さらに、六十四卦各大成卦に対して特定の操作^{*7}をすると、六十四卦は最終的に4種類の大成卦に集約されます（図 6.24 参照）。

この、集約された4種類の卦は、11：乾为天、88：坤为地、63：水火既济、36：火水未济であり、いずれもこの四正卦によって構成される大成卦になります（図 6.25 参照）。

^{*7} 互卦、約象。186 ページ参照

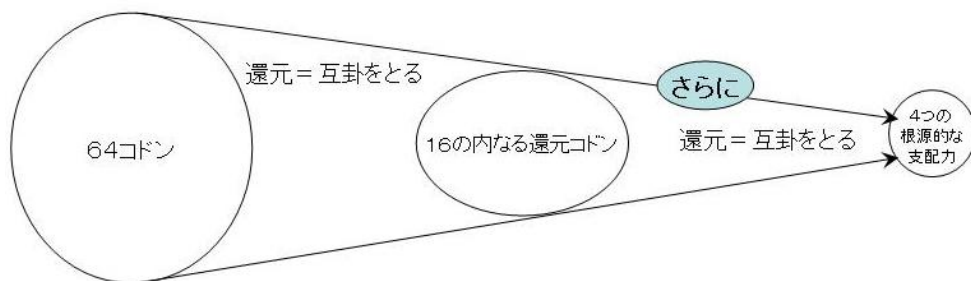


図 6.24 内なる還元コドン

注：「コドン」は銀河ツールにおいては、「卦」と同義。還元コドンは、互卦・約象（186 ページ）のこと。銀河ツールと伝統的な易との用語の対応については、「20 の銘板」と周易の用語対応（405 ページ参照）」

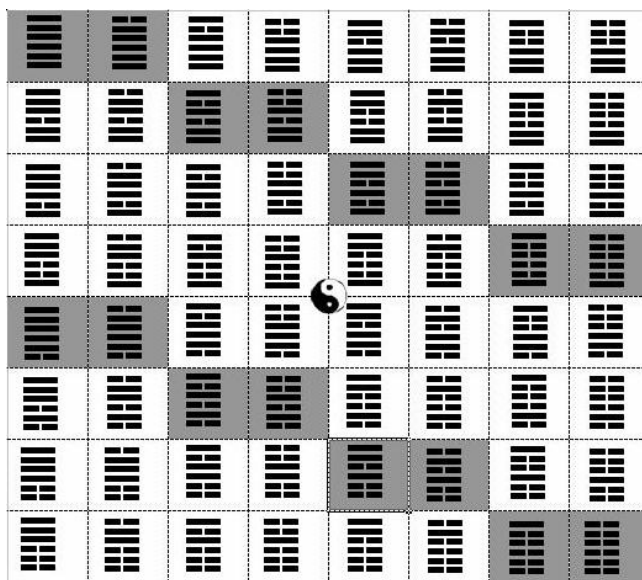


図 6.25 マスターマトリクス上の「16 の内なる還元コドン（互卦）」

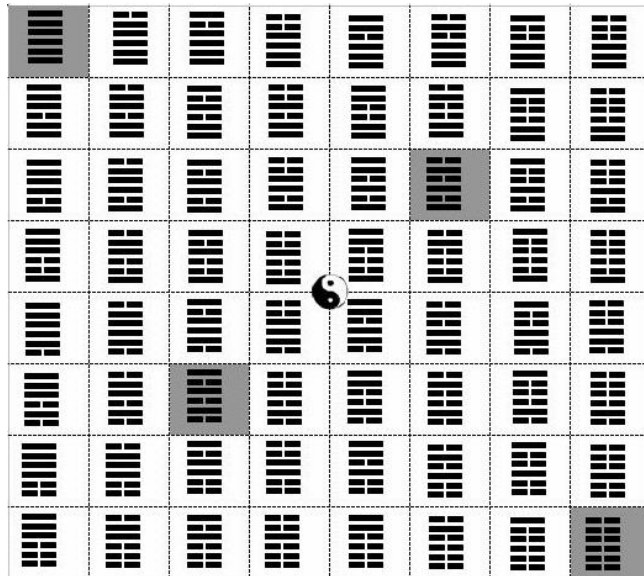


図 6.26 マスターマトリクス上の「4つの根源的な支配力（互卦の互卦）」

さて、先天図上において、八卦を「乾兌離震巽艮坤」の順でひろっていくと、図 6.27 のようになります。

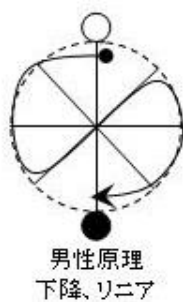
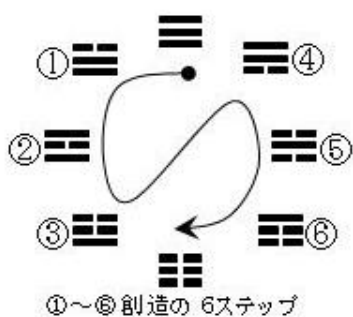


図 6.27 先天図一下降

一方、先天図で、乾を陽の極、坤を陰の極として、これを十二消長卦のルールで拾っていった八卦の進行方向と組み合わせると図 6.28 のようになります。

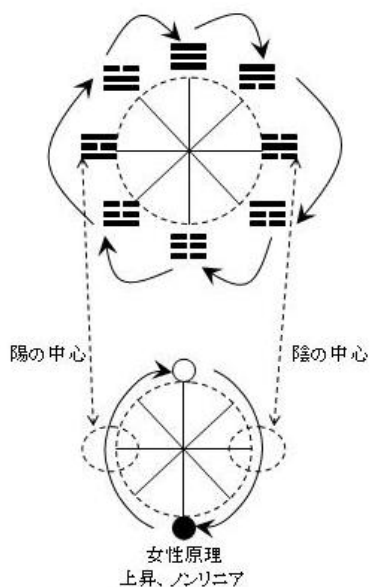


図 6.28 先天図一上昇

図 6.27 を、天（乾）から地（坤）へ、現状の世界がこのような創られた創造のプロセス、図 6.28 をその世界の在り様を踏まえて本源に気づくプロセスとするなら、図 6.27 には男性原理、図 6.28 には女性（調和）原理をそれぞれあてはめることができるかと思います。

先天図のどこが「3」？どこが「5」？

長々と先天図についてお話してきましたが、この先天図のどこがフィボナッチ数列の「3」で、どこが「5」なのか、という話に戻ります。

まず「5」ですが、これには四正と、本源を示す中心があてはまる、としました。

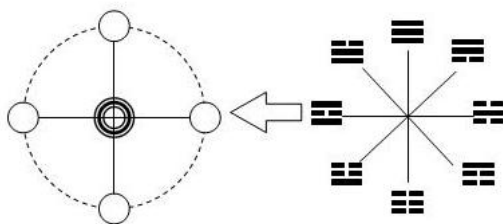


図 6.29 先天図の 5

つぎに「3」ですが、これには各八卦版のツイストペアがあてはまる、としました。「ペア」だから「3」ではなく「2」だろう、と思われるかもしれませんが、中央の本源をいれて、「3」です。もっとただしくいうなら、各八卦版ツイストペア（2）＋本源（1）で、3ということになります。

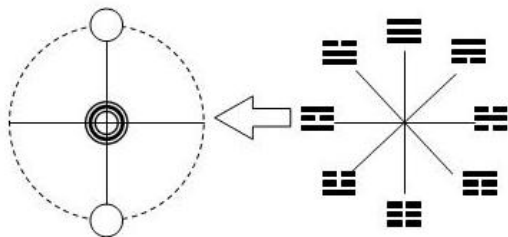


図 6.30 先天図の 3

なんだかこじつけっぽく聞こえるかもしれませんが、そもそもツイストペアは、直接指示することのできない本源を指す「指」として創発したものです。そういう意味でも、本源を外すわけにはいきません。この組み合わせは $8 \div 2$ 、全部で4つあります。

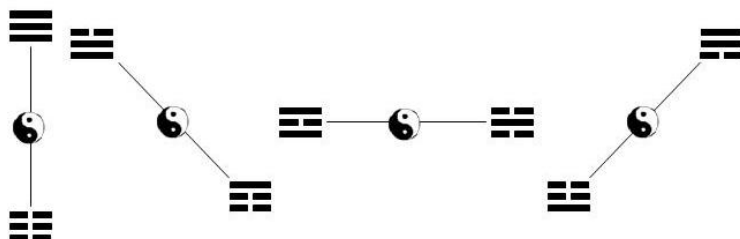


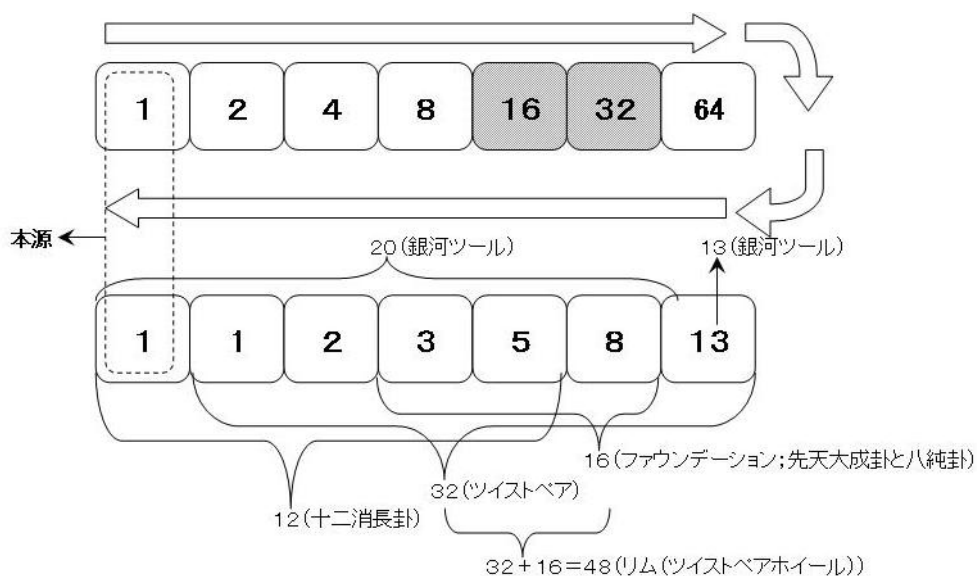
図 6.31 先天図の3、全図（4つの3）

このようにして「3」も「5」もいずれも先天図の中にみいだすことができました。

システムハンドブック Ver1.0 で提示させていただいた「ツイストペア・ホイール」は、上下卦の並びが円周上で反転しているものの、結局は「伏羲六十四卦方位図」の外周の円と等価なものだった……ということは「6.5.3「3」と「5」は先天図に（67 ページ）」の「先天図と後天図」の中でお話させていただきましたが、それに気がつく前に、ツイストペア・ホイールは、先天図を中心にするということと、フィボナッチ数列の探求から得られた結果をもとにするということで、独自の発展をとげていきました。

先天大成卦

以下に図 6.11 を再度示します。



「3」「5」「8」は上段の2倍進数列におけるミッシングリンクである「16」に対応しています。「8」は八純卦に対応するとしました。

八純卦はマスターマトリクス上では右下がりの対角線上にきれいに並びます (図 6.12 参照)。

「3」と「5」がどのようにマスターマトリクス上に展開するのか、考えているうちに、ある時、先天図上で向かい合ったふたつの八卦を、図のように重ねることにより、特別な大成卦ができることに気がつきました。

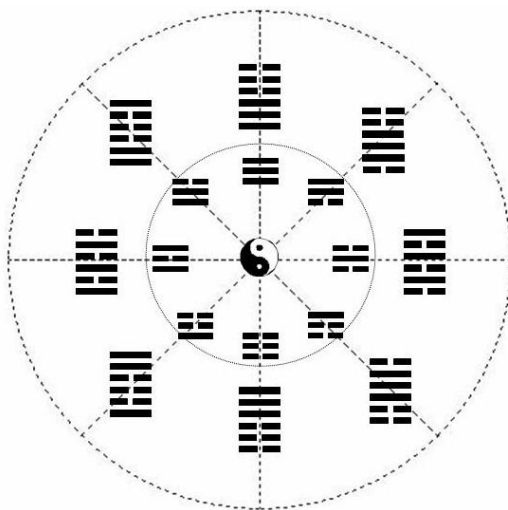


図 6.32 先天大成卦の構成

先天図上において、ある方位にある八卦を下卦として、その向かい側にある八卦を上卦としてつくられた大成卦には次のような特徴がありました。

1. 上卦と下卦は互いに陰陽を反転した関係にある。
2. 各大成卦は3つの陰爻と3つの陽爻から成り立っている。

1 の特徴については、先天図の特徴をそのままひきついでいます（図 6.18 「八卦版」ツイストペア（71 ページ）参照）。2 の特徴については 1 の特徴から必然的に導かれます。

2 の特徴をそなえた大成卦は、実は他にもあります（図 6.35 「マスターマトリクス上の三陰三陽卦（85 ページ）」参照）しかしながら、このふたつの特徴を同時に兼ね備えた大成卦は、図 6.32 に示した 8 つの大成卦以外ありません。

つまり、上卦下卦の各爻が陰陽反転の関係にあり、かつ、三陰三陽の大成卦はこの 8 つしかないわけです（もっとも、上卦下卦の各爻が陰陽反転の関係にあれば、その大成卦は必然的に三陰三陽であることは先に述べたとおり）。

そのような他にない特徴を持っているため、この8つの卦に「先天大成卦」という名前をつけました。

先天大成卦はその意味の上では、次に示すような点で重要であるということができます。

- 上卦と下卦が八卦版のツイストペアになっているということは、これら先天大成卦はそれぞれ単独で「本源」を指していると考えられることができる。
- 三陰三陽卦は大成卦の中でも、もっともバランスの取れた大成卦のグループである。

先天大上卦はこの二つの要素が統合された——ある種、理想を示すシンボルということもできるでしょう。

先天大上卦をマスターマトリクス上で展開すると図 6.33 のようになります。

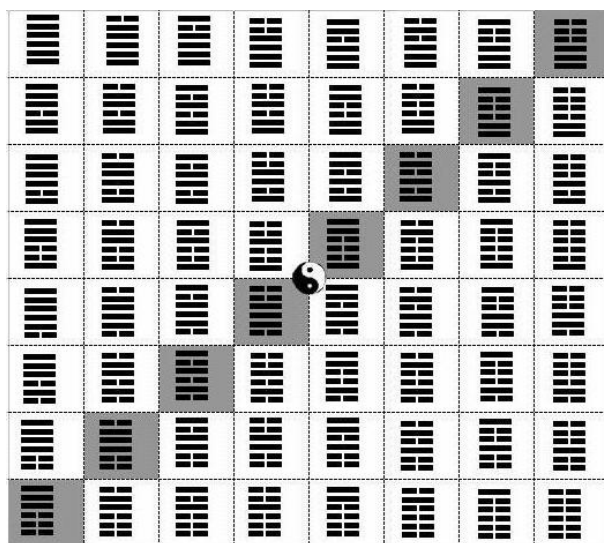


図 6.33 マスターマトリクス上の先天大成卦

この八純卦と対称的な右上がりの対角線上の並びは、「6.5.2 フィボナッチ数列にかくれていた「16」（64 ページ）」で述べた「うつくしさ」をあらわしているといっていでしょう。

八純卦と先天大成卦をあわせてマスターマトリクス上に展開すると以下ようになります。

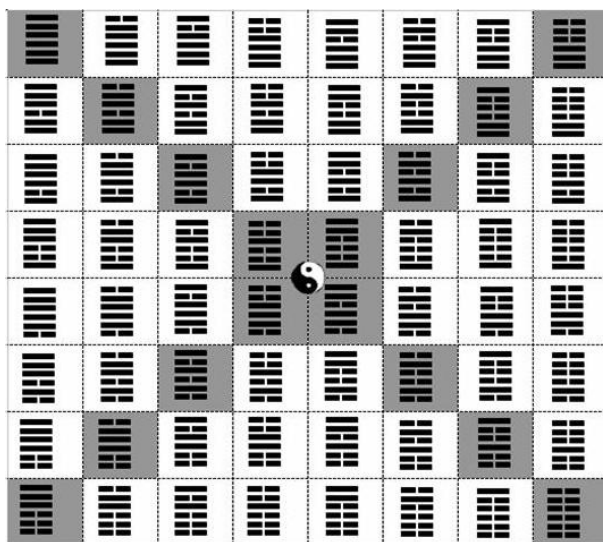


図 6.34 マスターマトリクス上の八純卦と先天大成卦

本源の方向とそこへ至るバランスを示す先天大成卦と、メタフィジカルなレベルとフィジカルなレベルの架け橋となる八純卦は（「6.3 八卦はメタフィジカル（60 ページ）」参照）、マスターマトリクス上の二つの対角線上に展開されます（図 6.34）。

ごらんのとおり、このふたつのグループはマスターマトリクス上で見事な対称性を示します。それはまるで、マスターマトリクス全体を支えている土台のようにも見えるため、先天大成卦と八純卦、このふたつの大成卦のグループをあわせた全 16 卦をファウンデーション——基盤と呼ぶことにしました。

ファウンデーションを構成する大成卦の数である「16」は図 6.11 に示すようにフィボナッチ数列にあらわれています。

ここで、参考までに三陰三陽卦が、どのようにマスターマトリクス上に展開されるか示しておきます。

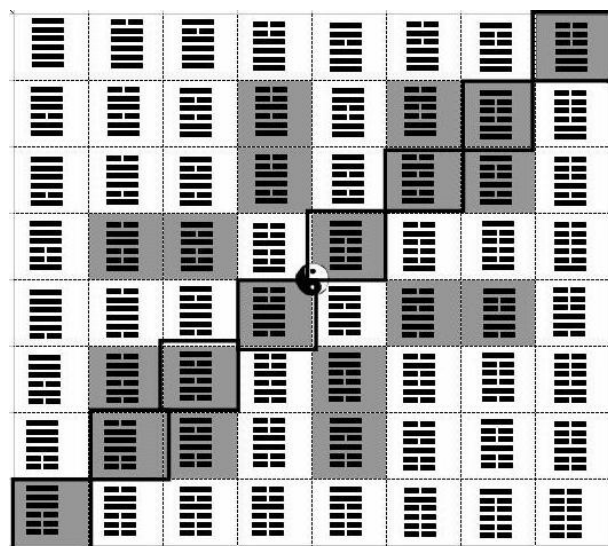


図 6.35 マスターマトリクス上の三陰三陽卦

三陰三陽卦はその名のとおりに 3 つの陰爻と 3 つの陽爻から成る大成卦のことで、大成卦全六十四卦中、20 卦がこれにあたります。陰爻と陽爻の数が等しいわけですから、意味としては、六十四卦の中でもっともバランスのいい大成卦のグループ、ということが出来ます。

図 6.35 をみてもわかるとおり、そのマスターマトリクス上における配置は一定の「うつくしさ」を有しています（太線で囲まれた大成卦は先天大成卦）。

また、六十四卦中の三陰三陽卦の全体数である 20 という数も、フィボナッチ数列上に現れています。^{*8}

^{*8} $1 + 1 + 2 + 3 + 5 + 8 = 20$ 。図 6.11 では、「銀河ツール」の 20 として示されている。

6.6 ツイストペア・ホイール

大成卦で環——ホイールをつくってみよう、というのは、もともと最初に著者の易レクチャーを聞いてくださっていたある方の発想によるものです（1章はじめに（3ページ参照））。

ツイストペアの話をした後の雑談で、それらのペアを環状に組んでみたら新しい発想が生まれるかもしれないという話になりました。その方は星読みでもあり、星読みではホロスコープという立派なホイールを使いますから、そのような提案にたどりつくことは、ごく自然な流れだったと思います。

あとから調べたり、あるいは他の方のお話をうかがったりしていく中で、「ホイール」というシンボルは、太平洋を囲むように暮らしている、または暮らしていたネイティブ・モンゴロイドの間に、共通的にしっかりとそのベースによこたわっているんだな、ということがわかってきました（[49] など）。

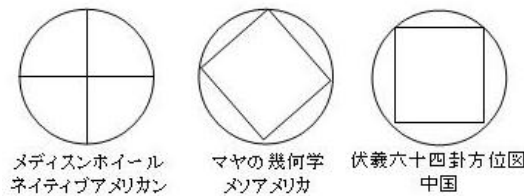


図 6.36 さまざまなホイール

○とか+とか□といったシンプルなシンボルは元型そのものでもあり、わたしたちの意識の奥底をゆり動かす力を持っているようです [6]。図 6.36 にそのいくつかの例をあげましたが、易システムそのものにも、図 6.15「伏羲六十四卦方位図」のようなダイアグラムがあることはお話したとおりです（「6.5.3「3」と「5」は先天図に（67ページ）」）。

マヤのホイールでは、◇が男性性（または物質）、○が女性性（またはスピリット）、ということで*⁹、◇と○は9時、12時、3時、6時、4つの点で接します。円と四角が接する点はスピリットと物質が会合場所、男性性と女性性の統合点というわけです。この4つの点は、「6.5.3「3」と「5」は先天図に（67ページ）」の中の「先天図の特徴」のところで説明した「四正」にあたる場所でもあります。

朱子は「周易本義」[44]中の「伏羲六十四卦方位図」についての説明のなかで、
「円かなるものは動きて天と為り、方なるものは静かにして地と為る者なり。」
とっています。

*⁹ 2007年10月13日「NAGA K' U (ナガク') 奥義学校」小櫻聖奈子さんのレクチャーによる。

易システムでは一般に天＝男性、大地＝女性、と考えるので、マヤのホイールと男性女性の対応が逆になるものの、○の中の□という構成は同じです。^{*10}

ハンドブック Ver1.0 で示したツイストペアホイールとは、上下卦の並びが逆ですが、結果的には「伏羲六十四卦方位図」の周囲に並べられた六十四卦の円陣と同じものだった……ということは、「6.5.3 先天図と後天図（67 ページ）」でお話したとおりですが、そのことに気づく前にツイストペアホイールの再構成をはじめていました。

「6.5 フィボナッチ数列の探求（62 ページ）」でお話させていただいたような過程で、先天図を中心に、先天大上卦のような卦が導かれることになったため、その流れのままに、純卦に先天大成卦を加え、この二つ（ファウンデーション）も輪の中心にして、新しいツイストペアホイールを創りました。

図 6.37 にそのホイールを示します。

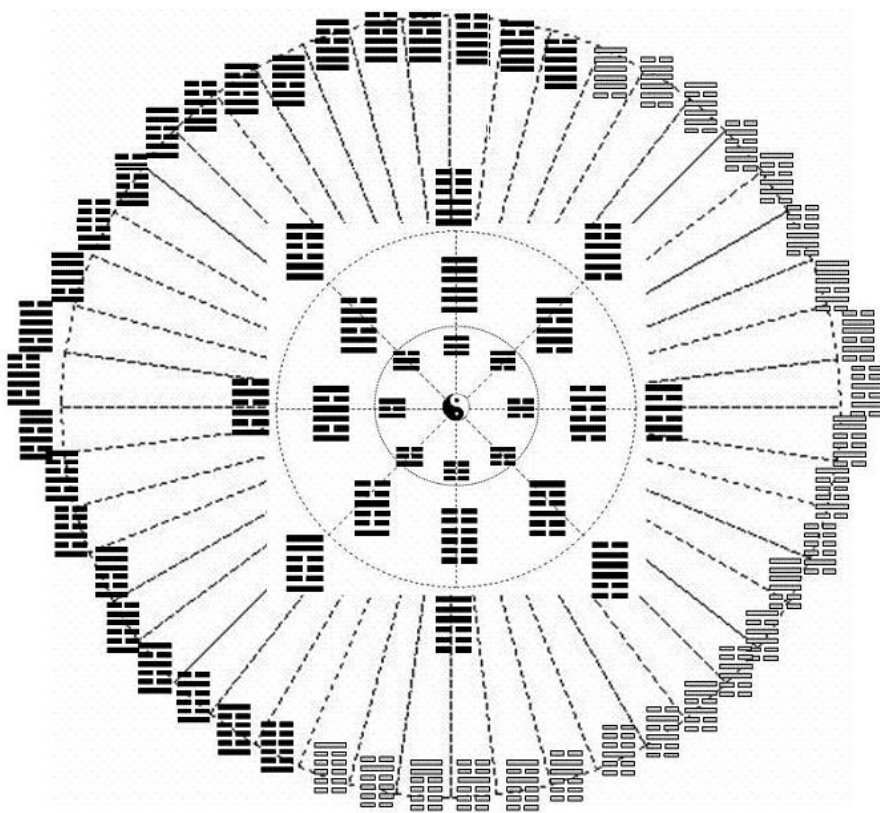


図 6.37 ツイストペア・ホイール

^{*10} ○は天、□は大地という割り当ては天と地のその外見的イメージからきているものと思われます。

6.6.1 ツイストペア・ホイールの構造

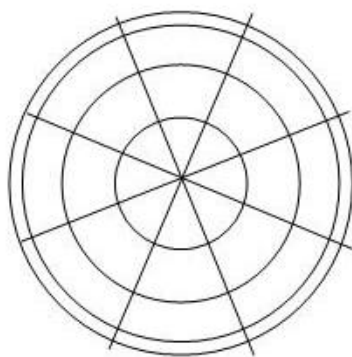


図 6.38 ツイストペア・ホイール全体構造

ツイストペア・ホイールには、まず、同心円状に4重の構造があります。さらに、扇形の8つの部分に分けて考えることができます。

この二つの条件を重ね合わせると、ツイストペア・ホイールには、図 6.38 に示すような全体構造があることになります。

この構造を、図 6.37 と照らし合わせながらこの先の説明を読み進んでいただければと思います。

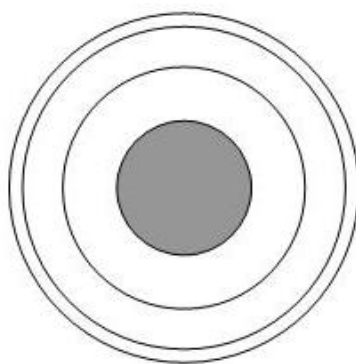


図 6.39 ツイストペア・ホイール中心部

もっとも中心になる部分にはすべての基本となる先天図を配しています。すべてはここから生じました。

先天図は、その名のとおりすべてに先だってここに 있습니다。

ツイストペア・ホイール全体を実際的車輪にたとえるなら、この、先天図がある部分は、スポークのもっとも根っこ部分、すなわちハブ（軸受け）ということになります。

注：

本書の文脈では、「軸」の内容は、本源と無極（39 ページ）ということになります。無極は本源が特殊化したわたしたちの宇宙の基盤です。スピリットは無極をベースに発展・変化する動きの総体であり、ホイール全体がスピリットであるということが出来ます。また、フローはスポークが中心から辺縁部に向かって広がっていくその方向、ということが出来ます（図 6.40）。

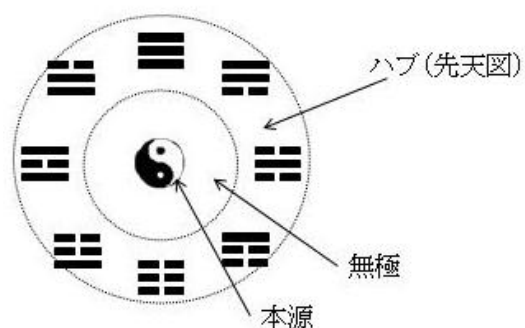


図 6.40 ハブ

ハブ＝先天図の外側、中心から 2 番目の同心円上には、純卦が配置されます。

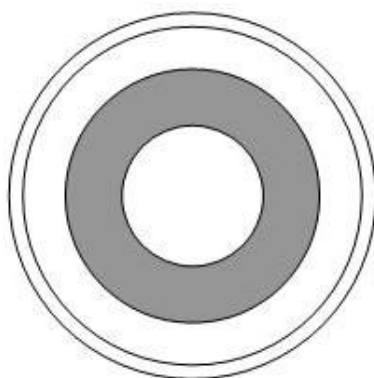


図 6.41 ツイストペア・ホイール中心から 2 番目の同心円

この部分は単純に、先天図の八卦のすぐ外側に、同じ八卦ふたつで構成される純卦を配置しています。

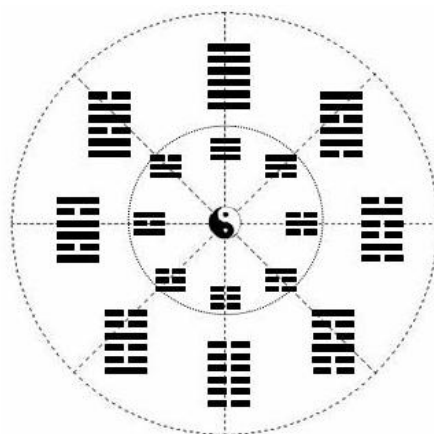


図 6.42 ツイストペア・ホイールの純卦

純卦は本質的に八卦と同じものであり、六十四卦＝大成卦全体を統べるものです。

純卦には、2倍進数列（スピリットの下降の路）における八卦同様、メタフィジカルなものとフィジカルなものをリンクする役割があると想定しています。

この意味で先天大成卦は純卦よりフィジカルなものです。

一方、ツイストペアホイールは中心（ハブ）から周辺部（リム）へいくにしたがって、メタフィジカルなものがフィジカルなものへと収斂していく方向（スポーク＝スピリットの下降）を示しています。

この方向性（外縁部の方がよりフィジカルになる）に従って、先天大成卦を純卦よりも外側に置きました。

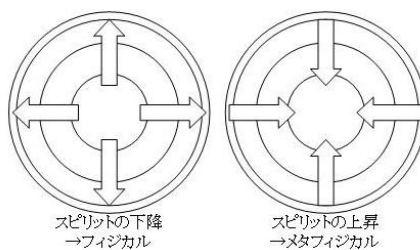


図 6.43 スポークにおける方向性

図 6.45 に、純卦のさらに外側に配置された先天大成卦を示しました。先天大成卦はツイストペア・ホイールの中心から、3 番目の同心円上に配置されます。

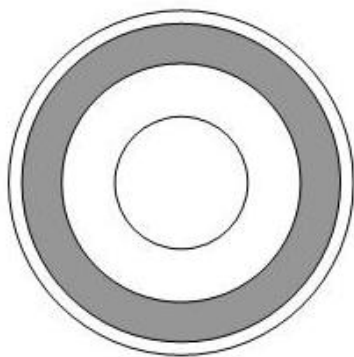


図 6.44 ツイストペア・ホイール中心から 3 番目の同心円

先天大成卦は、先天図における各八卦を下卦、各八卦のその反対側にある八卦を上卦として構成した大成卦です。

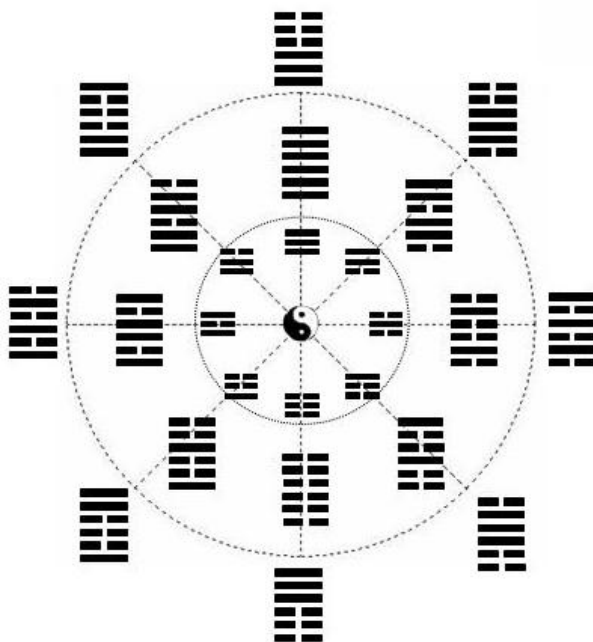


図 6.45 ツイストペア・ホイールの先天大成卦

ファウンデーションを除く、残り的大成卦がツイストペア・ホイールの辺縁部に配置されますが、この部分はホイールの最外縁であり、この部分を「リム」と呼びます。

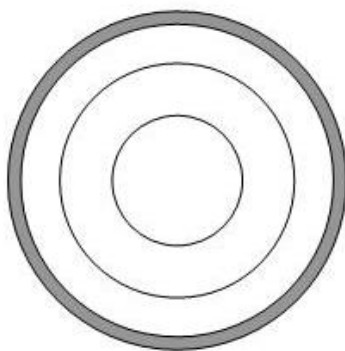


図 6.46 リム

リムにおける大成卦の配置はマスターマトリクスを使った方がわかりやすいと思います。図 6.47 に、マスターマトリクスにおけるリム上の大成卦を示しました。

灰色に色づけされた部分がツイストペア・ホイール上のリムに配置された大成卦です。純卦（8 卦）と先天大成卦（8 卦）——つまりはファウンデーションを除いたすべての卦（48 卦）がリム上に配置されています。

上 下	1	2	3	4	5	6	7	8
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								

図 6.47 マスターマトリクス上のリム

タテとヨコにある 1～8 の数字は「乾兌離震巽坎艮坤」の、八卦の順でふられたコード番号です。

リムには黒い色で描かれた大成卦と、灰色で描かれた大成卦があります。

黒い色で描かれた大成卦は、マスターマトリクス上での行方向（横方向）に並んだ大成卦が、行方向のコード順に、リム上では左回りに配置されています。

一方、灰色で描かれた大成卦は、マスターマトリクス上での行方向コード順が、リム上では黒い大成卦と反対の右回りになります。

これはホイール上で相対した黒と灰色の大成卦が、ツイストペアを構成するからですが、リム上における左回り、右回りの配置は、先天図の特徴がそのままひきつがられています（図 6.27（77 ページ参照））。

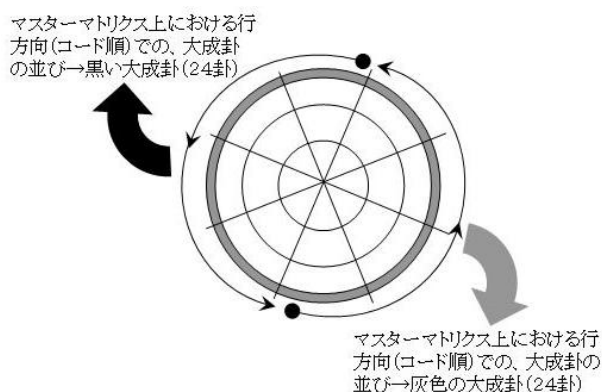


図 6.48 リム上における大成卦の並び

リムの総数は、 $64 - 16$ （ファウンデーション分） $= 48$ で、この数は、 4 週 $\times$ 12 ケ月と考えた場合の一年間の週の数に一致します。

先天大成卦（8）とリム上の大成卦の数（48）を加えると 56 （ $8 + 48$ ）になり、 56 を 2 で割ると「28」という数が得られますが、これは 13 の月の暦における 1 ケ月の日数 [38] です。これら、リム近辺において見られる特徴は、辺縁部において初めて「時間」という性質が現れることを示すシンボルと見ていいでしょう。

十二消長卦は、先天大成卦である 18：天地否と 81：地天泰、純卦である 11：乾为天、88：坤为地以外はすべてリムに属しています。^{*11}

十二消長卦は、易システムにおける周期をあらわす大成卦のグループですが、この大成卦の集まりは周期とともに時間をあらわすものでもあります（「十二消長卦（63 ページ）」参照）。

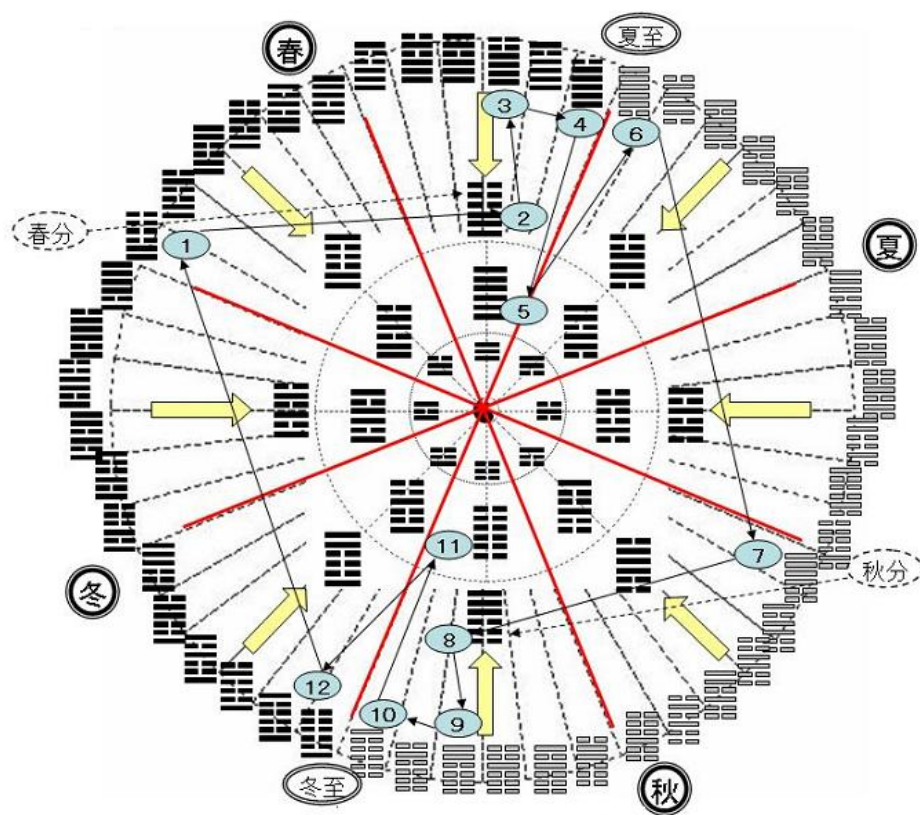


図 6.49 ツイストペア・ホイール上における十二消長卦の並び

図 6.49 において、ツイストペア・ホイール上で番号がふられた大成卦は十二消長卦です。各番号はグレゴリオ暦における 1～12 の月です。十二消長卦のスタート^{*12}である 12 月の冬至（88：坤为地）から、ホイール上では右回りに陽爻が増えていき、夏至（11：乾

^{*11} 【18：天地否、81：地天泰、11：乾为天、88：坤为地】 この 4 つの卦は、銀河ツールにおいて、「4 つのマスター二項コドン」と呼ばれています。卦のカタチをみてわかるとおり、「4 つのマスター二項コドン」とは、初一二三（下卦）および、四一五上（上卦）を各組をひとつの爻と観たてた四象です。

^{*12} 十二消長卦は周期——サイクルをあらわすものでもあるため本来はスタートなどないのですが、仮に「スタート」としました。

為天)で、その勢力は極点に達します。夏至を過ぎると今度は陰の勢いが増していき、陰の勢力はふたたび12月の冬至にもどったところでその極点をむかえます。

ここからわかることは、十二消長卦を基準に考えるなら、ホイール上での時間の流れは右回りだということです。

一部、純卦のレベル、先天大成卦のレベルも含まれてはいますが、私たちにもっともなじみのある、私たちが普段考えているところの、もっとも日常的なレベルは、リムの部分であるということができると思います。

6.7 創造の6ステップ

フィボナッチ数列の探求は、ツイストペア・ホイールという形にまとめられ、「6.6.1 ツイストペア・ホイールの構造 (88 ページ)」では、その外見的構造を中心にみてきました。

しかしそれにしても、ツイストペア・ホイールに収束したかにみえるこのプロセスは、結局のところ、なにを意味するのでしょうか。そもそも、ツイストペア・ホイールとは何か、どんな「意味が」あるのか、といったことです。

実のところツイストペア・ホイール自身は、単なるディレクトリ (階層リスト——入れ物) であり、何を当てはめてもかまわないのですが、本書の文脈に沿って考えるなら、本源～無極～スピリットが展開してきた様子を、主にメタフィジカルなレベルにおいて象徴する図、ということができるでしょう。

「スピリットが展開してきた様子」というと、下降の路のみが描かれているように思えるかもしれませんが、実はツイストペア・ホイールには、下降と上昇を調和する路も含まれています。

2倍進数で象徴される下降の路では、フィジカルなレベルでスピリットが展開してきた様子を示しましたが (第5章 顕現 (39 ページ))、本節ではメタフィジカルなレベルでスピリット (そしておそらくそれに呼応するソウルも) が展開してきた様子を示します。

メタフィジカルなレベルでスピリットが上昇する——下降と上昇の調和的プロセスについては、「第7章 帰還 (107 ページ)」にて、具体例を交えながら考えてきたいと思います。

6.7.1 ファミリー

「ツイストペア・ホイール（86 ページ）」の節で、説明していない構造がひとつあります。それは、ツイストペア・ホイールを8等分する扇形部分で、この領域には、あるひとつの八卦と、その八卦を下卦とする大成卦8つ（純卦および先天大成卦、リム上の6卦）があります。いいかえると、この扇形領域には共通の下卦をもつ大成卦が集まっているということです。

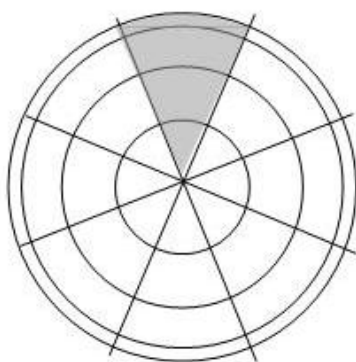


図 6.50 ツイストペア・ホイール上における扇形領域

ツイストペアホイールでは、共通の八卦を下卦とする大成卦が規則正しく並びます。

これら共通の下卦を持つ大成卦のグループをファミリーと呼びます。そして、共通となっている下卦の八卦のコード番号をファミリーナンバーと呼びます。

マスターマトリクス上でファミリーは行方向に並ぶことになります。その様子を図 6.51 に示します。

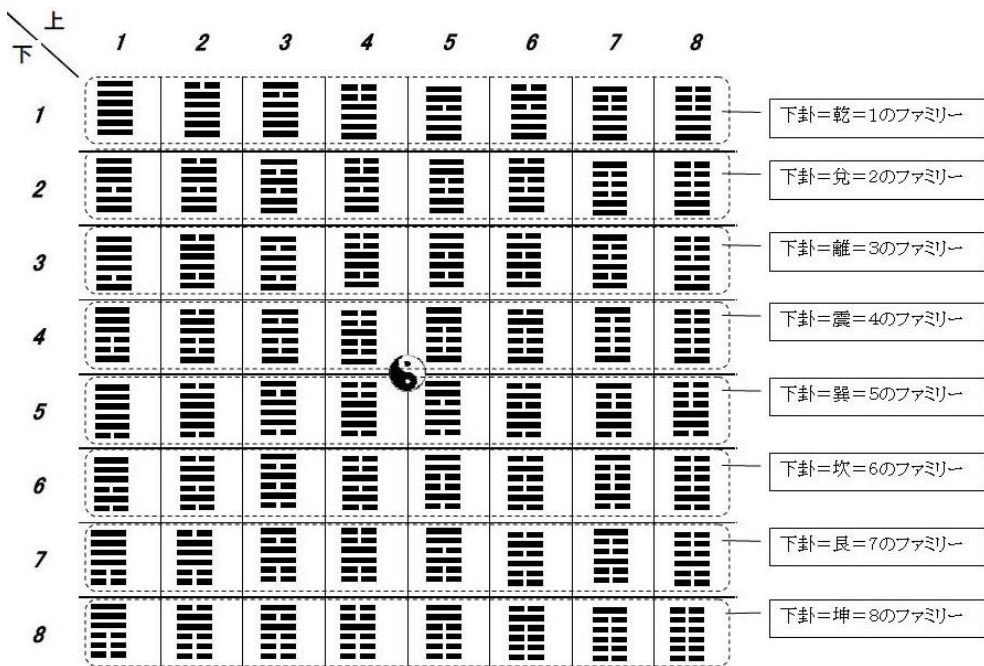


図 6.51 マスターマトリクス上のファミリー

ツイストペア・ホイール上におけるファミリーの構成

ツイストペア・ホイールから、あるファミリーだけを取り出すと、それは、8等分されたパイのうち、ひとつのピースを取り出したような扇状の形になるでしょう（図 6.50 参照）。

カタチではなく、その内容を模式的に描くと図 6.52 のようになります。

図 6.52 では、例として、ツイストペアホイールから、ファミリー番号＝1、乾のファミリーを取り出して示しました。

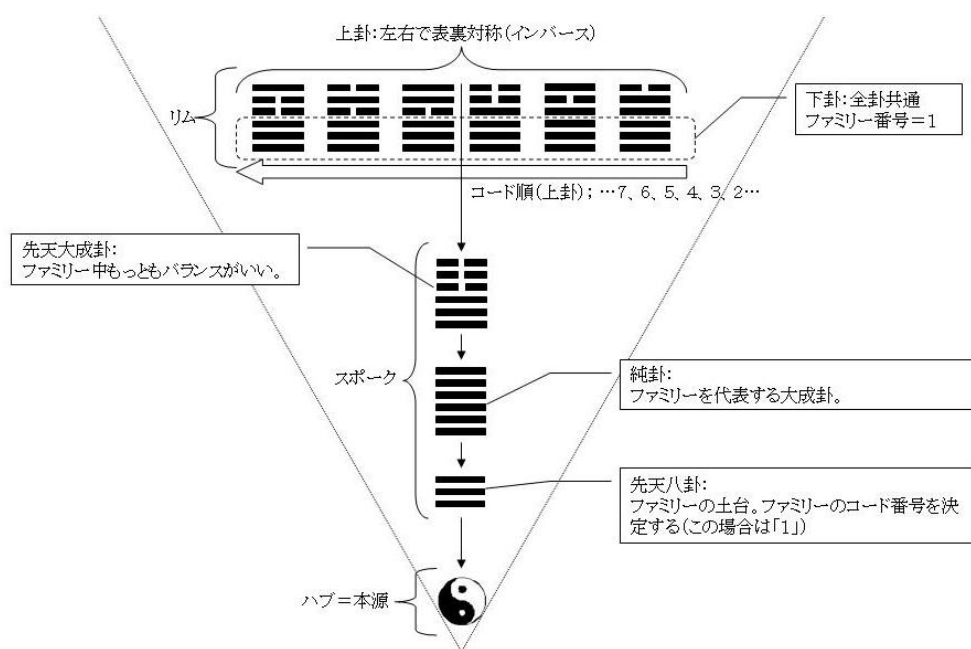


図 6.52 ツイストペア・ホイール上の「乾（1）」ファミリー

図中の説明で、先天大成卦がファミリー中もっともバランスがいい、とされているのは、先天大成卦は、その大成卦自身を構成する八卦が、「八卦版の」ツイストペアを構成しており、かつ三陰三陽卦であるからです。

ツイストペアはもともと本源を指し示す指……ペアとして創発したものですから、先天大成卦はその大成卦が単体で本源を指しているということもできます。

6.7.2 創造の6ステップ

さて、96 ページでは、「本節ではメタフィジカルなレベルでスピリットが展開してきた様子を示します。」としましたが、ここでお話は、「ツイストペア・ホイールってなんだろう？」ということにもどります。

基本的に、易システムは、ディレクトリ（書棚）であり、フレームであり、そこに何をいれても（あてはめても）かまわないわけですが、本書の文脈に沿うなら、どう観ていくのが適当なのだろうか、ということです。

ここで思いあたったのは、大成卦の構造でした。くわしくは「8.2 大成卦の一般構造（163 ページ）」で説明しますが、大成卦にはその成り立ちから説明される一般的な構造があります。

その中に、その大成卦が示す状況が展開するステップとしての観方があります。占術でこの観方を用いるときは、その観方はそのまま時間の流れになります。

大成卦は初爻からはじまって、二爻、三爻、四爻、五爻、上爻と積み上がっていきますが、これはこのまま、時間の流れととらえることもできます（図 6.53）。

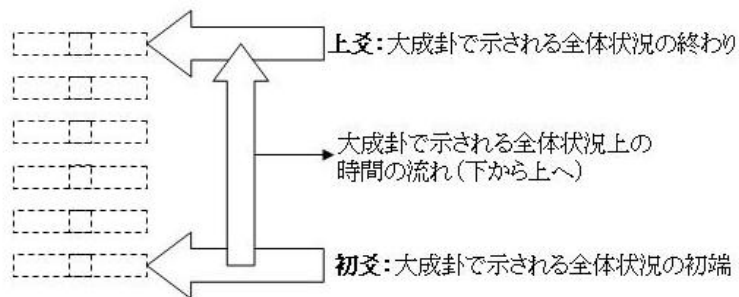


図 6.53 大成卦上の時間の流れ

本源→両儀→四象→八卦と創発していくプロセスと、ツイストペア・ホイールの構造に、この観方をはてはめると、たとえば、図 6.54 のようになります。

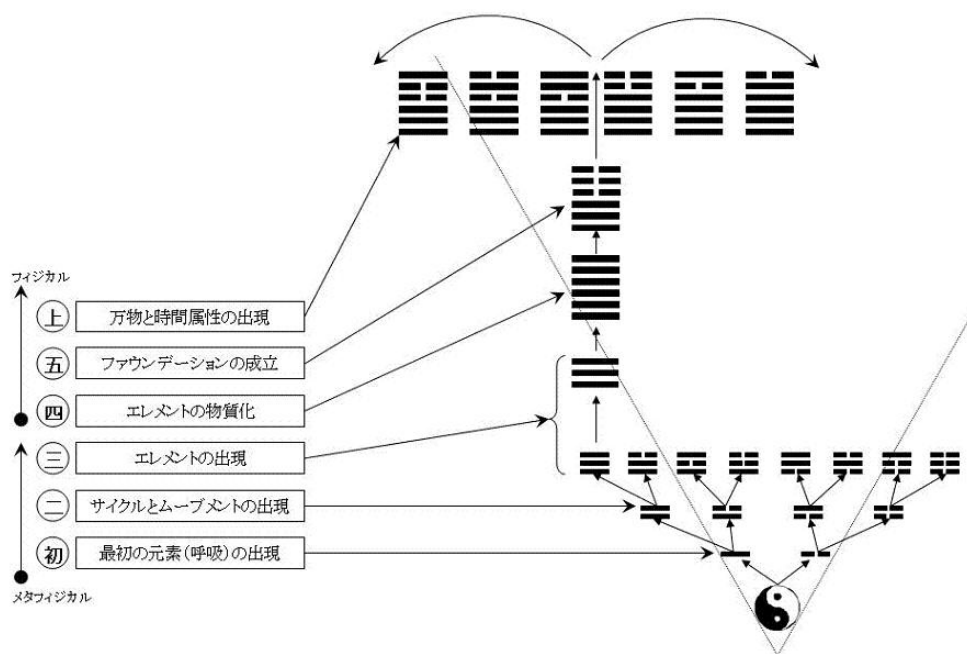


図 6.54 創造の6ステップ

最終的に組みあがった大成卦には、64のパターン（リムには48パターン）があるわけですが、大成卦は、ひとつづつがそれぞれ、本源から始まる創造のステップを内包しているのです。

六十四卦は森羅万象——万物をあらわします。すなわち万物は、そのすみずみまで、あますところなく、大きい小さい、単純、複雑にかかわりなく、もれなく、本源から始まる創造のステップを内包しているのです。

リムはもっともフィジカルなレベルであり、もっとも卑近な、私たちの日常を示すシンボルでもあります。すなわち、泣き、笑い、出会い、別れる、私たちの日常にも、もれなく、本源から始まる創造のステップが内包されているということです！

「第7章 帰還」でのお話は、この、あらゆるものに原初からのステップが埋め込まれているはずである、というこの前提が最大の基盤になっています。

次に、内包されているステップの概略を示します。

1. 最初の元素の出現（陰陽／両儀）

この宇宙——わたしたちが暮らすこの世界の最初の最初。基盤の基盤。

この最も基本となる単位は、最初に生じたかすかなゆらぎからできています。このゆらぎによって、無極は「対象」を獲得し、無極ではなくなりました。

吸って、吐く。

ひとりぼっちでいるのが少し退屈になった無極の、このため息は、後に「陰」と「陽」と呼ばれるようになりました。

2. サイクルとムーブメントの出現（四象）

陰と陽、それだけではその動きはかすかなものでした。

陰と陽との中間状態があらわれるにいたって、その動きはよりはっきりしたものになりました。

ある状態はいつまでもそのままではなく、一定の周期に従って変化するようになりました。

3. エLEMENTの出現（八卦）

陰と、陽、そしてその中間。これらの状態はさらに複雑な組み合わせを生み、いくつかのまとまり——ELEMENTを生じるようになりました。

もちろん、各ELEMENT自体もいつまでも同じ性質のELEMENTであり続けることはなく、サイクルとムーブメントの段階で生じた性質を継承して、常に別のELEMENTへと変化し続けています。

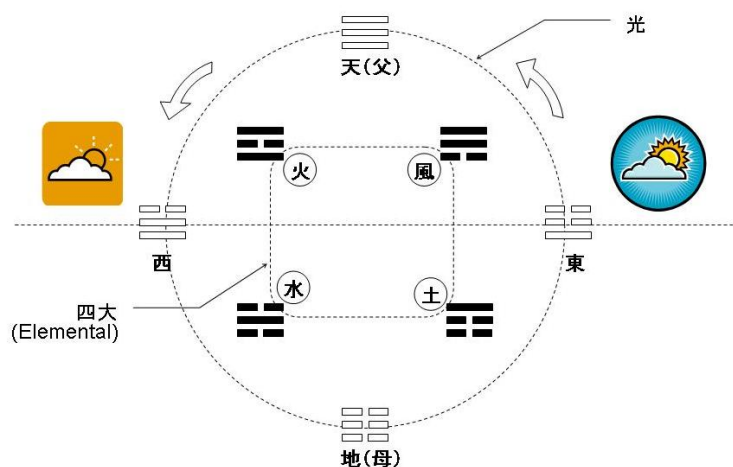


図 6.55 自然のスピリット（ELEMENT）にあてはめた八卦

4. ELEMENTの物質化（純卦）

ELEMENTは、同じ性質のものが重なり合うことにより、さらに重たく、粗雑になり、物質化したELEMENTをつくります。

いわゆる「自然霊」が目に見えることがあるようになるのはこのレベルです [24]。

5. ファウンデーションの成立（先天大成卦）

物質化したエレメントどうしは、さらに自らを構成するエレメントを交換し合い、物質化したエレメントのバリエーションをつくります。先にできた物質化したエレメントとこのバリエーションが、基本の構成要素——ファウンデーションとなります（図 6.56）。

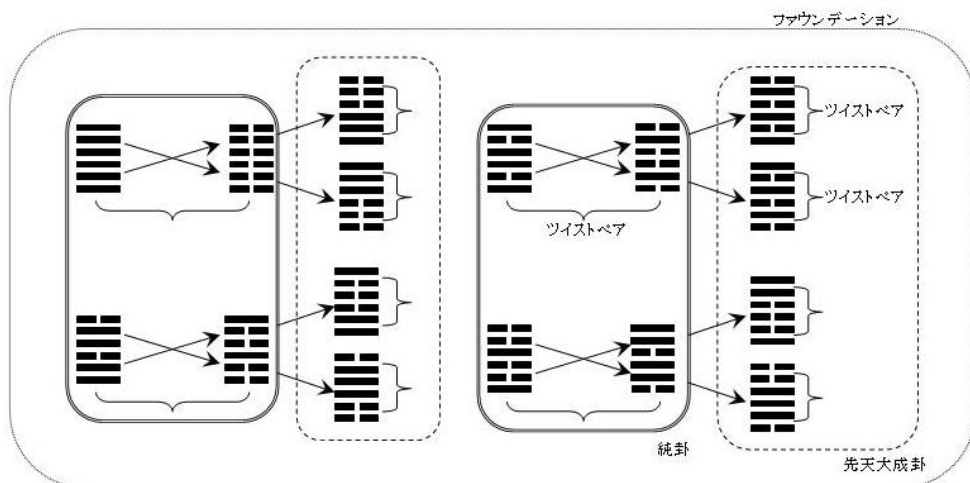


図 6.56 純卦から先天大成卦へ（物質化したエレメントが構成要素を交換する）

6. 万物と時間属性の出現（リム四十八卦／六十四卦）

基本の構成要素からこの宇宙——わたしたち自身（の身体）をも含む、わたしたちが暮らすこの世界のすべてが造られています。

いかに複雑に見えるものであっても、その根源には本源を指差すヒント——しるしがあるはずです。

もとをただせばすべては陰と陽で、陰と陽は無極であり、本源なのですから。

以上のステップと「5章 顕現」で述べたプロセスは最終的には物理次元で重なり合いますが、これが「5章 顕現」で述べたプロセスの背後で働いていた原動力のラフスケッチです。

ファミリーの構造から、この6ステップを導き出してきました。

ツイストペア・ホイールとはなにか。

最初に述べた質問の答えの一部がここにあります。

ツイストペア・ホイールは、エレメントの組み合わせが異なるファミリーから構成され

ています。

ツイストペア・ホイールがあらわすことのうちのひとつが、この創造のステップであるということになります。そして、目に見える／見えないの相違こそあれ、結局のところ、「5章 顕現」と本章は、同じストーリーを語っていることになります。

宗教的な表現を借りれば、神様は6つの段階を経て、この世をお創りになられた、ということもできるかと思います。次の段階で一休みされたかどうかは、図 6.54 からはわかりませんが。

第 7 章

帰還

人はまず原理があることを確認し、その後にそれを実際にやってみる。何度も何度も繰り返しているうちに、しだいにその人はその原理を全身で理解するようになるだろう。つまりそうすることでその原理とひとつになるのだ。そしてその人が原理とひとつになるころ、原理そのものがその人の意志に反応するようになっている。

ダグ・ボイド [15]

一つの道でもなく、またもう一つの別の道でもなく、
その二つの釣り合いが確かな道を照らし出す。
——「四つ目の知恵」より。

ポーラ・アンダーウッド [22]

7.1 ディレクトリとしての易システム

大成卦——六十四卦は、モノや、人事百般を含む事象、森羅万象——すべてをあらわすことができ、易システムを使った占術においてもそれが前提になっています。

大成卦がすべてをあらわすことができるのであれば、たとえば、ある人の人生全体をあらわすこともできるのではないのでしょうか。

大成卦はなんでもあらわすことができるという前提にたてば、それも可能ということになります……この場合、初～上爻の 6 段階は人生の 6 ステップになります。しかしこれでは、少々解像度が粗すぎる気もします。仮に人生 80 年だとすると、 $80 \div 6$ でひとつの爻が約 13 年に相当することになります。

結局は……なにをどう観たてるかによるのです。

易システムはディレクトリなのです。

ディレクトリという言葉は、コンピュータの用語では階層リストを指しますが、一般的

7.2 魂のテンプレート

7.1 で述べたように、人生全般をひとつの大成卦にあてはめることは、別にやってはいけないことではありませんが^{*3}、少々荷が勝ちすぎます。

そこでもう少し、おおもとに近づいて考えることにしました。

大成卦で、この世に生まれてきた目的、その人固有のある種の傾向、性格を含む設計図「のようなもの」をあらわすことはできないか。

とりあえず、この設計図「のようなもの」を「魂のテンプレート」と呼ぶことにしました。

同じ魂のテンプレートを持った人が、同じ人生を歩むとは限りません。また逆に、異なった魂のテンプレートを持った人がかならずしも、かけ離れた人生を歩むともかぎりません。

このことはディレクトリである易システムの特徴からくる同卦異占、または異卦同占の原理と似ているように思えますが、魂のテンプレートの場合は少々ちがいます。

魂のテンプレートはあくまでひな型「のようなもの」であり、それがどのように使われるかは各人が歩む人生の環境によって異なります。

魂のテンプレートは、未来を予測するものというよりは、むしろ、いったいこの自分はどのような要素からできているのか、そのおおもとをふりかえるツールとしてとらえていただければよいかと思います。

そして、「第6章 顕現の原動力」でみてきたように、各六十四卦——魂のテンプレートは、それぞれに創造のプロセスという本源へと至る路を含んでいます。それはまた、この章のタイトルでもある本源へと「帰還」するための地図でもあります。

7.2.1 テンプレートを構成する要素

「人生全体」からその基本仕様書「のようなもの」ともいえる魂のテンプレートへ。ターゲットはしぼりましたが、魂のテンプレートをひとつの大成卦に対応させるのも、まだ、大成卦にとって荷が重く思えました。

一方、ツイストペアホイールは、本源からこの日常へいたるプロセスも含んでいます。

そこで、ツイストペア・ホイールを構成するリム（四十八卦。もっともフィジカルなレベル）をもっとも日常的な、もっとも卑近な要素とし、さらにそれだけでなく、同じファミリーに属する先天大成卦、純卦、というファウンデーションも魂のテンプレートに含めることにしました。

テンプレートを構成する要素の種類は、リムからハブへ向かうにしたがってその数を減

^{*3} 実際に、[42] やに [28] は、そのような応用例が説明されています。

じていきます。リム = 48 → (先天大成卦 = 8 ・ 純卦 = 8) = ファウンデーション = 16 → 八卦 = 8 → 四象 = 4 → 両儀 = 2 → 無極 = 本源 = 1。

最後にはただひとつ。

今もここにある本源にたどりつきます。

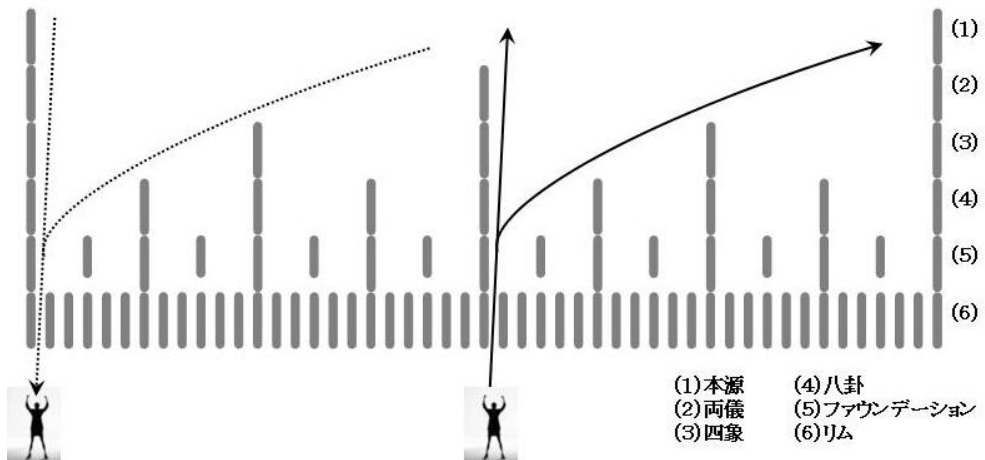


図 7.2 本源からあなたへ・あなたから本源へ

逆に観ていくと、あなたは本源（無極）から、両儀→四象→八卦→ファウンデーション→リムという道筋をたどっていまここにいるわけです。両儀と四象はそこから意味をくみとるにはあまりに本源（無極）に近すぎるため、とりあえずテンプレートからはのぞきました。

八卦は、基本的に純卦の意味とダブります。純卦は、メタフィジカルなレベルとフィジカルなレベルをリンクするものであり、より粗大になった八卦と考えることもでき、八卦よりも物質レベルに近いものです。リーディングを行うフロントエンドセルフとしては、物質レベルに近い分だけ、おそらくは純卦の方が読みやすいだろうと考え、テンプレートに八卦は加えませんでした。

結果的に、魂のテンプレートを構成する要素としては次のようになりました。

- オーナー・ドリヴン (OD)

特定のベゼル(「ベゼルという概念(120 ページ)」)によって定義されるあなたに対応したひとつの大成卦。テンプレートのかなめ。

- インバース (I)

OD の各爻の陰陽を反転してできる大成卦(OD の裏卦(184 ページ))。OD-I でツイストペアを構成する。

- ナビゲーター (N)

OD が所属するファミリーにおける先天大成卦。それ自体が八卦版のツイストペアを構成する。

- グラウンド (G)

OD の下卦×2 で構成される純卦。

7.2.2 テンプレートのビジュアルと構成要素の意味

一応テンプレートの構成要素は決まりました。「テンプレートを読む(140 ページ)」で具体的な例をあげたいと思いますが、OD が決まれば、あとの要素は機械的に導くことができます。しかし、卦を導くことができても、それらの卦がテンプレート上においていかなる意味をもつものかわからなければリーディングのしようがありません。

そこで、ある種の図形——シンボルにそのカギを求めてみてはどうかと思いました。

いきなり各要素の意味を考えるのではなく、もし、魂のテンプレートなるものがあるのだとすれば、それはいったいどんなシンボルがしっくりくるか……ということを検討してみたわけです。

適切なシンボルに行き当たることができれば、こんどはそのシンボルの構成要素と、魂のテンプレートの構成要素(OD、I、N、G)をつきあわせ、配置し、シンボルから意味を読み取っていけばいいと考えたわけです。

最初のうちは、先端に丸のついた縦長の十字架のような、そんなイメージを考えていて、テンプレートを構成する要素数も6と、最終的な要素数よりふたつ多かったのですが、このイメージも考えを進めていくうちになんだかしっくりこなくなりました。

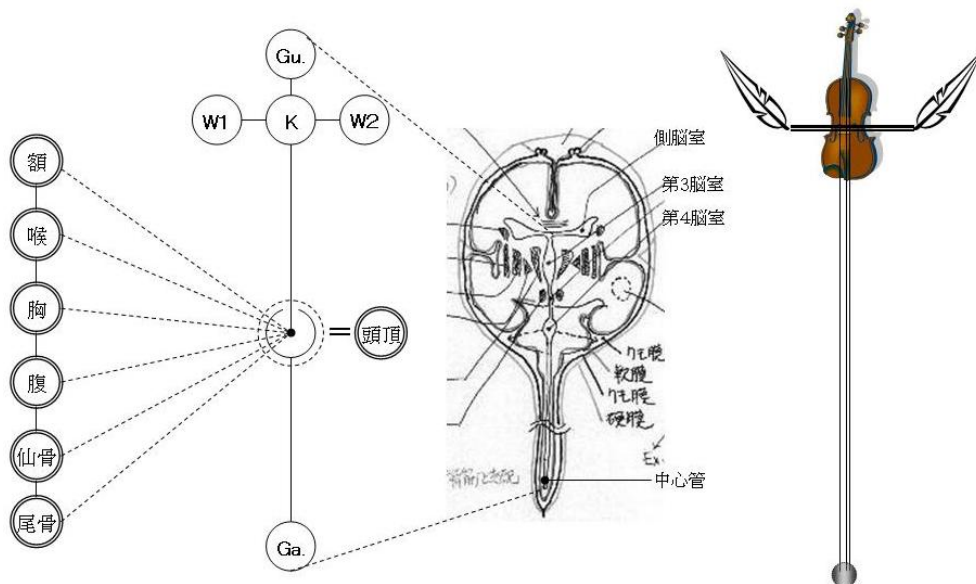


図 7.3 初期のテンプレート・イメージ（参考）

最終的なテンプレートの構成要素からは、図 7.3 で示した W1、W2 の要素はなくしました。

W1、W2 は、ツイストペア・ホイール上でリム上にある OD の、両側に位置する大成卦ですが、ひとつにはベゼル（後述（120 ページ））によっては、必ずしも OD がリム上にくるとは限らないからです。OD がリム上になれば、両側の W1、W2 は導くことができません。

また、ツイストペア・ホイール上におけるリムのレベルは、本源からもっと遠い、いわば分離の極致です。したがって、W1、W2 は、一時的にはありますが、今あなたがいる地点からは分け隔てられた領域にある要素ですので、これらをあなた固有のテンプレートに含めるのも適切ではありません。

このようにしてテンプレートを構成する要素を 111 ページに示した 4 つにしぼり、イメージをまた最初から考え直すことにしました。

そうして行き当たったのが、図 7.4 に示すイメージです。

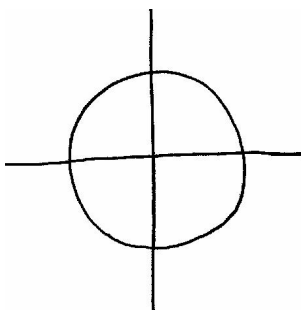


図 7.4 テンプレート・イメージ

ネイティブ・アメリカンのメディスン・ホイール（86 ページ）に似たシンボル^{*4}ですが、陰・陽というきわめてシンプルな要素から成り立っている易システムを利用したツールのイメージとしては、やはりシンプルなものが妥当ではないだろうかと感じました。

いってみればこのイメージが「しっくりきた」のです。

メディスン・ホイールと違うところは（いや、ひょっとしたら同じなのかもしれませんが）、真ん中の十字は輪を仕切るものではなくて、タテにもヨコにも無限に続く平面全体を指向しているということです。

このイメージが浮かんだ後、過去にこのようなシンプルなシンボルに関する本を読んだことがあるのを思い出しました。巻末に参考文献としてあげてある「運命のサイン [6]」という本がそれです。

著者のアンジェレス・アライエン氏は文化人類学者で、[6] の中で、長年の研究から文化（大陸）横断的にほぼ共通のシンボルとそれらに対応した意味を見いだしたとしています。

それから 7 年間の研究と新たに発見した資料から、私は円と四角と三角と十字とらせんという 5 つの基本的なシンボルが、すべての文化の芸術に現れることを発見しました。また、文化の異なる人々が、これらのシンボルに対して同じような意味を持たせていることもこの研究で確認できました。

アンジェレス・アライエン [6]

^{*4} 島津藩の家紋、音楽の楽章におけるコード記号、さらに天文学における惑星記号で、「地球」を表す記号にも、○に十字という同様のシンボルをつかいます。惑星記号の地球の場合、○は地球、横線は赤道、縦線は子午線をあらわします [37]。

そのシンボルと意味は図 7.5 のとおりです。アンジェレス・アライエン氏の研究が十分に信頼できるものであるとすれば、これらのシンボルは人類の集合意識に根付く元型的イメージといっていいでしょう。

魂のテンプレートのシンボルそのものズバリのシンボルこそありませんが、テンプレートのシンボルが、円と十字から成り立っていることはすぐにわかります。

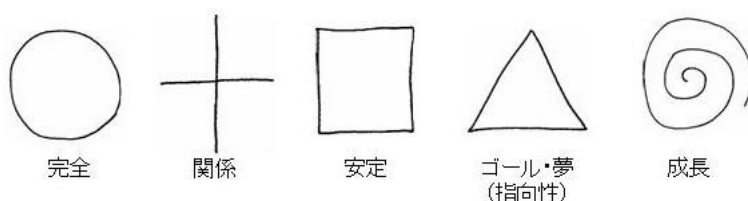


図 7.5 普遍的シンボルとその普遍の意味

また、後から知った話ではありますが、語り部であるネイティブ・アメリカン、ブラック・エルクにヴィジョンとして授けられたイメージとして [13] にまったく同じシンボルが出てきます。

さて、テンプレートを構成する要素をこのシンボルのどこに配置するかですが、これは同時に各要素の意味を検討することでもありました。

最初のうちは、十字の交点、十字と円が交わる点などに、そう、タロットのスプレッドのように魂のテンプレートの構成要素（OD、I、N、G）を配置していましたが、これもどうもうまくありません。

そうではなくて、OD、I、N、Gはテンプレートの「要素」なのだから、シンボル上のポイントではなくて、シンボルの構成「要素」に対応させるべきであると気づくの少し時間がかかりました。

図 7.6 にその構成要素に分解したテンプレートのシンボルと、テンプレートの構成要素 (OD、I、N、G) との対応を示します。

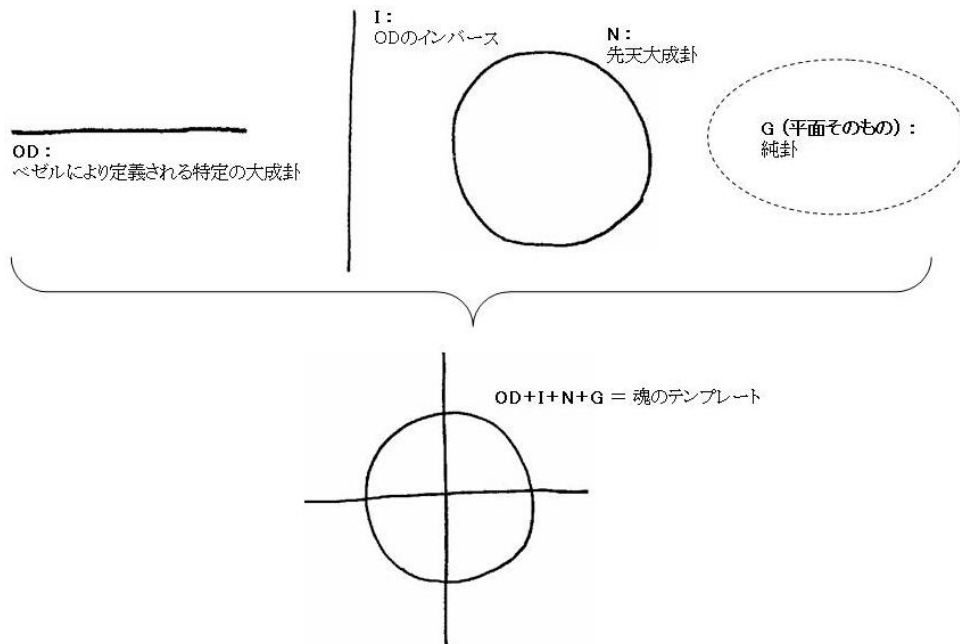


図 7.6 シンボルの構成要素と OD、I、N、G との対応

実際は、シンボルの構成要素にテンプレートの構成要素を対応させながらその意味づけをしていったのですが、各構成要素の意味を次に示します。

- 横線：オーナー・ドリヴン（OD）

図 7.5 に示したアンジェレス・アライエン氏による普遍的シンボルには含まれていませんが（シンボル——とするには単純すぎるのかもしれませんが）、ただ単に横に引かれた線を眺めていると、そこにさまざまなものがみえてくるのがわかります。それは地平線、もしくは水平線、いずれにしてもこの地上をあらわすものと考えることができるでしょう。もっとも身近でもっとも密度が高くもっとも日常的な物理フィールドであり、この地・大地を示します。

そのようなわけで、OD は目に見えるあなた自身（肉体）、またはこの地上における、目に見える、有限の時間がある世界における役割・動きなどをあらわします。

- 縦線：インバース（I）

これも、図 7.5 に示した普遍的シンボルには含まれていません。

まっすぐ垂直にのびた直線は、天と地とのつながりを思い起こさせます。水平線と垂直線の交点は、天と地がつながる場所、すなわちあなたが立っている「今・ここ」、今この地点をあらわしていると考えられるでしょう。

I は、意識そのもの、普段意識することのないあなた自身——あなた自身の意外な部分、カタチのない（物理的でない）あなた自身、巫、天とのつながり、または天とのつながりにおける、隠れた意図などをあらわします。

ところで、本源・無極はどこにいったのでしょうか。OD-I は魂の目的＝本源を示す指ですが、本源そのものではありません。本源を直接語る言語は存在しません。

OD と I との交点は、今、現時点におけるあなた自身をあらわします。物理的な肉体とソウルが重なったもの——それが現在のあなたというわけです。横線の OD と縦線の I が重なった十字は、[6] によれば「関係性」をあらわすものです（図 7.5）。あなたという存在は、天（ソウル）と地（スピリット）の関係性そのものであるということもできます。

- 円：ナビゲーター（N）

円は、図 7.5 に示した普遍的シンボルに含まれており、完全、または完成をあらわすものです。この構成要素には、先天大成卦が割り当てられますが、先天大成卦は、それ自身が八卦版のツイストペアで構成されているという特徴をもつ卦で、ある種の理想、目標を示すものとも考えられます。

テンプレートのシンボルでは、円は、中心になる OD と I との交点——「今・ここ」のあなたを取り囲んでいて、OD と I をむすぶ架け橋のようにも見えます。

Nはあなたの進路の灯台となる指標、あるいは、もしこの世での役割といったものがもしあるのだとすれば、その役割を果たすための方向性などを示すものです。OD と I は、このNという要素によって調和が取られます。そういう意味では、あなた自身の調和・統合の方向を示す要素であると考えられることもできます。

- 地（シンボルがのる平面そのもの）グラウンド（G）

グラウンド＝Gは、構成要素というより、シンボルがのる土台——平面そのものであり、テンプレートの基盤です。

これには純卦が割り当てられますが、この純卦は、テンプレートの構成要素に割り当てられた大成卦すべてに共通する下卦を二つ重ねたもので、テンプレート全体の基盤を象徴します。

Gはテンプレートすべての要素に共通する基本的傾向や、おおもとになる力をあらわします。

以上、いままで述べてきた、魂のテンプレート各構成要素の導き方と意味をまとめると次の表のようになります。

表 7.1 テンプレート各構成要素の導き方と意味

構成要素	導き方	意味
OD	自分にとって適切なベゼルを選択し、そこから導く。	物理領域における肉体的活動、目に見える、有限の時間がある世界における（あるすれば）役割や働きなど。
I	OD の全 6 爻の陰陽を反転する。OD と I はツイストペア。	普段意識することのないあなた自身、あなた自身の意外な部分、カタチのない（物理的でない）あなた自身、天とのつながりにおける、隠れた意図など。
N	OD の下卦をそのまま、上卦を、下卦の八卦の陰陽を反転した八卦にする。OD ファミリーの先天大成卦。	進路の灯台となる指標、（あるとすれば）人生における役割を果たすための方向性、OD と I の調和・統合の方向、など。
G	OD の下卦をそのまま、上卦を、下卦の八卦と同じ八卦にする。純卦。	テンプレートすべての要素に共通する基本的傾向、おおもとになる力の傾向、など。

7.3 OD をいかにして定めるか

魂のテンプレートのシンボルは決まりました。

魂のテンプレートを構成する要素（4つ）も決まりました。

それぞれの要素が意味するところも決まりました。

その人固有の大成卦（OD）をひとつ、特定することができれば、魂のテンプレートを構成する他の大成卦は自動的に導くことができます。

それでは、その OD となる大成卦をどのように決定したらいいのでしょうか。

算命術や、推命、気学、占星術など、命占とよばれる占術の伝統は、生まれた年月日が魂の性質を決定する——すくなくともその方向付けをする、という概念を支持しています。

しかし、それをそのまま鵜呑みにしてしまっているのでしょうか。誕生日にほんとうに意味などあるのでしょうか。

実はこの問いについては、このハンドブックの冒頭で「前提」というかたちで答えをだしてしまっています。

もしよければ、「3.3 偶然（21 ページ）」をふりかえっていただければと思いますが、易システムは、この世界に偶然はない、という世界観に立脚しています。

いいかえれば、すべてのことには意味があるのです。

とすれば、誕生日——自分がこの世に生まれてきた日にも当然意味がある、ということになります。スピリットは、その日＝「その意味」を選択してあなたという存在としても顕現している、ということではできないでしょうか。

これが、魂のテンプレートというツールを利用するにあたっての前提となります。

もちろん、証明することはできません。

「証明」は科学のやり方です。テンプレートは科学ではありません。同じスポーツであっても野球と柔道はちがうように、この世界をよりよく生きていこうという目的は同じであっても、科学と占術——その技術をベースに導かれる魂のテンプレートは、別のものです「3.2 占術の役割（20 ページ）」。

テンプレートから導かれる判断の妥当性を「証明」することはできませんが、テンプレートの場合、そこから導かれる判断が「腑に落ちる」か否か、自分の内なる声がこれは正しそうだ、と言うのが、聞こえるか、感じるか、見えるか、わかるか^{*5}、によって、その妥当性を判断することができます。

この判断は、易システムを使った通常の占術において、卦を立てて得た卦（「得卦」といいます）をリーディングした結果が、妥当であるかどうかを判断するやり方をそのまま利用することができます。詳しくは、「8.3.4 得卦の妥当性を判断する（181 ページ）」を参照してください。

誕生日には意味があり、スピリット（+魂（ソウル））はその「意味」を選んで「あなた」としてあらわれています。

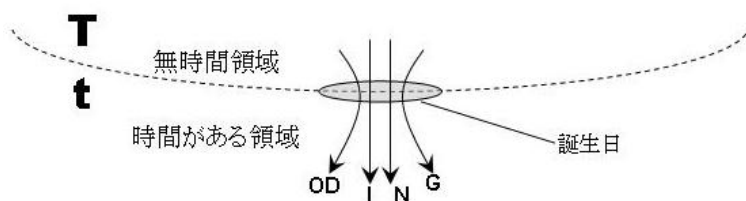


図 7.7 スピリット（+魂（ソウル））が顕現するポータルとしての誕生日

一方、誕生日は「日」であり、「日」は時空の中にある一定の領域です。

ツイストペア・ホイール上で、時間というファクターがあらわれるのは、リム・レベル（ツイストペア・ホイールの最外周）です。ここには 48 種類の大成卦が割り当てられていますが、このリム上の 48 卦が誕生日という時間にどう対応するかをつきとめれば、あなたの誕生日に対応した卦がすべてを導くカギ——すなわち OD になります。

よし、これで OK！

と思いきや、ここにひとつ、クリアしておかなければならない課題があります。

^{*5} [20] によれば「腑に落ちる」= これで正しいと思える感覚には以下の 4 つがあります。

クレアボイアンス：見る

クレアオーディエンス：聴く

クレアセンシエンス：感じる

クレアコグニザンス：わかる

それは――

時間は各自まちまちだということです。

7.4 ベゼルという概念

時間が「各自まちまち」だというのは、一般的には奇異な考え方に映るかもしれませんが。しかし、「時間」というものをよく考えてみると、そんなに奇妙でも不思議な考えでもないことがわかります。

たとえば、食事の時間。

学校の給食の時間などを想像してみてください。

その日の献立はレバーのから揚げでした。

今の食育はどうなのかわかりませんが、著者が子供の頃はけっこうきびしいものでした。好きだろうと嫌いだろうと全部食べ終わるまでは、昼休みに遊ばせてくれないばかりでなく、へたをすれば五時間目が始まって、他の子に見られながら食べ続けなければなりませんでした。

レバーが大好きなA君、見るのもイヤなBさん。

給食の時間は、たぶんA君にとってはなんでもないだけでなく、あつという間の時間でしょう。昼休みのサッカーのことなどを考えながら食べていたとすると、その時間はあとから思い出せないほど。ないも同然です。

これに対して、Bさんにとってその時間は苦痛以外のなにものでもありません。こっそり手伝ってくれるA君のような友達でもいればいいのですが、こわい先生の目もあります。Bさんにとっての、この給食の時間はまさに永遠。

さて、この二人にとって給食の時間である1時間は同じ1時間でしょうか。

客観的な、「1時間」という時間は同じだが、同じ1時間が主観的にはちがって感じる、ということでしょうか。

しかし、ちょっと待ってください。時間に「主観的」「客観的」などという区別があるのでしょうか。

いや、そもそも「客観的時間」などというものがあるのでしょうか。まるでそこにある茶碗のように、売ったり買ったりとおいたり、あなたとかかわりなく、自分と切り離して考えることのできる「時間」――そんなものがほんとうにあるのか、もし仮にあったとしても、それはほんとうに、私たちがふだん感じているところの「時間」なのか。

そういわれて、時計を指差す方もいるかもしれません。あの長い針が1回転する間が1時間なのだ、と。しかし、それは時計という機械が、その仕組みしたがって、あの長いほうの棒を一回（と短いほうの棒を12分の1回ほど）、まわしているだけのことです。「1時間」という「実際に経験する時間」とは何のかかわりもありません。それが、かかわりがあるように思えるのは、そのようにみましよう考えましようという約束事を誰かから教

えられたからではないでしょうか。

先の給食の例でみたように、実際の時間（ t ）は、周囲の環境とあなたの心とのかかわりにおいて生じるもので、伸び縮みする、というより、各人固有の経験です。

この意味で、時間は各人固有の「感覚」であり、「意識」の産物であるということもできると思います。

さて、「ベゼル」とは元来、時計の外周にあるリング状の枠——ガラスなどがはまるみぞぶちのことですが、ツイストペア・ホイールでは、ツイストペア・ホイールの一番外側にあるリムの、さらに外側にはめこまれるリング状の目盛りのことを指します。

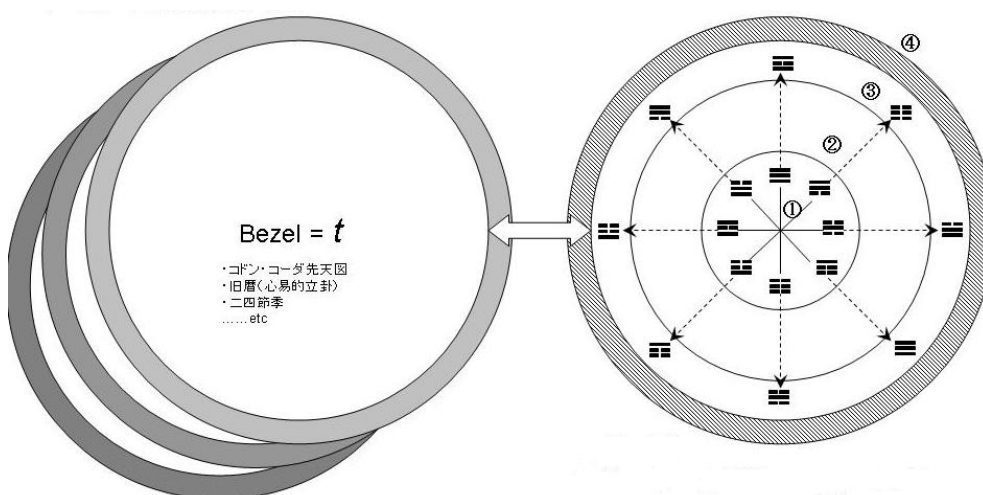


図 7.8 ベゼル

図 7.8 では、右側の円の (1)、(2) の同心円がハブからリムまでのツイストペア・ホイール本体をあらわしています。(3)、(4) はベゼルです。

このベゼルという「目盛り」は、必要に応じてつけかえることができます。どうしてつけかえる必要があるかという、たとえば、先の給食の話でいうと、A 君と B さんの時間に関するベゼルはちがったものになるだろうからです。

図 7.8 で (3) は伝統的な易において「後天図」と呼ばれているものです。後天図については「先天図と後天図 (67 ページ)」で一部説明しましたが、占術において季節・時序・方位などをあらわすもので、その意味でベゼルのひとつとして位置づけることができます。

(1) は先天図で、ツイストペア・ホイールの中心（ハブ）ですが、(1) 先天図 = (3) 後天図の対応については、伝統的な占術ではたとえば次のように説明されます。

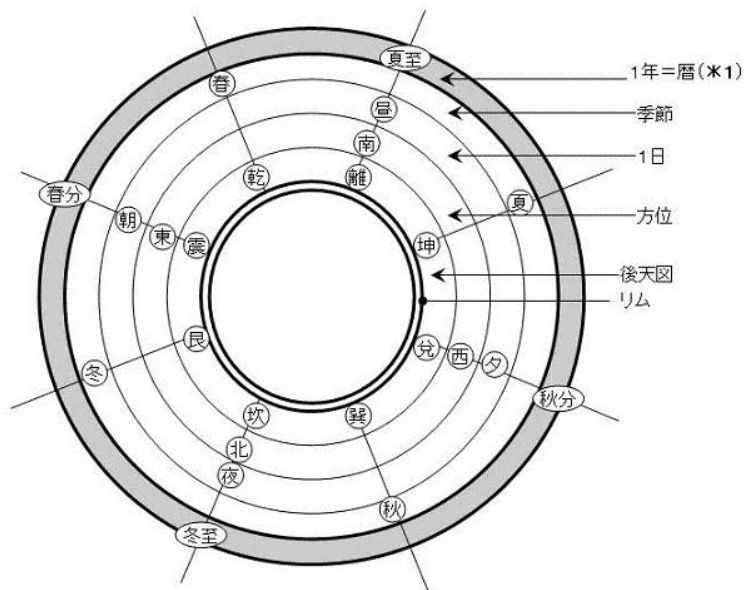
【体（先天図における八卦 (1)）→用（後天図における八卦 (3)）】

- 乾→離：太陽は光を発する（陽→上昇）。
- 兌→巽：沢は草木を育てる。
- 離→震：光を発して鳴る（光→音）。
- 震→艮：地震は山をつくる。
- 巽→坤：風は雲を生ずる。
- 坎→兌：水あって沢（湖）となる。
- 艮→乾：山は金を生じる。
- 坤→坎：地は水を生じる（坤も坎も下降）。

注：

易システムでは後天図はベゼルの一種とみなします。そこに配置された各八卦は単なるラベルであり、ツイストペア・ホイールのハブとなっている先天図のように、ツイストペア・ホイール内の各大成卦と相互作用をもつことはありません。

ベゼルには、図 7.9 に示すようにさまざまなものを想定することができます。



(※1) 「1年」の概念は、文化的社会的地域的(または個人的)文脈によって異なる。

図 7.9 リムをとりまく実生活の様相

ここでお話は、魂のテンプレートにもどります。テンプレートの基盤となる OD は、誕生日から導きます。誕生日は、カレンダー——暦の中に位置づけられます。

図 7.9 のグレーになっている輪＝ベゼルが、その暦をあらわしています。この暦上の誕生日日付から、その日に対応するリム上の大成卦を割り出せばいいだけですから、一見それ以上のことはなにもないように思われます。

ところが実は暦はひとつではありません。

世界的な標準としては、たしかに「グレゴリオ暦」というひとつの暦です。

しかし、たとえば、ホゼ・アグエイアス夫妻がマヤ暦をベースに考案した「13 月の暦」のような暦もありますし、体調管理やスピリチュアルな側面から見直されつつある「旧暦（太陰太陽暦）」や、農耕暦のような暦もあります。また、地球暦^{*6} のような暦もあります。

現代では暦は為政者の独占物ではありません。天文年鑑などを参照すれば、どなたでも自由に独自の暦を作成することができます。

ビジネスや他人との約束のために使うのは、いまのところグレゴリオ暦になるかもしれませんが、少なくともプライベートでは、どのような暦を使うかはまったく自由なのです。

というより、各人固有の意識による経験であるという先の時間の性質からすると、暦はその時間にカタチをあたえるものですから、積極的にご自分にあった暦——ベゼルを選択することが、より自然なのではないかと思います。

極端に言えば、ひとりにひとつずつの独自の暦があってしかるべきだということです。その独自の暦とリム四十八卦の対応はそれぞれ個別に考えなければなりません。これが、ツイストペア・ホイールの最外縁を、着脱可能なリングと考えた最大の理由です。

^{*6} 杉山開知氏による私家版の暦。上からみおろした太陽系の縮図そのままの暦。日付は月日ではなく、地球が地球軌道上のどこにあるかをあらわす度数で示されます。

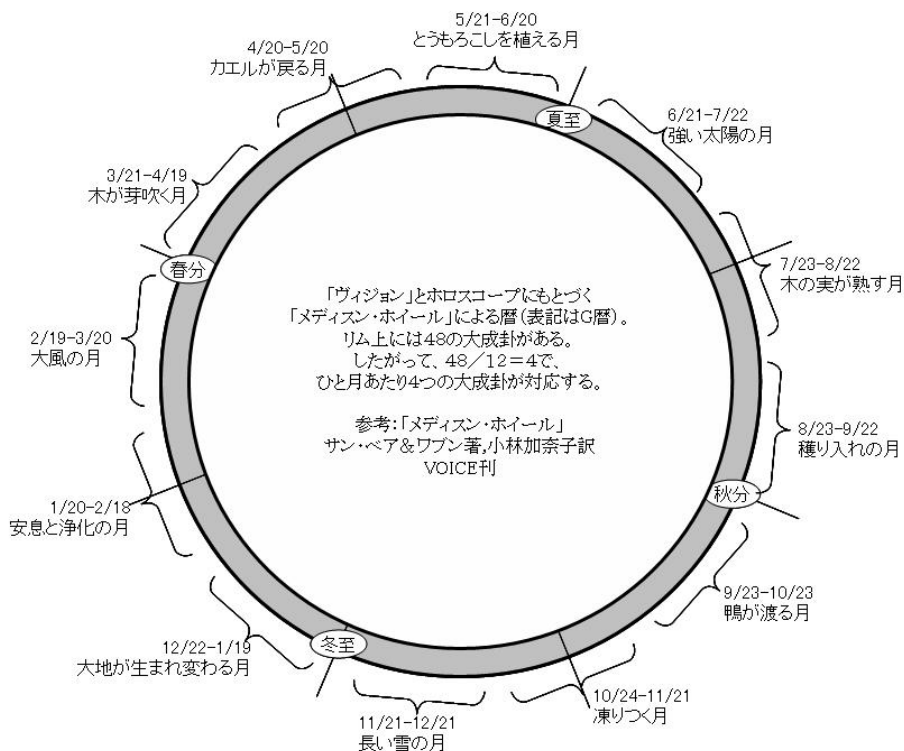


図 7.10 あるベゼルの例

この本では、OD を導く方法として以下の3つをご紹介します。

- 二十四節季（グレゴリオ暦）から
すでにグレゴリオ暦以外の暦を使っている方なら、その暦とリム四十八卦との対応を、この二十四節季との対応から検討することができると思います。
- 旧暦から
旧暦から梅花心易の方法で OD を導く方法。梅花心易は独自の世界観を持っており、この方法で導かれる OD は、リム上の四十八卦のみならず、六十四卦のうちいずれかです。
- 13 月の暦から
ホゼ・アグエイアス夫妻考案による、一連の銀河ツールと呼ばれるシステム・スイートのうち、易と関係の深い「20 の銘板」と呼ばれるシステム（ツール）から、OD を導きます。
「20 の銘板」には、13 月の暦の半分を構成するツオルキンと呼ばれる 260 日周期の暦と、六十四卦を対応づける独自の「先天図」があります。ここから導かれる

OD は、リム上の四十八卦のみならず、六十四卦のうちいずれかになります。

なお、上の3つだけでなく、オリジナルのベゼルを考案することもできます。その際の指針を「さまざまなベゼル (393 ページ)」にまとめましたので、ご興味のある向きはあわせてご参照ください。

7.5 ベゼルから OD を導く

では、具体例をあげて、実際に OD を導いてみることにします。

誕生日が、グレゴリオ暦で 1962 年 1 月 4 日の人の OD を、124 ページであげた 3 つの方法 (ベゼル) で特定してみることにします。

7.5.1 二十四節季 (グレゴリオ暦) から

図 7.11～図 7.15 に二十四節季とツイストペア・ホイールのリムに配置された 48 の大成卦の対応を示します。

それぞれの節季について、3 行から構成される表があります。

1 行目が、その節季に対応したグレゴリオ暦の「月」、

2 行目が、そのグレゴリオ暦の「月」における「日」、

3 行目が、対応する大成卦—— OD のコード番号になっています。

例の、「1962 年 1 月 4 日」生まれの人だと、「1 月 4 日」ですから、図 7.11、「1 月 4 日」のところに対応するコード番号を見ます。そうしますと、節季としては「冬至」の期間中で、対応する大成卦のコード番号は 74 ということがわかります。すなわち、この人の場合は、OD = 74:山雷頤、ということになりますが、この図 (表) を参照するにあたっては、以下のような注意が必要です。

- 節季の開始日付はあくまで目安です。実際は図 7.11～図 7.15 の日付より、年によって 1 日程度前後することがあります。
- 節季の変わり目近辺に生まれた方は、市販の天文暦、万年暦等で、生まれた年、生まれた日の対応する節季の正確な期間を調べる必要があります。
例の「1 月 4 日」は、図 7.11 では、冬至の期間の最後の日になっていますが、例にあげた誕生日が属する冬至の期間は、1961 年 12 月 22 日～1962 年 1 月 5 日になっています。
例の「OD = 74:山雷頤」を修正する必要はありませんが、1962 年の場合、冬至の最終日は 1 月 5 日です。
- 各表の 3 行目で灰色になっている日は、午前中生まれの (0 時～11 時 59 分) 場合は節季前半の大成卦、午後生まれの (12 時～23 時 59 分) 場合は節季後半の大成卦

がODになるものとします。

ある節季の期間が2で割り切れない日数であるときに、期間の真ん中にあたる日について、このような処置を要します。

上記の理由により、この日も1日程度前後します。

たとえば、図 7.11 では、冬至の期間は12月22日～翌年1月4日の14日間になっていますが、例の誕生日が属する1961年～1962年の冬至期間は、1961年12月22日～1962年1月5日の15日間です。

したがって、1961年～1962年の冬至期間においては、午前・午後で対応する大成卦を分ける処置をしなければならない日は（すなわち、灰色の日は）、1961年12月29日ということになります。

- 2月29日は雨水の後半（コード番号:43）に対応するものとします。

冬至	12月												1月					
	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4				
	84								74									
小寒	1月																	
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19			
	64									34								
大寒	1月												2月					
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3			
	24									14								
立春	2月																	
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18			
	83									73								
雨水	2月												3月					
	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	1	2	3	4	5			
	53									43								
啓蟄	3月																	
	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20			
	23									13								

図 7.11 二十四節季とリム上の四十八卦の対応 (1)

春分	3月												4月					
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4			
	82								62									
清明	4月																	
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19			
	52									42								
穀雨	4月												5月					
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4			
	32								12									
立夏	5月																	
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
	71									61								
小満	5月												6月					
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5		
	51								41									

図 7.12 二十四節季とリム上の四十八卦の対応 (2)

芒種	6月																			
	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20					
	31													21						

夏至	6月															7月									
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6									
	15										25														

小暑	7月																					
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22						
	35										65											

大暑	7月												8月				
	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6		
	75											85					

立秋	8月																					
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22						
	16										26											

処暑	8月												9月				
	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	
	46										56						

図 7.13 二十四節季とリム上の四十八卦の対応 (3)

白露	9月																					
	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22							
	76								86													
秋分	9月											10月										
	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7							
	17								37													
寒露	10月																					
	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22							
	47								57													
霜降	10月											11月										
	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6							
	67								87													
立冬	11月																					
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21							
	28								38													

図 7.14 二十四節季とリム上の四十八卦の対応 (4)

小雪	11月											12月									
	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6					
	48										58										
大雪	12月																				
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21						
	68									78											

図 7.15 二十四節季とリム上の四十八卦の対応 (5)

7.5.2 旧暦から

この方法^{*7}では、ご自分が生まれたグレゴリオ暦における生年月日に対応した旧暦の日付がわかっていることが前提となります。

旧暦の日付については、市販の万年暦等を参照してください。

例の、1962年1月4日生まれの人だと、「丁丑（ひのとうし）年11月28日」となります。

ここで一定の数字を算出します。この数字を仮にA、B、Cとすると、まず、Aは、表7.2から求めます。

表 7.2 十二支と数字

十二支	数字
子	1
丑	2
寅	3
卯	4
辰	5
巳	6
午	7
未	8
申	9
酉	10
戌	11
亥	12

Bは旧暦の「月」、Cは旧暦の「日」とします。

例の、グレゴリオ暦、1962年1月4日生まれの人だと、旧暦ですと「丁丑年11月28日」ですから、

$$A = 2$$

$$B = 11$$

$$C = 28$$

となります。

^{*7} 本項目の記述は、[28]を参考にしています

この方法ではさらに生まれた時刻からの数字も導きます。以下の表から生まれた時間の干支を導き、その干支から、先の表 7.2 を参照し、数字 D を求めます。

表 7.3 時間と十二支

十二支	時間
子	23:00～0:59
丑	1:00～2:59
寅	3:00～4:59
卯	5:00～6:59
辰	7:00～8:59
巳	9:00～10:59
午	11:00～12:59
未	13:00～14:59
申	15:00～16:59
酉	17:00～18:59
戌	19:00～20:59
亥	21:00～22:59

例の、1962 年 1 月 4 日生まれの人が、午後 8 時 15 分に生まれたとすると、表 7.3 より、「戌」の刻生まれということになります。「戌」は、表 7.2 より、D = 11 となります。

以上で、4 つの数字が出そろったことになります。

$$A = 2$$

$$B = 11$$

$$C = 28$$

$$D = 11$$

この 4 つの数字から OD を求めます。

まず、A、B、C を足して、合計を 8 で割った余りを求めます。8 で割り切れた場合はあまり = 8 とします。

例ですと、

$$A + B + C = 2 + 11 + 28 = 41$$

41 を 8 で割ると、あまり「1」となります。この数字を E とします。

E に D を加えて、8 で割った、あまりの数字を F とします。

例ですと、

$$1 (=E) + 11 (=D) = 12$$

これを8で割ったあまりは、「4」すなわち $F = 4$ となります。

E Fでつくられる数字がそのまま、OD に対応する大成卦のコード番号になります。

例ですと、 $E = 1$ 、 $F = 4$ ですから、 $E F = 14$ 、すなわち、「OD = 14: 天雷无妄」ということになります。

7.5.3 13月の暦から

13月の暦は、ホゼ&ロイディーン・アグエイアス夫妻が考案した銀河ツールと呼ばれる一連のツールの中核をなすツールです。13月の暦は、洗練された万年暦であるとともに、その暦を「生きる」ことにより、より自然の状態に近づけるとされています。「13の月に替える平和の運動」は世界的なムーブメントであり、これを書いている時点で、日本では約1万人以上のユーザがいると思われます。くわしくは、[38]、[3]などを参照してください。日常使用するツールとしては、[4]などがあります。

この銀河ツールでは、260日周期のツオルキンとよばれる暦が組み合わされており、ツオルキンの各日には1~260の「KIN 番号」があります。

13月の暦から OD を求めるには、まず、グレゴリオ暦の誕生日に対応した KIN 番号を求め、さらに「20の銘板」と呼ばれる銀河ツールに含まれる独自の先天図から、KIN 番号に対応した大成卦を求めます。

例を示しながら、以下に説明します。

この方法で OD を求めたい誕生日が、グレゴリオ暦で1962年1月4日だったとします。まず、図 7.16 *8を参照して、KIN 番号を求めます。

1. 生まれた年の西暦と月の交わるころの数字を、図 7.16 からさがします。

例の場合、1962年の1月ですから、「62」となります。

2. 該当する数字と、誕生日の日を足した数字が KIN 番号になります。

例の場合、1月4日ですから、「4日」の「4」を「62」に足して、求める KIN 番号は「66」ということになります。

誕生日が2月29日の場合は、2月28日と考えてください。

出てきた数字が260より大きい場合、その数字から260を引いてください。

*8 図 7.16 および、ここで示す方法は、[4]、[25]を参考にしています。

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1910 / 1962	62	93	121	152	182	213	243	14	45	75	106	136
1911 / 1963	167	198	226	257	27	58	88	119	150	180	211	241
1912 / 1964	12	43	71	102	132	163	193	224	255	25	56	86
1913 / 1965	117	148	176	207	237	8	38	69	100	130	161	191
1914 / 1966	222	253	21	52	82	113	143	174	205	235	6	36
1915 / 1967	67	98	126	157	187	218	248	19	50	80	111	141
1916 / 1968	172	203	231	2	32	63	93	124	155	185	216	246
1917 / 1969	17	48	76	107	137	168	198	229	0	30	61	91
1918 / 1970	122	153	181	212	242	13	43	74	105	135	166	196
1919 / 1971	227	258	26	57	87	118	148	179	210	240	11	41
1920 / 1972	72	103	131	162	192	223	253	24	55	85	116	146
1921 / 1973	177	208	236	7	37	68	98	129	160	190	221	251
1922 / 1974	22	53	81	112	142	173	203	234	5	35	66	96
1923 / 1975	127	158	186	217	247	18	48	79	110	140	171	201
1924 / 1976	232	3	31	62	92	123	153	184	215	245	16	46
1925 / 1977	77	108	136	167	197	228	258	29	60	90	121	151
1926 / 1978	182	213	241	12	42	73	103	134	165	195	226	256
1927 / 1979	27	58	86	117	147	178	208	239	10	40	71	101
1928 / 1980	132	163	191	222	252	23	53	84	115	145	176	206
1929 / 1981	237	8	36	67	97	128	158	189	220	250	21	51
1930 / 1982	82	113	141	172	202	233	3	34	65	95	126	156
1931 / 1983	187	218	246	17	47	78	108	139	170	200	231	1
1932 / 1984	32	63	91	122	152	183	213	244	15	45	76	106
1933 / 1985	137	168	196	227	257	28	58	89	120	150	181	211
1934 / 1986	242	13	41	72	102	133	163	194	225	255	26	56
1935 / 1987	87	118	146	177	207	238	8	39	70	100	131	161
1936 / 1988	192	223	251	22	52	83	113	144	175	205	236	6
1937 / 1989	37	68	96	127	157	188	218	249	20	50	81	111
1938 / 1990	142	173	201	232	2	33	63	94	125	155	186	216
1939 / 1991	247	18	46	77	107	138	168	199	230	0	31	61
1940 / 1992	92	123	151	182	212	243	13	44	75	105	136	166
1941 / 1993	197	228	256	27	57	88	118	149	180	210	241	11
1942 / 1994	42	73	101	132	162	193	223	254	25	55	86	116
1943 / 1995	147	178	206	237	7	38	68	99	130	160	191	221
1944 / 1996	252	23	51	82	112	143	173	204	235	5	36	66
1945 / 1997	97	128	156	187	217	248	18	49	80	110	141	171
1946 / 1998	202	233	1	32	62	93	123	154	185	215	246	16
1947 / 1999	47	78	106	137	167	198	228	259	30	60	91	121
1948 / 2000	152	183	211	242	12	43	73	104	135	165	196	226
1949 / 2001	257	28	56	87	117	148	178	209	240	10	41	71
1950 / 2002	102	133	161	192	222	253	23	54	85	115	146	176
1951 / 2003	207	238	6	37	67	98	128	159	190	220	251	21
1952 / 2004	52	83	111	142	172	203	233	4	35	65	96	126
1953 / 2005	157	188	216	247	17	48	78	109	140	170	201	231
1954 / 2006	2	33	61	92	122	153	183	214	245	15	46	76
1955 / 2007	107	138	166	197	227	258	28	59	90	120	151	181
1956 / 2008	212	243	11	42	72	103	133	164	195	225	256	26
1957 / 2009	57	88	116	147	177	208	238	9	40	70	101	131
1958 / 2010	162	193	221	252	22	53	83	114	145	175	206	236
1959 / 2011	7	38	66	97	127	158	188	219	250	20	51	81
1960 / 2012	112	143	171	202	232	3	33	64	95	125	156	186
1961 / 2013	217	248	16	47	77	108	138	169	200	230	1	31

図 7.16 KIN 早見表 ([4] より)

最後に、求めた KIN 番号から、表 7.4～表 7.6 を参照して、OD にあたる大成卦のコード番号を求めます。

例では、KIN 番号 = 66 でしたから、OD のコード番号は、「OD = 85:地風升」となります。

表 7.4 KIN 番号と OD にあたる大成卦のコード番号の対応 (1)

KIN 番号	OD にあたる大成卦のコード番号	調波番号 (参考)
1 ~ 4	11	1
5 ~ 8	21	2
9 ~ 12	15	3
13 ~ 16	31	4
17 ~ 20	25	5
21 ~ 24	41	6
25 ~ 28	35	7
29 ~ 32	51	8
33 ~ 36	45	9
37 ~ 40	61	10
41 ~ 44	55	11
45 ~ 48	71	12
49 ~ 52	65	13
53 ~ 56	81	14
57 ~ 60	75	15
61 ~ 64	12	16
65 ~ 68	85	17
69 ~ 72	22	18
73 ~ 76	16	19
77 ~ 80	32	20
81 ~ 84	26	21
85 ~ 88	42	22
89 ~ 92	36	23
93 ~ 96	52	24
97 ~ 100	46	25
101 ~ 104	62	26
105 ~ 108	56	27
109 ~ 112	72	28
113 ~ 116	66	29
117 ~ 120	82	30

表 7.5 KIN 番号と OD にあたる大成卦のコード番号の対応（2）

KIN 番号	OD にあたる大成卦のコード番号	調波番号（参考）
121～124	76	31
125～128	13	32
129～132	該当なし	33
133～136	86	34
137～140	23	35
141～144	17	36
145～148	33	37
149～152	27	38
153～156	43	39
157～160	37	40
161～164	53	41
165～168	47	42
169～172	63	43
173～176	57	44
177～180	73	45
181～184	67	46
185～188	83	47
189～192	77	48
193～196	14	49
197～200	87	50
201～204	24	51
205～208	18	52
209～212	34	53
213～216	28	54
217～220	44	55
221～224	38	56
225～228	54	57
229～232	48	58
233～236	64	59
237～240	58	60

表 7.6 KIN 番号と OD にあたる大成卦のコード番号の対応（3）

KIN 番号	OD にあたる大成卦のコード番号	調波番号（参考）
241～244	74	61
245～248	68	62
249～252	84	63
253～256	78	64
257～260	88	65

7.6 動的に変化するテンプレート

本書で「魂のテンプレート」と呼んでいるものは、特定の手順で、特定の大成卦のグループを選択し、それら大成卦の意味をリーディングすることで、その人の出自なり、スピリットがこの地上に投影される際のある種の傾向などを、明らかにしようとするひとつのころみです。基盤になるのはツイストペア・ホイールで、ツイストペア・ホイールのひとつの応用例ということができます。

この考えを形にまとめ始めた最初の頃は、このテンプレートをスピリットの光が地上に現れるときの忘れられた設計図のようなイメージでみていました。設計図ですから、基本的には書き換えることはできません。しかし実は、書き換え不可の設計図というイメージは逆で、地上から本源・無極（＝大いなるすべて、グレートスピリット……）を見上げようとするときの窓のようなものではないか、と気づきました。個別化された意識＝各人の時間であるベゼルを変えれば、テンプレートもそれにつれて動的に変化します。

たとえば、グレゴリオ暦で1962年1月4日生まれの人（「7.5 ベゼルからODを導く（125 ページ）」の例を参照）、

- 「グレゴリオ暦」というベゼルをそのまま使うのであれば、
「OD = 74:山雷頤」となり、
- 「旧暦（太陰太陽暦）」というベゼルを使うのであれば、
「OD = 14:天雷无妄」となり、
- 「13月の暦」というベゼルを使うのであれば、
「OD = 85:地風升」となります。

OD はテンプレートを決定する基本となる大成卦です。OD が決まれば、テンプレートを構成する他の卦は自動的に決まります。採用するベゼルによって OD が変わるわけですから、ちょっといいかげんなものにみえるかもしれません。しかしこれは、いいかえれば、意識（時間）を変えれば、本源・無極の見え方も変わるということにはならないでしょうか。

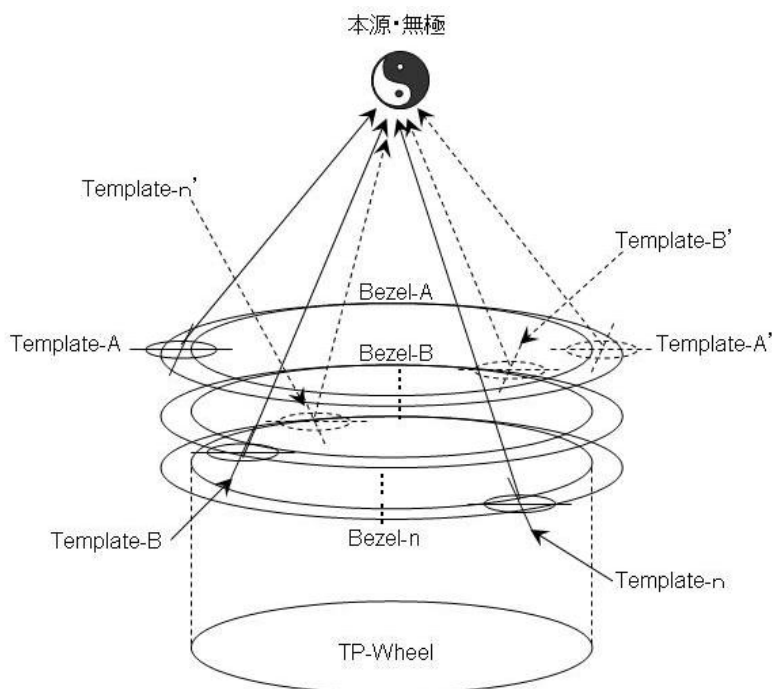


図 7.17 採用するベゼルによりテンプレートは動的に変化する

この世には「グレゴリオ暦」という唯一無二のベゼルだけがあるのではありません^{*9}。

旧暦や、13 月の暦、場合によってはご自分でベゼルの組み上げてもいい（ご自分でベゼルの創るためのヒントは、「その他のトピック」の部「さまざまなベゼル（393 ページ）」にまとめました）。時間は各人各様です。それぞれの人がそれぞれの「ベゼル」を、それぞれのニーズに応じて選択できる自由があってもいいのではないのでしょうか。

ベゼルは——誰かが決めたものをいやおうなしにあたえられるといったものではなく、自ら選び取るものといえそうです。

^{*9} 誤解のないようにコメントしておきますが、本書ではグレゴリオ暦を否定したり軽視したりすることをすすめているわけではりません。グレゴリオ暦は現時点では世界的な標準となる暦です。ただそれ以上でもそれ以下でもない、ということです。

7.7 テンプレートをよむ

さて、ここまでのお話で、なんとか OD を導くことができたとします。OD (Owner-Driven) を導くことができれば、魂のテンプレートを構成する他の要素、「I」「N」「G」は自動的に導くことができます。

その具体的方法は、表 7.1 に示しましたが、以下に、もう一度おさらいしておきます。

- I; Inverse

OD の全 6 爻の陰陽を反転する。OD と I の対は、ツイストペアを構成する。

- N; Navigator

OD の下卦をそのまま、上卦を、下卦の八卦の陰陽を反転した八卦にする。OD が属するファミリーの先天大成卦になる。

- G; Ground

OD の下卦をそのまま、上卦を、下卦の八卦と同じ八卦にする。純卦。

たとえば、OD が「85：地風升」（以後、この例を使います）だったとすると、図のようになります。

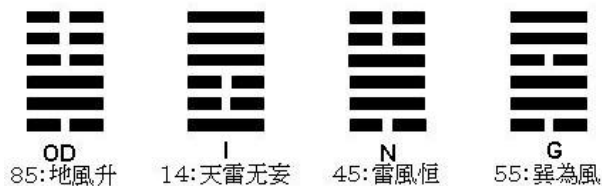


図 7.18 OD が「85：地風升」だった場合の魂のテンプレートの構成要素

こうして導かれた、OD、I、N、G を読み解いていくわけですが、その方法自体は、さほどむずかしいものではありません。

読み解く流れは以下ようになります。

1. OD、I、N、G 各要素のイメージマップを描く。
2. イメージマップからハラにくるキーワードをひろいあげる。
3. 選ばれたキーワードから、解釈を組み立てる。

それでは、OD が「85：地風升」の人を例に、実際にやってみましょう。

7.7.1 イメージマップを描く

環境

この段階は、テンプレートを読む際の、一番基本になる段階ですので、心と時間に余裕のあるときにやったほうがいいかもしれません。

またそうするのが妥当であるという確かな感覚がない限りは、一気にやってしまう必要はありませんが、そうかといってあまり時間をかけると、フロントエンドセルフのバイアスがかかる可能性が高くなります。

フロントエンドセルフの検閲をさけるためにも、ある程度、すばやく行ったほうがいいのかと思いますが、なにかに追い立てられるようにあわててやるのも好ましくありません。

まあ、このところは「ゆっくりすばやく」という矛盾した形容が、いちばんぴったりくるような気がします。

できれば、ひとりきりになれる静かなところで。そしてできれば、電話や他の人や他の用事に邪魔されない環境で。瞑想を行うときの環境と同じような条件をととのえるのがベター、と考えてくださればいいかと思います。

イメージマップ

イメージマップは、マインドマップ ([17]、[7]) とも呼ばれます。マインドマップは、中心のテーマから、木の枝状にブランチをのびし、キーワードやイメージを広げていく一枚のおおきな「地図」です。

本格的なマインドマップでは、複数の色を使い、文字だけでなくイメージ（絵）も描き込んでいきますが、ここで描く「イメージマップ」では、絵は描きません。

描くのは、キーワードと、そのキーワードを囲む楕円だけです。必要なのは A4 程度の大きさの紙が 5 枚と、筆記用具です。

描き方は、まず、

1. 図 7.18 に示した、易卦のシンボルとコード番号、それが OD、I、N、G のいずれなのかを紙の中央に描き、楕円で囲みます（図 7.19～図 7.23 を参照してください）。
2. テンプレートにはあがっていませんが、OD と I のペア自体にも意味があります。これについては、中央に「OD-I」と書き、このツイストペアの意味を書き、楕円で囲みます。

注： _____

ツイストペア番号とツイストペアの意味の求め方

まず、215 ページ以降の「六十四卦リスト」から、OD にあたる卦を探し出します。次に「六

十四卦リスト」の各ページのタイトルにあるツイストペア番号（「TP=××」で示される）から、347 ページ以降の「ツイストペア・リスト」を参照し、ツイストペアの意味を確認します。

3. これで、中央にテーマが書かれた紙が5枚できました。それぞれ中央には OD、I、N、G、OD-I、の易卦（OD-I の場合はキーワード）が描かれ、楕円で囲まれています。
4. 中央の各テーマから放射状に矢印を引き、テーマから連想されるキーワードを書き、キーワードを楕円で囲ってください。そのキーワードからさらに矢印を分岐させてキーワードを追加しないでください。キーワードを追加するときは必ず中心のテーマから。つまり、イメージマップでは、中心のテーマから2階層以上の分岐はさせません。
これをひとつのテーマにつき（各紙につき）、10 個～10 数個のキーワードが出るまで繰り返します。

注： _____

この過程は、できるだけ「ゆっくりすばやく」行ってください。また、易卦の意味に慣れていない場合は、215 ページ以降の「六十四卦リスト」および、347 ページ以降の「ツイストペア・リスト」を見ながらマップを描いてもけっこうです。

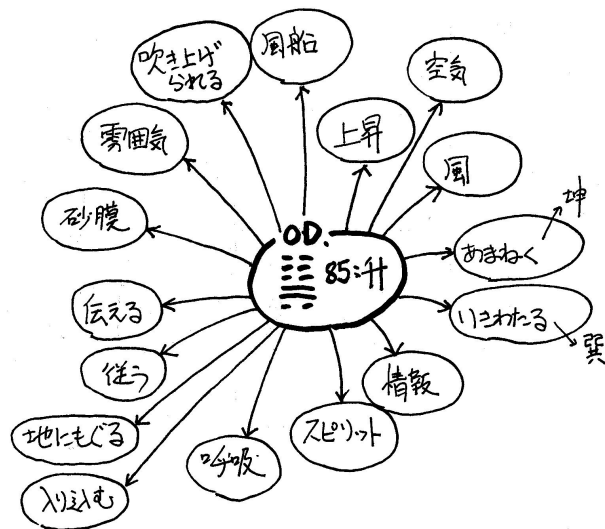


図 7.19 OD のイメージマップの例

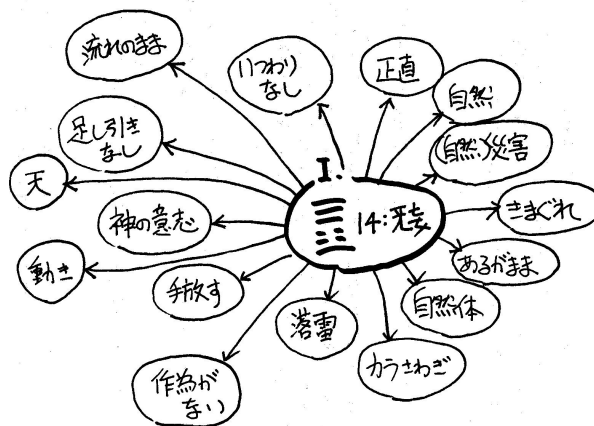


図 7.20 I のイメージマップの例

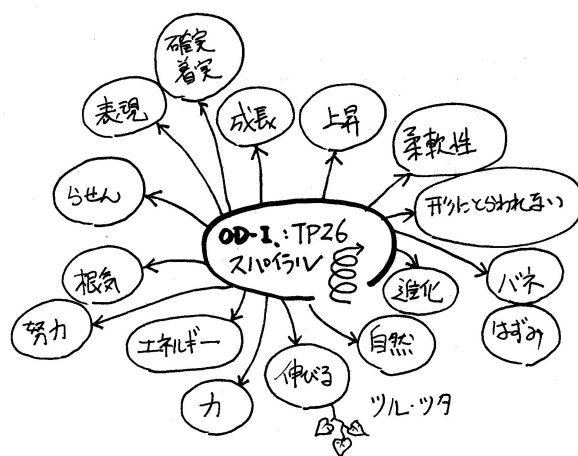


図 7.21 OD-I のイメージマップの例

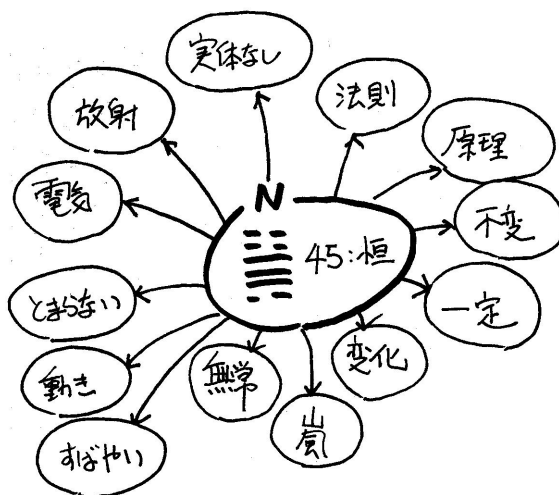


図 7.22 N のイメージマップの例

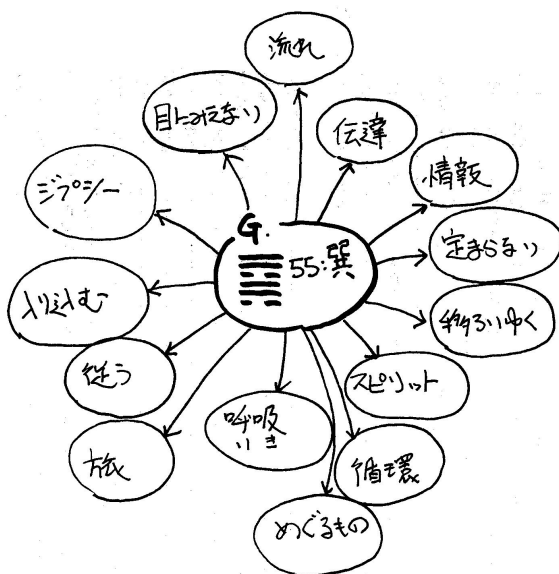


図 7.23 G のイメージマップの例

7.7.2 キーワードを拾い上げる

このステップも前のステップ同様、あまりあわててやることはお勧めしません。各人の判断によりますが、場合によっては、イメージマップを作って、また日を改めて行った方がいいこともあります。

この段階で行うことは、前の段階で描いたイメージマップのキーワードから、ぐっと「ハラ」に来る――

『これは』

と、感じるものを拾い上げることです。

選択するキーワードの数には、とくに制限はありませんが、多くて2～3個といったところでしょうか。あまり多くのキーワードを拾い上げることは、このステップの意味をなくしてしまうことになりますし、次のステップで、解釈を組み上げることをむづかしくしてしまう可能性があります。

注：

キーワードを拾い上げる（選ぶ）ときは、過剰に中心テーマにとらわれないようにしましょう。たとえば、『N はナビゲータで、導くもの、なわけだから、これがキーだというのはおかしい。だから、これと、これと……』

というふうに理詰めで考えるのではなく、直感的に選び取っていくほうがいいと思います。



図 7.24 OD のイメージマップのチェック例

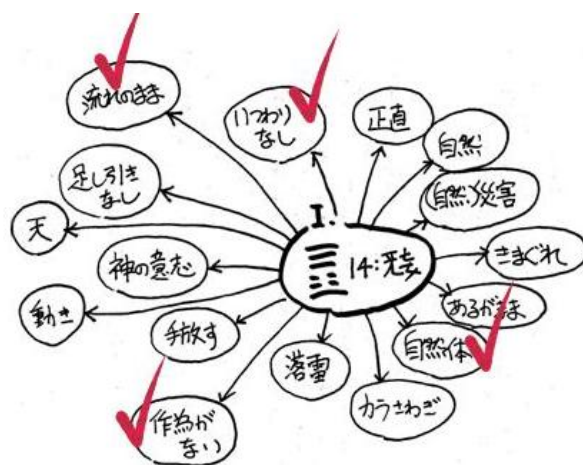


図 7.25 I のイメージマップのチェック例

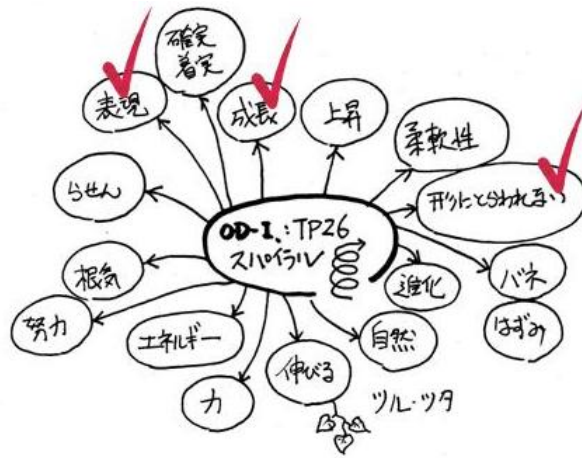


図 7.26 OD-I のイメージマップのチェック例



図 7.27 N のイメージマップのチェック例

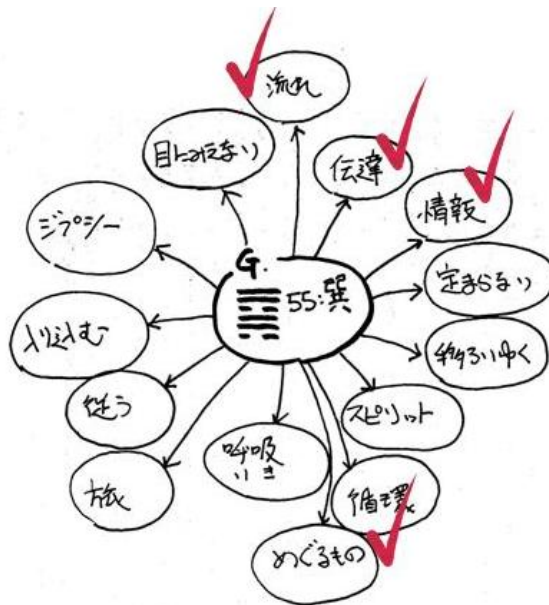


図 7.28 G のイメージマップのチェック例

7.7.3 解釈する

さて、いよいよ最終ステップです。

今度は、魂のテンプレートを構成する各卦、OD、I、N、G の意味を縦系に、前のステップで選んだキーワードを横系にして、テンプレートの意味を組み立てていきます。

このとき、前のステップで選ばれなかったキーワードは、完全に捨て去ってしまうのではなく、行き詰ってしまったときや、組み立てる解釈に新たなはずみつけるきっかけが必要なとき、ときどき参考にします。そのようなわけで、解釈を組み立てるときには、前のステップで描いたイメージマップを必ず手元においておくようにしましょう。

この段階は、じっくり行った方がいいと思いますが、あまり考え込まないようにしてください。誰に見せるためのものでもありません。自分で自分のテンプレートの意味を確認するのです。ことさら飾った文章や、筋を通さんがために不必要に硬直した文章を書く必要はありません。自分が納得できればそれでいいのです。

テンプレートを構成する各卦（要素）の意味は、表 7.1 に示しましたが、簡単におさらいしておきます。

- OD

この世界——日常世界における役割や働きなど。

- I
普段意識することのない、隠れた部分。
- N
方向性。めざすものなど。
- G
全体的の基本的性質。資質。
- OD-I
表 7.1 にはありませんが、OD と I によるさらに大きな目標、N が示す具体的方向性など。

OD の解釈例



- OD の意味：縦糸

日常活動

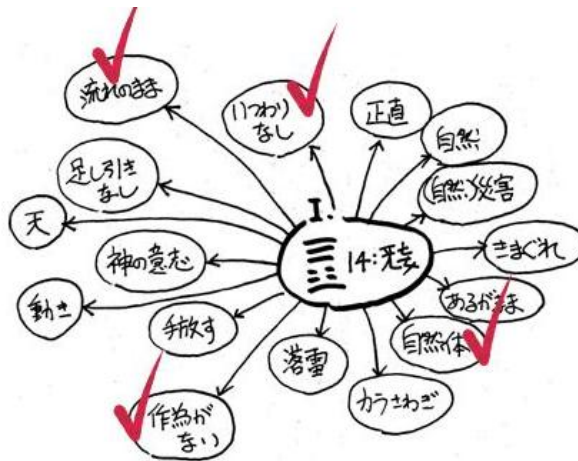
- 選択したキーワード：横糸

上昇・情報・スピリット

- 解釈例：

とにかく前向きに常に高みを目指す傾向にある（ちょっと理想主義的か）。あまり後を振り返るようなこともないので、ややもすると、独走（ふりかえるとだれもいない）とか、足元がおそろかになるかもしれない。いわゆる「夢」の対極にある実生活の活動——収入を得ることや人間関係をきりもりすることなど——から逃げないこと、グラウンディングが大切。情報をあつかうのがうまく、精神的な事ながらに興味があるかもしれない。あちこちさまよう、方針が定まらない、転職をくりかえす、放浪癖がある、なども考えられるが、これについてもグラウンディングを行うことでバランスをとることが重要である。

I の解釈例



● I の意味：縦糸

普段意識することのない、隠れた部分。

● 選択したキーワード：横糸

自然体・作為がない・流れのまま・いつわりがない

● 解釈例：_____

どこかちゃらんぼらんに見えるかもしれない。それは、意識していないかもしれないが、ひとつところにじっとしているのが苦手だからである。基本的に動き続ける性向にある。また、ウソをつくのが下手。いわゆる「建前」を含む何らかの作為や、つくられたものを必要とする立場や職業はさける。

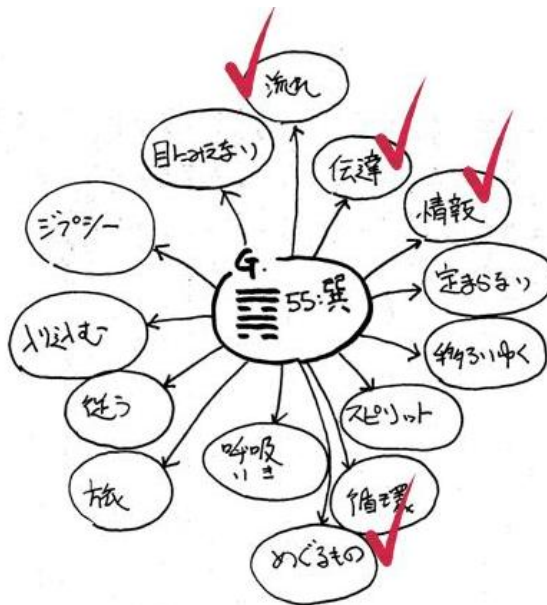
N の解釈例



- N の意味：縦糸
方向性。めざすもの。
- 選択したキーワード：横糸
法則・原理・一定
- 解釈例：_____

「45：恒」には、変化することは変わらない、という矛盾した意味がある。この世のものはすべて変化し続け、なにひとつとしてとどまっているものはないのが真理だが、そんな中にあってもなお、一定の原理や法則を見出そうとする。実際にそれを得ることができるかできないかは問題ではなく、そういった行為に身を投じることそのものが生きる指針となる。いまこの時点で、そのような活動に興味がないとすれば、将来的にそうなる可能性がある。

G の解釈例



- G の意味：縦糸

基本的性質。

- 選択したキーワード：横糸

流れ・伝達・情報・循環

- 解釈例：_____

何かを伝えること、伝えながらあちこちめぐりつづけること。そうすることによって、この世界の呼吸・血流・エネルギー循環の一部になること。いや、これは好むと好まざるとにかかわらずだれもがここにいてときからいつだってそうなのだから、そのような流れの一部であることを意識し続けること。それらが基本的な性質になっている。

OD-I の解釈例



- OD-I の意味：縦糸

大きな目標、N が示す具体的方向性

- 選択したキーワード：横糸

表現・成長・形にとらわれない

- 解釈例：

それをいったらこの宇宙に在るすべてのものがそうなのだが、常に成長し続けることが大目標である。上昇を示す OD とあいまってそのエネルギーは強大である。成長は肉体的な成長から、資産の成長、精神的な成長、さまざまだが、とくにどれというこだわりは持たない方がいいようだ。また、OD のイメージとは矛盾するようだが、アメリカンドリーム的な突発的な飛躍ではなく、昨日より今日、今日より明日、といった漸進的成長の意味合いが強そう。表現というキーワードを選択しているが、なにかを表現することによって、または成長したことを表現することによって、本源への路を確かなものにしていくのかもしれない。

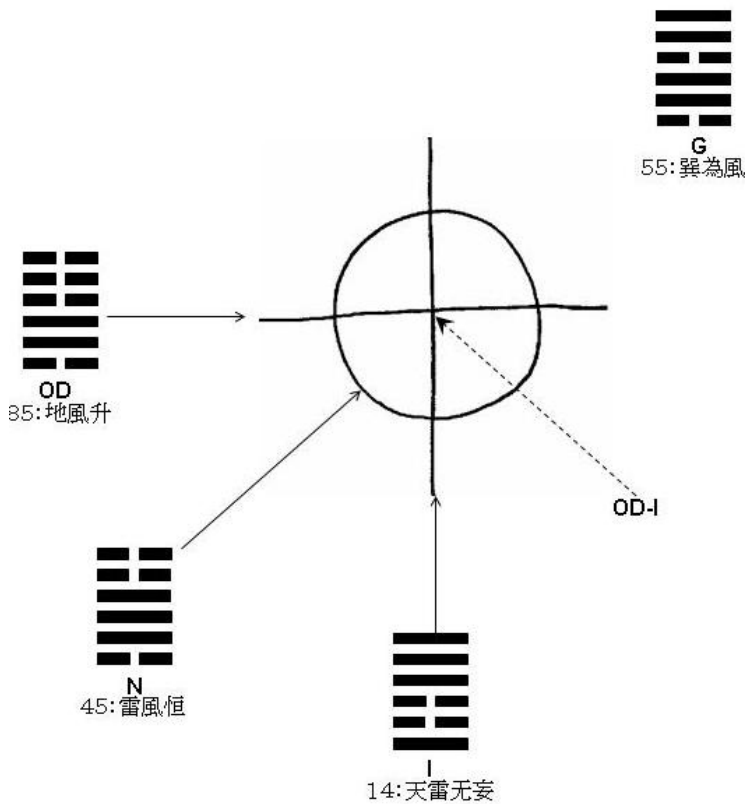


図 7.29 魂のテンプレート（例）全図

以上、OD が「85：地風升」で、魂のテンプレートの例をみてきましたが、もちろん、一度行った解釈は絶対的なものではありません。

時間を経るにしたがって解釈そのものが変化してくることもありますし、あるいはもう一度、イメージマップを書き直す必要が出てくるかもしれません。

そんなときは、ためらいなくテンプレートの解釈をバージョンアップしてください。気に食わないところを直す……のではなく、あなた自身の経験と成長にともなう新しい視点からテンプレートを再度見つめなおすのです。

場合によっては、テンプレートそのものを総変更するために、ベゼルを選択しなおす必要が出てくる可能性もあります。

第 III 部

Book of Changes

第 8 章

得卦を読み解くカギ

この章のタイトルは、「得卦を読み解くカギ」となっていますが、得卦とは、それが「魂のテンプレート」の OD として得られた卦であれ、日常生活の中で占って得られた卦であれ、とにかく何らかの意図を持って立卦し、それに呼応する形で得られた大成卦のことです。

「7.7 テンプレートをよむ（140 ページ）」で、例として行ったイメージマップを使う方法は、「魂のテンプレート」を読むための方法としてご紹介しましたが、得卦を読み取るための方法のひとつ、と考えることもできます。

得卦を読み解く方法はさまざまあります。それこそ、占う人の数だけ読み取り方があるといっていると思います。

読み解く方法さまざまでも、得卦から一定のルールに従って解釈のヒントを取り出し、回答につながる連想を行うというステップは共通です（例外は常にありますが）。

「7.7 テンプレートをよむ」では、そのステップは、イメージマップを描く、というステップになっています。実際にイメージマップを描いてみた方はわかると思いますが、「さあ、自由に連想して」といわれてもなかなかむずかしいものです。

また、「直観が大切だ」といっても、頭に浮かんだことをなんでもかんでも回答に盛り込めばいいというものでもありません。

そんなことを聞く相談者はあまりいませんが、もし、なぜそう思うのか、ということを問われたときに、占的^{*1}との絡みで論理的にか、大成卦のシンボルや構造などからか、またはその両方から、最終的な解釈にいたった理由をできるだけ説明できるようにしておくことがのぞましいと思います（本書で推奨している一人占いの場合はなおさら）。

すべてにおいてその判断に至った理由を説明できることはむしろ少なく、実際には説明できない部分が残ることが多いでしょう。それはそれで純粋な直観であるにとらえていいとは思いますが、あまりにも説明できない部分だらけだと、その回答が直感によるもので

^{*1} 【占的】 占うターゲットになる事からのことを占的といいます。

はなくて、まったく野放図な思いつきの連続である可能性も出てきてしまいます。

まずは、なるべく多くのイメージ・連想を得るためのヒント、そして連想が、説明できないあらぬ方向へ流れていってしまわないためのアンカーとして、大成卦の構成要素の意味や、一般的な構造を知っておくことは重要です。

8.1 陰陽

陰陽とは、物理的現実そのものに真実味を加えるような定義付けの概念、パラメーター、または境界を創り出すもののひとつです。そして、皆さんが物理的または肉体的に自分自身を表現することを可能とするために創り出した、性格の構造の基礎となる概念のひとつなのです。

原典の「二極性」を「陰陽」といいかえて [16] より引用

空間と時間は（陰と陽は）、聖なる創造の計画によって確立された二つの原初的な座標 (coordinates) である。時間（陽）、発生させるものは、つながった線によって示され、空間（陰）、母体は途切れた線によって表される。これら2つの線がともになって、二つの普遍的な時空座標を構成し、それは空間における特定の時間ベクトル・ポテンシャル点を決定するために統一される。

[25] より引用

まずは、システムのもっとも基本となる「陰・陽」からみていきましょう。陰陽については、「5.3 両儀（41 ページ）」でも触れましたが、あらためて整理しておきます。

伝統的な陰陽論では、

- 陰陽対立
陰陽は、たがいに対立した性質を持つ。
- 陰陽可分
陰陽それぞれは、さらに陰陽に分けられる。
- 陰陽互根
陰陽は、互いに相手を育てる関係や相手に依存する関係にある。
- 陰陽消長
陰陽は、互いに役割の交代を繰り返す。
- 陰陽転化

陰陽は、極限や一定の条件のもとでは反対のものに入れ替わる。

などの観点で語られます（以上の説明は [40] より）。

これらの観点と一部だぶりますが、著者は以下3つの観点で「陰陽」をとらえています。

1. 必ず相手が必要。

単独で取り出されたあるものの陰陽を語ることはできない。

2. 必ず基準が必要。

あるものが、別のあるものに対して陰か陽かをいうためには、そのための判定基準が必要。

3. 複数基準がありうる。

唯一それだけが正しいという基準は存在しない。

たとえば、ある色の陰陽はどう判定するのか？といった場合、1. により、特定の色を取り出して、単純にそれ単独で、陰か陽かをいうことはできません。

しかし、そこに他の色とのかかわりを規定する基準があれば、その他の色とのかかわりにおいて、答えることができます（2.）。その基準の中に自己矛盾があるような場合は、その基準による判断はあてにならないものになるでしょう。

なぜそれが陰なのか（または陽なのか）、きちんと説明できる基準が必要であるということです。

また、基準そのものは矛盾なく成立していることが前提です。3. で述べた、多様な基準がある、ということと、基準に矛盾があることは別の話で、基準における矛盾はエラーであり、その基準が基準として不完全であるということです。

3. は唯一絶対の基準はない、ということですが、これが、ひいてはものごとの多様性を生み出す原動力となっています。

陰陽は動的に変化しうる二つの「観点」ともいえるでしょう（図 8.1）。表 8.1 に、図 5.4（42 ページ）に示した一般的な陰陽の意味とはまた別の「基準」からみた陰陽の例を示します。

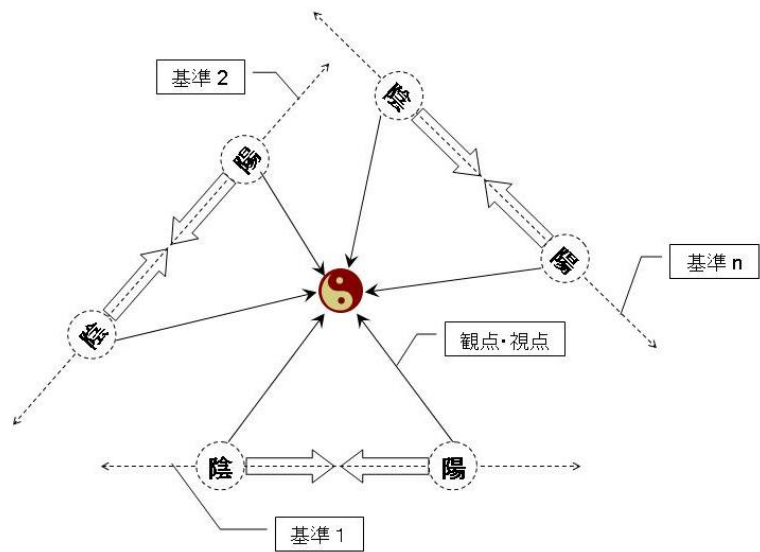


図 8.1 陰陽の概念

表 8.1 陰陽の例

陰	陽	出典
量的（空間的）なもの	質的（心的）なもの	[2]
（性命の）「命」	（性命の）「性」	[2]
実体	力（作用）	[2]
愛	意志	[2]
魄	魂	[2]
アニマ、地上的な身体を持つ霊	雲のようなデモン、高いところで息吹する霊	[2]
エロス	ロゴス	[2]
空間	時間	[25]

8.2 大成卦の一般構造

8.2.1 大成卦のオーバービュー

図 8.2 に、大成卦の基本的な全体構造を示します。

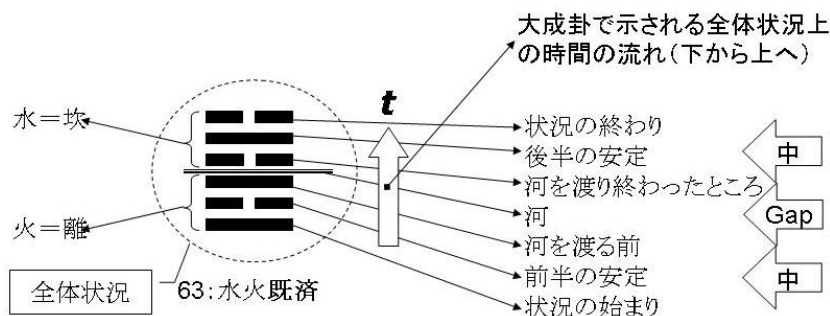


図 8.2 大成卦の全体構造

大成卦には、名前がついています。これを卦名といいます。

たとえば、図 8.2 の例ですと「63: 水火既済」ですが、この場合、「水」と「火」は、その大成卦を構成する上卦と下卦を示しており、上卦が「水」、すなわち「坎」、下卦が「火」すなわち「離」でできていることを意味しています。「水火既済」のうち、実際の卦名は「既済」の部分で、「水火」は「既済」卦がどの八卦から成り立っているのかをおぼえるための便宜としてあとから加えられたものです。

まずは、卦全体につけられた名前が、全体状況をあらわすものと思ってください。この例ですと、「既済」という名前ですから、その名前がおおまかに全体状況をあらわすことになります。「既済」は、既に済むという意味で、状況が「完成された」状態にむかいつつあるか、またはすでに完成された状態にあり、ついている隙、アソビがないことを示します。

一般的には、大成卦を構成する6つの爻は、大成卦全体が示す全体状況における状態遷移の段階を示します。時間 t は大成卦上を、下から上に向かって流れ、初爻（一番下の爻）は大成卦が示す全体状況の発端であり、上爻（一番上の爻）は大成卦が示す全体状況が終わりつつある段階を示します。

また、シンボルにはあらわれませんが、図 8.2 で「河」と描いたように、上下卦の間には、ある種のギャップがあるものと想定されています。このギャップは、ほんとうの河のような物理的なギャップ——ハードルであるかもしれないし、乗り越えなければならない精神的な壁かもしれないし、あるいは試験のような試練かもしれないし、あるいはまた、純粹に時間のギャップかもしれません。この「ギャップ」をどう観るかは占的と占者の判

断によります。

このギャップの前後では、「河」をわたる直前と直後、ということで安定が悪くなります。これからギャップを超えようとする三爻目は不安で足がふるえ、なんとかやっとギャップを越えた四爻目は、全力でギャップを超え終わったばかりでまだちょっと足元がおぼつかない、というわけです。

比較的安定しているのは、最初の緊張からも離れ、ギャップにもまだちょっと遠い二爻目で、もっとも安定しているのは、ギャップも超え終わり、足元も落ち着いた五爻目です。

易経では、極端を嫌い、中庸を重んずる傾向があります。二爻目と五爻目はそれぞれ下卦、上卦の中央の爻であり、その意味で尊ばれ、変爻がこの位にあたると「中を得る」などと表現されます。また同じ理由から、最も安定している五爻目を「尊位」と呼ぶこともあります。

以上が、大成卦の全体構造の概要ですが、経文はかならずしもこの原則にしたがった内容にはなっていません。経文の内容以外の一般構造やシンボルの形、大成卦を構成する八卦の意味などにウエイトをおいた判断をするのか、それとも経文重視で判断するのか、あるいはその両方か。占者は常にその選択にさらされます。

8.2.2 位にあたる・あたらない

ところで、図 8.3 は先の例にあげた「63：水火既済」卦ですが、この卦はまた、すべての爻が「定位」にある卦でもあります。定位というのは、その言葉どおり定まった位置のことです。伝統的な易では、偶数は2で割れるため、やわらかい……柔、すなわち「陰」とされ、奇数は、2で割れないため、かたい……剛、すなわち「陽」とされます。この原則を、爻の位置に当てはめたものが定位で、初（一）、三、五は奇数位ですから「陽」、二、四、六は偶数位ですから「陰」、ということになります。これはどちらがよくてどちらがわるいということではなくて、一、三、五爻目には陽爻が、二、四、六爻目には陰爻が置かれるのが本来の姿である、という意味です。

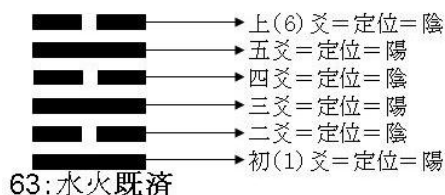


図 8.3 六爻定位

図 8.3 のようにすべての爻が、定位にある卦が「63：水火既済」であり、完全という意味では一種の理想形ですが、完全である反面、アソビ——余裕がないという意味にもなり

ます。卦名の「既済」も、既に済んでしまっている、すでに完了（完成）してしまっている、というところからつけられた名前、カチツとしている反面、面白味に欠ける様子でもあります。

図 8.3 の「63：水火既済」卦以外の 63 種類ある大成卦は、いずれかの爻が定位から外れています。各爻において、定位にある爻を「位にあたる」といい、定位にない爻を「位にあたらない」といいます。位にあたらない、すなわちその爻が定位にないケースには次のふたとおりがあります。

- 本来陰があるべきところ（陰爻が定位のところに）に陽の爻がある

状況的にはおとなしくしていなければならないのに騒ぎすぎる、あるいはまた、受容的になっていなければならないところで前へ出ようとしすぎる、といったような解釈ができます。いずれにしても勢いが強すぎる、エネルギー過剰、といった感じ。

- 本来陽があるべきところ（陽爻が定位のところに）に陰の爻がある

上記のケースとはちょうど逆になります。うってでなければならないところでしり込みしてしまう、あたえられたポジションにたいして力が及ばない、など、エネルギー不足の感じ。

図 8.3 の「63：水火既済」卦の各爻の陰陽を反転させると、図 8.4 「36：火水未済」という卦になります。



図 8.4 すべての爻が位にあたらない＝「未済」卦

爻のすべてが位にあたって「いる」卦の、各爻の陰陽を反転させたわけですから、「36：火水未済」卦における爻はすべて、位にあたって「いない」ことになります。

「未済」という卦名は、『未』だ『済』まずで、すべて位にあたっていない混沌とした状況を示す卦であり、その先何がおこるかわからない、いいかえるとなにが起きてもおかしくない状態です。すべては「まだこれから」ですから、「未だ済まず」というわけです。

8.2.3 爻位

「8.2.1 大成卦のオーバービュー」では、大成卦全体をひとつの時間の流れとして観たわけですが、初爻の側を地＝下方、上爻にむかっての側を天＝上方として全体をとらえた場合、各爻はまた違った意味を帯びてきます。

天人地

上爻と五爻を「天」の位、初爻と二爻を「地」の位、その間にはさまれた三爻と四爻を「人」の位とする観方を、天・人・地の「三才観」といいます。

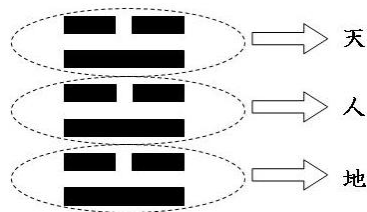


図 8.5 天・人・地、三才観。例は「63：水火既済」

著者の知る限り、この観方を直接占断に応用することはあまりないように思いますが、天人地はいわばこの宇宙（マクロコスモス）を構成する三つの要素であり、三才観は、それらすべてがひとつの大成卦の中にあるという観方であることになります。

大成卦それ自体は占断の回答として森羅万象をあらわすわけですから、三才観の考えをひろげてとらえるなら、日常生活で起きるあらゆることの中に、この宇宙のすべてが圧縮されて（相似に、フラクタルに）組み込まれていると考えることもできます。実際、「第5章 顕現」でのお話は大成卦の成り立ちをこの宇宙の創成になぞらえて説明したものでした。

人がつくる組織

ひとつの大成卦全体を、ひとつの組織ととらえることもできます。組織、といっても、家庭、学校、会社、地域の共同体、国などいろいろですが、上爻＝上・上方、初爻＝下・下方と考えれば、各爻がどのようなポジションをあらわしているのか、だいたい想像がつくと思います。会社組織と古代社会（たぶん中国）における例を表 8.2 に示します。

表 8.2 会社組織と古代社会における爻位のとらえかたの例（[26] より）

爻の位	会社	古代社会
上	会長	賢人
五	社長	天子
四	部長	公卿
三	課長	士大夫
二	係長	士
初	社員	庶民

身体

ひとつの大成卦はひとつの組織であり、ひとつの宇宙であり、また、ひとつの身体としてみることができます。人体が小宇宙（ミクロコスモス）であることは、古来より言われてきたことですが [24]、大成卦においても、卦全体を人一人の身体としてとらえることができます。

表 8.3 大成卦を一人の身体としてとらえる例（[26] より）

爻の位	身体部位
上	首（頭）
五	胸
四	腹
三	股・腰
二	スネ
初	足首

また、この観方のひとつの応用として、「12：天沢履」は陰部である三爻のみが陰爻であるため「女子裸身の像」と観るというとらえかたがあります。同様に、「87：地山謙」は陰部である三爻のみが陽爻であるため「男子裸身の像」と観ることもあります。

もちろん伝統的な易の観かたにはありませんが、身体との絡みで考えるなら、それぞれの爻位をチャクラとしてとらえることもできると思います。ただ一般的にチャクラの数は7とされているので、大成卦を構成する六爻ではひとつ足りないことになり、この部分でとらえかたにちがいがでてくるでしょう。本書では一例を「7：7：：7：7の放射子の立方体と「63：既済卦」（423 ページ）」で考察しています。

8.2.4 上下卦

8.2.1「大成卦のオーバービュー」では、大成卦の真ん中に「ギャップ」があるという説明をしました。このギャップはどうしてできたのでしょうか。

大成卦（6本の爻で構成される）は、ふたつの八卦（3本の爻で構成される）からできています。たとえば、図8.6の「63：水火既済」卦は、「坎」と「離」というふたつの八卦からできていますが、「ギャップ」というのは上にある「坎」と「離」の間、という意味なのです。

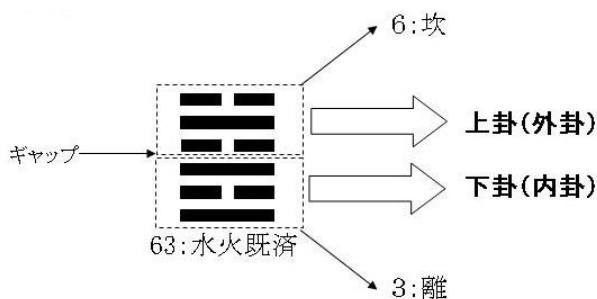


図 8.6 上卦・下卦

上にある八卦を上卦（図8.6でいうと「坎」）、下にある八卦を下卦（図8.6でいうと「離」）、といいます。

上卦は上にあるから、「上」卦であり、下卦は下にあるから「下」卦であるというのはみたまですが、図8.6の（ ）内にもあるように、上卦のことを外卦、下卦のことを内卦ということもあります。

内卦といういいかたは、手前の八卦（下卦）を自分側、内側、インナー、ホームなど、ようするに自分に近い部分、場所などとみたとした場合のいい方です。この場合同様に、手前から離れた方の八卦（上卦）を、外側、アウター、アウエイなど、自分から離れた部分

とみます。空間的、場所的に自分の近くと遠くをあらわすこともありますし、心情的な距離の遠近にみたてられることもあります。

また、時間的な遠近をあらわすこともあります。時間は原則として、「8.2.1 大成卦のオーバービュー」で説明したとおり、初（1）爻→上（6）爻へ流れていきますので、下卦（内卦）が時間的に先行し、その次に上卦（下卦）で示される事象が発生するという運びになります。ですから、たとえばひとつの大成卦を一日としてみた場合は、下卦が午前中、上卦が午後ということになります。

ところで、純卦は上下卦が同じ八卦で構成される大成卦で、8種類あります。

占って純卦を得た場合、同じようなことが2度起こると判断することがありますが、それはこの内卦（時間的に先行）と外卦（時間的に内卦の次に起こる）が同じ卦だからです。典型的な例を図 8.7 に示します。

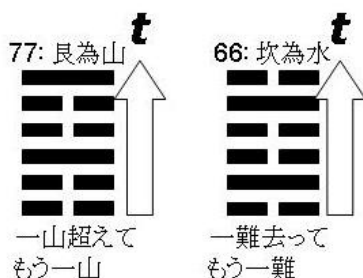


図 8.7 上卦＝下卦；純卦

8.2.5 引き合い、反発しあう陰陽

このセクションで説明する応爻、比爻、および、乗る、承^うけるなどは、大成卦中のある単独の爻と、特定のルールに従って選ばれたそれ以外の爻との関係について観る場合のいかたです。通常、この関係性をメインにすえて占断を行うことはなく、最終的な判断に付随する情報として、補助的に観ることがほとんどです。また、すべての場合において必ず考慮しなければならない観方でもなく、他の多くの判断要素と同じく、この観方を判断に含めるかどうかは占者の裁量にまかされています。

一般に得卦は、さまざまな角度から多重にとらえることができますが、そのさまざまなとらえかた・観方には相矛盾する要素もあり、すべてを判断に盛り込むことはできませんし、そうする必要もありません。占者はそれらの材料を取捨選択して、独自の判断を構築していきます。

応爻、比爻

ある爻が下卦にある場合、その爻に相当する位置の上卦の爻と、陰陽の関係（どちらかが陰でどちらかが陽）にある場合、その、ある爻からみた上卦の爻は「正応」、「応じている」といいます。このとき、ある爻からみた上卦の爻を応爻といいます。

同様に、ある爻が上卦にある場合、その爻に相当する位置の下卦の爻と、陰陽の関係にある場合、その、ある爻と下卦の爻は、やはり「正応」、「応じている」といいます。このとき、ある爻からみた下卦の爻も応爻といいます。

いずれの場合も、互いに陰陽の関係（異符号どうし）にあることが必要条件で、双方とも陰、あるいは双方とも陽（同符号どうし）である場合には、「応ずる」関係は成り立ちません。応ずる関係が成り立たないことを「不応」、「応じていない」といいます。

応ずる爻がある場合は、なんらかのかたちで「引き合う」、または「助けになる」、人やモノや事象があるということです。逆に、応ずる爻がない、不応の場合はそこに引き合うものも助けになるものもないということです。

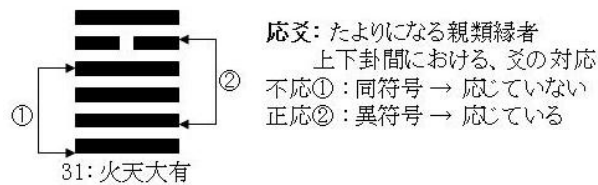


図 8.8 応・不応例

注: _____

ちょっと考えればわかるように、応ずる爻がまったくない爻などはザラにあるわけで、そのことをいたずらに過大評価する必要はありません（とはいえ、応ずる爻がないことにどの程度のウエイトを置くかは、占的、および、占者の判断によるわけですが）。

比爻は、応爻でみた陰陽の関係を上または下にある近隣の爻との間で観た場合のいいかたです。判断も応爻と同様で、上または下にその爻と陰陽の関係（異符号）にある爻があれば、これを「比している」といい、なんらかの「引き合う」または「助けになる」、人・モノ・事象があるということです。「比」はまた「したしむ」の意味もあります。

ある爻を近隣の爻とあわせて観たとき、双方とも陰、または双方とも陽である場合（同符号）、引き合う、または助けになる、人・モノ・事象が「ない」と観ます。

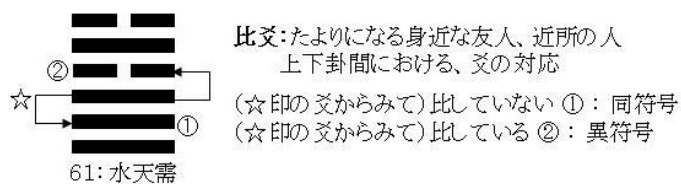


図 8.9 比爻の例

乗る、承ける

「乗る」「承ける」といういいかたは陰爻中心の観方で、メインになる判断の補助として用いるという点では前述の応、不応、比などと同様です。

陰は一般に、もの柔らかな受容力であり、自分の側から自発的積極的に動き出すという側面には乏しい状態であるといえます。しかしながら、しなやかで相手を包み込む包容力を持っており、太く短く直線的である陽に比べて柔軟性に富み、耐久力があります。

大成卦上で、ある陰爻に着目した場合、その陰爻が、陽爻の上にある状態を乗っている状態を、「乗る」といいます。陽が陰の背後に隠れてしまっている状態であると観ますので、陰爻は自分で前面に出て、どちらかという不得意な「前進」というプロジェクトをすすめなければなりません。

時間と同様、物事は大成卦上を下から上へと推移していきます（図8.2）。そのようなわけで、上にある爻を前（時間・物事の進行方向）、下にある爻をその後と観ます。

ある陰爻の上に陽爻がある状態を、陰爻からみてこの陽爻を「承ける」といいます。このパターンでは強力な「陽」というエネルギーが前になって、後にある陰爻がひっぱられて進む状態ですので、陰爻にしてみれば勞せずして物事を先に進ませることができる状態です。

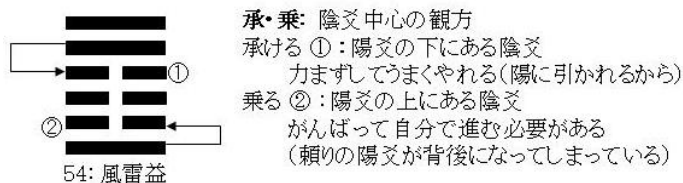


図 8.10 乗る・承ける

8.3 得卦の判断

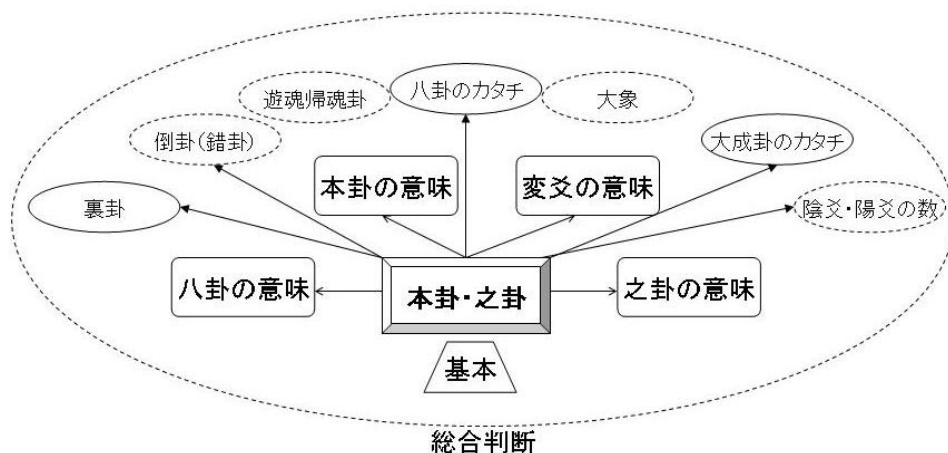


図 8.11 得卦判断の概要図

図 8.11 に示したのは、得られた卦を判断するための材料を俯瞰したものです（「8.2 大成卦の一般構造」で説明した事項は省いてあります）。

図 8.11 中央に「基本」という台があり、その上に本卦・之卦がのっていますが、なんといってもまずは「本卦」のカタチと意味から判断するのがすべてのはじまりです。図 8.11 に示されている本卦以外のカタチや卦は、之卦を含めて、すべて本卦から派生したものです。ここに示した本卦以外のカタチや卦は、いわば、本卦の観方のバリエーションということができるわけです。

「観方のバリエーション」なわけですから、占うときはかならずしもすべてを考慮し判断に入れなければならない、というわけではありません。もちろん、そんなことはできない——わけではないにしろ、占うたびに毎回ここに示したすべてを考慮していたのでは、時間はいくらあっても足りず、すべてに同じウエイトをおこうとすると、收拾がつかなくなってしまいます。

つまり、ここに示したのは本卦を多重に観る方法のいろいろであり、そのうちのどれを取捨選択するかは占者にまかされているのです。ただ、取捨選択するには、どんな観方のバリエーションがあるのかということを取りあえず知っておく必要があります。知っておけば、それぞれの観方はそのときの占的にたいして必要であるかどうかの判断ができるわけです。

図 8.11 に示した以外にも判断のヒントとなる材料は多々あると思いますが、ここでは

基本的でかつ、実際の占断で比較的良好に使われそうなものを選んで示してあります。

以上をまとめると占断のステップとしてはおおまかに以下ようになります。

1. 占的を定める。
2. 占的から常識的・論理的に判断できることは事前に洗い出し、おさえておく。
この時点で結論（回答）が得られるようであれば立卦の必要はない（易システムについての理解を深めるため——など、自分の学びのために立卦する場合は別です）。
3. 立卦する。
4. 「8.2 大成卦の一般構造（163 ページ）」から得卦の検討。
5. 図 8.11 から得卦の検討。
6. 最終的な回答を出す。
7. 記録。
後日の結果確認と考察のため。

8.3.1 本卦・之卦、変爻、八卦の意味

これについてはここでとくに説明することはありません。それぞれ、以下のリファレンスを参照し、自由に連想をひろげて判断します。

- 本卦・之卦の意味
「第10章 六十四卦リスト（215 ページ～）」の「Keyword / Tips」、「Image」、「Overview」などの項目
- 変爻の意味
「第10章 六十四卦リスト（215 ページ～）」の「Detail」の項目
- 八卦の意味
「第9章 八卦リスト（195 ページ～）」

- ツイストペアの意味

伝統的な観方ではないので、図 8.11 にはありませんが、易システムでは本卦と裏卦（後述。184 ページ）のペアに一定の意味を与えています。よろしければ参考にしてください。

ツイストペアのリストは「第 11 章 ツイストペアリスト（347 ページ～）」からになります。

8.3.2 大成卦、八卦のカタチ

カタチ——は「象」と書きますが、見た目の形のことだと思っていただいてさしつかえありません。見た目の形といっても、易のシンボルは切れた線（陰爻）と、つながった線（陽爻）が積み重なってできたものであり、形としてはこれ以上はないといっていいほどシンプルなもの。ですから、ある意味「なんにでも見える」わけですが、どういうふうに、なにに観てるかということにきまりはありません。

典型的な例ですとたとえば図 8.12 に示すようなカタチの観方があります。このようにみると、易システムのシンボルは確かにシンプルではありますが、非常に豊かな連想ができることがおわかりになると思います。

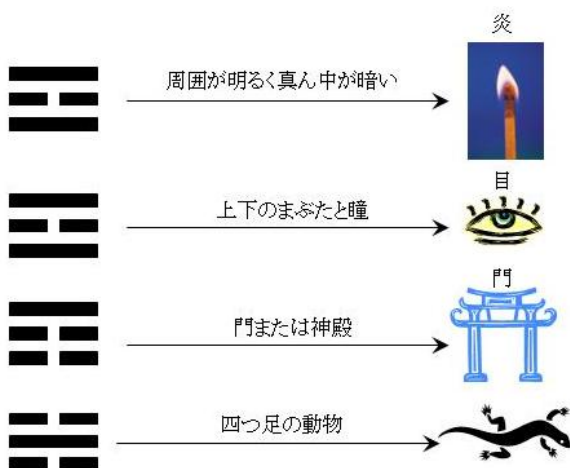


図 8.12 八卦の象の例

図 8.12 は八卦のカタチの観方の例でしたが、このようにカタチを見る方法は、そのまま大成卦を観るときにも応用することができます。大成卦の場合は、八卦に比べるともう少し複雑な観方になります。

たとえば図 8.13 は「25：沢風大過」ですが、この卦は上下に陰爻があり、陰爻にはさ

まれる格好で4つの陽爻があります。



図 8.13 棟木たわむ象

陽は発動するエネルギーであり勢いの強い状態・モノ・人・事です。それが4つ束になって中心部を独占し、いささか心もとない陰爻が上下でそれをサンドイッチ状にはさみこみ、どうにか束ねている状態ともみてとれます。

そんなところから、大きく過ぎる（大過）、重荷といった意味が出てきたものと思われます。具体的な例にあてはめて想像してみると、決壊寸前のダム（あふれそうな水が4陽爻、ダムが上下陰爻）とか、おしよせるファンを制止しようとする警備員（ファンが4陽爻、警備員が上下陰爻）とか、あるいはこの大成卦全体を客商売をしている一軒の店と見るなら、満員御礼といったところでしょう（この場合、4陽爻は客、上下2爻が店員またはそのお店の設備など）。

遊魂・帰魂

帰魂卦と呼ばれる大成卦は全部で8つあり、また、遊魂卦とよばれる大成卦も全部で8つあります。

帰魂卦は図 8.14 の上の段に描いた8つの卦で、これらの卦はいずれも、五爻の陰陽を反転すると純卦になります。純卦は、上卦、下卦共に同じ八卦で構成されている大成卦のことで、これは図 8.14 の下の段に描いた8つの卦です。

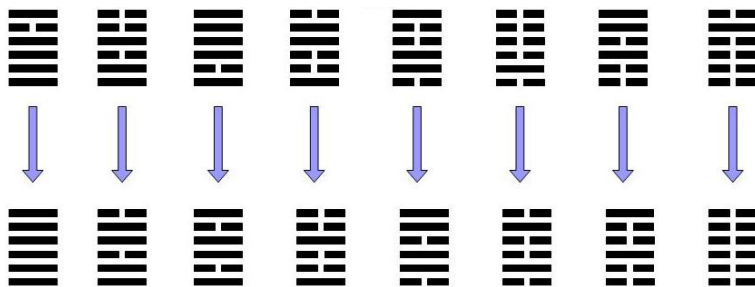


図 8.14 帰魂卦（上段）

「帰魂」の名称のとおり、魂が帰る、すなわちもとの鞘にもどることを意味し、安定・堅実・もどるといった意味合いがあります。家出人などを占ってこの卦を得た場合は、家にもどるか、一定の場所に落ち着いていることを意味します。ただし、病気を占った場合は、魂が「天に」帰る、の意味となり、昇天する、といった観方をしますのであまりいい回答にはならないでしょう。しかし、これも必ずそのようにとらえなければならない、ということではありません。一般的にそのような傾向があるということです。一方、遊魂卦は図 8.15 の上の段に描いた 8 つの卦で、これらの卦はいずれも、五爻はそのまま、上爻と四爻の陰陽を反転すると純卦になります。

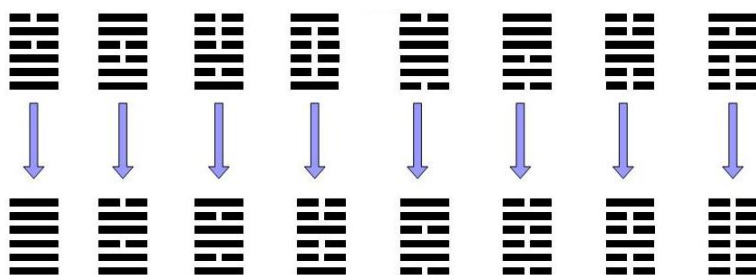


図 8.15 遊魂卦（上段）

「遊魂」の名称のとおり、魂がそこらへん（？）をふらふらとさまよっている（遊んでいる）状態ですから、不安定・迷い・遊走などといった意味になります。家出人は落ち着く先が定まらずさまよい、病気では意識不明といった観方になるでしょう。これもこれらの卦が出たときは必ずそう観なければならない、ということではなくて、そのような傾向があるという参考情報です。

■遊魂卦・帰魂はどこからきたか 遊魂卦・帰魂卦は、周易の考え方からきた卦ではありません。遊魂卦、帰魂卦という大成卦のカテゴリーは、五行易（断易）からきたものです。

五行易（断易）はまたの名称を漢易ともいい、その名のとおり漢代にまとめられたもので、周易と同じ大成卦のシンボルを使いますが、実体は、本書がベースとしている周易とはまったく異なるものです。

本書は五行易の指南書ではないので、概観するにとどめますが、五行易ではまず六十四卦 384 爻をすべて干支におきかえます。60 干支には木火土金水の五行がありますから、最終的には 384 の各爻は木火土金水のいずれかの五行におとこまれます。

五行易は主に、得卦の爻の五行とその日の日付の干支（月建、日辰）における五行、および大成卦における爻どうしの五行相剋を観て、占的の吉凶を判断するものです。

著者の私家版易经——「易システム」はそのバックグラウンドとして、先天図とフィボナッチ数列を基にした「ツイストペア・ホイール（「易システムのバックボーン」）（383 ペー

ジを参照してください)」を想定していますが、五行易にも独自の組織——大成卦の全体構成があります。遊魂卦、帰魂卦はこの五行易における全体構成においてあらわれるものです。

五行易の組織は、8つの純卦をベースとして成り立っています。易システムにおけるファミリー（97ページ）とはまた異なりますが、五行易においても六十四卦は、「宮」とよばれるグループで8つにグループ分けされています。それぞれ純卦に対応した「乾宮（11：乾为天がベース）」「兌宮（22：兌为沢がベース）」「離宮（33：離为火がベース）」「震宮（44：震为雷がベース）」「巽宮（55：巽为風がベース）」「坎宮（66：坎为水がベース）」「艮宮（77：艮为山がベース）」「坤宮（88：坤为地がベース）」というグループがあります。

各グループにおいて、ベースになる純卦の初爻を陰陽反転してえられた卦を第一世とし、初爻につづき二爻目を陰陽反転してえられた大成卦を第二世とし、以下同様に、三世（三爻を陰陽反転）、四世（四爻を陰陽反転）、五世（五爻を陰陽反転）まで続きます。六世はありません。「六世」とやってしまうと、もとになる純卦のすべての爻を反転することになってしまい、それはすなわち他の純卦になってしまうからです。

ここまでの説明では、ひとつの宮に対して6つの（一～五世＋純卦そのもの）大成卦があることになります。宮は八卦に対応していますので8つあり、 6×8 で全部で48卦が宮に配当されたことになります。

一方、大成卦は全部で64種類ありますから、 $64 - 48 = 16$ 、この時点では、まだ16種類の卦が宮に配当されていません。

実は、この16種類の卦が図8.14および8.15で示した、帰魂卦（8種類）、遊魂卦（8種類）なのです。

たとえば乾宮でいうと、11：乾为天の五爻を反転した、31：火天大有が乾宮の帰魂卦になり（図8.14左端）、11：乾为天の上爻と四爻を反転して得られる61：水天需が、同じ乾宮の遊魂卦になります（図8.15左端）。同様に、各宮に帰魂卦と遊魂卦をひとつずつ配当することにより、六十四卦すべてが8つの宮にグループ分けされます。

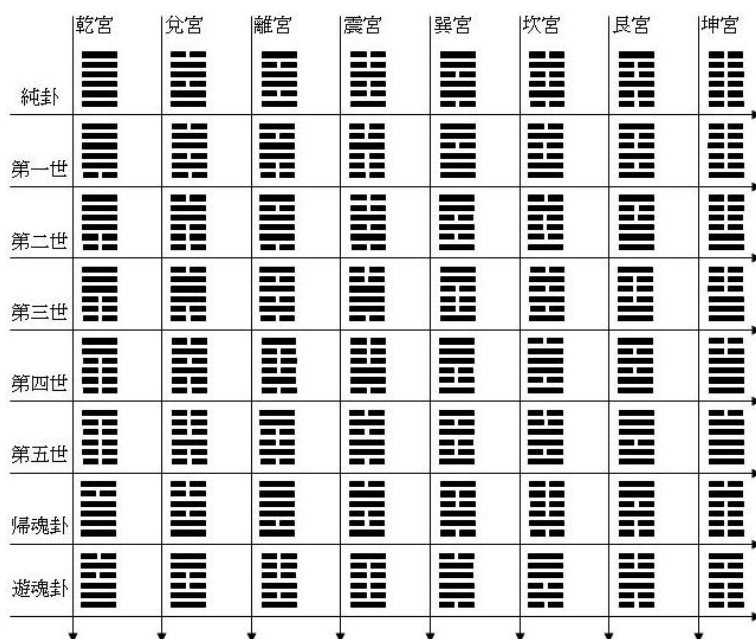


図 8.16 五行易（漢易）の組織（参考）

大卦

大卦というのは、大成卦全体をひとつのおおきな八卦として観る方法です。^{*2}

大成卦のうち、初爻と二爻、三爻と四爻、五爻と上爻、この3つのペアの陰陽がそれぞれでそろっていることが、大卦として観ることができる条件となります。

それらのペアをひとつの爻として観ると、大成卦全体でひとつの八卦があらわされることになります。図 8.17 を参照してください。

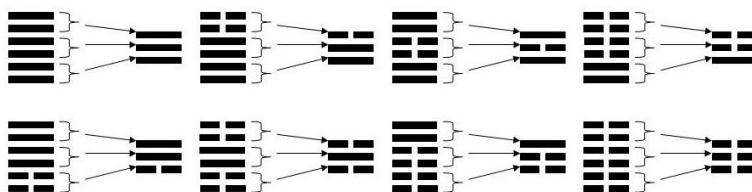


図 8.17 大卦

このような大成卦が得られた場合は、その全体が示す八卦の意味を重く見て判断するこ

^{*2} [25] では「8つのゴールデン・コドン」と呼ばれています。

ともできます。ただこれも、必ずそう観なければならないというわけではなく、判断の参考にするということです。

陰爻・陽爻の数

「デシジョン・メーカーとしての易システム（401 ページ）」を参照してください。

裏卦・倒卦（錯卦）

「8.4.2 裏卦（184 ページ）」を参照してください。

8.3.3 解釈のつかない卦

すぐには解釈のつかない卦（または解釈しにくい卦）はどうしても現れます。

このような場合は、以下のどのタイプの卦か考えることが解釈の糸口になるかもしれません。^{*3}

1. 未来を予言する卦

今の状態を続けていくなら、将来起こりやすそうなことを明らかにする卦。

2. 質問（占的）に対する正確な答えや、解決策を提供してくれる卦。

3. 新しい観点から質問（占的）をいいなおす卦。

質問にはこたえてくれないが、代わりに答えに関する新しい情報をあたえてくれる卦。

4. 質問に取り組んでくれない卦。

その代わり、本格的に質問に取り組む前に、解決しておかなければいけない別の質問に注意をうながす。

1. や 2. は、誰もが期待する回答で、わかりやすい理想的な答えといえるでしょう。

解釈がつかない場合は、3. や 4. のように、回答が「スイング」している（ブレている）可能性を探ってみた方がいいかもしれません。

^{*3} このセクションの内容は [23] を参考にしています。

8.3.4 得卦の妥当性を判断する

重要なのは解釈した結果が「腑に落ちる」――

「ぽとん」

と、ハラに落ちて納得できるものであるかどうかです。

しかし、その感覚はいつも得られるとは限りません。

そのようなときには、以下の点についてチェックしてみることが役に立つかもしれません。^{*4}

- その解釈には、「真実の響き」がきこえるか。
- その解釈は、受け入れることができるだけでなく、実行すべきことがわかっている最善のことに矛盾していないか。
- その解釈は、ものごとを新しい角度から観せてくれるか。
- その解釈を受け入れることで、人生に希望がわいてくるか。
- その解釈を利用したら、問題に関わる全員に利益がもたらされるか。
- その解釈にしたがうことで、心が落ち着くか。
- その解釈は、理にかなっているか。
- 信頼できる友人は、その解釈に同意してくれるか。

すべての条件を完璧にみたす解釈というものは少ないと思います。しかし、そうでなくとも、上記のうち何点かを満たす解釈であれば、充分信頼に足る解釈であるといえるでしょう。

^{*4} このセクションの内容は [23] を参考にしています。

8.4 派生卦

8.4.1 之卦

一般に、ある大成卦に特定の操作を加えることでできる——もとの大成卦から「派生する」大成卦を、もとの卦の派生卦といいます。

そういう意味では、「7.2 魂のテンプレート（109 ページ）」で示した、「I」「N」「G」なども、本卦である「OD」の派生卦であるということが出来ますが、本卦の派生卦で一番ポピュラーなのは、之卦^{*5}であるということに異論をはさむ人はたぶん少ないでしょう。

本卦のひとつの爻の陰陽を反転することによって得られる之卦は、もっとも基本的な派生卦であるということが出来ます。

之卦の観方、意義については「第2章 クイックスタート（9 ページ）」などでふれましたのでここでは繰り返しません。が、本書でご紹介している易システム——私家版易経——では、変爻がひとつだけ得られる立卦法のみ説明しています。これは伝統的な立卦法では「略筮法」といわれるもので、この方法では本卦から派生する可能性のある大成卦は6パターンになります。

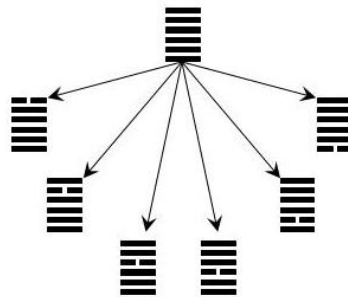


図 8.18 「11：乾為天」からの派生卦（之卦）の例

伝統的な方法ではさらに「中筮法」「本筮法」などの方法もありますが、これらの方法を使うと変爻が複数得られます。変爻が複数得られるということは、自分自身を除いた残り全部のパターン、63種類の大成卦が之卦として派生する可能性があるということです。

より正しくいうと、之卦として得られるパターンには「本卦＝自分自身」も含まれます。つまり、之卦＝自分自身（本卦）のパターンが得られることもあるということで、これはすなわち、「変爻がない」というパターンです。

^{*5} 伏卦とも。[29]

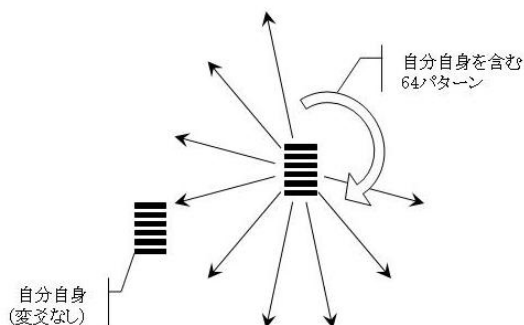


図 8.19 変爻＝複数の場合の「11：乾為天」からの派生卦

単独の変爻が得られる方法よりも、複数の変爻が得られる方法の方が、本卦→之卦への変化の様子としてはよりダイナミックであるということができますが、以下のような点で、そのフォーカスが不明瞭になる傾向にあり*6、複数の変爻が得られる立卦法については、本書ではふれません。

- 複数ある変爻のうち、どの変爻にウエイトを置くのか、その決定が困難。
- 変爻がなかった場合は、之卦も本卦中の爻（全体状況の中の段階）も特定できず、的をしぼった判断がしにくくなる。

サイコロであれ、筮竹であれ、カードであれ、何をつかってどのように立卦しようと、あるいはまた、梅花心易風になにも道具を使わずに立卦しようと、その方法は問いませんが、変爻がひとつ、之卦も必ず得られる方法で立卦することを本書——易システムでは推奨します。

*6 もちろんこれは、「周易」または「周易」をベースにしたシステムにのみあてはまることです。たとえば、ある程度数の変爻（動爻）があったほうがより適切な判断ができる断易（五行易）などでは、その立卦法として中筮法が推奨されます。

8.4.2 裏卦

ある大成卦について、その大成卦を構成するすべての爻の陰陽を反転してできる大成卦を、もとの大成卦の「裏卦」*7 といいます。

注：「陰陽を反転する」とは、ある爻が陰であった場合は陽に、逆に陽であった場合は陰に変えるということです。爻それぞれに対してこの操作を行います。8.4.3 に述べる「倒卦（全体をひっくりかえす）」とはちがいますので注意してください。

たとえば、「85：地風升」の裏卦は、「14：天雷无妄」になります。

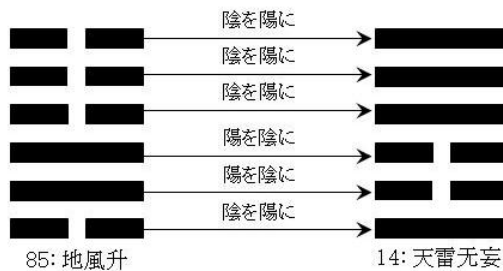


図 8.20 「85：地風升」の裏卦

裏卦として派生した大成卦から、もとの大成卦をみた場合も「裏卦」であるわけで、図 8.20 の例でいうと、「14：天雷无妄」の裏卦が「85：地風升」であるということもできます。

裏卦の占術上の意味は、その名のとおり、主体となる大成卦の背景、裏の事情、隠れた目的・意図などを示唆するといえます。

お互いが裏卦となる大成卦のペアをツイストペアといいます、ということは「6.1 ツイストペア（54 ページ）」で述べたとおりですが、このペアそのものに特別な意味をもたせるのは、易システム＝私家版易経の話であり、伝統的な易の考え方ではないことをおことわりしておきます。ツイストペアのコード番号は合計すると必ず「99」となります。

*7 錯卦とも。[29]

8.4.3 倒卦

倒卦とは、*8 ある大成卦の爻の並びをそのままに、180度回転（天地逆さまに）して得られる大成卦です。言葉で説明するとわかりづらいかもしれませんので、図 8.21 を参照してください。

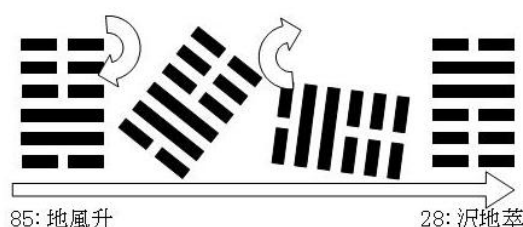


図 8.21 「85：地風升」の倒卦

タロットカードなどのカード占いをされる方は、倒卦はもとの大成卦の「リバーズ（逆位置）」であるといえわかりやすいかもしれません。倒卦はもとの大成卦を反対側からみたかたちであり、その操作のとおり、実占上は、外部、相手側などからからみた意味、様子などを示唆する派生卦です。

カード占いのようにもとの大成卦の意味と反対の意味になることはありません。なぜなら、ある大成卦を倒立してできた大成卦は別的大成卦であり、その別的大成卦は独自の意味を持っているからです。もちろん、もとの大成卦と反対の意味を持っている大成卦が派生することもあります。かならず反対の意味ということではないのです。また、もとの大成卦の構成によっては、裏卦＝倒卦となることもあります。図 8.22 にその典型的な例を示します。

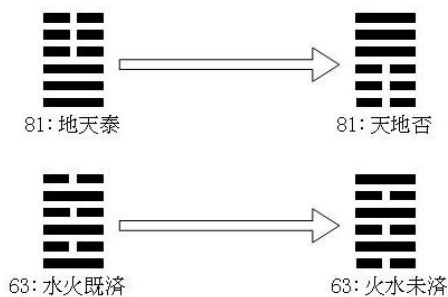


図 8.22 裏卦＝倒卦となる例

*8 綜卦とも。[29]

また、上下卦の爻の並びが中心から対称である卦は、当然のことながら、倒卦は生じません（ひっくりかえしても同じ）。

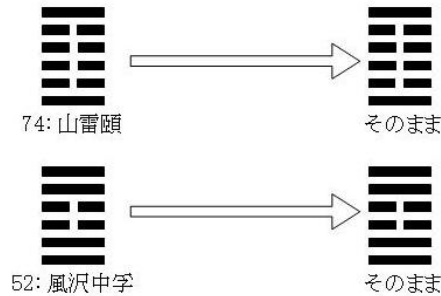


図 8.23 倒卦が生じない例

8.4.4 互卦と約象

ある大成卦の二、三、四爻でできる八卦を互卦、三、四、五爻でできる八卦を約象といいます。このふたつをあわせて単に互卦ということもあります。

「85：地風升」の例を図 8.24 に示します。

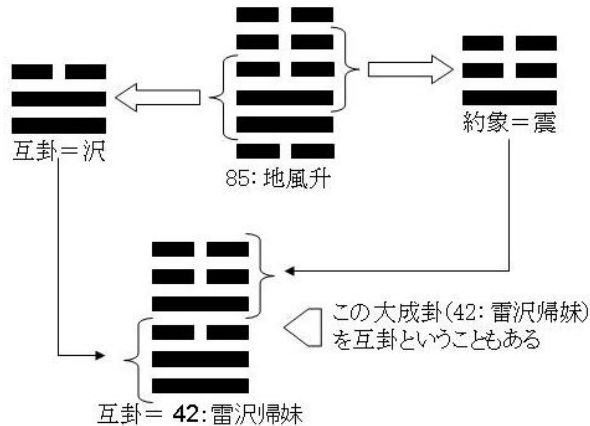


図 8.24 互卦・約象の例

互卦、約象はともに上下卦の一部を使用してできる八卦です。このことから実際の占術上では、自分と相手の接点、または問題解決の糸口とみたりします。互卦、約象の八卦の意味から判断します。互卦と約象からできる大成卦全体を互卦ということもありますが、この場合はその大成卦の意味から判断します。

梅花心易などでは、この互卦を事態の成り行きとみます。つまり、現状をあらわす大成卦——図 8.24 の例では「85：地風升」——の中に将来そうなるであろう兆候「42：雷沢帰妹」——きざし——が、あらかじめ組み込まれていると考えるわけです。周易的な実占ではあまりそのようなみかたはしませんが、易卦の構造を考える上では非常に興味深い考え方です。

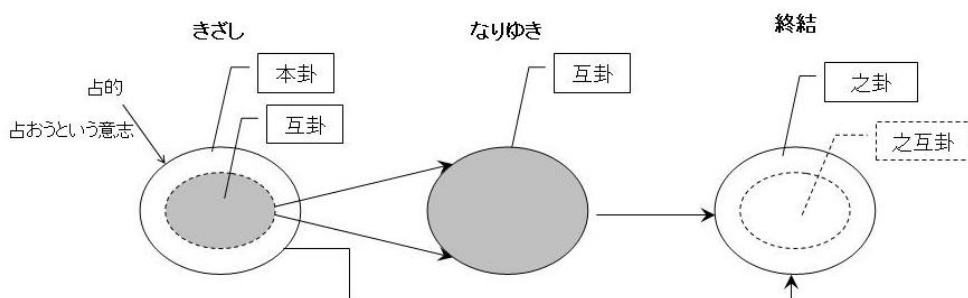


図 8.25 梅花心易における互卦のイメージ (参考)

8.5 十二消長卦一般

ある大成卦に特定の操作を加えることでできる卦を派生卦と呼ぶのなら、十二消長卦も派生卦の一種といえます。十二消長卦については、「十二消長卦（63 ページ）」でも簡単に言及しましたが、本節ではいくつかの例をあげて、もう少し詳しく述べてみたいと思います。

十二消長卦はまず、なにをおいても、「時」をあらわすものです。たとえば、図 8.26 は、「周易参同契 [50]」における十二消長卦の図です。

この図の月は旧暦の月です。



図 8.26 「周易参同契 [50]」における十二消長卦

十二消長卦は単に時、月、季節をあらわすだけでなく、その中に「変化」と「サイクル」と「対称性」という非常に重要な原理を含んでいます。じっさい、あらゆる成長のプロセスにあてはめることができ、占術に用いるときも、時や季節としてだけでなく占的にからむ事象の変化の段階を示すものとして、もっと汎用的にとらえることができますし、また、十二消長卦が含む原理の性質からして、そのようにより広くとらえることが妥当でしょう。

いくつかの例を示すと、まず、図 8.27 と図 8.28 は一般的な「周期」に十二消長卦をあてはめたものです。

図 8.27 は、周期の極大点（もっとも勢いが強い点）に純陽（老陽）である乾為天、周期の極小点（もっとも勢いが弱い点）に純陰（老陰）である坤為地をあてはめ、他の卦はこの二つを基準にあてはめていったものです。

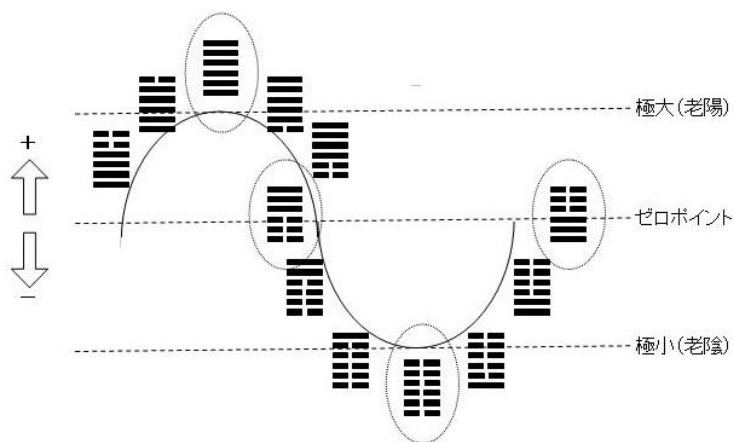


図 8.27 極大点極小点を基準にして十二消長卦をあてはめた事象推移一般

図 8.28 は、周期の極大、極小点に、卦全体としてもっともバランスがいい三陰三陽爻をあてはめています。十二消長卦における三陰三陽爻は 18:天地否と 81:地天泰であり、それぞれ極性が逆になります。

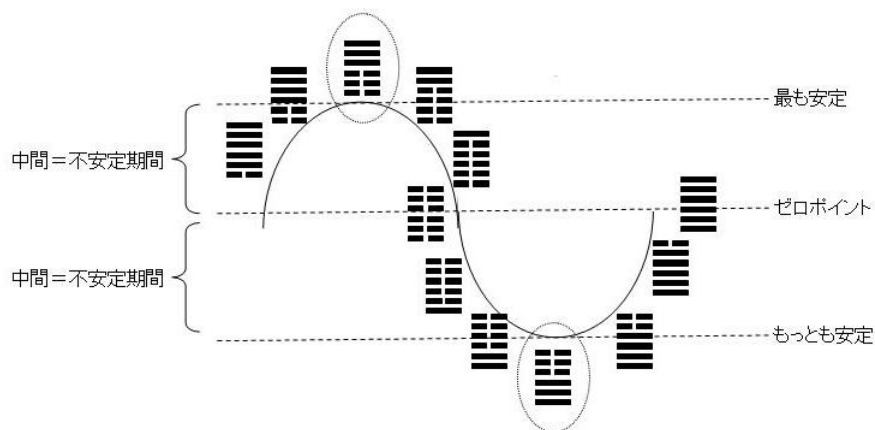


図 8.28 陰爻陽爻の数を基準にして十二消長卦をあてはめた事象推移一般

図 8.29 は、図 8.27 の具体的な応用例であり、バイオリズムに十二消長卦をあてはめてみました。

バイオリズムには、身体、感情、知性の 3 種類があり、それぞれ周期が 23 日、28 日、33 日ですから、十二消長卦にあてはめるときは、それぞれの周期を 12 等分することになります。

バイオリズムの考え方がおもしろいのは、好調期にしても不調期にしても、その極期が「ストレス」、そして、好調期から不調期、あるいはその逆の極性への移行点が、ミスやボカを起ししやすい要注意日とみなされていることです。

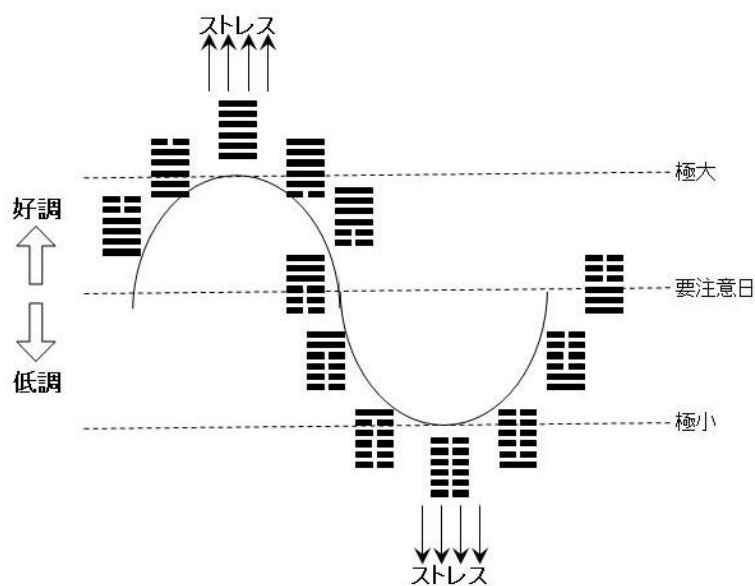


図 8.29 バイオリズムにあてはめた十二消長卦

図 8.30 の例は、洗練された万年暦であるとともに、成長スパイラルのモデルであるとも考えられる「ウェイブスベル」のダイアグラム [38] に十二消長卦をあてはめたものですが、ラセン描きながら上昇するステップと実によくフィットします。

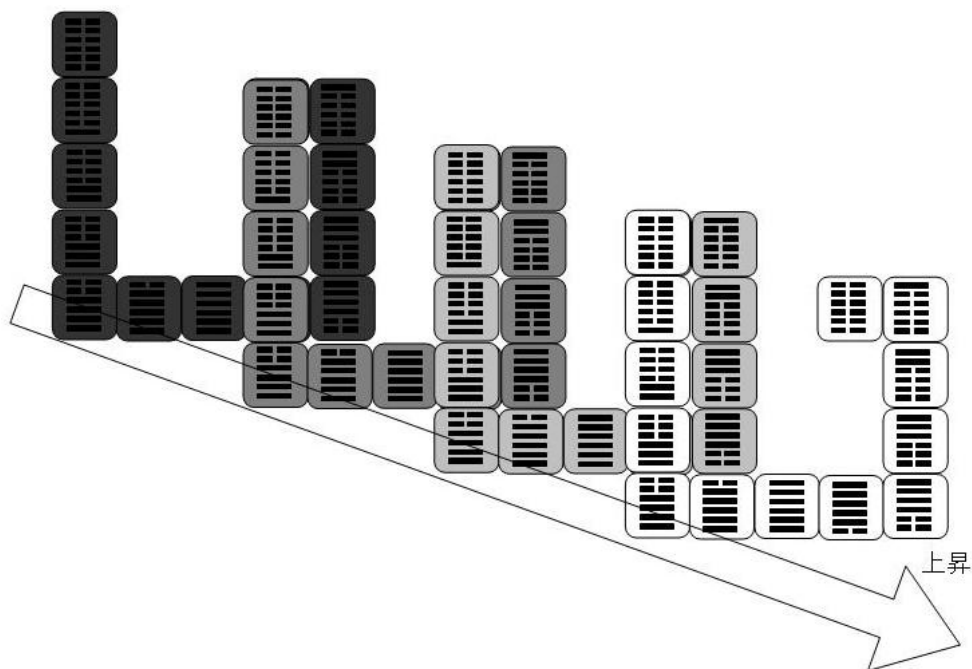


図 8.30 ウェーブスベルと十二消長卦

ウェイブスペルが示す 13 の段階にはそれぞれ意味があり、さらにまた、13 段階を 4 ブロックに分けた各ブロックにもそれぞれ意味があります。

これらの意味^{*9} を十二消長卦を構成する各大成卦とあわせて考えることもできるでしょう。図 8.30 の配当にもとづく対応を表 8.4 と表 8.5 に示します。

表 8.4 ウェーブスペルにおける 4 ブロックとその意味

銀河の音	十二消長卦	ブロックの意味
1～4	88:坤為地～81:地天泰	行為の基礎を確立する
5～8	41:雷天大壮～15:天風コウ＜女へんに后＞	行為のリズムを拡張する
9～12	17:天山遯～78:山地剥	行為を変換する
13	88:坤為地	輸送する

表 8.5 十二消長卦とウェイブスペルにおける 12 の音の意味

銀河の音	十二消長卦	銀河の音に対応したキーワード
1	88:坤為地	目的
2	84:地雷復	挑戦
3	85:地沢臨	奉仕
4	81:地天泰	形
5	41:雷天大壮	輝き
6	21:沢天夬	同等
7	11:乾为天	調律
8	15:天風コウ＜女へんに后＞	無欠性
9	17:天山遯	意図
10	18:天地否	現われ
11	58:風地觀	解放
12	78:山地剥	協力
13	88:坤為地	存在

^{*9} 惑星奉仕のウェイブスペル [4][3]

第9章

八卦リスト

易システムを一種の言語と見なした場合、その「文字」に相当するのは、陰と陽を示す「爻」であり、その「爻」が3本集まってできた8つのパターン——八卦は、文章を構成する「単語」ということができるでしょう。

単語をつなげただけの話でも、日常会話程度のコミュニケーションであれば、かなりの部分をカバーできるのと同様（もちろん、難しい話はできませんが）、実は、八卦の意味をきちんとおさえておくだけでも、かなりの判断をすることができます。

また八卦の意味は、大成卦の意味を理解する上でも基本となります。

凡例

- タイトル行

コード番号：その八卦の名前（よみがな）

- － コード番号

コード番号は「乾兌離震巽坎艮坤」の各八卦に、そのままの順番で1～8までの数をわりあてたもので、この番号は、各大成卦にわりあてられた二桁のコード番号にそのままひきつがれています（「10章 六十四卦リスト（215ページ）」参照）。

1	乾(けん)	
2	兌(だ)	
3	離(り)	
4	震(しん)	
5	巽(そん)	
6	坎(かん)	
7	艮(ごん)	
8	坤(こん)	

- 対応する自然

八卦はまず、現実にある自然物に対応づけられました。この自然物を各八卦の正象といいます。

- 基本性質

上記自然物の性質、卦のカタチなどから連想して、基本的な性質が導かれています。この基本的性質を各八卦の卦徳といいます。

- － Keyword（20の銘板）

「普遍生命の書」の64のウル・ルーンとコドン・キー——8つのコドンの三つ組み [25] ^{*1}」からのキーワード。

- － Keyword（ヴィルヘルム）

「ヴィルヘルム版 I CHING～Book of Changes[1]」からのキーワード。

- ムーブメント

八卦が基本的にどのような「動き」を持っているか略図とキーワードで示します。

^{*1} 【8つのコドンの三つ組み】銀河ツールにおける用語。要するに「八卦」のこと。

この「動き」は大成卦上を構成する八卦の相互作用をみるときにキーポイントになることがあります。

たとえば、1：乾は陽気で上昇、8：坤は陰気で下降しますが、この動きをもとに、81：地天泰や、18：天地否のような大成卦は意味づけられています。

- 基本性質に対応する具体事項

基本性質からさらに敷衍してえられる具体物のリストです。実際には基本性質だけでなく、卦のカタチやなりたち後天図の関係などから、さまざまな意味を導き出されています。

- 字義

各八卦につけられた名前＝漢字の意味を、[47]、[46]をベースに説明しています。

- － 【形声（文字）】 [39]

一方を発音の記号、もう一方を意味範疇の記号として書きあらわす方法。

例→「さんずい（水）」と「可」を合わせて「河」とする。

- － 【会意（文字）】 [39]

複数の漢字の意味をあわせてあらわす方法。

例→「人」と「言」をあわせて「信」とする。

八卦の性質を一覧表にまとめたものを図 9.1 に示します。

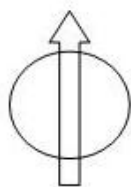
卦名	乾	兌	離	震	巽	坎	艮	坤
象								
正象	天	沢	火	雷	風	水	山	地
卦徳	健	説	麗	動	入	陷	止	順
五行	金	金	火	木	木	水	土	土
(五行数)	四、九	四、九	二、七	三、八	三、八	一、六	五、十	五、十
易数	1	2	3	4	5	6	7	8
(九星)	六白	七赤	九紫	三碧	四緑	一白	八白	二黒

図 9.1 八卦の性質一覧

1：乾（けん）



- 対応する自然
 - 空、天
- 基本性質
 - 空、父性原理、発動のエネルギー
 - 堅い、広い/広がり、創造のキッカケ
 - 父、君主、天の徳がすこやかに活動している様、健やか、剛、尊、施し、活動、剛健、頑固、尊厳、独立傾向が極めて強い
 - 九星：六白金気性
 - － Keyword（20 の銘板）
 - Time
 - 時間。「創造的な送信」で、天のしるしとして知られる。それは発生。
 - － Keyword（ヴィルヘルム）
 - Heaven, Day
 - Creative, Strong
 - Early Winter, Ice
- ムーブメント
 - 軽く、上昇。
 - いきおいよく、迅速に。



- 基本性質に対応する具体事項
 - － 方位
 - 西北 60 度（戌亥）
 - － 数
 - 4、9
 - － 味
 - 辛味

- － 色
 - 白、銀
- － 天気
 - 太陽、晴天、寒気
- － 地理
 - 西北、繁華街、高所、中心地
- － 場所
 - 神社、仏閣、官庁、広場、高級地
- － 人物
 - 天皇、王、社長、長老
- － 身体
 - 頭、首から上、心臓、骨
- － 病気
 - 上記部位に関する病、発熱
- － 食物
 - 果物（丸いから）、つめたいもの、つつまれたもの、高級品／珍味、乾物
- － 品物
 - 貴金属類、機械類、車輪に関するもの、かぶせるもの、おおうもの
- － 動物
 - 馬、獅子、龍
- － 植物
 - 秋にさく花、果実のなる木、神木
- － 家宅
 - 西北向きの家、ビル、おおきな家屋
- － 時
 - 晩秋～初冬、10月～11月、戌亥の年、月、日、時

● 字義

【乾】会意。乙が吹き流しがながくはためく形で、他の部品は車に立てた旗がなびく形をあらわす。そこから、晴れてさわやかな天気、さらにそこから、「かわく」の意味になる。「かわく」以外の意味は、易卦の「乾」の意味が漢字の「乾」の意味として流れ込んだようだが、吹き流しが勢いよくはためく姿は勇ましく（乾）もみえるし、吹き流しと天（乾）はイメージ的にも近い。

2：兌（だ）



- 対応する自然
沢、せせらぎ
- 基本性質
よろこび、楽しみ、軽い／軽やか
はずむ、楽しさ、はかない
沢、海、湖、池、水をたたえているところ、少女、めかけ、水商売の人。喜んでいるカタチ→剛（一、二爻）の上の柔（三爻）。卦のカタチより→欠ける、不足する。
女性、口、説明、お金（五行より；金）
九星：七赤金気性
 - － Keyword（20 の銘板）
Joy
喜び。「魔法使いの歌」で、海のしるしとして知られる。それは普遍の至福。
 - － Keyword（ヴィルヘルム）
Lake
Joyful, Fullness
Late Autumn, Rain
- ムーブメント
ためらいながら、ゆらゆらと上へ。沢の気。



- 基本性質に対応する具体事項
 - － 方位
西 30 度（酉）
 - － 数
4, 9
 - － 味
辛味
 - － 色

白、金

－ 天気

新月（上限の月）、雨、小雨、天気がかわりやすくはっきりしない、夕暮れ、日没

－ 地理

くぼ地、低地、沢、水際、池、切り通し、地崩れの地、西方

－ 場所

水たまり、ミゾ、井戸、プール、花柳街、飲食街

－ 人物

少女、ちょっとたりない人、通訳、ブレンゼンター、気弱な人、銀行員

－ 身体

口、舌、右肺

－ 病気

口に関係する病気、胸の病、性病、頭の疾患

－ 食物

羊の肉、鶏肉、飲み物一般、甘いもの

－ 品物

金銀、通貨、欠けたもの、へこんだもの（おわん、コップ）、たのしいもの（おもちゃ、楽器など）、カバン、先端のないもの

－ 動物

羊、トラ、猫、サル、すずめ、沢中の動物、鳥、水鳥

－ 植物

秋に咲く草花、なでしこ、月見草、からし菜、しょうが、沼沢地に生える草花木。

－ 家宅

西向きの家、水辺の家、損傷（欠け）のある家、茶室

－ 時

秋、9月、酉の年、月、日、時

● 字義

【 兌 】会意。「兄」は神への祝詞（のりと）を入れる器を頭に乘せて祈る人の形で、神につかえる祝（はふり）をいう。「兌」はその祝に神気が降り下った形。神が降り下って、うっとりとしてよろこぶ。易では兌に対応する自然物は「沢＝せせらぎ」で、せせらぎの音のような軽やかなよろこびという観方もあるが、字から連想されるイメージは喜悦、神（または精霊）との合一によるエクスタシーである。

3：離（り）



- 対応する自然

火、太陽

- 基本性質

技術、明るさ、文明

分離（明暗をわけ）、くっつく（付着。単独では存在できない）、明らか（になる）
火（日）、離散集合、乾かす、明瞭にする、外見は勢いが強く内部は弱い、明瞭、知識、文章、目立つ、はなやかな、中女

九星：九紫火気性

- － Keyword（20の銘板）

Vision

ヴィジョン。「太陽水晶」で、光のしるしとして知られる。それは普遍の知恵。

- － Keyword（ヴィルヘルム）

Fire, Sun

Conscious, Depending

Mid Summer, Lighting

- ムーブメント

もえあがり、かつ、もえひろがる。



- 基本性質に対応する具体事項

- － 方位

南30度（酉）

- － 数

2, 7

- － 味

苦味

- － 色

赤、紫

- － 天気

日（太陽）がでる、雷、暑気

－ 地理

南方、熱い所、乾いている所

－ 場所

見張り所（天文台、灯台）、官庁、華やかな場所、美容院、化粧品、アクセサリ－店

－ 人物

中女、美人、文士、易者

－ 身体

目、心臓、乳房

－ 病気

上記身体部位に関する病気、高熱

－ 食物

乾物、火をとおしたもの（にる、やく）、苦味のあるもの、美しい料理、貝／甲殻類（外固く内やわらかい）

－ 品物

文書（出版物、証明書など）、アクセサリ－、明らかにするもの（明かり）、火に関するもの一切、文房具類

－ 動物

派手な動物（オウム、インコ、クジャク、キンギョ、コイなど）、貝類

－ 植物

赤い（紫）草木類一切、花類一切

－ 家宅

南向きの家、日当たり良好、美しい（派手な）家、空家（内側空虚）

－ 時

6月、午の年、月、日、時

● 字義

【 離 】 形声。へんの部分は二匹の虫（「き」：竜を含む爬虫類）が交わりつらなる形。つくりはトリ（鳥）＝「佳」で、全体として、トリが、隤＝トリモチにくっつくこと、トリがトリモチからはなれること、「離」はこの双方の意味を持つ。離れること、付着すること。

4：震（しん）



- 対応する自然

雷、動き

- 基本性質

瞬発力、移動、（突発的）変化

激しい動き、始動、はじまり

雷、奮い動く、発育、胎動、伸長、大人（一陽）が小人（二陰）におさえられ、奮い立とうとしている。驚き、驚かす、声あってカタチなし、活動開始、新規開発、行動猛進、勢い盛ん

九星：三碧木気性

- － Keyword（20 の銘板）

Energy

エネルギー。「種のわき起こり」で、雷のしるしとして知られる。それは力。

- － Keyword（ヴィルヘルム）

Thunder

Active, Exciting

Spring, Earthquake

- ムーブメント

振動しながら上昇

回転しながら上へ向かって進む



- 基本性質に対応する具体事項

- － 方位

東 30 度（卯）

- － 数

3、8

- － 味

酸味

－ 色

青、碧

－ 天気

雷、雷鳴、地震、東風

－ 地理

東方、騒がしいところ、森林、おおきな路

－ 場所

音楽室、コンサートホール（音のするところ）、電話局（電気に関するところ）、
列車（動きに関するところ）

－ 人物

長男、著名人（ひびきわたる）、音に関係する人（もの）

－ 身体

音、声、のど、舌、手

－ 病気

神経痛、足の病、発狂

－ 食物

酸味のあるもの、酢の物、若芽・果実（五行より）

－ 品物

打楽器、音の出るものすべて、動くものすべて、キリ、針、千枚通し

－ 動物

竜、へび、さえずる鳥すべて、鳴く虫

－ 植物

草木、竹、薬草

－ 家宅

東向きの家、やかましい家（出入りが激しい）

－ 時

春、3月、卯の年、月、日、時

● 字義

【震】形声。辰はオオハマグリ（蜃）のもとの字で、ハマグリなどの貝が足を出して移動する形。ここから「動く（振動）」の意味がある。ハマグリの状態による占術があり（詳細不明）、自然災害（かみなり）、人的災害（暴動のようなさわぎ）を占った。かみなり、かみなりがとどろく、人やものが、ふるう、ふるえる、おどろく、おののく、の意味。

5 : 巽 (そん)



- 対応する自然

風

- 基本性質

吹き渡る、旅、空気

あまねくいきわたる、スキマに入り込む、目に見えない

風、従う（服従して他に同調する）、模倣し育成する、人に従順で他人のためにつくすが自分のことには迷いやすい、決断にとぼしい（優柔不断）

九星：四緑木気性

- － Keyword (20 の銘板)

Breath

呼吸。「思考の浸透」で、風のしるしとして知られる。それは霊（スピリット）。

- － Keyword (ヴィルヘルム)

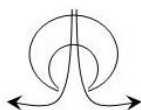
Wind, Wood

Gantle, Gradual

Early Summer, Stillness

- ムーブメント

上から下へと吹きおろす。かつ、横にも吹き進む。



- 基本性質に対応する具体事項

- － 方位

東南 60 度（辰巳）

- － 数

3, 8

- － 味

酸味

- － 色

青、緑

- － 天気

下弦の月（卦のカタチより）、風、嵐

－ 地理

東南（辰巳）、草木のあるところ、洞窟

－ 場所

商いという意味より→市場、取引場、飛ぶという意味より→飛行場、卦のカタチより→トンネル、レール、郵便局（風のたより）

－ 人物

長女、旅人、遊び人、木に関係のある人、職人、マスコミ関係者

－ 身体

股（卦のカタチより）、太もも、呼吸器系（風・空気）、神経、髪

－ 病気

前記身体にかかわりある病気、痛風

－ 食物

めん類（長いもの）、根菜（伏入）、燻製（風であおる）

－ 品物

風に関係ある品物（うちわ、扇風機など）、ヒモ・糸（長いもの）、木工品（細工物）、コミュニケーションに関わりあるもの

－ 動物

キジ、ニワトリ、長虫類

－ 植物

草木一般、ツタ・ツル（長いもの）、山林に自生する植物

－ 家宅

東南向きの家、地下、香り漂う家

－ 時

晩春から初夏、4～5月、辰巳の年、月、日、時

● 字義

【巽】会意。上半分は二人が並んで舞を神に捧げる形。下半分の「共」はその二人が舞う舞台であり、神楽のような意味か。易における巽の意味とは直接関係はなく、易における巽は仮借義であろう、というのが字統 [47] における見解だが、神様に通じるための手段というくくりでは、易も神楽も共通している。

6：坎（かん）



- 対応する自然

水、月

- 基本性質

自然のめぐみ、穴／くぼみ／谷、暗闇

鏡、高所から低所へ（自然の摂理）、方円の器に従う（柔軟性）

水、池の中の竜が雲が来るのを待って水中に潜んでいる、万物をうるおし生物を育てる、山から海へ（河）→苦勞して大を成す、水は方円の器に従う→順応性、交際性、陰にはさまれ陽気を発揮できない→困難／苦しみ、一人の男が二人の女にはさまれたカタチ→情にながされやすい、再度＝リピートの意味あり

九星：一白水気性

- － Keyword（20 の銘板）

Heart

ハート。「月水晶」で、水のしるしとして知られる。それは普遍生命。

- － Keyword（ヴィルヘルム）

Water, Moon

Dangerous, Abysmal

Mid Winter, Cloudy

- ムーブメント

高きから低きへ。上から下へ。



- 基本性質に対応する具体事項

- － 方位

北 30 度（子）

- － 数

1、6

- － 味

塩辛い

- － 色

黒、または白

－ 天気

雨（水）、冷氣、月

－ 地理

北、河、溪谷、低地

－ 場所

水に関係するところ、低いところ、穴、穴に関係するところ

－ 人物

中男、暗い人、悪い人、水に関係ある人、水に関係するものを扱う人

－ 身体

穴のあいたところ、液体に関係する部位／器官

－ 病気

水に関係する病、陰部の病、アル中

－ 食物

飲み物一般（酒も含む）、水中のもの（魚類など）、塩辛いもの

－ 品物

流れるようなもの（帯、ヒモなど）、ペン、筆、細ながく芯のあるもの、ペンキ、水に関係あるもの、水晶／レンズ（透きとおったもの）

－ 動物

水中、水の近くで生活するもの、四足の動物、夜行性のもの、暗いところに関係あるもの、寒いところにいるもの

－ 植物

藻類、水中の植物、水に関係あるもの、暗いところ／寒いところに生えるもの

－ 家宅

北向きの家、水辺の家、湿地帯の家、料理屋、喫茶店←水商売

－ 時

冬、12月、子の年、月、日、時

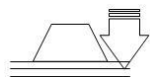
● 字義

【 坎 】 形声。土と欠は人が大きく口を開いて立つ姿。もともとは墓穴、または祭祀のために犠牲を入れる穴。転じて一般に土がおちくぼんだところをいう。

7：艮（ごん）



- 対応する自然
 - 山、静止
- 基本性質
 - 静止、停滞、落ち着いた
 - 動かない（とどまる）、変わらない（安定）、ゲート（門）
 - 山、とどまって動かない（陽は上に陰は下にとどまる）、自己の見識に固く閉じ動かない、中止、不動、障害、頑固、高い、高ぶる
 - 九星：八白土気性
 - － Keyword（20 の銘板）
 - Temple
 - 神殿。「山の門」で、瞑想のしるしとして知られる。それは普遍の心。
 - － Keyword（ヴィルヘルム）
 - Mountain
 - Keeping Still, Perverse
 - Late Winter, Stillness
- ムーブメント
 - 動かない（崩れるときは下へ）。



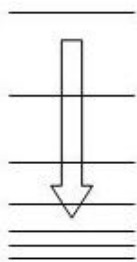
- 基本性質に対応する具体事項
 - － 方位
 - 東北 60 度（丑寅）
 - － 数
 - 5、10
 - － 味
 - 甘み
 - － 色
 - 黄
 - － 天気
 - 曇り、曇天

-
- 地理
 - 東北方、山岳、山林
 - 場所
 - 墓、神社仏閣、倉庫、境界（門）、高層ビル
 - 人物
 - 小男、僧侶、頑固／強欲の人、無知な人、上記「地理」「場所」に関する人
 - 身体
 - 肩、鼻、手指（手はものを止める）、背骨、脊髄、関節
 - 病気
 - 上記「身体」に関する病、はれもの／コブ←もりあがるから
 - 食物
 - 肉、土中のもの、山のもの、つらなったもの（団子、魚卵類）、練り物
 - 品物
 - 積み重ねたもの、つむぎあわせたもの、連なったもの、台状のもの、収納貯蔵するもの
 - 動物
 - クチバシの長い動物、クチバシの強いトリ、足の長い動物、集団生活する動物
 - 植物
 - 瓜、果実、木になる実、黄色いもの、山のもの
 - 家宅
 - 東北向きの家、行き止まり、突き当たり、高い家
 - 時
 - 1月、2月、丑寅の年、月、日
 - 字義
 - 【 艮 】 会意。「目（上半分）」と「人（下半分）」。「目は邪眼であり、呪力をもつ視線。人は後ろ向きに退く形で、邪眼に会って進行を止められる様子。」

8 : 坤 (こん)



- 対応する自然
 - 大地、地
- 基本性質
 - つつむ、母性原理、従順
 - 受け入れる、はぐくむ、目立たない、バックグラウンド
 - 大地、万物を育成してゆく力、一切を受け入れる順の力（性質）、大衆、庶民、生みの苦勞、柔順性、忍耐性、生み出すための苦勞、建設の努力、縁の下の力持ち
 - 九星：二黒土気性
 - － Keyword（20 の銘板）
 - Space
 - 空間。「受容的なコード化」で、地のしるしとして知られる。それは発生。
 - － Keyword（ヴィルヘルム）
 - Earth, Night
 - Yielding, Nourishing
 - Early Autumn, Warm
- ムーブメント
 - 重く、下降する。



- 基本性質に対応する具体事項
 - － 方位
 - 西南 60 度（未申（裏鬼門））
 - － 数
 - 5、10
 - － 味

-
- 甘い
 - － 色
 - 黒、黄
 - － 天気
 - 曇り、霧、静かな日
 - － 地理
 - 平地、田畑、農村、山中腹
 - － 場所
 - 上記「地理」の場所、空き地、墓地、押入れ、袋小路
 - － 人物
 - 女、母、妻、副社長、地位の低い人、雑多人
 - － 身体
 - ハラ、胃、血
 - － 病気
 - 消化器系の病気
 - － 食物
 - 米、細かいもの（粉）、肉
 - － 品物
 - 四角ばったもの、やわらかいもの、土でつくったもの
 - － 動物
 - 牝馬、牛、土のもの（アリ、クモ）、サル
 - － 植物
 - 地衣類、きのこ
 - － 家宅
 - 西南向きの家、田舎の家、陰気な家
 - － 時
 - 7、8月、未申の年、月、日
- 字義
 - 【 坤 】 会意。「土」と「申」。易の意味以外に字としての意味はない。すべて「乾」の対義。「申」はそれ単体では電光の形。

第 10 章

六十四卦リスト

易システムを言語と考えたとき、八卦はその「単語」に相当するといえるでしょう。そのたとえでいえば、六十四卦——大成卦は文章ということができるでしょう。たったふたつの単語からできた文章ですが、この大成卦をさまざまな角度から読みこんでいくことにより、このシンプルな文章はやがて文脈となり、森羅万象を雄弁に語りはじめます。^{*1}

^{*1} なお、本リストの作成にあたっては [34] および [29]（とくに [29]）を参考にしました。

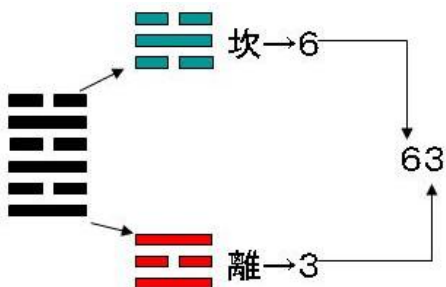
凡例

- タイトル行

コード番号：その大成卦の名称（よみがな）・TP＝ツイストペア番号

- － コード番号

コード番号は八卦に割り当てられたコード番号をそのままついています。大成卦は上卦、下卦というふたつの八卦からできています。大成卦のコード番号は二桁の数字ですが、十の位の数字には上卦を構成する八卦のコード番号を、一の位の数字には下卦を構成する八卦のコード番号を、それぞれあてはめています。図は、「既済（きせい）」卦の例で、既済卦のコード番号は「63」になります。



- － TP＝

ツイストペア番号（と、そのツイストペアが説明されているページ番号）。

易システムでは、ある大成卦のすべての爻の陰陽を反転させてできた大成卦（つまりもとの大成卦の裏卦）と、もとの大成卦のペアをツイストペアと呼んでいます。

易システムでは、この、互いに裏卦の関係にあるペアを重視しており、ペアそれぞれ自体にも意味をつけています（「ツイストペアリスト（347 ページ）」参照）。 $64 \div 2$ で、32のツイストペアがあるわけですが、各ツイストペアにもコード番号がふられており、各大成卦がコード番号何番のツイストペアに属するか、ここではそのツイストペア番号を示しています。

すなわちこのツイストペア番号をもとに「ツイストペアリスト（347 ページ）」を参照し、この大成卦が所属するツイストペアの意味を知ることができます。

- Legacy

古典にもとづいた、大成卦全体につけられた言葉と、各爻につけられた言葉。

各爻につけられた言葉の先頭の○は、その爻が陽爻であること、●はその爻が陰爻

であることを示します。「初」は第一爻目（一番下の爻）、「上」は第六爻目という意味です（伝統的慣習で初爻、上爻と呼ぶ）。

「易経」を訳したのではなく、古典の意味に則しながら、できるだけ短くおさめるよう現代の言葉でいいかえたものです。固定的な連想をさけるため、吉凶などの言葉ははぶいてあります。かならずしも意味がとまらない部分もあるかもしれませんが、公案のようなものだと思って、自由に連想——直観をはたらかせてみてください。なお、この項目を記述するにあっては [34]、および [29]（とくに [29]）を参考にしました。

- Keyword / Tips

その大成卦をひとことであらわす言葉 / 純卦、十二消長卦、遊魂、帰魂など、その大成卦の特長（記述がない場合もあります）。

- － Keyword（20 の銘板）

『『普遍生命の書』の 64 のウル・ルーンとコドン・キー』—— 64 のコドンとウル・ルーンのインデックス [25]」からのキーワード。

「順番」は、易経における大成卦配列の順番です

- － Keyword（ヴィルヘルム）

「ヴィルヘルム版 I CHING～Book of Changes[1]」からのキーワード。

- Image

その大成卦全体の、Keyword よりはくわしい中心となるイメージ。

- Overview

その大成卦全体の、一般的解釈。

- 字義

各卦につけられた名前＝漢字の意味を、八卦リストと同様に [47]、[46] をベースに説明しています。……というより、上記二書をほとんど引用しているといった方が正しいかもしれません。

- － 【形声（文字）】 [39]

一方を発音の記号、もう一方を意味範疇の記号として書きあらわす方法。

例→「さんずい（水）」と「可」を合わせて「河」とする。

- － 【会意（文字）】 [39]

複数の漢字の意味をあわせてあらわす方法。

例→「人」と「言」をあわせて「信」とする。

- － 【金文】 [39]

銅や鉄などの金属で作った容器・兵器・印章などに鋳出されたり刻みつけられたりされた銘文。石文と並んで金石学の対象となる。

- 遺伝コードとの対応

遺伝暗号と易卦の、銀河ツールにおける対応。

- ライプニッツ・コード

陰爻を 0、陽爻を 1 とした場合の 2 進数表現。

上爻を最下位ビット、初爻を最上位ビットとした場合の 6 桁の 2 進数。

【 】 内は 10 進表現、() 内は 2 進数表現、「0x」以下は 16 進数表現。

1 1 : 「乾」 為天 (けんいてん) ・ T P = TP04 (352 ページ)



● Legacy

おいに路はひらける。ただしくあればよい。

－ 用〇 (用九) *2

龍の群れを見るがその首がない。よろしい。

－ 〇上

龍、天高くのぼりすぎ、パワーはコントロールを失う。

－ 〇五

天高く舞い上がる。

－ 〇四

龍、淵からはいあがり、

－ 〇三

昼、つとめにはげみ、夕、その日をふりかえる。

－ 〇二

その姿をあらわす。

－ 〇初

姿の見えぬ龍、

● Keyword / Tips

パワー／純卦、十二消長卦 (5月)、大乾

－ Keyword (20 の銘板)

創世／ Creative Genesis

順番 = 01

－ Keyword (ヴィルヘルム)

The Creative

● Image

内外卦ともに陽爻のみの卦。勢いの強い……強「すぎる」プラスエネルギー。男性だけ。勢いよく空を駆け昇る龍 (ドラゴン)

● Overview

非常に勢いの強いとき。あるいは、エネルギーに満ちた人やものや事にあなたが関

*2 坤と乾だけにつけられた爻辞

わっているのかもしれない。バランス感覚を大事に。勢いに乗ってやりすぎないように。それにさえ注意していれば、新たな成長をとげることができる。

- 字義

「八卦リスト」の「乾（198 ページ）」を参照してください。

- 遺伝コードとの対応

A A A = L y s （リジン）

- ライプニッツ・コード

【63】 = (111111) = 0x3F

12：天沢「履」(てんたくり)・TP = TP12 (360 ページ)



- Legacy

先人の踏み固めた道をいく。トラの尾を踏むが、トラ、そのものを食らわず。

- ○上

ふみたどってきた道をふりかえる。得るものはあるか。よくもわるくも。

- ○五

トラの尾を踏むことを決断する。正しくとも、きわどい。

- ○四

トラの尾を踏む。慎重の上にも慎重に。

- ●三

勢いがあり、無理をする。トラの尾を踏み、食られる。

- ○二

隠者が淡々とゆくがごとく、平坦な道をゆく。

- ○初

すなおにあとをついてゆくのであれば問題なし。

- Keyword / Tips

履行／女子裸身の像（男子裸像は謙（343 ページ））

- Keyword (20 の銘板)

実践／Practice

順番 = 10

- Keyword (ヴィルヘルム)

Treading (Conduct)

- Image

外卦の「トラ」の尾をふむことになるが、内卦兌のような無邪気さがあれば、問題なし。正式な手続きをふむ、履行する。先人のてつをふむ。過去のおこないをたどる。

- Overview

ことを始めるにあたっては、ゴールに至るまでのステップが重要。ささいに見えることであっても、おろそかにしてはいけない。ひとつひとつ確実にこなしていくことが結局は一番の早道。準備もろくにせずに、あせってゴールに向かって飛び出し

てはいけない。

- 字義

【履】会意。尸と彳、右側は舟と足跡の形。尸は、「かたしろ」であり、祖先の霊の代わりに立って祭りを受けるもの。彳は十字路（行）の片側の形であり、行進や道路をあらわす記号として用いられる [45]。舟はくりぬき舟の形に似た履き物の形でかたしろが履いたものであろう。総じて、葬式などの儀礼に際して「(儀礼用のクツを) 履く」とか「履む（ふむ＝儀礼を行う、舞う）」の意味になる。履行は言ったこと決めたことをそのとおりに行うことであり、ここから「おこなう」の意味にもなる。

- 遺伝コードとの対応

A G A = A r g (アルギニン)

- ライプニッツ・コード

【55】 = (110111) = 0x37

13：天火「同人」(てんかどうじん)・TP= TP19 (367 ページ)



● Legacy

野(広い外の世界)で広く人と交わる。路はひらける。大河もこえていける。君子のようにただしくあればよい。

－ ○上

郊外にいて交わる人は少ないが、自然体でいれば悔いはない。

－ ○五

先に泣き後に笑う。大軍を出して勝ち、同志にあう。

－ ○四

城壁に上るが攻めることができない。

－ ○三

伏兵をはなち、高台から敵をのぞむ。三年たっても兵をあげられない。

－ ●二

グループで人とまじわる。

－ ○初

門を出て人とまじわる。

● Keyword / Tips

同志／遊魂卦

－ Keyword (20 の銘板)

組織された人々／ People Organized

順番 = 13

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Fellowship with Men

● Image

同志、仲間とともに事をなす。共同で動けば大事にも対処できる。ひとり高みに昇ってことをなすのではなく、他者と同じ高さの視線でことをなす。

● Overview

ころざしを共にする他の人間が頼りになるとき。その人は友人かもしれないし、親かもしれないし、他人であるかもしれない。だれであれ、鍵になるのは「目的、

めざすものが一致している」という点。単独でことにあたるよりも、人と共に行動した方がよい。

- 字義

【同人】

→同

会意。凡と口を組み合わせた形。凡は盤（平たい皿状のもの）で、口は祝詞を入れる器（サイ）の形。同は筒型の酒杯の名であると思われる。周代に諸侯が集まって同をつかって行う合同という儀礼があった。集まって儀礼をともにするところから、ともにする、おなじくする、おなじ、ともに、の意味になる。

→人

「53：家人」を参照（287 ページを参照）

- 遺伝コードとの対応

C A A = G l n（グルタミン）

- ライプニッツ・コード

【47】 = (101111) = 0x2F

14：天雷「无妄」(てんらいむぼう)・TP=TP26 (374ページ)



• Legacy

路はひらけるが正しくあらねばわざわいあり。自分から進んでことをなさぬこと。

－ ○上

自然のままている。いけばわざわいあり。よろしきところなし。

－ ○五

自分では防ぎきれない病あり。薬を用いず自然にまかせてよろこびあり。

－ ○四

自然にまかせ、決して手を出さない。そうすればなんとかもつ。

－ ●三

よい結果も悪い結果も自然の路。たとえていうなら、つないでいた牛を旅人が連れ去るようなもの。旅人にはよいが、ぬれぎぬを着せられた村人には災難。

－ ●二

収穫を得るために耕さず、熟田を得るために開墾しない。自然にまかせて進めばよい。

－ ○初

小細工せず、自然の路をいけばよし。

• Keyword / Tips

あるがまま／

－ Keyword (20の銘板)

共時性／ Synchronicity

順番 = 25

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Innocence (The Unexpected)

• Image

自然体。多くの場合、人為的努力は無駄に終わる。偶発的な出来事。雷が鳴り渡るカタチ。自然災害。

• Overview

コスモスの法則を理解した上で、自然体でいる。できることはやって、それ以上と

らわれないこと。できることはせいっぱいやっておく。手を抜くと思わぬ災害や事故にみまわれるかもしれない。せいっぱいやった上で手放す。

- 字義

【无妄】

无→

象形。亡の異字体。亡は手足を折り曲げているなきがらの形。ム、ない、なし、の意味。

妄→

形声。音符は亡。設文解字によれば「乱るるなり」とあり、でたらめ、という意味となる。でたらめ、いつわりのほか、みだりに、の意味も。

総じて、无妄はみだれ、うそ、いつわりの「ない」こと、の意味になる。

- 遺伝コードとの対応

C G A = A r g (アルギニン)

- ライプニッツ・コード

【39】 = (100111) = 0x27

15：天風コウ「＜女へんに后＞」（てんぷうこう）・TP＝TP32（380 ページ）



● Legacy

女、さかんなり。女を取るにもちうるなかれ。

－ ○上

ツノにであう。やや恥ずべきことだが、とがめられることはない。

－ ○五

クコの葉で瓜を包む。これがうつくしさを含んでいれば、天より星も落ちることあり。

－ ○四

包みに魚がない。ことをおこせばよくないことがおきる。

－ ○三

しりの皮がむけ、座れない。行こうとしても、進めない。あやういがおおきなまちがいはない。

－ ○二

包みに魚が入っている。咎められることはないが、客にすすめるには適當ではない。

－ ●初

金具につなぐ。かたくとめておくとよい。すすんでもよいことなし。やせたブタがとんではねて落ち着きなし。

● Keyword / Tips

会う／十二消長卦（6 月）

－ Keyword（20 の銘板）

時間の浸透／ Time Penetrating

順番＝ 44

－ Keyword（ヴィルヘルム）

Coming to Meet

● Image

純陽（乾）のなかに、スッと一陰が入り込んだカタチ。五陽が一陰にあうあるいは天から風がふきおろすカタチ。予期しない出会い、アンバランス。

- Overview

晴れた空の下を風が吹いていくように、さまざまな情報や人が行きかう。よい知らせ（人）もあれば、あまりいい影響をあたえない知らせ（人）もある。後者の知らせは、それと気づかないうちに入り込んでいることも。そうだと思ったらすぐに切り離すか、そっと身を引く。

- 字義

【コウ＜女へんに后＞】コウ＜女へんに后＞は、邂逅の「逅」であり、遭うこと、思いがけない出会いのことをいう [29]。

- 遺伝コードとの対応

G A A = G l y (グリシン)

- ライプニッツ・コード

【31】 = (011111) = 0x1F

16 : 天水「訟」(てんすいしょう)・TP = TP25 (373 ページ)



• Legacy

河わたれず、道ふさがれる。おそれて思いとどまればよいが、ゴリ押しは不可。知恵者に会えばよし。

－ ○上

争いに勝ち、ほうびをもらうが、早々に三度も奪われる。

－ ○五

争いに勝つ。もとより、よい。

－ ○四

争いに勝てず引き下がり、天命に従い、あらためる。

－ ●三

先祖の威光でくいつなぐ。正しければよいが、公の仕事にとりたてられても、たいしたことはできない。

－ ○二

五に勝てず故郷へ帰る。

－ ●初

事は手早くかたづける。多少クレームがあるが、最後にはよい。

• Keyword / Tips

あらそい／遊魂卦

－ Keyword (20 の銘板)

離れる人々／People Apart

順番 = 06

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Conflict of the Small

• Image

天は上昇し、水は低きに流れ、互いの意見があわない様。争いで得るものはなく、避ける努力が必要。争いが避けられないときは、我を張らぬこと。被害を最小限に食い止めるべきである。

• Overview

トラブル。争いごと。ふつうは自分と他の人との間に起こるものだが、いつも意識している自分と「無意識の自分」の間で起こることも。いずれにせよ、争いはさけたほうがよい。どうしても争わなければならないのなら、そのときは自分の中心にあるものに焦点を。水のように透明で、水のように自然でいる

- 字義

【訟】形声。音符は公。公は宮廷のなかの儀礼を行う式場の平面形。ここで先祖を祭り、裁判も行われた。ここから、うったえる、せめる、などの意味になる。金文ではすべて裁判の意味に用いる。

- 遺伝コードとの対応

GGA = Gly (グリシン)

- ライプニッツ・コード

[58] = (111010) = 0x3A

17：天山「遯」（てんざんとん）・TP = TP18（366 ページ）



- Legacy

逃げる。退く。凡人は退くべきときに退けない。

- － ○上

ゆうゆうとのがれる。よろしくないところは、ない。

- － ○五

よくのがれる。ただしくあればよい。

- － ○四

よくのがれる。君子にはよいが、凡人にはよくない。

- － ○三

しりぞこうにもつなぎとめられる。病がありあやうい。一時雇いを養うにはよし。

- － ●二

しりぞく意志は牛の革のようにかたく、だれにもとめられない。

- － ●初

逃げるにしても最後尾。あやうい。むやみに進んではいけない。

- Keyword / Tips

退く／十二消長卦（7月）、大巽

- － Keyword（20の銘板）

献身／Devotion

順番 = 33

- － Keyword（ヴィルヘルム）

Retreat

- Image

空（天）の下にそびえる山。賢者が隠遁するのにふさわしい場所。賢者は身を引くタイミングを心得ている。ムリに現役にとどまるようなことはしない。

- Overview

一時退いてみる。完全な隠遁はむつかしいかもしれないが、週末、あるいは仕事が終わってからのひとときを使うか、場合によってはまとまった休みをとる。方法はともかく、一歩退いて状況を冷静にみつめる。

- 字義

【遯】形声。音符は豚。しんにようは「歩く」という意味。のがれる、しりぞく。

- 遺伝コードとの対応

U A A = 終止コドン

- ライプニッツ・コード

【15】 = (001111) = 0x0F

18：天地「否」（てんちひ）・TP = TP11（359 ページ）



● Legacy

ふさがれた路は人の路ではない*3。陽（大）が上に行き陰（小）が下にくだる。

－ ○上

ふさがりが徐々にとける。先にふさがり後によろこぶ。

－ ○五

ふさがれたなかでも一段落。しかし油断せず大樹によっておく。

－ ○四

天命に従えばよし。その友にもよきことあり。

－ ●三

たくらみ、悩みの火種を胸に秘める。

－ ●二

五に包まれる。五に従うならばよし。

－ ●初

仲間とともに行動する。悪い仲間（内卦三陰）からはなれ、自重するなら、よい。

● Keyword / Tips

否定／十二消長卦（8月）

－ Keyword（20の銘板）

安定化／Stabilizing

順番 = 12

－ Keyword（ヴィルヘルム）

Standstill (Stagnation)

● Image

天は上に行き、地は下に行き、相交わることはない。そむく、離反する、平行線。

「否」塞で、ふさがれる意味も。

● Overview

道がふさがれている。関わっていることがふりだしにもどされてしまうことも。し

*3 原文の読み下し文では「否はこれ人に匪ず」。ここでは「人一人」間の道がふさがれたのではなく、「人一人」間の道がふさがれたととらえた。「字義」参照。

かし道はなくなってしまったわけではなく、そこにある。また、道は未来永劫にわたってふさがれつづけているわけでもない。こんなときは無理に状況をすすめない。状況を受け入れ、静かに見守る。

- 字義

【否】会意。不と口とを組み合わせた形。不はもともと花のシベとガクの形だが、字の音のみ借りて否定の「ず」の意味に用いる。口は祝詞を入れる器（サイ）の形。祝詞をとнаえて神に祈るが神が承諾しないことを否という。ここから、いな、いなむ、しからず、あらずの意味になる。易においては塞がる、通じないの意味にとるが、漢字の成り立ちから考えると、さしずめ、神への通路——チャンネルがふさがれている、通じないということになる。

- 遺伝コードとの対応

UGA = 終止コドン

- ライブニッツ・コード

【7】 = (000111) = 0x07

21：沢天「夬」(たくてんかい)・TP = TP05 (353 ページ)



● Legacy

王の庭（面前）にて罪を揚げられる。誠をもってさけぶが、あやういことがある。
自分の領地で命令する。武力行使は得策ではない。積極的にことをなしてよし。

－ ●上

追いつめられ、きられる。さけぶことなかれ。

－ ○五

山ゴボウが根をはらないうちに抜き取る。決然として中道を守れば咎められる
ことはない。

－ ○四

尻の皮がむけ、座れず。行こうとしても、行けず。羊をひくようにいけば後悔
することはない。言葉を聞くが、その言葉を信じない。

－ ○三

ほほ骨に血気さかな色。悪いことがある。君子は決然と処分を行ない、ひと
りゆき、雨にあう。怒りをかうことがあるが咎められることはない。

－ ○二

おそれ警戒してさけぶ。夜に敵襲があるが警戒をきびしくしていたので憂いは
ない。

－ ○初

さかんに進もうとする。いってみても勝てずに、咎められる。

● Keyword / Tips

決断／十二消長卦（4月）

－ Keyword (20 の銘板)

不屈／Indomitable

順番 = 43

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Break-through (Resoluteness)

● Image

首なし（上爻のみ陰だから）。せっぱつまった。のるかそるか。五陽が一陰をきる。
極端。（首をかけるぐらいの）大きな決断。（陽の）勢いが強すぎる。あとがない

ぞ、おちついていけ。アタマがない→指導者不在。

- Overview

どちらをとるか、決断にせまれる。必要な決断をさきのばしにしてきたのかもしれない。もしそうなら、なぜ、さきのばしにしてきたのか、その原因に、正直にむきあう。「あとがない」状況にあり、決断は急がれているが、だからといってあせって決断をしてはいけない。慎重に行う姿勢をつらぬく。

- 字義

【夬】会意。ゆがけ（弓をひくとき弦で指を傷つけないためにつかう皮手袋）を手に持つ形。またはものを切る刃物を手に持つ形。ゆがけ、わける、などの意味。

- 遺伝コードとの対応

$AAC = Asn$ （アスパラギン）

- ライプニッツ・コード

【62】 = (111110) = 0x3e

22 : 「兌」 為沢 (だいたく) ・ TP = TP03 (351 ページ)



- Legacy

路はひらける。ただしくあればよい。

- ●上

四、五をひきいれ、よろこぶ。

- ○五

上を信じて親しもうとするが、あやうい。

- ○四

三・五を天秤にかける。五とともになら、よろこびあり。

- ●三

応ずる相手なし。ひそかによろこぶ。

- ○二

そこにマコトあり。よろこぶ。

- ○初

そこに調和があり、よろこぶ。

- Keyword / Tips

悦び／純卦

- Keyword (20 の銘板)

喜びの輝き／Radiance of Joy

順番 = 58

- Keyword (ヴィルヘルム)

The Joyous, Lake

- Image

たのしく、軽やかなよろこび。口に関すること。飲食、おしゃべりなど。またはそのカタチから、欠けたもの。

- Overview

よろこびがさざなみのように、自分のうちにも、外にもあふれだしていく。よろこびはひとりじめしないでみんなでわかちあえば、何倍にもなる。わかちあうことで自分のよろこびが「減って」しまうように感じるのであれば、それはよろこびの仮面をつけた別のものなのかもしれない。コスモスとの調和に根ざしたほんものの

「よろこび」であれば、源泉がついてしまうということはない。コスモスのパイは、自分のぶんも他人のぶんも充分にあり、それらをきりわけてもまだまだ余る。

- 字義

「八卦リスト」の「兌（200 ページ）」を参照してください。

- 遺伝コードとの対応

A G C = S e r（セリン）

- ライプニッツ・コード

【54】 = (110110) = 0x36

23：沢火「革」(たくかかく)・TP = TP20 (368 ページ)



- Legacy

暦での「革める日」に革める。おおいに路はひらけ、正しい態度を保つ。悔いることはなくなる。

- － ●上

君子は、ヒョウの毛が生えかわるように革める。普通の人はそのツラだけ革める。積極的にでるとよくない。正道を守っていれば、よい。

- － ○五

大人物は、トラの毛が生えかわるように革める。占うまでもなく、そこにいつわりはない。

- － ○四

悔いることはなくなる。誠意をもってその命令を革めれば、よい。

- － ○三

積極的にでるときではない。正しい態度を保っていてもあやうい。革めるのにも三度検討すれば、信頼が生まれる。

- － ●二

時が熟して（己の日（十干の中日））から革める。いけばよいことがある。とがめられることはない。

- － ○初

かたくしぼるのに、牛の皮をもちいる。

- Keyword / Tips

革めること／

- － Keyword (20 の銘板)

時間の革命／ Revolution of Time

順番 = 49

- － Keyword (ヴィルヘルム)

Revolution (Molting)

- Image

兌（上卦、水）は、火（下卦）にあぶられてその性質を変える。上質の料理が生まれるのかもしれない。革める（変化させる）タイミングはまさに今この時である。

どのみち放っておいても水は蒸発してしまうものだ。液体から気体に、時間がたてば、その相は変化してしまう。

- Overview

なにもかもが大きく変わっていく。いまおきている変化は、自分を取りまく環境の変化かもしれないし、自分の内奥の大きな変化かもしれない。オープンにその変化をうけいれてみてはどうか。短期的には損害があるかもしれないが長い目で見れば必ず成長につながる変化であるはず。

- 字義

【革】象形。獣の革をひらいた形。獣の皮を剥ぎ、毛を取り、なめすなどの変化（加工）を加えて使えるものとするところから、変革の意味とする（設文）。かわ。あらためる。

- 遺伝コードとの対応

CAC=His（ヒスチジン）

- ライプニッツ・コード

【46】 = (101110) = 0x2e

24：沢雷「随」(たくらいずい)・TP = TP27 (375 ページ)



● Legacy

おおいにとおる。ただしくあればよい。とがめられることはない。

－ ●上

上と五を捕らえて縛り、さらに綱でかたくむすぶ。王は誠意をもって西山で祭祀を行う。

－ ○五

よき友に誠意あり。

－ ○四

五に従い、得るものあり。自分の立場に固執するとよくない。誠意あれば路はひらけ、聡明であればとがめはない。

－ ●三

大(四)にかかわり、小(初)を失う。求めるものがあり、四に従えば得るものがある。おちつきあればよし。

－ ●二

小(初)にかかわれば大(五)失う。

－ ○初

地位・立場がかわることがある。ただしくあればよい。門を出て人と交われば成果がある。

● Keyword / Tips

したがうこと／帰魂卦、否の交代生卦

－ Keyword (20 の銘板)

わき起こる喜び／Arousing Joy

順番 = 17

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Following

● Image

少女(外卦)に、男(内卦)がつき従うカタチ。上にあった陽爻(否のカタチ)が初に降りてきたカタチ。陰に従い、やみくもに進むことをおさえてちょうどいい。そのように動いて(内卦)よろこびある(外卦)卦。

- Overview

ときには状況にさからわないでいるほうが、結果的にはいい場合もある。といっても、「なにもしないで放っておく」という意味ではなく、りきんでコントロールしようとして、自分の内または外のながれに沿うように適度に力を加え、適度にコントロールするということ。心地よいてごたえや充実感といった、よろこびの中でそのようにできるのなら、それが一番だ。また、今はそのようにできるタイミングでもある。

- 字義

【随】形声。もとの字は隨、音符は隋。隋のこざとへんは、神が天に昇り降りするときのハシゴ。左は呪具（工）を手に持つ形。月は肉。おそらく神のあるところを求めてそこに肉を供えるという意味。位の高い人について随をもちいると、随従、随行の意味になり、便宜についてもちいると、随時、随所のように時と場所を定めないこと（時と場所は神意にしたがう）の意味になる。いずれにしても、神の所在を求めることが本来の意味。つきしたがう、したがう。

- 遺伝コードとの対応

C G C = A r g (アルギニン)

- ライプニッツ・コード

【38】 = (100110) = 0x26

25：沢風「大過」(たくふうたいか)・TP=TP31 (379ページ)



● Legacy

屋根を支える柱がたわむ。困難に耐え、すすむ。そうすれば路はひらける。

－ ●上

歩いて河をわたり、頭まで見えなくなる。よいことはないがとがめられることもない。

－ ○五

枯れ柳から花がさく。老いた女が若い男をやとう。可もなく不可もない。

－ ○四

柱は力強く、たわまない。初に心をうつすと、とがめられる。

－ ○三

屋根をささえる柱がたわむ。

－ ○二

枯れ柳から新芽が出る。老いた男が妻をめとる。わるくはない。

－ ●初

やわらかく白い敷物。

● Keyword / Tips

過負荷／遊魂卦

－ Keyword (20の銘板)

破裂する時間／Time of Bursting

順番＝28

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Preponderance of the Great

● Image

はちきれそう。重荷、過負荷。制御しきれない。両サイドの陰が中間の四陽をささえきれないカタチ。反目。お互いにソップを向いているカタチ(上卦と下卦で「兌」ノカタチがそむきあっている、とみる)。

● Overview

無理しないように。「無理などしていない」と思うのなら、背負える以上の荷物を

背負っていないか、もう一度よく確認する。無理しているのなら、その荷物を背負い込むことが、ほんとうに自分も周囲も幸せにすることなのかどうか、もう一度よく考える。自然な悩み・試練は自分と等身大「以下」のはず。

- 字義

【大過】

→大

「81：泰（331 ページ）」を参照してください。

→過

形声。しんにようは「歩く」という意味。つくりの「口」は、神への祈りの文（祝詞（のりと））を入れる器の形で、残った部分は人の上半身の骨。総じて、祝詞（のりと）に人の残骨をそえて、特定の重要な場所を通過し、わざわざ（禍）をはらう儀式を示す文字であろうと思われる。すぎる、すごす、あやまる、あやまち。

- 遺伝コードとの対応

G A C = A s p （アスパラギン酸）

- ライプニッツ・コード

【30】 = (011110) = 0x1E

26：沢水「困」（たくすいこん）・TP = TP24（372 ページ）



● Legacy

路はやがてひらける、正しくあること。大きな人物であればとがめられることはない。言葉は役に立たない。

－ ● 上

ツタ・カズラに足をとられてくるしむ。動けば悔いることがあるが、悔いがあっても進めば、よいことがある。

－ ○ 五

鼻切られ、足切られ、赤色のまえかけ（君子の服装、→二爻）にくるしむ。徐々によろこびはやってくる。祭祀をするのにはよい。

－ ○ 四

助けがやってくるが、ゆっくりとである。金の車（二）が邪魔をして、くるしむ。くやしい思いをするが最後にはうまくいく。

－ ● 三

石にくるしむ。茨の上でくるしむ。家にいっても、妻はいない。いいことはない。

－ ○ 二

飲み食いにくるしむ。（君子の服装である）朱色のまえかけが来る。これをもって祭祀を行うにはよい。積極的にでるのはよくない。とがめられることはない。

－ ● 初

切り株にすわり尻が傷み、くるしむ。深い谷に入り3年出ず。

● Keyword / Tips

漏洩／

－ Keyword（20の銘板）

源泉への呼びかけ／ Calling the Source

順番 = 47

－ Keyword（ヴィルヘルム）

Oppression (Exhaustion)

● Image

上卦、沢（水だめ）からちょろちょろ常に水がもれている（下卦）カタチ。水をつぎたしてもどんどん漏れていってしまう。

- Overview

沢は、適度な水量があるときは、目や耳を楽しませる癒しの源泉になるが、水量が多いと荒れ狂う土石流に、水量が少なければ無味乾燥な岩場になる。自分も周囲も健全であるためには、多くも少なくもない、一定のインプットとアウトプットが必要。現状ではでてゆく流れのほうが多そう。エネルギーの収支バランスをチェック。

- 字義

【困】象形。口の形の枠に木をはめて出入りを止める形。

- 遺伝コードとの対応

G G C = G l y（グリシン）

- ライプニッツ・コード

【22】 = (010110) = 0x16

27：沢山「咸」(たくざんかん)・TP = TP17 (365 ページ)



• Legacy

路はひらける。ただしくあればよい。女性をめとるのによい。

－ ●上

上あご、ほほ、舌に感じる。

－ ○五

のどぼとけに感じる。悔いはない。

－ ○四

ただしくあればよく、悔いはなくなる。心定まらず迷い、限られた仲間のみあなたの思いに従う。

－ ○三

腿に感じる。初、二に同調する。すすめばとがめられることがある。

－ ●二

ふくらはぎに感じる。静かにしていればよいが、動くのはよくない。

－ ●初

親指に感じる。

• Keyword / Tips

打てばひびく／乾の包卦

－ Keyword (20 の銘板)

心ひかれるもの／ Mind Attracting

順番 = 31

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Influence (Wooing)

• Image

内卦、外卦の各爻がそれぞれに陰と陽で対応しているカタチ。打てば響く。たがいに感應しあう関係。

• Overview

非常にセンシティブな状態。あなたのよびかけにたいして答えてくれるものが必ずある状況。返答はあなた以外のどこからか、またはあなた自身の中からかえってくる。実はこのつながりは「いつも」私たちと共にあるが、ふだんは、雑事・雑念に

ジャマされて隠れてしまっている。いつもより注意深く、意識的に歩みをすすめよう。

- 字義

【咸】会意。口は、神への祈りの文（祝詞（のりと））を入れる器の形。「戌」は、まさかりであり、祝詞にまさかりをのせて祈りの効力を封じる意味。そのようにしておくと、神が夜中にひそかにあらわれ、祈りに応えてくれるもの、とされた。祈りに対し神の反応があることを「咸」という。おわる（祝詞を封じ終わる）、ことごとく、みな、の意味。「感」となると、こころうごく、おもうの意味になる。

- 遺伝コードとの対応

UAC = Tyr（チロシン）

- ライプニッツ・コード

【14】 = (001110) = 0x0E

28：沢地「萃」(たくちすい)・TP = TP10 (358 ページ)



- Legacy

路はひらけ、王は祭壇に向かう。知恵ある者に相談する。落ち着きあればよし。お
おきないけにえ（そなえもの）をささげるとよい。進んでことをなしてよい。

- － ●上

（嘆き悲しみ）涙と鼻水が流れる。とがめられることもない。

- － ○五

周囲のものを集め、自分の立場を堅くまもる。うわべだけのものも集まるが、
根気よくあれば、悔いることはなくなる。

- － ○四

おおいによし。とがめられることもなし。

- － ●三

小人があつまり、なげきかなしむ。いいところはない。いけばとがめれること
はないが、少しくやしい思いをする。

- － ●二

ひきたてがあり、よいことである。とがめられることはない。誠意が質素であ
ることにあらわれようであればよし。

- － ●初

誠意があってもことは終わらない。ときに乱れ、ときに集まる。もし叫べば手
をひと握りし、笑いを起こす。案ずることなくゆけばよし。

- Keyword / Tips

あつまる／

- － Keyword (20 の銘板)

存在の海／ Ocean of Presence

順番 = 45

- － Keyword (ヴィルヘルム)

Gathering Together (Massing)

- Image

大地が水（沢）をたたえているカタチ。水は大地にしみこみ、乾きをうるおす。

- Overview

必要なもの、人、こと、などが自分のまわりにあつまる。あらゆるチャンスを利用して、コスモスがさしだすプレゼントをもれなく受けるように。包みは積んでおかないで必ずあけてみる。中身をムダにしないためのコツは、贈り物を、自分にも他人にもメリットがあるように活用することである。

- 字義

【萃】形声。「卒」に細かく砕けたもの、散乱するもの、といった意味がある。設文では、草の形であるとあり、草が集まる意味であるとする。

- 遺伝コードとの対応

U G C = C y s (システイン)

- ライプニッツ・コード

【06】 = (000110) = 0x06

31：火天「大有」(かてんたいゆう)・TP=TP06 (354ページ)



- Legacy

路はひけらる。

- ○上

天が手をさしのべる。自然の流れにのっている。

- ●五

二と心がつうじる。威厳をもって交流すればよい。

- ○四

その勢いをおさえてちょうどよい。

- ○三

五に貢物を差し出す。度量のないものはそれができない。

- ○二

大きな車にたくさんの荷物。そのまま進めてもとがめはない。

- ○初

おごり、たかぶりにかかわらず、苦しみ、自戒すれば、あやまちはない。

- Keyword / Tips

豊富であること／帰魂卦

- Keyword (20の銘板)

人々の知恵／Wisdom of the People

順番 = 14

- Keyword (ヴィルヘルム)

Possession in Great Measure

- Image

日(上卦の離)、天(下卦の乾)高くのぼり、あまねく世界を照らす。なにごととも大いによし。大きく有する。パイの大きさは無限。ケチるな。

- Overview

日は高く昇り、まちのぞんでいた収穫の時。遠慮することなく、たわわに実った果実をかりとる。おそらく、自分ひとりではたべきれない量があり、そんなときはその豊かさを他の人とわかちあい、来年の収穫にむけて種をまいておくといい。そう

しておけば、天と地は一致協力して、来年にはふたたび持ちきれないほどの豊かさをもたらしてくれる。

- 字義

【大有】

→大

「81：泰（331 ページ）参照」

→有

会意。又（ゆう）と、月の組み合わせ。又は右手の形、有は神に供える肉を右手に持って捧げる形。肉を手を持つ、すなわち、もつ、たもつ、ある、の意味になる。

- 遺伝コードとの対応

AAG = Lys（リジン）

- ライプニッツ・コード

【61】 = (111101) = 0x3d

3 2 : 火沢「ケイ（火沢ケイ＜目へんに癸＞）」（かたくけい）・ T P = TP13（361 ページ）



- Legacy

ちいさなことにはよい。

- ○上

そむいて孤独である。どろだらけのブタや、鬼を満載した車をみる。思わず弓をひこうとするが、のちに弓をゆるめる。敵対するのではなく和合しようとしている。（陰陽和合の）雨にあう。よいことである。

- ●五

悔いることはなくなる。同族どうし肌をかみあわせるような深い関係にある。あやういがとがめられることはない。

- ○四

そむいて、もと夫と会い、信頼をわかちあう。あやういがとがめられることはない。

- ●三

車は後から引かれ前から止められる。髪切り、鼻切りの刑に会う。はじめわるいがおわりにはよい。

- ○二

主人に街の路地で会う。とがめられることはない。

- ○初

悔いはなくなる。馬を失っても追わないこと。自分でかえってくる。悪人に会うようなことがあっても寛大な心であればとがめられることはない。

- Keyword / Tips

そむく／坎の包卦

- Keyword（20 の銘板）

識別力／Discriminating

順番 = 38

- Keyword（ヴィルヘルム）

Opposition

- Image

ささいなことは OK だが、重要なことは NG。中女（上卦）と少女（下卦）が同じ家の中で反目しあっている。

- Overview

方針、方向などがことなる二者が、ひとつ屋根の下に同居している。今は違いが表面化しているのでそれが大きな悩みになっているかもしれないが、よく考えれば、すべてはコスモスの一部分である。方向、方針などを無理にあわせるよりも、ありのままを認める。そもそも、すべてはそれぞれコスモスの「異なった」部分である。多様性は豊かさの原動力でもある。

- 字義

【ケイ（目へんに癸）】形声。癸は、物をたてる台座の下につける足組として、×形に組んだ木の形で、あいそむくもの、の意味がある。ケイは乖離の意味があるが、易卦の名前以外に古い用例はない。

そむく、敵対する。

- 遺伝コードとの対応

A G G = A r g（アルギニン）

- ライプニッツ・コード

【53】 = (110101) = 0x35

33 : 「離」 為火（りいか）・TP = TP02（350 ページ）



- Legacy

ただしくあれば、路はひらける。雌牛のような柔順さがあればよい。

- － ○上

王の出兵、首をとる。己に同調せぬものをとらえる。とがめられることはない。

- － ●五

とめどなく涙をながし、憂い、なげく。

- － ○四

突如としてそれ来たり。焼かれ、殺され、棄てられる。

- － ○三

日は沈みかけている。粗末な楽器をたたいてもだれも歌わないのであれば、そこには老いのなげきしかない。

- － ●二

中央の黄色がついている。おおいによろしい。

- － ○初

足もとがおぼつかない。これを慎めばとがめられることはない。

- Keyword / Tips

浄化／純卦

- － Keyword（20 の銘板）

ヴィジョンの太陽水晶／ Vision Sun Crystal

順番 = 30

- － Keyword（ヴィルヘルム）

The Clinging, Fire

- Image

光、明かり。文明・技術またはそれに関すること。書類・文書なども文明の産物のためその意味に含まれる。光に関するもの、窓や目など。明確化する、明るみに出る。「離」は光と闇が区分されるという意味。火は単独では存在できないため、くっつく・付着するなどの意味もある。

- Overview

火。光。隠れていたものが明るみにでる。明るみにあるものとそうでないものが明

確に区分される。区分されても照らされたものとそうでないものはそれぞれコスモスの部分であることに変わりはない。永久に分離されたわけではない。一時、区別されただけである。それをわかった上で、「火」をかしこく使う。

- 字義

「八卦リスト」の「離 (202 ページ)」を参照してください。

- 遺伝コードとの対応

C A G = G l n (グルタミン)

- ライプニッツ・コード

【45】 = (101101) = 0x2d

34 : 火雷「噬ゴウ<口へんに盍>」(からいぜいごう)・T P = TP28 (376 ページ)



- Legacy

強硬手段で路を開く。

- ○上

首カセが耳を傷つける。

- ●五

乾肉をかみ、中に黄金を得る。慎重に、おちつきあれ。

- ○四

乾肉をかみ、中に金属の矢じりを得る。悩むが、おちつきあれ。

- ●三

骨付き肉をかみ、毒にあたる。

- ●二

鼻が見えなくなるほど、軟い肉を強くかみすぎる。

- ○初

足カセが、足を傷つける。

- Keyword / Tips

かみくだく／

- Keyword (20 の銘板)

わき起こるヴィジョン／ Arousing Vision

順番 = 21

- Keyword (ヴィルヘルム)

Biting Through

- Image

初と上の陽爻が、中間の異物（四の陽爻）をかみくだくカタチ。障害を除く。動いて（下卦）、あきらかになる（上卦）。

- Overview

障害と相対し、取り除く。それがなんであるにせよ、いつまでもそこにいすわらせていい理由はない。その障害もほうっておけば消え去っていくものなのかもしれないが、それをまっている時間がない。障害を取り除く動機は、慎重にチェックする

必要がある。その動機がコスモスの流れに沿ったものである確信があるのなら、自信をもって行動する。

- 字義

【噬ゴウ<口へんに壺>】

噬→

形声。音符は筮（ぜい）。かむようにしてたべること。

壺→

象形。器（皿）の上にフタ（去）をする形。おおう。あう。総じて、かみあわせること。

- 遺伝コードとの対応

C G G = A r g（アルギニン）

- ライプニッツ・コード

【37】 = (100101) = 0x25

35：火風「鼎」(かふうてい)・TP=TP30(378 ページ)



- Legacy

おいによりしい。路はひらける。

- － ○上

ナベに玉(ぎょく)でできた運び棒がついている。わるいことがあろうはずはない。

- － ●五

ナベに黄色の取っ手と、金の運び棒がついている。ただしくあればよろしい。

- － ○四

ナベの足が折れ、目上の人への食事をひっくりかえす。その刑罰は重く、よろしくない。

- － ○三

ナベの取っ手がとれて運べない。キジの脂身もたべられない。やがて雨がふり(陰陽和合)悔いることはなくなる。最後にはよくなる。

- － ○二

ナベに料理あり。仲間に病あり。自分にうつることはない。

- － ●初

ナベ逆さにし、底のカスをだす。側室を得てあとつぎができる。とがめられることはない。

- Keyword / Tips

三点／

- － Keyword (20 の銘板)

時間の変容 / Transformation of Time

順番 = 50

- － Keyword (ヴィルヘルム)

The Caldron

- Image

初爻は入れ物についた足、二、三、四爻は入れ物本体、五爻は入れ物についた耳、上爻は、入れ物を運ぶための棒で、全体で鼎(なべ)をあらわすカタチ。足つきの入れ物＝安定、足三本＝三つの支え、なべ＝熟成、あわてずゆっくり料理する。

- Overview

安定した状態。大切なのはバランス。三つの足のうちどれかひとつが欠けてしまうと、ナベはひっくりかえり料理は台無しになる。三つの支えに均等に重さが加わることで、だれひとりとして単独ではなしえなかったおおきな成果を得る。

- 字義

【鼎】象形。かなえの形。説文には、「三足両耳、五味を和するの寶器なり」とある。鼎の形の器は神意を問う卜問に用いられたり、また、王の権威を示す宝器とされた。

- 遺伝コードとの対応

G A G = G l u (グルタミン)

- ライプニッツ・コード

[29] = (011101) = 0x1d

36：火水「未済」（かすいびせい）・TP = TP23（371ページ）



- Legacy

路はひらける。子狐がほとんど河を渡り終えたところで尾をぬらす。よろしきところなし。

- － ○上

誠を胸に悠然と酒を飲む。とがめられることはない。首までつかるほど飲めば、誠あってもこれをうしなう。

- － ●五

正しくあればよし。悔いはない。君子の光あり。誠あり。よろしい。

- － ○四

正しくあればよし。悔いることはなくなる。動き、鬼方を攻め、三年目にして賞せられることあり。

- － ●三

ことがまだ済まない。積極的にでるときではない。（十分に準備すれば）大河をこえていくのもよい。

- － ○二

車輪を引き戻す。正しくあればよし。

- － ●初

その尾をぬらす。

- Keyword / Tips

カオス／

- － Keyword（20の銘板）

準備／Prepared

順番＝64

- － Keyword（ヴィルヘルム）

Before Completion

- Image

すべての爻が不正な位置にあるカタチ。混沌としてまとまりのない感じ。カオスであり、形になっていないあらゆる可能性がある。

- Overview

未知。混沌。とはいえ、混乱状態ではない。具体的な結果、または成果があらわれるまえの「可能性」が満ちている状態である。できるかぎり、「思いこみ」や「執着」を低くおさえて、あらゆる可能性に心を開く。たいていの場合答えは、まったく思いもよらなかったところからもたらされる。

- 字義

【未済】

→未

象形。枝が茂っている木のカタチ。「いまだ、いまだ ～ ず」の意味に用いるのは字の音だけを借りて別の意味をあらわす用法（仮借義（かしやぎ））である。

→済

「63：既済（303 ページ）」を参照してください。

- 遺伝コードとの対応

UAG＝終止コドン

- ライプニッツ・コード

【13】＝（001101）＝0x0d

37 : 火山「旅」(かざんりょ)・TP = TP16 (364 ページ)



- Legacy

路は少しひらける。ただしくあれば、得るところのある旅になる。

- ○上

鳥、その巣を焼かれ、旅人、はじめ笑っていたが、後になきさけぶ。牛を土地の境界でみうしなう。よろしくない。

- ●五

キジ（美しい鳥＝離）を射て、一矢うしなうが、最後には誉あり。

- ○四

腰を落ち着ける場所を見つける。金と斧を得るが、あまり愉快ではない。

- ○三

宿焼かれ（離に近い）若者は逃げる。あやうい。

- ●二

宿に着き、路銀を懐に人足の若者を雇う。

- ●初

旅に出て落ち着かない（こせこせ動く）。それが災いを招く。

- Keyword / Tips

移りゆくこと／

- Keyword (20 の銘板)

航行／Voyaging

順番 = 56

- Keyword (ヴィルヘルム)

The Wanderer

- Image

山の上にちらつくひとつのかがり火。宿屋の明かりか、旅人のかざすランプの明かりか。山から山へうつろいゆく困難の旅路。

- Overview

山から山へ移ろいゆくあかりは、旅人が彼の行く道をかざすあかりである。心細い状況だが、はじめからおわりまでのすべてが完全に最初から決まっている旅はない。その道には危険もあるし、全体としてはつらい道のりとなる。しかし、それで

もなお、コスモスのはたらきを信じて、フローに身をまかせることが、結局は目的地への一番の近道である。

- 字義

【旅】会意。氏族の旗と、それを掲げて進む人々（氏族）のカタチ。氏族旗をかか
げて進む氏族の軍団、また、遠くへ行くことを「旅」といった。古くは山や川の神
を祭るため、あるいは分社を祭るとき旅をした。

- 遺伝コードとの対応

UAG = 終止コドン

- ライプニッツ・コード

【13】 = (001101) = 0x0d

38 : 火地「晋」(かちしん)・TP = TP09 (357 ページ)



- Legacy

馬をほうびとし、諸侯にたびたびあたえる。昼間に三度も諸侯に接見する。

- ○上

そのツノにまで進む。自分の領土内を鎮める分にはとがめられることはない。

征伐にこだわると悔いがのこる。

- ●五

後悔はなくなり損得を心配する必要はなくなる。おおいに進んでよし。

- ○四

食欲な大ねずみ。ただしくともあやうい。

- ●三

初爻、二爻から信用され、悔いることがなくなる。

- ●二

進みたいが、憂いあり。ただしくおちつきあれば五爻から大きな福を受ける。

- ●初

進んでも打ち砕かれる。たとえ相手から信じられなくても心をゆったりと保っていればよい。

- Keyword / Tips

夜明け／遊魂卦

- Keyword (20 の銘板)

心のひろがり／Mind Expanding

順番 = 35

- Keyword (ヴィルヘルム)

Progress

- Image

地平線(坤)から、太陽(離)が昇りつつあるカタチ。ようやくはじまる。これからはじまる。

- Overview

日は昇り、大地を照らす。まちのぞんでいた夜明け。人から認められたり、賞をもらったりするようなことがあるかもしれない。贈り物はすなおに受け取るが、あま

りはしゃぎすぎないように。日は昇り、時がたてばまたしずむ。大切なのは、その時々状態ではなく、日を運行させ、夜明け、朝、昼、夕、夜、というサイクルをつくりだしている法則の方である。この法則があるからこそ、日は沈み、沈んでもまた登ってくる。

- 字義

【晋】象形。矢の鋳型の形。上部はヤジリをならべた形。下部、日の部分は鋳型の湯口。ヤジリをつくる鋳型なのでもともとヤジリを意味した。もとの象形文字が忘れられ、晋国の晋や、易の晋ではこの字をまったく別の意味で用いている。矢、晋＝進、進む。

- 遺伝コードとの対応

U G G = T r p (トリプトファン)

- ライプニッツ・コード

【05】 = (000101) = 0x05

4 1 : 雷天「大壮」(らいてんたいそう)・TP = TP07 (355 ページ)



• Legacy

行き過ぎず落ち着きあればよし。

－ ●上

生垣につっこむオス羊、角をとられ、進めもせず、もどれもせず。よいことな
しだが、くるしみなやめばやがてひらける。

－ ●五

かの羊、原野の境に消える。悔いることはない。

－ ○四

ただしくあればよく、後悔することはなくなる。生垣はひらけ羊は解放され
る。車と車軸はしっかりと結ばれ、大きな車が走り出す。

－ ○三

凡人はいさみ足になるが、君子はそうはならない。オス羊が生垣につっこみ角
がひっかかり、苦しむ。

－ ○二

正しくあればよし。

－ ○初

足ははやっていさみ足。はやってすすむのはよくない。

• Keyword / Tips

鳴り物入り／十二消長卦(3月)、大兌

－ Keyword (20の銘板)

祈り／Prayer

順番 = 34

－ Keyword (ヴィルヘルム)

The Power of the Great

• Image

天高くとどろく雷鳴。声あってカタチなし。おおげさ。おおぶろしき。いきおいの
み。騒ぐ必要はなし。いさみ足。

• Overview

かなしみにうちひしがれて落ち込むこと。よろこびのあまり有頂天になること。どちらもストレスである。よいことにせよ、わるいことにせよ、感情におぼれないこと。徹頭徹尾、しっかりと感情をとらえることができるのは、冷静な意識だけ。この意識で、あらわれてはきえていく感情をしっかりと「観」る。

- 字義

【大壮】

→大

「81：泰（331 ページ）」を参照してください。

→壮

形声。音符は𠂔（壮の左部）。𠂔は足のついた机でそこに肉を供えて戦勝祈願を行った。その肉を携えて軍をひきいる人を将、将軍とする。士は、戦士をあらわすまさかりの先の形。総じて、戦士、軍の中核をなす軍人を指す字であったものと思われる。意味はそこから、さかん、つよい、などになる。

- 遺伝コードとの対応

AAU=Asn（アスパラギン）

- ライプニッツ・コード

【60】 = (111100) = 0x3C

4 2 : 雷沢「帰妹」(らいたくきまい)・TP = TP14 (362 ページ)



• Legacy

積極的に動くのはよくない。いいところがない。

－ ●上

女がカゴを受け取るが中身はカラ。男が羊を裂くが、血がでない。よいところなし。

－ ●五

帝乙（殷の天子）が、その妹を嫁がせる。その衣は、つき嫁には及ばない。月、望に近し。よろしい。

－ ○四

嫁ぐ時期をのがした。待てば、嫁ぐ時期はやってくる。

－ ●三

嫁ごうとするが、またされる。もどって、つき嫁として嫁ぐ。

－ ○二

目の不自由なものがよくみる。隠者のようにただしくあればよい。

－ ○初

嫁ごうとするが、つき嫁（補佐）となる。足の不自由な者がよくある。いってよろしい。

• Keyword / Tips

犠牲／帰魂卦、「81：泰」卦がくずれたカタチ。

－ Keyword (20 の銘板)

超越／Transcending

順番 = 54

－ Keyword (ヴィルヘルム)

The Marrying Maiden

• Image

うって出るときではない。一時にかを犠牲にする必要がある。長男（上卦）につきしたがう少女（下卦）。

• Overview

ものしろ、ことにしろ、ひとにしろ、中身がともなわず落ち着きがない。あわてて行動をおこさずに、多少の犠牲がともなっても、一歩ひいてなりゆきをよく観察する。どうしても行動を起こさざるを得ないときは慎重に。冷静に機をみる。

- 字義

【帰妹】

→ 帰

会意。軍が無事に帰還したことを祖先の霊に報告する儀式。へんは供物としての肉であり、つくりは廟を清めるために酒をふりかけて使うホウキの形。帰はもともと軍隊が帰る意味だったが、後に軍隊以外のものにも「帰る」意味として用いるようになった。

→ 妹

形声。音符は「未（び）」。いもうと。女兄弟。昧（くらい）と通じる。

- 遺伝コードとの対応

A G U = S e r（セリン）

- ライプニッツ・コード

【52】 = (110100) = 0x34

4 3 : 雷火「豊」(らいかほう)・TP = TP21 (369 ページ)



- Legacy

路ひらける。王は豊む。憂うことなく、日中の太陽のようであれ。

- ●上

屋根を大きくして、その家を日よけでおおう。中をのぞくとひっそりとして人がいない。三年たってもその家の人に会うことはない。よろしくない。

- ●五

賢人を招き、慶びと栄誉がある。よろしい。

- ○四

日よけ大きくする。日中に星（北斗七星）を見る。自分と実力の等しい主人（初）と会う。よろしい。

- ○三

さらに大きな幕でおおう。日中にちいさな星も見える。その右腕を折る。とがめれることはない。

- ●二

日よけを大きくする。日中に星（北斗七星）を見る。いけば疑われにくまれる。誠意をもって啓発すればよし。

- ○初

配属されてきた主人（四）と会う。陽どうしで実力は同じ。とがめられることはない。

- Keyword / Tips

豊穰／

- Keyword (20 の銘板)

知恵がわきおこる／ Wisdom Arousing

順番 = 55

- Keyword (ヴィルヘルム)

Abundance (Fullness)

- Image

豊かであること。受け取れ。そして分け与えよ。雷と火が同時にきて天地が明るく照らされる。(すばやい) 動き (上卦) があって、豊か・明らか (下卦) になる。

- Overview

豊かさの内容をよく点検する。それが外部からの評価や、なにかカタチあるものに依存している場合は、豊かであるとはいえない。もし、なにかが「惜しい」「もったいない」という感覚があるなら、自分も流転するコスモスの一部であることを思い出すように。もし、自分はまだ豊かでない、というのなら、自分が今手にしているものをよく点検する。

- 字義

【豊】象形。下部の「豆」は脚の高い食器で、この中にたくさんのきびなどを盛って入れた形。おい、ゆたか、さかん。

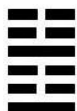
- 遺伝コードとの対応

CAU=His (ヒスチジン)

- ライプニッツ・コード

[44] = (101100) = 0x2c

44 : 「震」 為雷 (しんいらい) ・ TP = TP01 (349 ページ)



- Legacy

路はひらける。最初は恐ろしく後には笑う。音すさまじいがおちつきあれ。

- － ●上

まったく意気消沈、そわそわきよろきよろ。衝撃を受ける前に覚悟しておく。

他三陰爻と組むには難あり。

- － ●五

ゆくももどるもあやうく、思慮深くあることのみ。

- － ○四

その衝撃に動けず。

- － ●三

その衝撃に茫然自失。だがおそれず、あえてゆくがよい。

- － ●二

恐くなって財を失い、丘に逃げる。追わずとも、財、七日にしてもどる。

- － ○初

最初恐ろしく後には笑う。

- Keyword / Tips

動き／純卦

- － Keyword (20 の銘板)

雷/わき起こる存在 / Thunder/Arousing Being

順番 = 51

- － Keyword (ヴィルヘルム)

The Arousing(Shock, Thunder)

- Image

おおきな動きや変化があるが、たいていの場合はみかけだおしで終わる。急な変化。声あってカタチなし（実質がともなわない。かけ声だけ）。

- Overview

動き、音、あるいはショック。おどろくようなことがあるが、冷静に。一時の激しい動きにとらわれないように。なにごととも過大評価しない。そうすればカラ騒ぎせずむ。悩みにしろ仕事にしろ結局のところは自分と等身大のはず。

- 字義
「八卦リスト」の「震 (204 ページ)」を参照してください。
- 遺伝コードとの対応
CGU = A r g (アルギニン)
- ライプニッツ・コード
[36] = (100100) = 0x24

45：雷風「恒」(らいふうこう)・TP = TP29 (377 ページ)



- Legacy

路はひらける。とがめられることはない。ただしくあればよい。すすんでよい。

- ●上

常にふらつく。

- ●五

常に変わらぬ徳あり。女性にはよいが男性にはよくない。

- ○四

狩りして獲物なし。

- ○三

恒常性がなく、その徳がふらつく。恥をかかされる。正しくあっても、とがめられることがある。

- ○二

悔やむことはなくなる。

- ●初

相手にかわらぬことを求めすぎる。正しくあったとしてもよいところはない。

- Keyword / Tips

不変／ 81:泰の交代生卦、乾の包卦

- Keyword (20 の銘板)

心の永続／ Mind Enduring

順番 = 32

- Keyword (ヴィルヘルム)

Duration

- Image

風(下卦)、動き(上卦)で、いずれも変化をあらわすが、全体では逆に変わらないものを示す。つまり「変化すること」は変わらない。

- Overview

すべてが常に移り変わっていくのは、コスモスの法則である。流れに逆らう行動や、考え、感情はすべて苦しみをもたらす。いい状態もわるい状態もずっとそのままということはない。唯一変わらないのは、「すべては変わる」というコスモスの

法則だけ。

- 字義

【恒】形声。もとの字は亘で、上下の線の上に月が描かれた形。月は満ち欠けをくりかえすが、なくなってしまうことはないので、変わらぬもの、という意味を得たのであろう。一定、久しく変わらないこと、きまったやり方、などの用例がある。

- 遺伝コードとの対応

G A U = A s p (アスパラギン酸)

- ライプニッツ・コード

【28】 = (011100) = 0x1C

46：雷水「解」（らいすいかい）・TP = TP22（370 ページ）



- Legacy

西南によい。いくところがあれば、もどって、よし。いくところがあるなら、はやく行って、よし。

- ●上

高塚の上のハヤブサ（害鳥）を射る。よくない、ということはない。

- ●五

君子が問題を解決する。小人が誠意をもってしたがう。

- ○四

足の親指を切り離す。誠意をもつ友があらわれる。

- ○三

けちな人物が大きな荷物を背負い、かつ車に乗り、分不相応。

- ●二

狩をして 3 匹の狐を得る。その腹から黄金の矢じりを得る。

- ○初

とがめられることはない。

- Keyword / Tips

ほどける／離の包卦

- Keyword（20 の銘板）

ハートの解放／Hart's Release

順番 = 40

- Keyword（ヴィルヘルム）

Deliverance

- Image

水（下卦、坎）と、雷が（上卦、震）呼応し雷雨が万物を生育、解放する。悩み、契約、なんらかの決め事が解消される。よくもわるくも、「解ける」ことがポイント。

- Overview

とける。ほどける。これにもふたつの側面がある。いままで組んでいた手や関係がほどけること。もうひとつは、問題や悩みがとけること。いま体験していることは新しい状況・新しい可能性がひらける段階に達したしるしである。「いい、わるい」

のこだわりを越えて、新しいステップへの準備をおこたらないように。

- 字義

【解】会意。角と刀と牛を組み合わせた形。牛の角を刀で切り取ること。解と釈は獣の角を切り取り、肉を取り分けて解体するのがもとの意味。とく、とかす、とける。

- 遺伝コードとの対応

G G U = G l y (グリシン)

- ライプニッツ・コード

【20】 = (010100) = 0x14

47：雷山「小過」(らいざんしょうか)・TP = TP15 (363 ページ)



• Legacy

路はひらける。ただしくあればよい。小事には可だが大事には可でない。飛ぶ鳥が音を遺す。それ以上、上昇するのはよくないが、下降するのはよい。おおいによろしい。

－ ●上

人と会うこともなく通り過ぎる。飛ぶ鳥が網にかかる。人災であり天災である。

－ ●五

西より雲は低く集まってきたが恵みの雨は降らず。王は、糸のついた矢をはなち、穴の中の獲物を取る。

－ ○四

とがめられることはない。行き過ぎずに人と会う。すすむのはあまりよくなく、かたくなに過ぎればあやうい。

－ ○三

長じてくる陰（初、二）の攻めを防ぐ。放置しておくとも問題が大きくなる。

－ ●二

祖父（四爻）の前を過ぎ祖母（五爻）に会う。君主までいかず、大臣に会う。このようにすればとがめられることはない。

－ ●初

飛ぶ鳥。高く飛ぶのはよくない。

• Keyword / Tips

少し過ぎる／遊魂卦、大坎

－ Keyword (20 の銘板)

Inner Time / 内なる時間

順番 = 62

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Preponderance of the Small

• Image

上下の4陰を翼、中心の2陰を胴体として、空を行く鳥のカタチ。ただ、少々高く飛びすぎた。これ以上無理をしてはならない。滑空し、下るによし。または、4陰が2陽より「過ぎる」カタチ。

- Overview

山のいただきをめざしていたはずが、少々勢いがすぎて、虚空へ飛び出した。いまならまだ、自分のあしもとをふりかえって、本来の目的地にもどることができる。行き過ぎに注意。いまここで、思い切った行動なり決断をするには、少々時期尚早。いま、ほんとうにこれ以上の高みに昇ることが必要なのか、自分自身によく問いなおしてみる。

- 字義

【小過】

→小

象形。小さいものが散乱しているカタチ。そのものが小さく、少ないために、「ちいさい、すこし」の意味になる。散乱しているものはおそらく貝で、貝は古くから呪器、貨幣、装身具として使われた。

→過

「25：大過（243 ページ）」を参照してください。

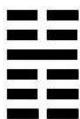
- 遺伝コードとの対応

U A U = T y r (チロシン)

- ライプニッツ・コード

【12】 = (001100) = 0x0C

48：雷地「豫」（らいちよ）・TP = TP08（356 ページ）



● Legacy

各リーダーをたてて、軍を派遣するのによい。

－ ● 上

よろこびにめがくらむ。そこから目覚めることができれば、失敗しないだろう。

－ ● 五

持病があるが、大事に至らず死ぬこともない。

－ ○ 四

四をたよりに集まる。おおいに得ることあり。五を疑うことなかれ。友集まる。

－ ● 三

四を上目にみながらよろこぶ。かえりみること遅ければ悔い残る。

－ ● 二

石のように固く、はしやがず。日を终えずしてことをなす。

－ ● 初

四に応じ、よろこびが隠せず、困る。

● Keyword / Tips

よろこび／

－ Keyword（20 の銘板）

人々の凱旋／ The People Triumph

順番 = 16

－ Keyword（ヴィルヘルム）

Enthusiasm

● Image

大地の上、雷鳴がとどろき大地を奮い立たせるカタチ。動いて、よろこびを得る。

● Overview

よろこびのとき。はしやぎすぎにならないように。状況はいままさにはじまったばかりで、そこから本当の成果をつみ取るには時間がかかる。とはいえ、先のみえなかったいままでとはちがって、条件にさえ気をつけてやれば結果を得ることができる。その新芽に水をやり、十分な光と肥料をあたえてやる。

- 字義

【豫】形声。豫は予の旧字。心に迷って決しかねることを猶予というが、猶は神意をはかる意味であるから、豫が象（殷代には中国に生存していた [45]）によって将来のことを占う意味であろうが今は確かめることはできない。豫で「たのしむ」の意味にとる用例は書経にみられる。総じて、たのしむ、よろこぶ、あらかじめの意味。

- 遺伝コードとの対応

U G U = C y s （システイン）

- ライプニッツ・コード

【4】 = (000100) = 0x04

5 1 : 風天「小蓄」(しょうちく)・TP = TP08 (356 ページ)



● Legacy

小畜、よきかな。恵みの雨まであと一歩、風天高くまう。 四が五陽をひきとめる。陰の力が弱い。

－ ○上

雨がふったりやんだりする（陰陽和合）。陽（主人）が陰（女性）を尊び、積み重ねる。女性（陰）は正しくしていても（陰が過ぎるのは）あやうい。月は望にちかい。

－ ○五

誠意があり、協力しあい、富をわけあう。

－ ●四

誠意がある。憂いなくおそれもなくなる。とがめられることはなくなる。

－ ○三

車の車輪がはずれ、夫婦が反目する。

－ ○二

引っ張って、復（かえ）る。よろしい。

－ ○初

復（かえ）って正しい道につく。どうしてとがめられることがあるだろうか。よいことである。

● Keyword / Tips

たちどまる／五爻を変えると「7 1 : 大畜」に

－ Keyword (20 の銘板)

修練 / Discipline

順番 = 09

－ Keyword (ヴィルヘルム)

The Taming Power of the small

● Image

風が空高くを吹き渡っている。やがてあなたのところにも吹いてくるが……まつ。またされる。しかし、長くはまたされない。すこしまたされる。

● Overview

風は天高く舞い、世界をかけめぐっているがまだ降りてこない。恵みの風がやってくるまでは、しばらくまたなければならない。ここで無理強いをしようとすると、せっかくの転機が失われかねない。もうすこしまてば、必ず新しい可能性、新しい状況がみえてくる。

- 字義

【小畜】

→小

「47：雷山小過（279 ページ）」を参照してください。

→畜

会意。玄と田を組み合わせた形。玄は糸束をねじった形。田は染め汁をいれたナベの形。染め汁に糸束をひたして染色することを畜という。長い時間漬けて色を深くするので、つみかさねる、とどめる、たくわえるの意味。

- 遺伝コードとの対応

A C A = T h r (トレオニン)

- ライプニッツ・コード

【59】 = (111011) = 0x3B

52：風沢「中孚」(ふうたくちゅうふ)・TP = TP15 (363ページ)



• Legacy

豚や魚にまで通じる誠心があり、よろしい。大河をわたってもよい。ただしくあればよい。

－ ○上

飛べない鳥（鶏）が飛ぼうとする。正しくあってもよくない。

－ ○五

誠意があり、お互い手を取りあう。

－ ●四

月、望に近し。馬が仲間から離れる。とがめられることはない。

－ ●三

敵にであう。あるいは攻め、あるいは退き、あるいは泣き、あるいは歌う。

－ ○二

物陰で鶴が鳴けば、子がそれに応じる。我によき杯あり。我なんじとともにこれをともにせん。

－ ○初

心安らかであればよし。他に心がうばわれるようであれば、安らかではられない。

• Keyword / Tips

核心／遊魂卦、大離

－ Keyword (20の銘板)

内なる空間／Inner Space

順番 = 61

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Inner Truth

• Image

まことあればなにごとにも相つうず。上下卦が、たがいの口をくっつけているカタチ。大離であり、外見は強そうに見えても中身がともなわないケースも。

• Overview

もっとも近いもの、自分の心をみつめる。外部のできごと、他人が想うこと、他人の言動などはコントロールできない。それにはかまわずコントロールできるものに集中する。それは自分の心であり、ものの考え方であり、行動である。自分の中心にしっかりと錨をおろしてさえいれば外部の状況に左右されることなく一貫した行動がとれるようになる。

- 字義

【中孚】

→中

象形。旗のカタチ。殷王朝の軍は左軍、中軍、右軍に分かれたが、この旗は元帥のいる中軍の旗。中央、まんなか、物事のなかば、こころのうち、など。

→孚

会意。爪と子。爪は、手で上から押さえるカタチ。手で子をとらえるカタチ。かえる、とらえる、まこと。孚（まこと）は経文に頻出するが、本書では 誠意・誠心の意味として記述した。

- 遺伝コードとの対応

AUA = Ile (イソロイシン)

- ライプニッツ・コード

【51】 = (110011) = 0x33

53：風火「家人」(ふうかかじん)・TP=TP22(370 ページ)



• Legacy

ただしく、女らしくあればよい。

－ ○上

誠意と威厳があれば、ついにはうまくいく。

－ ○五

王が女性(二爻)の家をおとずれる。心配はない。

－ ●四

家が富む。たいへんよろしい。

－ ○三

家のものが悲鳴をあげるほど、きびしいのはよくないが、騒々しくなるほど、甘やかすのもよくない。

－ ●二

さきだって行わず、分限を守る。

－ ○初

乱れをふせぐ。そうすれば悔いることはなくなる。

• Keyword / Tips

家／坎の包卦

－ Keyword (20の銘板)

家庭の力／Power of the Home

順番＝37

－ Keyword (ヴィルヘルム)

The Family (The Clan)

• Image

家族。家庭。煮炊き、ふいご(上卦、風)で、火(下卦)をおこすカタチ。家族に何らかのかたちで関係している。あるいは、答えを求める者自身の家庭の中にカギがある。

• Overview

ホームグラウンド。軸足を置く場所。それは家庭かもしれないし、特定の雰囲気な

のかもしれない。現状を、そのホームグラウンドにいるときと比べる。それが「あまりにも」かけはなれていると、実力を発揮することがむづかしくなる。ホームグラウンドにいるときにくつろげる理由をよく考え、それを現状に応用することが問題解決の鍵になる。

- 字義

【家人】

→家

会意。家を示す宀と、豕（シ）を組み合わせた形。家は先祖をまつる神聖な建物である廟のこと。豕は生け贄として殺された犬の形。廟のような神聖な建物を建てる時にはまず犠牲を埋めて、その土地の神が怒らないよう地鎮を行う。家はもともと先祖をまつる廟であるが、これを中心として家族が住んだので人の住む「いえ、住居」の意味になった。

→人

象形。立っている人を横から見た形。ちなみに、大→手足を広げて立っている人を正面から見た形、光→人が頭上に火の光を乗せている形、兄→神への祈りの文である祝詞（のりと）を頭に乗せた形、企→かかとをあげてつま先立ちしている人を横から見た形。

家人で、家の人、家庭の人。

- 遺伝コードとの対応

CCA = Pro（プロリン）

- ライプニッツ・コード

【43】 = (101011) = 0x2B

54：風雷「益」(ふうらいえき)・TP = TP29 (377 ページ)



● Legacy

進んでことをなしてよい。大河を越えていってもよい。

－ ○上

あたえようとするものがない。攻撃を受けたりする。心は落ち着かず、よいことはない。

－ ○五

真心をもって恵みを与える。問われるまでもなく、おおいによろしい。誠意があるので下の者もこの徳を恵みとして受け入れてくれる。

－ ●四

中道を行き、公（五爻）に聞き入れてもらえらる。公に従い、国を移すとよい。

－ ●三

困難をもって得るところあり。とがめられることはない。誠意をもって中道をいき、玉をもって（誠意を示して）公（四爻）に告ぐ。

－ ●二

五爻からほどこしをうける。高価な大ガメを得る。この甲羅で占すれば吉凶たがうことなし。ながく、ただしくあればよし。王（五爻）はこれをもって（二爻を登用して）帝に祭る。

－ ○初

大仕事をしてもよい。おおよいによい。とがめられることはことはない。

● Keyword / Tips

ほどこし / 18：否の交代生卦、坤の包卦

－ Keyword (20 の銘板)

レディオソニックの道 / Radiosonic Way

順番 = 42

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Increase

● Image

利益。得すること。「上」から「下」へのほどこし。上からの利益がある。君主が損して人々が助けられる。人から利益を得る。おとしもの（風（上卦）と動き（下

卦) で、たいていの場合は帰ってこない)。

- Overview

人から助けられるのは決して不名誉なことではない。時には誰かの助けを借りなければ前進できない局面もある。そんなときは卑屈にならず、かといって、それが当然だ、などといった顔もせず、自然に、受け取るものを受け取る。万物は流転する。いずれあなたが与える側にまわるときがやってくる (72 : 損)。

- 字義

【益】この文字の字義にはふたとおりの系統がある。

1. 会意。水と皿を組み合わせた形。皿の上に水があふれている形で、水があふれることから、ます、増加するの意味になった。
2. 象形。二股にわかれた糸の先をくくった形。

- 遺伝コードとの対応

C U A = L e u (ロイシン)

- ライプニッツ・コード

【35】 = (100011) = 0x23

55：「巽」為風（そんいふう）・TP = TP01（349 ページ）



- Legacy

隙間からすこしだけつうじる。知恵あるものに会う。

- ○上

ベッドの下にはいつくばるほど従う。斧も金もうしになってしまう。

- ○五

はじめ悪いが終わりよし。先んずること三日、後るること三日、熟慮を要す。

- ●四

悔やむことなくなる。狩して3種の獲物をえる。

- ○三

しきりに従う。

- ○二

ベッドの下にはいつくばるほど従う。神託をきき誠心を伝えればよし。

- ●初

進み、そして退く。武人のようであれ。

- Keyword / Tips

スピリット（息吹）／純卦

- Keyword（20の銘板）

呼吸の心／Mind of Breath

順番 = 57

- Keyword（ヴィルヘルム）

The Gentle

- Image

風。情報。隙間から入り込む（入り込んだ）もの。

吹き降ろすイメージから、上から下への命令という意味もある。

- Overview

外にも内にも風がふく。心地よい風ではないときは、それにとらわれることのないように。風はいずれ過ぎ去っていくもので、これといった実体もない。心地よい風であるときは、充分に楽しみ、その上で油断のないように。あたらしい変化や情報が、気づかないうちにそっと入りこんでいる。風（チャンス、きざし、ささや

き……)を読む。むやみに風、流れにさからわない。

- 字義

「八卦リスト」の「巽 (206 ページ)」を参照してください。

- 遺伝コードとの対応

G C A = A l a (アラニン)

- ライプニッツ・コード

[27] = (011011) = 0x1b

56：風水「渙」(ふうすいかん)・TP=TP21(369ページ)



- Legacy

路はひらける。王は廟（祭祀を行うところ）に向かう。大河をこえて行ってよい。ただしくあればよい。

- － ○上

血のでるような状況は去る（ちる）。とがめられることはない。

- － ○五

散る（乱れる）とき。大号令を出し、あともどりしない。住まいを（財も）放つ（散らす）。とがめられることはない。

- － ●四

徒党が散る。おおいによいことである。散った後、あらたな集まりができる。凡人の思いがおよぶところではない。

- － ●三

その身を散らす。悔いなし。

- － ○二

散って、その机に向かつてはしる。悔いることはなくなる。

- － ●初

勢いのある馬（二）に救われる。よろしい。

- Keyword / Tips

散る／

- － Keyword (20の銘板)

溶解／Dissolving

順番＝59

- － Keyword (ヴィルヘルム)

Dispersion (Dissolution)

- Image

水面（下卦＝坎）が、風（上卦＝巽）で飛ばされ、しずくとなって飛び散るカタチ（または王が船（上卦＝巽）に乗って水（下卦）を渡り難局を乗り切るカタチ）。集まっていたものが離散する、広がるイメージ。いいことも、わるいことも、散る。

- Overview

停滞していたもの、かたまり、人のあつまりなどが、時を得た風によって吹き散らされる。そのかたまりは、「悩み」かもしれないし、プロセスの滞りかもしれない。散らされたあとふたたび集まってきた人々や、ものや、考えなどは、いままでとはまったくちがったものになる。そのなかには、新しい目的、新しい視点での解決がかならずある。

- 字義

【渙】形声。声符はつくりの部分。この部分は女性が分娩するカタチとみられる。分散、盛流の意味。設文には「散りて流るるなり」とある。

- 遺伝コードとの対応

GUA = Val (バリン)

- ライプニッツ・コード

【19】 = (010011) = 0x13

57：風山「漸」（ふうざんぜん）・TP = TP14（362 ページ）



- Legacy

女性がとつぐのによい。ただしくあればよい。

- ○上

水鳥、天空に向かう。その羽は美しく儀式につかえるほどである。よろしい。

- ○五

水鳥、丘にやすむ。妻は三年子ができない。邪魔が入るが五のゆくてをはばむことはできない。よろしい。

- ●四

水鳥、木にやすむ。安定した枝にとまる。とがめられることはない。

- ○三

水鳥、陸にやすむ。夫は出征して帰らず、妻は子をはらむが育たない。よいところはない。守りにまわるとよい。

- ●二

水鳥、岩にやすむ。なごやかに飲食を楽しむ。よろしい。

- ●初

水鳥、水際にやすむ。年の若いものはあやうい。すこし小言を言われるが咎はない。

- Keyword / Tips

漸進／帰魂卦、「18：否」の交代生卦

- Keyword（20の銘板）

進化／Evolving

順番 = 53

- Keyword（ヴィルヘルム）

Development (Gradual Progress)

- Image

山の上に生えた小さな木（上卦、巽の五行は木）のカタチ。これから伸びる。ゆっくりとした成長。

- Overview

ものごとがきわめてゆっくりと過ぎ去っていく。できることをすべてやっていない

のだとしたら、この時間を利用して足場をかためる。できることをすべてやりおえているなら、現在の展開はあなたのせいではなく、これ以上どうすることもできない。コントロールできないことでむやみにイライラするのは時間の無駄であるばかりでなく、心にとっても負担になる。

- 字義

【漸】形声。ひたす、すすむ、ようやく、など。次第に浸潤すること。声符は「斬（会意）」で、車に使う木材を斧（斤）で斬ることを意味する。

- 遺伝コードとの対応

UCA = Ser（セリン）

- ライプニッツ・コード

【11】 = (001011) = 0x0b

58：風地「觀」(ふうちかん)・TP = TP07 (355 ページ)



• Legacy

祭祀を行う。不要な宴は行わず、誠実であること。

－ ○上

在下の人々にその生きざまをみられる。覚者ならとがめられることはないだろう。

－ ○五

我が生きざまを内省する。覚者ならとがめれることはないだろう。

－ ●四

仕えようとする国をよく観る。仕えるなら他者の引き立てにより仕える。

－ ●三

我が生きざま省みて、進退を熟慮する。

－ ●二

すぎ間からうかがい観る程度。柔順であればよい。

－ ●初

子供のようにみる。子供ならいいが、大人では観方が浅い。

• Keyword / Tips

観ること／十二消長卦（9月）、大艮

－ Keyword (20 の銘板)

魔法使いの熟慮／ Wizard's Contemplation

順番 = 20

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Contemplation (View)

• Image

大地を風が吹き渡る。そこかしこを見聞し、見識を広げる。表面だけでなく、内面も深く観る。観光の「観」。光を観る。

• Overview

問題、または対象となっているものごとを、できるだけ自分の思いこみや主観を入れないようによく観察する。そのように観ていくと、その問題や対象となっているもののあたらしい側面がわかり、解決や前進につながる。ただし、そのキッカケに

いそいでとびつかないように。軽やかな風となって大地をわたり、ほんとうのすがたを観察するとき。今はまだ、行動するときではない。

- 字義

【観】形声。もとの字は觀で、觀のへんの部分はこうのとりをあらわす。こうのとりは神聖な鳥で、占いなどにつかわれた。こうのとりを使って神意をみきわめることを観といったのだと思われる。のちにひろく、みる、みきわめるの意味に用いられるようになった。

- 遺伝コードとの対応

UUA = Leu (ロイシン)

- ライプニッツ・コード

【3】 = (000011) = 0x03

6 1 : 水天「需」(すいてんじゅ)・TP = TP09 (357 ページ)



• Legacy

雨いまだふらず。何するにせよ、またされる。おおいによきかな。まったのち、この大河ゆるりこえよう。

– ●上

穴に入る。招かざる客三人（在下三陽）。招かざるとも、客は客。

– ○五

のみくいにてまつこと。動じなければよし。

– ●四

血だまりにてまつこと、いずれ穴よりはいいあがる。

– ○三

ぬかるみにてまつこと。多少被害あり。

– ○二

水辺にてまつこと。多少小言があるが問題はない。

– ○初

水辺より遠く、まちづづける。

• Keyword / Tips

まつ／遊魂卦

– Keyword (20 の銘板)

共になる人々／People Together

順番 = 05

– Keyword (ヴィルヘルム)

Waiting(Nourishment)

• Image

曇って今にも雨がふりそうである。しかしめぐみの雨はまだふらない。何をするにもとにかくまたされる。

• Overview

めぐみの雨は、もうまもなく降る。あせりは禁物。なにかを待つ時間はけっして「ムダ」な時間ではない。コスモスのプロセスは常に最善のタイミングでものごとが起こるようにはたらいっている。待つ時間がムダに見えるのは、プロセス全体をと

らえるほどの視野が人間にないからである。コスモスに「ムダなもの」はなにひとつとしてない。

- 字義

【需】会意。雨と而を組み合わせた形。而は頭髪を剃った鬣（まげ）のない人をあらわし、神につかえる人（巫祝＝シャーマン）。すなわち、雨乞い。ここから需は、もとめる、まつの意味になる。

- 遺伝コードとの対応

ACC = Thr（トレオニン）

- ライプニッツ・コード

【58】 = (111010) = 0x3A

6 2 : 水沢「節」(すいたくせつ)・TP = TP16 (364 ページ)



- Legacy

路はひらける。度を越した節度にこだわってはいけない。

- ○上

度を越した節度である。そのまま対応を変えないことはよくない。(対応を変えれば) 悔やむことはなくなる。

- ●五

満足できる節度であり、よろしい。積極的にできれば、尊ばれることがある。

- ○四

その節度に安らかに落ち着く。路はひらける。

- ●三

節度を守れずなげく。とがめられることはない。

- ○二

外庭から先へはでない。よろしくない。

- ○初

中庭から先へは出ない。とがめられることはない。

- Keyword / Tips

節度、節目／

- Keyword (20 の銘板)

測定 / Measuring

順番 = 60

- Keyword (ヴィルヘルム)

Limitation

- Image

節目。節度を守ること。度を越した節制は NG。ふたつづつ交互に続くかのようにみえる陰陽は竹の「節」のカタチ。節が多すぎる竹はつかえない。

- Overview

節度をまもること。しかしながら、四角四面になんでもかんでもある特定のルールに押し込めるような「節度」ではかえって逆効果。自分が影響をおよぼすことができない範囲にまで「節度」を求めることには意味がない。適切な節度は自分がコン

トロールできる範囲でなされ、かつコスモスの流れにそったものである。

- 字義

【節】形声。声符は「即」。設文に「竹のフシなり」とある。竹の割符がもとの意味である。「使節」はこの割符を持った使者。車と船（車節、舟節）が通過するときの規定、物資の供給ルールなどを節度といった。儀礼についてはこういったルールは礼節といった。そこからすべての人の行動規範を意味する節度、節操の意味になり、「節制」から節約、節儉の意味になった。

- 遺伝コードとの対応

AUC = Ile (イソロイシン)

- ライプニッツ・コード

【50】 = (110010) = 0x32

63：水火「既済」（きせい）・TP = TP23（371 ページ）



- Legacy

路は充分にはひらけず。正しくあればよい。はじめはよいが後に乱れる。

- ●上

首ぬらす。あやうし。

- ○五

東隣（商）（五）で牛を殺す（派手な）儀式は、質素な西隣（周）（二）の祭祀には及ばない。西隣の祭祀がほんとうに福を受ける祭祀である。

- ●四

水漏れのときのために布を用意し、終日警戒する。

- ○三

殷の高宗が鬼方を攻める。三年目にしようやく勝つ。器の小さいものを登用してはならない。

- ●二

車に乗る女をかくす覆いをなくした。追うなかれ。七日後に覆いはもどる。

- ○初

行こうとする車の車輪をひっぱる。（狐が河を渡ろうとして）尾をぬらす。とがめられることはない。

- Keyword / Tips

完成／

- Keyword（20 の銘板）

達成／ Accomplished

順番 = 63

- Keyword（ヴィルヘルム）

After Completion

- Image

完全。パーフェクト。すべての陰爻、陽爻がただしい位置（定位置）にあるカタチ。スキがない。アソビがない。余裕がない。面白みがない。柔軟性に欠ける。あとは変わらざるを得ない（ととのっているものが乱れる）。

- Overview

水が火を消そうとしている。すべてがおさまるところにキッチリおさまっている状況だが、あそびや変化が入り込む余地はない。もうすこし余裕、または許容性があってもいい。そして、必ずやってくる変化にそなえる。

- 字義

【既済】

【既】→会意。へんの部分は食器、つくりの部分は後ろをむいてゲップをする人の姿。総じて食事が終わって満腹になった人。食事が終わるということから、おわる、すでに、の意味になる。

【済】→形声。音符は齋（齊）。齊は神に使える女性が髪に三本のかんざしを縦にとおして飾りをととのえるカタチ。ととのえ終わる、の意味がある。済は水をわたってことが成るの意味から、成就、実現、なるの意味になる。

- 遺伝コードとの対応

CCC = Pro（プロリン）

- ライプニッツ・コード

【42】 = (101010) = 0x2a

64：水雷「屯」(すいらいちゅん)・TP=TP30(378 ページ)



● Legacy

やり過ぎないようにすごせばよし。リーダーをたて、まかせるとよい。

－ ●上

孤立。馬、前に進まず。おそれて血の涙を流す。

－ ○五

四以下への恵みがとどこおる。正しさも行き過ぎてはいけない。

－ ●四

三、五に挟まれ馬は前に進まない。初と組み五を補佐すれば進める。

－ ●三

ただ夢中に鹿を追い林に入る。兆しを読み、引き時をとらえること。

－ ●二

頭打ちで立ち戻る。馬は前に進まず。初より求められるが、五との間の誠実さを守ればよい。

－ ○初

大石でできた柱にあたる。リーダーをたて、まかせるとよい。

● Keyword / Tips

のびなやむ／

－ Keyword (20の銘板)

再出発／ Fresh Start

順番＝03

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Difficulty at the Beginning

● Image

下(内)は動き、上(外)へ芽吹こうとするが(下卦、震)、上は冷たく固くこれをふさぐ(上卦、坎)。頭打ち。のびなやむ。

● Overview

水面下で動きあり。まだ、目に見えるカタチであられるにはいたっていない。あらたな動きはアタマをおさえられるようなかっこうで、しばらくはのびなやむ。適

切な時間がたてば、適切なタイミングでやがてその成果が目に見えるカタチであられる。それまではしばしガマン。

- 字義

【屯】象形。織物の縁飾りの形。織物の縁の糸を結んで房飾りのようにするもので、その糸を結んだ形。そこから「あつめる・たばねる・たむろする」の意味。金文では屯は「純」の意味に用いる。

設文解字によれば、草木がのびようとするところを、横棒の「一」で示される固い地面がじゃまをして伸びなやむ様子ということになるが、なやむ＝「難」の意味は、易から出た意味で本来の字の形の意味とは関係ない。

- 遺伝コードとの対応

CUC = Leu (ロイシン)

- ライプニッツ・コード

【34】 = (100010) = 0x22

65：水風「井」（すいふうせい）・TP = TP28（376 ページ）



- Legacy

村は変化していくがそこにある井戸は変わらない。失うものはないが、えるものもない。路行く人は井戸を井戸として使う。つるべが水面にとどくかとどかないかのところで壊れてしまう。

- ●上

井戸水を汲んでもフタをしてはならない。誠心があり、おいによりしい。

- ○五

井戸がきれいになり、冷たい水がみなに飲まれる。

- ●四

井戸の内側に石垣をつくる。とがめられることはない。

- ○三

井戸をさらってもだれにも飲んでもらえず心が痛む。大いに使われるべきである。王が賢明ならばみながその福を受ける。

- ○二

井戸水が少なくようやくフナが住める程度。つるべがこわれていて水が漏れる。

- ●初

井戸水が泥でにごっていて飲めない。古井戸には鳥もやってこない。

- Keyword / Tips

深み／

- Keyword（20の銘板）

源泉への到達／ Reaching the Source

順番 = 48

- Keyword（ヴィルヘルム）

The Well

- Image

風（下卦）は五行でいえば木であり、木が水（上卦）の下にあり、つるべの先のオケが水にはいるカタチで井戸。隠れた才能。生活に必要不可欠なもの。移すことはできない。他人に見出してもらう必要がある。

- Overview

水の流れは、風のようにかすかでとらえどころがなく、まだかたちにもなっていないし、誰もその水脈の存在に気づいていない。まずは水源、水脈をしっかりと確保する。この「水」は才能ととらえることもできる。やみくもにほりまわすと、せっかくの水もにごってしまっていて飲むことができなくなる。ムリとアセリは禁物。

- 字義

【井】象形。いげたの形。ただし、卜文・金文の字には、以下の用例があり、必ずしもひとつに定めがたい。水が生活必需品であることから、第一義を「いげた」とした。卜文・金文の用例→丹をとる丹井の形、首や足にはめる枷の形、人や獣を落とす落とし穴の形、器などを作るときの木枠の形。

- 遺伝コードとの対応

G C C = A l a (アラニン)

- ライプニッツ・コード

【26】 = (011010) = 0x1A

66 : 「坎」 為水（かんいすい）・TP = TP02（350 ページ）



● Legacy

誠あり。心とおる。（困難の中を）進んでいけば尊ばれることもある。

－ ● 上

頑丈な綱でしばられ、逃げられぬよう茨の草原に置かれる。三年は抜けられない。よろしくない。

－ ○ 五

穴にたまりだした水。水面がふちにまでやってくる。咎められることはない。

－ ● 四

一樽の酒、ふたつの素焼きの器。質素な食べ物を小窓から差し入れる。最後には咎なきを得る。

－ ● 三

前にも後にも穴、穴は陰しく、くぼみに落ち込む。動いてはいけない。

－ ○ 二

険しい状況、得られても少し。

－ ● 初

難儀が重なる。穴の中の穴、くぼみに入る。よろしくない。

● Keyword / Tips

まごころ／純卦

－ Keyword（20 の銘板）

ハートの月水晶／Heart Moon Crystal

順番 = 29

－ Keyword（ヴィルヘルム）

The Abysmal(Water)

● Image

落ち込む、穴、危険、困難。一難去ってまた一難であるとか、穴二つ、など。水。中央に陽のあるカタチ、また「水は方円の器に従う」ことから、誠、真心として尊ばれる側面もある。

● Overview

なにかに板ばさみになってしまったような困難。今そうでなくても、そのようにな

る可能性あり。なんとかそれを回避することができても、必要なことを学んでいないのであれば、コスモスは別の状況で再び同様の課題を出してくる。大切なのは、高いところから低いところへと流れていく水のような誠意と真心である。

- 字義

「八卦リスト」の「坎（208 ページ）」を参照してください。

- 遺伝コードとの対応

GUC = Val (バリン)

- ライプニッツ・コード

【18】 = (010010) = 0x12

67：水山「蹇」（けん）・TP = TP13（361 ページ）



- Legacy

西南にいくとよいが（坤＝平らかな土地）、東北に行くとよくない（艮＝峻険危険な土地）。賢者に会うとよい。ただしくあればよし。

- － ●上

いけばなやむ。とどまればおおいに功績がある。賢者に会うとよい。

- － ○五

おおいになやむが、友（二爻）がきてくれる。

- － ●四

いけばなやみあり、とどまれば仲間と手を組める。

- － ○三

いけばなやみがあり、とどまれば安泰である。

- － ●二

王（五爻）につかえる者にはなやみが多い。自分のためでなくひとのためになやむ。

- － ●初

いけばなやみがあり、とどまれば誉れがある。

- Keyword / Tips

足止め／離の包卦

- － Keyword（20 の銘板）

ハートの修練／Heart's Discipline

順番＝39

- － Keyword（ヴィルヘルム）

Obstruction

- Image

前方に深い河（上卦、坎）、背後に山（下卦、艮）のカタチ。進退窮まった状態。前にも後ろにも進めない。ふさがっている。足が動かない。

- Overview

前方に谷、後方に山。先へ進むのにも後へ引くのにもままならない。近くをその山に詳しいだれかがとおりすぎるかもしれない。その人はどこからやってきたのだろ

う。谷間を抜ける道、山を楽に迂回する道があるのかもしれない。きいてみるだけなら損はない。その人に意見を参考にするかしないかは、あなたが決めることである。

- 字義

【蹇】形声。設文解字では跛、びっこ、あしなえ、とする。不順、みだれること、または、心が鬱屈するさまを示すこともある。

- 遺伝コードとの対応

UCC = Ser (セリン)

- ライブニッツ・コード

【10】 = (001010) = 0x0A

68：水地「比」（すいちひ）・TP = TP06（354 ページ）



● Legacy

相手をさがしあるく。誠意あればあまり親しくなかったものも来る。後から来るものには注意。

－ ● 上

親しもうとしたが首がない。

－ ○ 五

親しむことをしめす。三方から狩り立てるが前方に逃げる獲物は追わない。領土の人民、警戒を解き親しむ。

－ ● 四

五に親しむ。誠意あればよし。

－ ● 三

親しもうとしたが、上下の陰と上は目的の人物ではない。身近にたよれるものなし。

－ ● 二

二（自分）から五に親しめばよい。

－ ● 初

誠意をもって親しめばよい。素焼きの器にあふれるほどの誠意があれば、予想外のよろこびがある。

● Keyword / Tips

親しむ／帰魂卦

－ Keyword（20 の銘板）

人々の統一／Unity of the People

順番 = 08

－ Keyword（ヴィルヘルム）

Holding Together (Union)

● Image

水が大地にしみこんでいくカタチ。そのように人々が相親しむ（比）。

● Overview

大地に雨がふり万物を育てる。草木が天から水や光を受け、大地から養分をもらっ

て成長する。自分の利益だけを優先すれば、天からの恵みは、早晩、雲散霧消する。水は大地にしみこませ、いきわたらせてこそ意味がある。「比」はまた、人と人が肩をならべ、相親しむカタチでもある。

- 字義

【比】会意。右向きの人ふたりを並べた形。ここから、したしむの意味。ならぶ、ならべる、(ふたつのものを)くらべる、の意味。

- 遺伝コードとの対応

UUC = Phe (フェニルアラニン)

- ライプニッツ・コード

【2】 = (000010) = 0x02

71 : 山天「大蓄」(さんてんたいちく)・TP = TP10 (358 ページ)



• Legacy

山、天高くそびえ動かず。家を出て、大河をこえてゆこう。

－ ○上

天の道おおいにひらけ、いただきからのながめ、すべてに通ず。

－ ●五

二のいきおいをおさえ、パワーをうばう。虚勢された猪の牙。

－ ●四

牛の角に横木をつけ、そのいきおいをおさえる。

－ ○三

良馬が疾走する。苦しくとも正道を守る。日々これ修練。

－ ○二

車の車輪がはずれる。

－ ○初

あやうきこと。やめるがよい。

• Keyword / Tips

長く待つ／

－ Keyword (20 の銘板)

時間の神殿／ Temple of Time

順番 = 26

－ Keyword (ヴィルヘルム)

The Taming Power of the Great

• Image

天より高くそびえる山。充分な(充分すぎる)たくわえ。またはそのくらいまたされる。とにかく家から出てみよう。

• Overview

天をもつらぬき、たかくそびえる山。おおきく積みあげられたものや、特定の場所や状況にながくとどめおかれる。大きな潜在エネルギー。すぐに思ったとおりにはすまないが、そのエネルギーを生かしながら少しずつでも前進する。そうすれば

新しいヒントやチャンスがやってくる。

- 字義

【大畜】→【畜】「51：風天小畜（283 ページ）」を参照。

- 遺伝コードとの対応

ACG = Thr（トレオニン）

- ライプニッツ・コード

【57】 = (111001) = 0x39

72：山沢「損」(さんたくそん)・TP = TP17 (365 ページ)



● Legacy

誠ありおおいによし。とがめられることなし。ただしくあれ。進んでことをなしてよし。なにをもちいるか。質素な竹皿二つ。

－ ○上

自分を削らずに人を益する。とがめられることはない。ただしくあればよし。すすんでことをなしてよい。家柄にかかわりなく、臣下がつきしたがう。

－ ●五

高価な大ガメを得る。この甲羅で占すれば吉凶たがうことなし。おおいによろしい。

－ ●四

病が減る。すみやかに対処すればよろこびがあり、とがめられることはない。

－ ●三

三人でいけば一人減る。一人でゆけば友を得る。

－ ○二

ただしくあればよし。すすんでなにかをおこなうときではない。自分を削らずに人に益する。

－ ○初

自分のことはまずおき、すみやかにいけばとがめられることはない。減らす(損する)際にはよく考えて減らす。

● Keyword / Tips

献上／坤の包卦、泰の交代生卦

－ Keyword (20 の銘板)

喜びの神殿／ Temple of Joy

順番 = 41

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Decrease

● Image

「泰」卦(81)の三爻の陽を上爻に移動＝下を減らして上を増す。損して得とれ。目先の判断にとらわれないように。

- Overview

山のいただきからみるような、大局的な視点でものごとを判断する。目先のことや自分の気持ちに正直になることに重きを置きがちだが大局的な利益を考えた場合にそれがほんとうにベストな選択なのかどうか、よく考える。状況が変われば、いったいなにが「利益」なのか、というその意味さえ変わってくる。

- 字義

【損】会意。手と員を組合わせた形。員は鼎のことで、鼎は元は煮炊き用の青銅器だが、ここでは神への供え物を入れる祭器である。この鼎の中に手を入れて供え物を減らす、という意味かあるいは、鼎そのものを毀損する意味かもしれない。そこなう、そこねる、へる、うしなう。

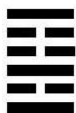
- 遺伝コードとの対応

AUG = Met (メチオニン) ; 開始コドン

- ライブニッツ・コード

【49】 = (110001) = 0x31

73 : 山火「賁」(さんかひ)・TP = TP24 (372 ページ)



- Legacy

路はひらけるが、飾りすぎや大事はさける。

- ○上

白く飾る。ミエも欲もとがめられることもない。

- ●五

丘や園を飾る。引き出物は質素だが、飾りすぎず、かえってとがめられることなく、よろしい。

- ●四

自然な白さで飾られる。白馬を飛ぶように駆る。三は邪魔しようとしているのではなく、結婚しようとしているのである。

- ○三

きらきらと、つやつやとかざる。派手にならぬようひかえめに。

- ●二

ひげをかざる。三はアゴ、二はアゴヒゲ。応ずるものなく三にひかれて一緒に動く。

- ○初

足をかざる。車を捨てて歩いてゆく。

- Keyword / Tips

飾る／

- Keyword (20 の銘板)

ヴィジョンの神殿 / Temple of Vision

順番 = 22

- Keyword (ヴィルヘルム)

Grace

- Image

山(上卦)の裾野(下卦)があざやかに彩られている(離)。はなやか。飾り。または飾ること。アクセサリ。ファッション。飾りは必要だが、やりすぎはイヤシイ。小事にはOK。

- Overview

ふだんは地味に見える山でも、夕映えにはあざやかに色づく。適度なデコレーションは、見る者を楽しませ、コミュニケーションをスムーズにするが、過度な飾りは、「装飾」をとおりこして「見せかけ」や、「いつわり」になる。極端におちいることなく、積極的にバランスをとる。

- 字義

【賁】形声。アクセサリーのようなかざりをいう語。貝でかざるもの。貴い人の光臨（オーラ）を得ることを賁臨といたりした。内より外にあふれる力。またこれとは別にフンと読んで負けるの意味もある。賁軍（ふんぐん）＝敗軍。かざる、おおきい、うつくしい、やぶれる。

- 遺伝コードとの対応

CCG = Pro（プロリン）

- ライプニッツ・コード

[41] = (101001) = 0x29

74 : 山雷「頤」(さんらい)・TP = TP31 (379 ページ)



• Legacy

ただしくあればよし。他人の食べ方、食べるものをみて、自らの口を満たす。

－ ○上

自分で自分の面倒をみる。下すべてに頼られる。あやういが、なんとかもちこたえる。

－ ●五

実力がともなわず上を頼る。大きいことはせぬほうがよい。

－ ●四

初を登用し、下から養われる、よきかな。

－ ●三

養いの路に反する。その態度をつづけるのはよくない。

－ ●二

常識とは逆に、初に養われる。とはいえ、上に養われるには遠すぎる。すすんでことを起こすことなかれ。

－ ○初

心中の大切なものをすて、四をみて、ものほしげにする。

• Keyword / Tips

口(くち)・アゴ／遊魂卦

－ Keyword (20 の銘板)

存在の神殿／ Temple of Being

順番 = 27

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Providing Nourishment

• Image

上、動かず(艮)、下動く(震)。ここから、口、あごを示す。口に関連する、飲食、生活する(就職)ことなど。養う、養われるなどの意味もある。

• Overview

上は艮で動かず、下は震で動き。全体として「口」、ひいてはだれかまたは自分自身をやしなうこと。実生活におけるバランスのとれた収支がここでのキーポイント。

入ってくるものと出てゆくものをチェックしてみる。「本当に必要なもの」というのは意外に少ないものだ。健全な収支バランスは、収入以下の支出、そしてフローに乗っていることによりもたらされる。

- 字義

【頤】会意。左側は婦人の両乳の形。頁は頭上に儀式の装飾をつけた人を横から見た形。やしなう、あごの意味だが、これをあごとしたのは後からつけられたものであろう。本来は廟（先祖の霊を祭るやしろ）で行われる儀式に関連した意味をもっていた。

- 遺伝コードとの対応

CUG = Leu (ロイシン)

- ライプニッツ・コード

【33】 = (100001) = 0x21

75 : 山風「蠱」(さんぷうこ)・TP = TP27 (375 ページ)



- Legacy

路はひらけ、大河をわたるもよし。甲に先立つこと三日。遅れること三日。

- ○上

王には仕えず、志を高く保つ。過ちをただすことから手をひく。

- ●五

父の過ちをただし、誉れにあずかる。

- ●四

父の過ちを受けいれる。ムリにすすめようとする、力およばず、かえってよくない。

- ○三

父の過ちをただす。少し悔いがあるが、大きなとがめはない。

- ○二

母の過ちをただす。ただしやりすぎはよくない。

- ●初

父の過ちをただす。立派な子がいれば父にとがめが及ぶことはない。きわどいが難をのがれる。

- Keyword / Tips

つくろう／帰魂卦

- Keyword (20 の銘板)

従順な心／Taming Mind

順番 = 18

- Keyword (ヴィルヘルム)

Work on What Has Been Spoiled (Decay)

- Image

山(上卦)で風(下卦)がせき止められ、腐敗する。皿(残り物)に蟲がわく。在庫なし。つわものどもが夢の後。ほころびをつくろう・穴埋め。再建。負の遺産。

- Overview

残されたのは過去の残骸ばかりだが、そのなかから新しいものを創り出す。容易な道ではないが順をおって地道に進めるなら、過去の繁栄以上の、全く別の高みにま

で成長することができる。しかし大切なのはそういった結果ではなく、その再建をやり通す信念である。この「信念」とは、あなたが目指す、まったくあたらしい方針のことだ。

- 字義

【蠱】会意。蠱は、蠱、媚蠱、巫蠱、などといわれる呪術をいう。その方法は五月五日に百種の虫をひとつの器の中に入れて共食いさせ、最後に残った一匹をひそかに人に食べさせるというもの。転じて、いかがわしく、みだりな意図をもって人を惑わすことを蠱惑という。まじない、まどわす、こびる。

- 遺伝コードとの対応

G C G = A l a (アラニン)

- ライプニッツ・コード

【25】 = (011001) = 0x19

76：山水「蒙」（さんすいもう）・TP = TP20（368 ページ）



● Legacy

路はひらける。自分から、おさなくおろかな者のところへ向かっていくのではなく、おさなくおろかな者の方が、自分を求めてやってくる。初筮に告ぐ。再三すればけがれる。けがれればお告げはない。ただしくあればよい。

－ ○上

無知なるものを罰するが、こちらから手をあげない。

－ ●五

無知なるものよき師（二）を得る。

－ ●四

無知に気づき、周囲は陰のみにて、くるしむ。

－ ●三

上爻（または二）の男を見れば落ち着きを失う。嫁にはふさわしくない。

－ ○二

四陰をつつむ。初（または五）をめとり、家をおさめる。

－ ●初

目を開かせ、しつける。

● Keyword / Tips

はっきりしない／

－ Keyword（20 の銘板）

再び聴く／Listen Again

順番 = 04

－ Keyword（ヴィルヘルム）

Youthful Folly

● Image

山（上卦）はものごとをとどめ、水（下卦）は困難。進もうにも進めない。未熟で先が見えない。自分の未熟さをわきまえていればよし、わきまえていなければ苦勞する。

● Overview

「蒙」は、おおう、おおわれるの意味。行く手は、いまひとつはっきりししない。

なによりも謙虚かつ慎重になること。いっさいの決めつけ、先入観はプロセスをこじらせることはあっても、なにかが改善されることはない。そこに作為があっては、得られるものもえられない。ひたすら純粹に求めることで道はひらける。

- 字義

【蒙】象形。上部は獣の角や耳の形。全体は獣の皮を開いた形。獣の皮の一部ではなく全体として残っているもの。全体で身をおおうもの。そこから、おおう、こうむる、おかす、くらい、おろかなどの意味になる。

- 遺伝コードとの対応

GUG=Val (バリン)

- ライプニッツ・コード

【17】 = (010001) = 0x22

77 : 「艮」 為山 (ごんいさん) ・ TP = TP03 (351 ページ)



• Legacy

背にとどまり、心身のざわめきに左右されず、他人にも左右されず。

– ●上

堅く誠実にとどまる。

– ○五

ほぼ骨にとどまる。抑制のきいた発言。

– ○四

胴体にとどまる。

– ●三

腰にとどまる。動けば背の肉を裂き、不穏な思いが心を焼く。

– ○二

ふくらはぎにとどまる。三を救えずして三に従う。快からず。

– ○初

足にとどまる。

• Keyword / Tips

グラウンディング／純卦

– Keyword (20 の銘板)

瞑想/神殿 / Meditation / The Temple

順番 = 52

– Keyword (ヴィルヘルム)

Keeping Still, Mountain

• Image

山また山のカタチ。山脈。林立するビル。ひとやま超えてもうひとやま。連なる門。静止、一筋縄では動かない感じ。

• Overview

山がつらなる。これを険しい道行きとみるか、山があらわす不動の性質がもたらす安定感とみるかは、占的による。事態は停滞しているようにみえる。ひとつ山道を登りおわったと思ったら、また同じような山道が始まった……いたずらに状況にハラをたてたりせずに、町中では見られない、高い山独特の草花を楽しんだり、風を

感じてみる。

- 字義

「八卦リスト」の「艮（210 ページ）」を参照してください。

- 遺伝コードとの対応

U C G = S e r（セリン）

- ライプニッツ・コード

【9】 = (001001) = 0x09

78 : 山地「剥」(さんちはく)・TP = TP05 (353 ページ)



- Legacy

自ら進んで動かないように。

- ○上

ただひとつ、食らわれずに残った果実。君子は車にのせられるが、凡人は住処を剥がされる。

- ●五

めざしのように連なり、初から四を率い、王の寵愛を受ける。よろしくないことはない。

- ●四

寝台からの剥がれ、人肌におよぶ。よろしからず。

- ●三

剥がれるときにあたる。とがめられることはない。

- ●二

寝台の脚とその脚のつけ根を剥がれ、おちつきをなくす。よろしからず。

- ●初

寝台の脚を剥がれる、おちつきをなくす。よろしからず。

- Keyword / Tips

剥(は)がれる／十二消長卦(10月)

- Keyword (20の銘板)

心の解放 / Mind's Release

順番 = 23

- Keyword (ヴィルヘルム)

Splitting Apart

- Image

山が崩れ、土にかえる。または、山をつくっている土が剥落しつつあるカタチ。メッキがはがれる。地位・もちものを落とす、奪われる。

- Overview

山が崩れて、土……大地にかえる。あるいはまた、表面的なデコレーションがはがれて、本質がみえてくる。起こっていることは必要なプロセスであって、それ以上

でもそれ以下でもない。「はがれおちたもの」は、次のステップには不要なもの
はずである。

- 字義

【剥】会意。左側は、毛の深い獣の形で、剥は刀でその獣の皮をはぎ取る意味。さ
く。はぐ。

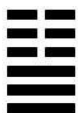
- 遺伝コードとの対応

UUG = L e u (ロイシン)

- ライプニッツ・コード

【1】 = (000001) = 0x01

8 1 : 地天「泰」(ちてんたい)・TP = TP11 (359 ページ)



● Legacy

小さなものどもが去り、大きなものがやってくる。よきことあり。路はひらける。

－ ○上

城は堀へと形を変え、兵をあげてはならぬとき。自分の領地より命令をだす。
ただしくあれど、きわどいとき。

－ ○五

王が末娘をとつがせる。娘の結婚のように、もとよりよきことなり。

－ ○四

トリがバタバタ舞い降りる。ひとりじめせず上・五とともに、疑いあうことなく誠心をもってたすけあう。

－ ●三

平らで傾かないものはなく、往って復らぬものもない。困難に耐え、正道をまもる。報酬がある。

－ ●二

荒くれものも一緒に河を徒歩にて渡る。仲間はずれをつくらない。同類と徒党をくまず、かたよりのない路をいき、五に応ずる。

－ ●初

なにごとも、ともおこなうのがよい。

● Keyword / Tips

安定／十二消長卦（2月）

－ Keyword（20の銘板）

発動／Dynamizing

順番 = 11

－ Keyword（ヴィルヘルム）

Peace

● Image

安定。安泰。陰と陽との調和。小さきもの去り、大いなるもの来たる。

● Overview

大地が上にあり、天が下にある。天のエネルギーは上昇し地のエネルギーは下降

し、そこで交わりが生じて万物を産み出す。好ましい状態ではあるがその安定に甘んじてしまわないように。ものごとは常に移り変わる。安定しているうちから、つぎの変化にそなえておいて損はない。

- 字義

【泰】形声。「大」と「升」と「水」から成り、音符は「大」。「升」は両手を並べた形であり、水中に落ちた人を両手で助けあげる形。ここから安泰、やすらかという意味になる。ゆたか、おおきい、はなはだの意味にも。また、太は泰の水の部分を点にした省略形であり、泰・太・大は通用することがある。となると、「太極」は大いなる極「大極」であり、やすらかな極「泰極」でもあるということになる。

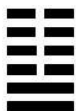
- 遺伝コードとの対応

ACU=Thr (トレオニン)

- ライブニッツ・コード

【56】 = (111000) = 0x38

82：地沢「臨」(ちたくりん)・TP = TP18 (366 ページ)



● Legacy

臨む。おおいにとおり、ただしくあればよい(元亨利貞)。ハカ月後(または旧暦八月(観卦のとき。観卦はまた、伝統的な大成卦の並びでは次の卦にあたる))に注意する。

－ ●上

手厚く臨めば、よきことあり、とがめられることはない。

－ ●五

武力でなく、智慧をもって臨む。偉大な王のように中道をわきまえれば、よい。

－ ●四

至れり尽くせりで臨めば、とがめられることはない。

－ ●三

甘言を弄(ろう)し、臨む。そのような態度をかえりみることであればよし。

－ ○二

感じて、臨む。上々なり。

－ ○初

感じて、臨む。ただしくあればよい。

● Keyword / Tips

臨む／十二消長卦(1月)、大震

－ Keyword (20の銘板)

魔法使いの熱望／Wizard's Aspiration

順番 = 19

－ Keyword (ヴィルヘルム)

Approach

● Image

陽爻(初、二)の二爻が伸びてくる。まさにこれからという感じ。ここでひいてしまつては、せっかくのびようとしていたものものびない。臆せず、躊躇せず、だがしかし、無茶・暴挙・蛮勇・邪な意図「なし」でいく。

● Overview

問題、あるいは、うすうす感じてはいたけども、さけていたようなことに向き合う。

必然的にそのことに「向きあわせられる」ことになるかもしれない。ふたたびそれをさけてしまうと、コスモスは手を変え品を変え、また同様の状況を提示してくる。そこでまた同じ状況・問題に向き合う。ハードルを越えてしまわない限り前には進めない。

- 字義

【臨】会意。臥と品を組み合わせた形。臥は人がうつむいて下をみる形で、品は神への祈祷文、祝詞をいれる器（サイ）を三つ並べた形。総じて、サイを供えて祈るのに応じて、天にいる神霊が下方を臨み見ること。のぞむ、みおろす。

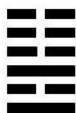
- 遺伝コードとの対応

AUU = Ile (イソロイシン)

- ライプニッツ・コード

【48】 = (110000) = 0x30

83：地火「明夷」(ちかめいい)・TP = TP25 (373 ページ)



- Legacy

苦しむが、正しくあればよい。

- ●上

配下を傷つける暗愚の君主。最初は天に登るが、後には地に落ちる。

- ●五

自分の明をさとられぬようにして、志を保ち正しくあればよい。

- ●四

上の腹に入り、その暗い心を知り、門を出る。危険から遠ざかる。

- ○三

明るいもの、傷つく。南方（下卦＝離）に狩をして首領の首をとる（上爻）。急いてはいけない。

- ●二

明るいもの、傷つく。傷つくが左股をケガする程度。強い馬の力を借りれば、すぐわれる。

- ○初

明るいもの、傷つく。飛びたとうとするがさまたげられる。旅に出ても三日、食事にありつけない。行って腰をおちつけようとしても、主人に小言をいわれうまいかない。

- Keyword / Tips

傷つく／遊魂卦

- Keyword (20 の銘板)

内なる輝き／Inner Radiance

順番 = 36

- Keyword (ヴィルヘルム)

Darkening of the Light

- Image

地の下に太陽がかくれてしまっている。姿を隠す賢者。傷つきやぶれ、地下に潜伏する。夜明け前。夜。閉店（シャッターが下りているカタチ）

- Overview

明かなもの、明晰な智慧などが、いまは地中深く埋もれている。あるいはまた、太陽が昇ってくる夜明け前。ものごとが明らかになったり、埋もれていた才能があらわれてくるには早すぎる。プロセスが完了すれば、ふたたび大地は明るく照らされる。才能も智慧も、そのときまで、ゆっくりみがいておくとよい。

- 字義

【明夷】

→明

会意。左部、日は窓の形。右部月は、月。窓から月明かりが入り込む様子を明という。あかり、あかるい、あきらか、あける、あかすなど。

→夷

えびす、たいら、たいらか、きずつく。説文解字では大弓を持った人、とするが、たいらかという意味と一致しない。卜文、金文の字形から、夷と尸（かばね、しかばね、かたしろ）はもと通用する語であったとみられる。

明夷で、明らかなものがやぶれる（きずつく）の意味。

- 遺伝コードとの対応

CCU = P r o（プロリン）

- ライプニッツ・コード

【40】 = (101000) = 0x28

84：地雷「復」（ちらいふく）・TP = TP32（380 ページ）



- Legacy

出入りに障害はなく、友が来てもよい。おなじ道を行ったり来たりする。行って帰るまでに7日かかる。路はひらける。

- － ●上

かえるかどうか迷う。わざわいがある。兵をあげるようなことをすれば戦に負け、その影響が君主までにおよぶ。10 年たっても敵を征することができない。

- － ●五

誠実・生真面目にかえる。

- － ●四

路なかばをすぎたが、自分の判断で、初のもとへひとりかえる。

- － ●三

頻繁にまちがいを犯しそのたびにかえる。

- － ●二

初にひかれてよくかえる。よろしい。

- － ○初

すぐにもどり、後悔にいたることもない。おおいによろしい。

- Keyword / Tips

かえる／十二消長卦（12 月）

- － Keyword（20 の銘板）

光り輝く回帰／Radiant Return

順番 = 24

- － Keyword（ヴィルヘルム）

Return (The Turning Point)

- Image

かえる。元にもどる。また一からはじまる。純陰の坤」の状態の初に新たにひとつの陽が生じたカタチ。あたらしい動きが地中にある（上卦＝坤、下卦＝震）カタチ。一陽来復、冬至の卦。

- Overview

プロセスは大地へとかえってゆき、またその大地から新しい出発がはじまる。表面的には以前と同じようにみえたとしても、それはあたらしい出発である。すべてのものは常に移り変わっていくものであり、一瞬たりとも「同じ状態」を継続することはできない。したがってその出発も「以前と同じ」ということはありえない。

- 字義

【復】右側のつくりはものの容量をはかる器具をさかさまにした形。イは十字路（行）の片側の形であり、行進や道路をあらわす記号として用いられる。総じて、行った道をまた逆に（さかさまに）かえってくる意味になる。かえる、むくいる、くりかえす。

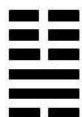
- 遺伝コードとの対応

C U U = L e u (ロイシン)

- ライプニッツ・コード

【32】 = (100000) = 0x20

85：地風「升」（ちふうしょう）・TP = TP26（374 ページ）



● Legacy

おおいに路はひらけ、大人物に会う。悩むことはない。南にいくとよい。

－ ●上

暗いなかを昇る。休むことなく正しい道を守ればよい。

－ ●五

正道を守ればよし。階段を昇る。

－ ●四

王（文王）は岐山（西山）を祭る。よろしいことであり、とがめられることはない。

－ ○三

人のいない村に昇る。

－ ○二

誠心があれば、祭祀にもちいる器は質素なものでよい。

－ ●初

誠心をもって昇る。おおいによし。

● Keyword / Tips

上昇／

－ Keyword（20の銘板）

光り輝く空虚／Radiant Emptiness

順番 = 46

－ Keyword（ヴィルヘルム）

Pushing Upward

● Image

地から、風がふきあがり、上昇していく。あるいはまた大地（坤）の中の、成長する若木（巽）。上向き、上り調子。ただし、昇りすぎに注意。

● Overview

大地から吹き上げる風。上昇気流。さしあたっては、さまたげるものもない。どこまでいけるか風によって、いけるところまでいってみよう。いまは、舞い上がったその状態を楽しんでおいて損はない。先のことは、もちろんよく考えてしておく必

要はあるが。

- 字義

【升】象形。穀類の量をはかる器の形だが、ここでは昇る、進むの意味。「昇」は形声文字であり、音符として升を用いている。「昇」はもと、日がのぼる、という意味の字と思われる。

- 遺伝コードとの対応

G C U = A l a (アラニン)

- ライプニッツ・コード

【24】 = (011000) = 0x18

86：地水「師」（ちすいし）・TP = TP19（367 ページ）



- Legacy

軍・兵（集団）を率いる二が、強く正しく賢明なるものであれば問題はない。

- － ●上

大君より命あり。国を開き、家を継ぐ。器の小さなもの（三）にそれをさせてはならない。

- － ●五

狩して獲物あり。のがさずこれをとらえる。長男（二）は軍をひきいる。弟（三、四（能力のないもの））は、しかばねを車にのせる。ただしくあってもよくない。

- － ●四

軍は、退却し宿営する。

- － ●三

軍は、しかばねを車にのせる。

- － ○二

中庸の徳を持って軍の中にいる。よいことであり、とがめられることはない。王（五）、三たびほうびを出す。

- － ●初

出征にあたって軍律をきびしくする。ルールのよしあしが結果を左右する。

- Keyword / Tips

軍隊／帰魂卦

- － Keyword（20 の銘板）

人々の力／ Power of the People

順番 = 07

- － Keyword（ヴィルヘルム）

The Army

- Image

師は師団の師^{*4}。軍隊。一陽が他の五陰を率いるカタチ。したがって一陽の責任は重く、凡人では勤まらない。地面（上卦）の下に水脈（下卦）が流れているカタ

^{*4} 漢代の意味によると「旅」は 500 人の集団、「師」は 2500 人の集団、「軍」は 12500 人の集団。

チ、また、農民が有事には兵士になるように、いざというときの備え、という意味もある。

- Overview

いくさ。大地の下を静かに流れる水脈は、いつかどこかで大きな流れとなって吹き上がる。いくさのリーダーは、よほどしっかりした人でなければつとまらない。戦いはできれば回避したいものだが、やむをえず始まってしまった場合には、慎重な行動をとるようにする。ときには撤退する勇気も必要。時期をわきまえた撤退は、やみくもに突き進む蛮勇とは異なる真の勇気である

- 字義

【師】会意。左側は、軍が出征するときに携える、戦争祈願の祭りをした肉。右側はその肉を切り分けるときに使う血止めのついた刀。この肉は軍の守護霊であるから、分かれて行動するとき各軍は、肉をきりわけて携える必要があった。肉を切り分ける権限を持っている者が師で、軍長、將軍をいう。この者が引退すると氏族の指導者として若者の教育にあたったので、師は「せんせい」の意味にも用いられる。

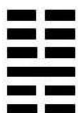
- 遺伝コードとの対応

GUU = Val (バリン)

- ライプニッツ・コード

【16】 = (010000) = 0x10

87：地山「謙」（ちざんけん）・TP = TP12（360 ページ）



- Legacy

路はひらける。君子ならなしとげることができる。

- ●上

謙虚さの名声がとどろく。だがもし必要であれば自分の領地のなかで軍をあげてよし。

- ●五

富を独り占めしない態度で臨む。従わないものには、むくいを与えてよし。

- ●四

うまくいかないことはない。謙虚さをまねく。

- ○三

苦勞してもそれを誇らず謙虚である。君子ならなしとげることができる。よろしい。

- ●二

謙虚さの名声がとどろく。ただしくあり、よろしい。

- ●初

謙虚の上に謙虚。君子はこの謙虚さをもって大河を越える。よろしい。

- Keyword / Tips

謙讓／男子裸像（女子裸像は履（221 ページ））

- Keyword（20 の銘板）

人々の道／Way of the People

順番 = 15

- Keyword（ヴィルヘルム）

Modesty

- Image

山（下卦）を削って平ら（大地＝上卦）にする。転じてへりくだる。謙虚であること。

- Overview

積み上げたものを削り、再びはじまりの状態にもどすことは、最大の謙虚さをあらわしている。引っ込み思案や、責任をのがれようとして自分を低くアピールするこ

ととはちがう。みかえりを求めたり、自分が謙虚であることを誇ったりすることでもない*5。そうならない範囲で、この時期はあまりハデな活動はひかえたほうがいいかもしれない。

- 字義

【謙】形声。音符は兼。本来はいやな（嫌な）行為であったと思われる。なるべく避ける、という意味から、ゆずる、ひかえる、さける、つつしむの意味になったのであろう。謙がその意味で使われだしたのは易経に由来する。おごり高ぶるものよりもひかえめにする者の方がよいという老荘的な考え方も含まれる。

- 遺伝コードとの対応

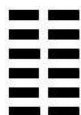
UCU = Ser (セリン)

- ライプニッツ・コード

【8】 = (001000) = 0x08

*5 卑下慢

88 : 「坤」 為地 (こんいち) ・ TP = TP04 (352 ページ)



• Legacy

さからうことなければ路はひらける。ことをなすときも先頭を走るより先に従う。
西南に友を得、東北に失う。

－ 用● (用六) *6

永く、正しくあればよい。

－ ●上

龍、野に戦う。その血は深く暗い天の色、大地の黄色。

－ ●五

中央の色、黄色のはかま。おおいによろしい。

－ ●四

袋の口をくくる。よくもわるくもなし。

－ ●三

才あれどひけらかさず。王の命による仕事をして、てがらを求めることなく
終わりをまっとうする。

－ ●二

直・方・大の本質を生かす。

－ ●初

薄氷はやがて分厚い氷に。

• Keyword / Tips

受容／純卦、十二消長卦 (11 月)、大坤

－ Keyword (20 の銘板)

根源母体 / Primal Matrix

順番 = 02

－ Keyword (ヴィルヘルム)

The Receptive

• Image

大地。オール陰。母性原理。受け入れはぐくむ。マイナスエネルギー。

• Overview

*6 坤と乾だけにつけられた爻辞

大地はあらゆるものを受け入れることができ、そして受け入れたあらゆるものを、公平にはぐくむ。「すべての」基盤。ただ淡々と受け入れ、育て、コスモスの法則である多様性と変化をもたらしていく。ただいくら大地が寡黙だからといっても、何も感じていないわけではない。物言わぬものを、それをいいことにかえりみずにいるといずれ大きなしっぺ返しをくらうことになる。

- 字義

「八卦リスト」の「坤（212 ページ）」を参照してください。

- 遺伝コードとの対応

UUU=P h e（フェルアラニン）

- ライプニッツ・コード

【0】=（000000）= 0x00

第 11 章

ツイストペアリスト

凡例

- タイトル行；ツイストペア番号

ツイストペア番号は、各ツイストペアにマスターマトリクスの並び順に番号をふっていったもので、TP0 1～TP32 までの番号があります。

- ツイストペアを構成する大成卦

ツイストペアは、各爻が陰陽反転した関係にある大成卦ふたつで構成されます。この項目では、そのツイストペアを構成する大成卦をコード番号とともに示します。

- ツイストペアの意味

各ツイストペアにつけられた意味です。伝統的解釈ではありません。

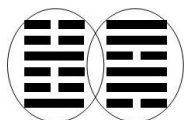
【 】内がメインの意味であり、その下に続くのがメインの意味を補足する言葉です。いずれもイメージをつかんでいただくためのキーワードで表現されています。

- なぜその意味になったか

上記の意味になった理由・経緯。

厳密な記録または考察ではなく、「ツイストペアの意味」を補足する散文です。

ツイストペア番号 = TP01



- ツイストペアを構成する大成卦

4 4 : 震為雷 / 5 5 : 巽為風

- ツイストペアの意味

【呼吸】

循環する動き

サイクル

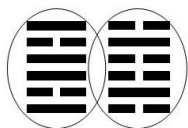
周期

- なぜその意味になったか

動く（震）……風（巽）。

全六十四卦の大成卦で構成されるマスターマトリクスの中心であり、32 対のツイストペアの始まりにあるのは、乾でも坤でもなく、もうこれ以上、じっとしていることができずにあらわれたゆらぎ～風の動きである。これがすべての始まりである。やがてそのゆらぎはくりかえされる呼吸＜いき＞となり、とぎれることのない息吹が、すべての原動力となった。

ツイストペア番号 = TP02



- ツイストペアを構成する大成卦

3 3 : 離為火 / 6 6 : 坎為水

- ツイストペアの意味

【生命】

新しい秩序

自分で自分を観る能力

- なぜその意味になったか

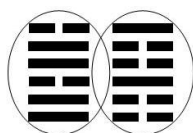
水（坎）は命の源を象徴する。

火（離）*1は、命という創造の成果を明らかにする。

火は、成長の結果、もともと水であった命から生じ、やがてそれは自分自身を照らし出す光となったものである。水があってわたしたちはここにおり、火があってわたしたちは宇宙を識る。

*1 ここでは「離＝火」を心と観ている

ツイストペア番号 = TP03



- ツイストペアを構成する大成卦
22：兌為沢／77：艮為山

- ツイストペアの意味

【振動】

エネルギー

共振

共感

ハーモニクス

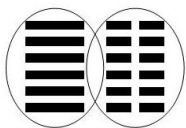
- なぜその意味になったか

大地に足が着いていれば（艮）、全身で地球と共鳴できる（兌）。

そうなるとやっと、ほんもののよろこび（兌）にうちふるえることができる*2。それはじかに土（艮）にふれたときのよろこびかもしれないし、座して（艮）なにかに没頭していたときのよろこびかもしれない。その身かもしれないし、その心かもしれないが、いたずらに動きまわらない（艮）ことが大事なポイントかもしれない。また、兌と艮の組み合わせは「咸」、感応であり、「損」、地から天へのみつぎものである。

*2 八卦リスト「兌（200 ページ）」の「字義」を参照

ツイストペア番号 = TP04



- ツイストペアを構成する大成卦

1 1 : 乾為天 / 8 8 : 坤為地

- ツイストペアの意味

【元素】

元因

原因

第一要因

おおもと

- なぜその意味になったか

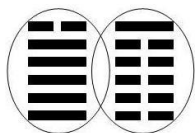
この宇宙はあるかすかなゆらぎから生まれた (TP01)。

ゆらいで最初にうまれたのはきわめてシンプルな要素 (乾=陽、坤=陰) だった。

やがてゆらぎ自身が、その要素を利用するようになった。ゆらぎはその要素を利用することで、より複雑な構造を自由自在に創ることができるようになった。しかし、おおもとの原則がシンプルなので、いくら複雑になったとはいえ、創られたものは決して手のとどかかないものではなかった。そしてそれはどこまでもいっても最初に創られた要素と、いつもどこかが似ていた。

根源。陰と陽。

ツイストペア番号 = TP05



- ツイストペアを構成する大成卦

21 : 沢天夬 / 78 : 山地剥

- ツイストペアの意味

【ゼロポイント】

ボイド、空亡

陰陽の境界

- なぜその意味になったか

双方とも十二消長卦のひとつであり、これが対になると、陰が陽に転じる、あるいはその反対に陽が陰に転じるときの、一定の空白期間を象徴する。

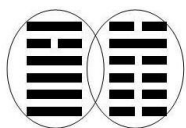
その期間にはなにもすることができない。

無理にことをなそうと思ってもうまくいかない、というよりもそもそも、できない。

できることといえばただ静かにつぎの変化を待つことだけである。

なにもかもかもが一瞬静まりかえる不思議なこの期間はどことなくこの宇宙が誕生する直前と似ている。

ツイストペア番号 = TP06



- ツイストペアを構成する大成卦

31 : 火天大有 / 68 : 水地比

- ツイストペアの意味

【心】

心圏（人間レベル）

宇宙が宇宙を観る感覚器としての心

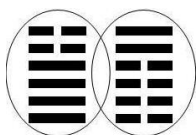
- なぜその意味になったか

人間（の心）はこの宇宙の感覚器官であり、宇宙は、人間レベルの存在が数多くあることで、その数の分だけ、さまざまな感覚のバリエーションのフィードバックを受けることができる（大有）。

これが宇宙のよろこびであり、必然的にこれと相似の傾向を私たち個々人もその内に有している。これが私たちが人と親しむ理由である（比）。

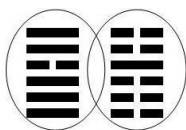
元来ひとつのものであるので相互依存的にならざるを得ない、という事情もあるが、分離に悩みながらも、その豊かな分離の感覚を楽しむという矛盾したよろこびも同時にあわせ持っている。

ツイストペア番号 = TP07



- ツイストペアを構成する大成卦
41 : 雷天大壮 / 58 : 風地観
- ツイストペアの意味
【上から下へ】
すこやかな成長
発展
流出
- なぜその意味になったか
風はいつも上から下に向かって吹き下ろし（風地観）、それはいつも大いなる喜びをもってなされる（大壮＝大兌）。そのようにして宇宙は永遠にとどまることなく動き続ける。

ツイストペア番号 = TP08



- ツイストペアを構成する大成卦

51 : 風天小蓄 / 48 : 雷地豫

- ツイストペアの意味

【呼応】

「祈り」と、それに応ずるエネルギー (レスポンスビリティ)

- なぜその意味になったか

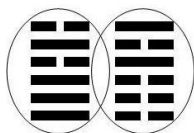
すべてはたえず動き続けているが、その中で立ち止まる（小蓄）ことも必要である。動き続ける中で動き続けながら感じるよろこびもあるが、少し立ちどまることによって得られるよろこびもある（豫）。

この場合のよろこびは後者で、いそがしく雑草を刈り続けていた手を一時休めて、空を見上げる農夫にも似ている。

つかれたとき、むなしくなったとき。

ふとたちどまって、祈る。

ツイストペア番号 = TP09



- ツイストペアを構成する大成卦

61 : 水天需 / 38 : 火地晋

- ツイストペアの意味

【時間（時）】

時間

時間のはじまり

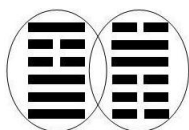
- なぜその意味になったか

待って（需）、夜が明ける（晋）。

待つことは時間そのもの感じることであり、その経験の質は意識状態を反映する。

夜明けは眠りから覚醒への移行のはじまりであり、時間が意識によって作りだされることを自覚する第一歩である。

ツイストペア番号 = TP10



- ツイストペアを構成する大成卦

71 : 山天大蓄 / 28 : 沢地萃

- ツイストペアの意味

【資源】

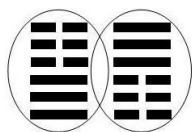
リソース

無限の材料

- なぜその意味になったか

萃は集めることであり、大蓄はあつまったものが積み上げられた結果である。このふたつが意味することは、この宇宙の資源の豊富さと、宇宙の気前よさだ。宇宙は常に必要なものを差し出してくれているが、それにタイミングよく気づくかどうかはまた別の問題である。

ツイストペア番号 = TP11



- ツイストペアを構成する大成卦

81 : 地天泰 / 18 : 天地否

- ツイストペアの意味

【鏡】

正反対に見えるが実は同じもの

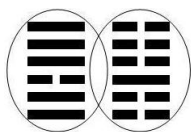
フリップフロップ

シーソー

- なぜその意味になったか

否と泰はその意味も、見た目のカタチも正反対である。陰は陽に、陽は陰に反転する可能性を、常に秘めている。原則は変化することそれ自体であり、陰であるか陽であるかはその瞬間のたまたまの状態であるに過ぎず、決して固定されてはいない。

ツイストペア番号 = TP12



- ツイストペアを構成する大成卦

12 : 天沢履 / 87 : 地山謙

- ツイストペアの意味

【儀式】

天地と人との間の儀式

イニシエーション

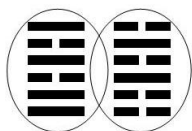
ふむべき手順

- なぜその意味になったか

地にもぐりこむほど深くこうべをたれ（謙）、定まった様式をなにひとつ省くことなく踏みすすむ（履）。

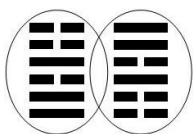
「自分が何も知らないことを知るためには山ほど学ばなければならない」儀式の本質の一部には、このシンプルなルールを思い出すことが必ず含まれている。

ツイストペア番号 = TP13



- ツイストペアを構成する大成卦
3 2 : 火沢ケイ<目へんに癸> / 6 7 : 水山蹇
- ツイストペアの意味
【ブロック】
フローをとどこおらせるもの
感情的なしこり
病（気のブロック）
- なぜその意味になったか
内的なものにしても外的なものにしても、葛藤（ケイ）は、放っておくとやがて流れをにぶらせる（蹇）カタマリになってしまう。葛藤から目をそむけないで、それが提供している学びを吸収すれば、そのとどこおりは自然と自分で動き出し、フローはまたもとにもどる。

ツイストペア番号 = TP14



- ツイストペアを構成する大成卦
42 : 雷沢帰妹 / 57 : 風山漸

- ツイストペアの意味

【痛み】

通過儀礼

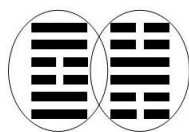
試練

通過しなければならない苦しみ

- なぜその意味になったか

確実な進歩・成長（漸）のためには、なんらかの犠牲（帰妹）もやむをえないことがある。しかし、あとにあってふりかえてみると、「犠牲」というのは必要なプロセスであったことがわかる。必要なプロセスを「犠牲」にしていたのは、近視眼的なものの観方、それ自体であったことがわかる。

ツイストペア番号 = TP15



- ツイストペアを構成する大成卦
52：風沢中孚／47：雷山小過

- ツイストペアの意味

【ライフスパン】

卵から成鳥へ

ゆりかごから墓場まで

一生・人生

鳥

- なぜその意味になったか

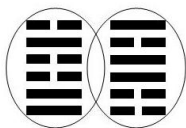
いきとしいけるものには、自然な寿命がある。

卵（中孚）はいつまでも卵であり続けることはできない。カラをやぶり成鳥（小過）
となって飛び立ってゆく。

成鳥もそのままではなく、やがてさらなる高み——天へと旅立ってゆく。

鳥は、最初から最後までを経験してはじめて、自分がもといたふるさとに帰ってきたことに気づくのかもしれない。

ツイストペア番号 = TP16



- ツイストペアを構成する大成卦

62 : 水沢節 / 37 : 火山旅

- ツイストペアの意味

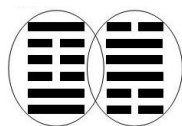
【プロセス】

省くことのできない課程

- なぜその意味になったか

それがいかに苦しいことであっても（旅）さけてとおることのできないプロセス（節）がある。仮にそれをさけてとおることができたとしても、その同じ状況は、時（順番）、場所（舞台）、形（登場人物）を変えてかならずまたあなたの目の前にあらわれる。はしょらないで、正直にその学びに取り組まない限り、ほんとうの意味で前進することはできない。

ツイストペア番号 = TP17



- ツイストペアを構成する大成卦

72 : 山沢損 / 27 : 沢山咸

- ツイストペアの意味

【問いかけ】

下から上へ求める

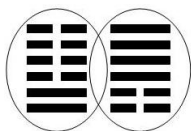
求めよされば与えられん

- なぜその意味になったか

すべてはよびかけ（問い）と（損、下卦から上卦へと投げられた一陽）、それに対する回答からなりたっている（咸）。易占も、夢見も、インターネットの検索も。

回答は質問を映す鏡であり、真摯な問いかけには真摯な回答もたらされる。

ツイストペア番号 = TP18



- ツイストペアを構成する大成卦

82 : 地沢臨 / 17 : 天山遯

- ツイストペアの意味

【変容】

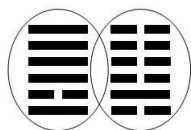
脱皮

- なぜその意味になったか

「天山遯」を眺め、「地沢臨」へと眼を移すと、一群の陽爻が上から下へと流れていくように見える。陰爻のカタマリを身体、陽爻のカタマリを、身体を覆う「皮」とすると、それはまるでイキモノが新たな成長に向けて脱皮していく姿にも見える。

「遯」、古い状態から逃れ出て、「臨」、新たなステータスへ臨んでいくのである。進化のスパイラルのあるサイクルから次のサイクルへのはざまには永遠とも思える空虚がかならずある。この空虚は無駄にあるものではなく、創発の衝撃を吸収するクッションとなっている。

ツイストペア番号 = TP19



- ツイストペアを構成する大成卦
13 : 天火同人 / 86 : 地水師

- ツイストペアの意味

【集い／集うこと】

人と人の間

(人の) 組織

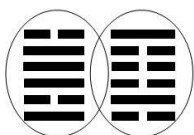
間主観ネットワーク

- なぜその意味になったか

個人は、出生と社会的成長によってまず分離の感覚を味わう。しかし、社会的成長の向こうには真の成長があり、そこで分離が幻想であったことに気づく。多くの人間は社会的成長と真の成長の間でゆれうごきつつその一生を終える。

「同人」は志を同じくする人間の集団。「師」は戦のために組織された人間の集団。どちらも「集団」を意味する。人間の集団はすなわち、「社会」である。

ツイストペア番号 = TP20



- ツイストペアを構成する大成卦
23 : 沢火革 / 76 : 山水蒙

- ツイストペアの意味

【純粋さ】

無知の知

無明を知る

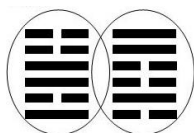
0:fool、純粋

- なぜその意味になったか

「蒙」で、自分がなにも知らないことを知り、「革」で、あらためる。

いったん自分がなにも知らないことを知れば、そのとたんに新しい知識は奔流のごとく流れこむ。自分を空にできないと、いつまでもよどんだ水を抱えているのと同じで、自らが清流になることも、清流の活動に参加することもできない。ふさがれた場所には光もとどかない。

ツイストペア番号 = TP21



- ツイストペアを構成する大成卦

4 3 : 雷火豊 / 5 6 : 風水渙

- ツイストペアの意味

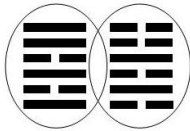
【リセット】

リセットされることによって成り立っている豊かさ

- なぜその意味になったか

集まったもの（豊）は散じる（渙）。散じたものは再び集まる。これが、吸気と呼気。これが、誕生と死。これが、豊かであること。循環することはこの宇宙の本質のように見える。

ツイストペア番号 = TP22



- ツイストペアを構成する大成卦
53 : 風火家人 / 46 : 雷水解

- ツイストペアの意味

【回帰】

もとにもどること

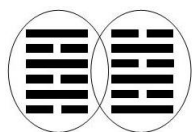
ほどけること

ふりだし（家）にもどる

- なぜその意味になったか

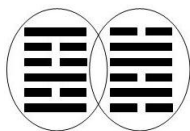
積荷を解き、役割から解放され（解）、ふたたび故郷に帰る（家人）。だれもが、いずれは一定の役目を終えて、ふたたび家に帰る。家にはまた、本来の役割が、本来の結びつきがある。

ツイストペア番号 = TP23



- ツイストペアを構成する大成卦
3 6 : 火水未済 / 6 3 : 水火既済
- ツイストペアの意味
【はじまりとおわり】
はじまりに組み込まれたおわり
おわりに組み込まれたはじまり
- なぜその意味になったか
始まりの混沌（未済）には、実は、あらかじめゴール（既済）が組み込まれている。
完成されたものには、実は、そこからはじまる無限の可能性が組み込まれている。
おわりははじまりであり、はじまりはおわりである。

ツイストペア番号 = TP24



- ツイストペアを構成する大成卦

73 : 山火贲 / 26 : 沢水困

- ツイストペアの意味

【内面と外面】

内面と外面のバランス

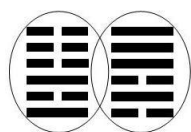
- なぜその意味になったか

贲は外見を飾り立てることであり、困は沢と坎でできており、双方とも水……深く流れる感情（坎）と表面的な感情（沢）をあらわす。

ペア全体で観ると、外見と、表面的な感情そして深い感情。やや外面にウエイトがあるようにみえる。

ものごとにはかならず目に見える側面と、目に見えない側面がある。目に見えない（証明できない）ものが真実でないとはかぎらない。

ツイストペア番号 = TP25



- ツイストペアを構成する大成卦
83 : 地火明夷 / 16 : 天水訟

- ツイストペアの意味

【エゴ】

分離

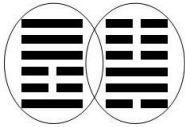
人工

無駄な力

- なぜその意味になったか

本源はその創造過程に夢中になるあまり、分離と判断の物質界に巻き込まれていった。しかしその本質は変わることなく、かたちを変えてわたしたちの内に宿る（明夷）。その片鱗は時に耐えがたい葛藤となって私たちの心に顔を覗かせる（訟）。

ツイストペア番号 = TP26



- ツイストペアを構成する大成卦
14 : 天雷无妄 / 85 : 地風升

- ツイストペアの意味

【スパイラル】

無為と上昇

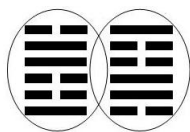
永遠に成長すること

魂の進化

- なぜその意味になったか

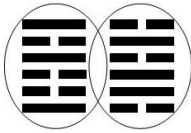
かかる時間もたどるプロセスも、個々の存在によってまったく異なるが、最終的にすべては上昇していく（升）。それが例外のない基本ルールであり、このルールはときに「自然」とよばれる（无妄）。

ツイストペア番号 = TP27



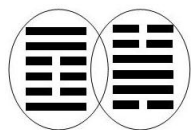
- ツイストペアを構成する大成卦
24 : 沢雷随 / 75 : 山風蠱
- ツイストペアの意味
【課題の清算】
さけられないプロセス
俯瞰する
- なぜその意味になったか
だれもができるなら遭遇したくない状況・課題がある（蠱、親のやぶれをただす）。
あきらめたりなげやりになったりするのではなく、必要なことであると、感じ、軽やかに従う（随）ことができたときこそ、高い視点を手に入れるチャンスである

ツイストペア番号 = TP28



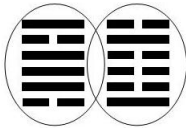
- ツイストペアを構成する大成卦
34 : 火雷噬嗑ゴウ<口へんに壺> / 65 : 水風井
- ツイストペアの意味
【瞑想のプロセス】
課題の解決とその後の静寂
ダイバー
- なぜその意味になったか
解決できない（口にはいらぬ）課題がふってくることはない。口に収まれば必ず
解決でき（ゴウ）、解決した後の口は単なる空虚ではなく、無限の可能性を秘めた
自己の内奥への入り口となる（井）。

ツイストペア番号 = TP29



- ツイストペアを構成する大成卦
54：風雷益／45：雷風恒
- ツイストペアの意味
【法則】
法（ダルマ）
宇宙の法則
- なぜその意味になったか
日常生活レベルではそうみえないことも多々あるかもしれないが、宇宙はその無限のリソースを惜しみなく、常にあたえ続けてくれている（益）。その活動は変化を起こす原動力となり、変化は終わることがない（恒）。

ツイストペア番号 = TP30



- ツイストペアを構成する大成卦

35 : 火風鼎 / 64 : 水雷屯

- ツイストペアの意味

【停滞】

良すぎる安定

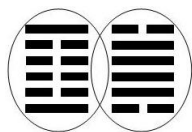
自己絶対化

- なぜその意味になったか

居心地がよくてその場所にとどまる（鼎^{*3}）。故意にとどまり続けるならそこには腐敗という変化があらわれる。行く手をふさがれその場所にとどまる（屯）。動く時機をうかがいつつとどまるならばそこには一筋の光明という変化があらわれる。変化は宇宙の法則である。

^{*3} ここでは「三本足でささえられた器＝安定」の意味にとっている

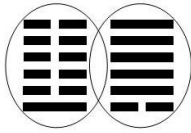
ツイストペア番号 = TP31



- ツイストペアを構成する大成卦
74 : 山雷頤 / 25 : 沢風大過
- ツイストペアの意味
【有限】
または「有限」という考え方
大きさの限られたパイ
ひとりじめ
たくさんのをを一気にくわえこむ
- なぜその意味になったか
一度に口に入れることのできるたべものの量には確かに限りがある^{*4}。しかし、生命をやしなうためにその口を通じて循環するたべものの量には限りはない。

^{*4} 「頤」は開いた口で、「大過」はその口に入りきらないほどの食べ物を（よくばって）くわえ込む姿、と観ている

ツイストペア番号 = TP32



- ツイストペアを構成する大成卦
84 : 地雷復 / 15 : 天風コウ < 女へんに后 >
- ツイストペアの意味
【出会い】
出会うこと
きざし
好機
- なぜその意味になったか
はじめの一步（復）は、いつも予期しない出会いから始まり（コウ）、プロセスは一定期間を経ていつもそこにもどってくるようにみえる（復）。

第Ⅳ部

その他のトピック・用語集・索引

易システムのバックボーン

ツイストペアホイール—— フルスペクトル

本文中で示したツイストペア・ホイール（図 6.37）の最中心には、先天図があります。発想のプロセスとしては、確かに先天図からはじまったわけですが、先天図は八卦によるダイアグラムです。

易システム全体としては、図 5.12 に示したように八卦以前に、四象、両儀という構造があり、これらの構造は帰納的にツイストペア・ホイールに組み込むことができます。

四象、両儀を組み込むことによって、ツイストペア・ホイールは易システムに含まれる要素すべてを体現するダイアグラムとなります。その様子を以下の図 11.1 に示します。

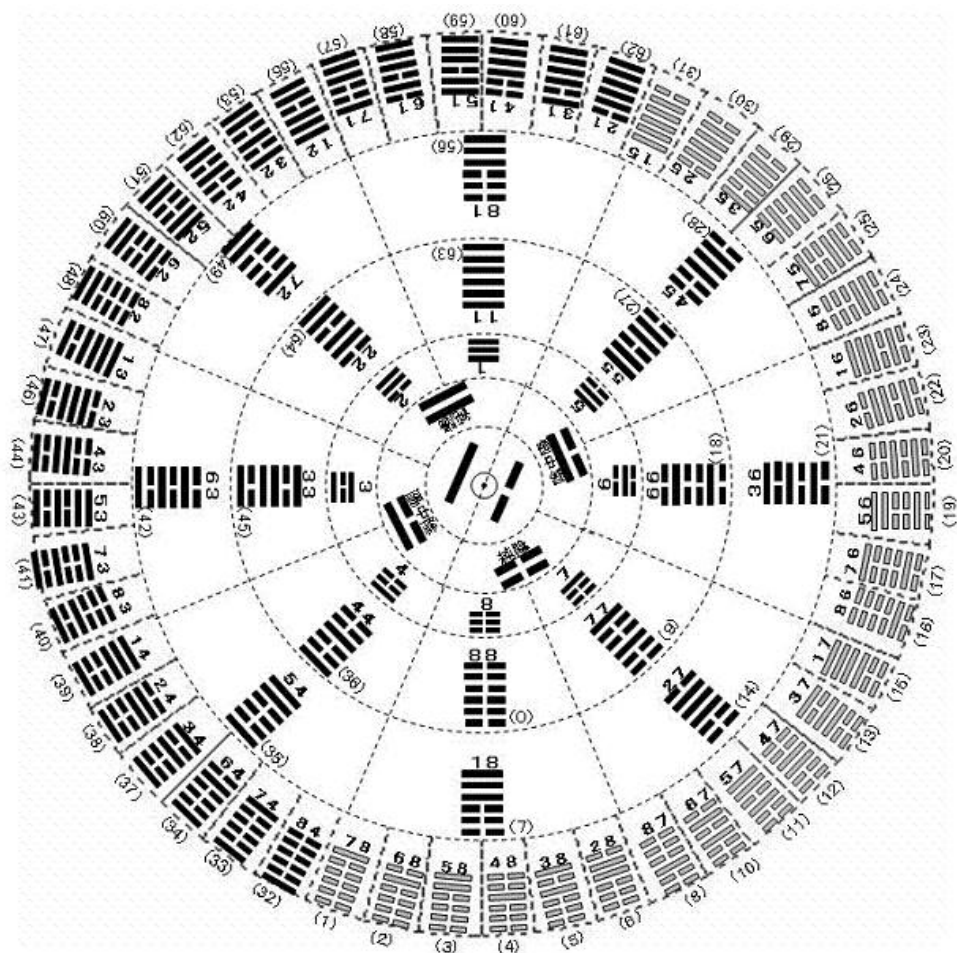


図 11.1 ツイストペア・ホイール——フルスペクトル

図 11.1 に示した易卦の天地は、周辺方向がすべて「地（下方向）」になります。すなわち、リムとその内側に配置された大成卦は、周辺方向の爻が初爻、そこから中心部に向かって二、三、四、五、上爻と積み上がっていく格好になっています。

各卦の天（上）に太字で書かれた番号は、各卦のコード番号です。下（地）もしくは右側に書かれた（ ）つきの番号は、ライプニッツ・コードで、各大成卦にふられた 0～63 の連番になります。

ライプニッツは、17～18 世紀のドイツの学者であり思想家ですが、易経に関心をもっており、1703 年、イエズス会宣教師ブーヴェを介して、六十四卦を円形方形にならべたダイアグラムを見せられ、自身の 2 進コードの研究に役立てたといわれています。

図 11.2 は、ライプニッツがアラビア数字の番号を書き込んだとされるダイアグラムで、

図 6.15（68 ページ）に示した伏羲六十四卦方位図と同じものです。

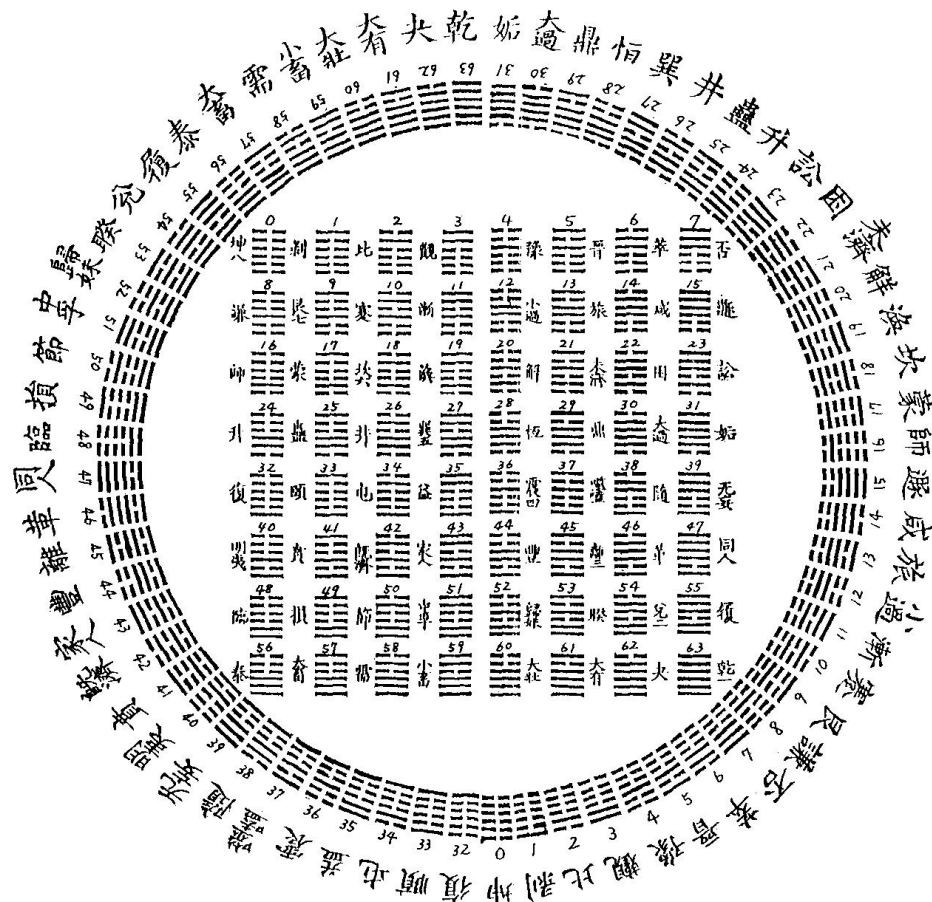


図 11.2 ライプニッツ版六十四卦方位図 [51]

図 11.2 における大成卦は図 11.1 のツイストペア・ホイールの大成卦とは天地が逆ですので注意してください。

この伏羲六十四卦方位図＝ライプニッツ版六十四卦方位図は、易システムにおけるマスターマトリクスと、表現の方法が異なるだけで実質は同じものです。いずれもコード番号＝易数＝先天数（乾兌離震巽坎艮坤の順で 1～8）順にもとづき大成卦を並べたもので、伏羲六十四卦方位図＝ライプニッツ版六十四卦方位図においては、その並びを天（○）、地（□）にかたどったものと思われます。

ライブニッツ・コードというのは、本書における造語で、図 11.2 でライブニッツが割り当てた番号のことです。

図 11.2 では、陰爻を 0、陽爻を 1 とみたてて、上爻＝0 ビット～初爻＝5 ビット目とした、6 桁の 2 進数であらわされる数値が各大成卦に割り当てられています。

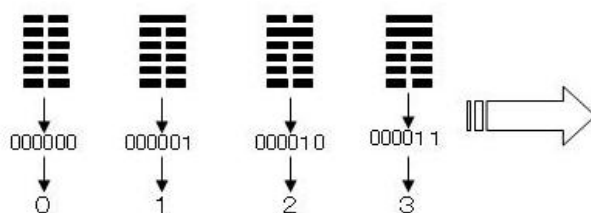


図 11.3 ライブニッツコード

易システムのバックボーン

本書の前の方で、占術は世界観を基盤にした応用技術である、というお話をさせていただきましたが（30 ページ）、それでは本書で「易システム」——私家版易経——と呼んでいるものの世界観・バックボーンとなるものはいったいなんでしょうか。いろいろな考え方があると思います。たとえば「第 5 章 顕現」における一連のストーリーをそのバックボーンであると考えられることもできます。

本書全体は「易システム」が構築されていった道程の記録のような側面も持っています。その構築の過程で、お互いが無二に絡み合った要素の対というものが非常に重要であるとの認識に至りました。なにしろシステムの根幹が、陰と陽という無二の対でなりたっているわけですから、当然の帰結ともいえます。

陰陽という対、四象という対、八卦という対。

六十四卦は万物をシンボライズします。

六十四卦はさらに純卦と先天大成卦とそれ以外にわけましたが、そこにも歴然と対はあり、これらをとくに「ツイストペア」と呼ぶことにしました。

ほんとうにリアルなのは本源のみであり、他はすべて幻想ともいえるのですが、この観点に立てば、対は本源を指差すふたつの幻想です。この幻想は個別化された意識が生じるレベルで、さらに日常時間という幻想を生み出します。

円は、その他の元型と同様、日常時間が生じる日常世界から、はるか本源を臨んだイメージのひとつです。本源を指す対を円——環状に配置したダイアグラムをツイストペア・ホイールと呼ぶことにしました。するとそれは、そのまま、私たちが暮らすこの宇宙——コスモス全体をあらわすダイアグラムにみえてきたのです。

これを「易システム」のバックボーンにしない手はありません。

円の外周には日常時間があり、わたしたちはこのレベルで泣き、笑い、悦び、怒ります。円の内側には日常時間とは異なる「放射状の『時間』」がありますが（スポーク（図 6.52、99）ページ）、これは日常生活レベルからすれば、「同時」とか「永遠の現在」とかとし表現しようのないもので、そういう意味では「時間」という言葉を使うのはおかしいのですが、他に適切な言葉もないし、またざろ述語を増やしても読者を混乱させるだけだとも思いますので、仮に「時間」と呼ばせていただきます。ただ、それだけでは日常時間と区別がつかないので、「放射状の時間」といっているわけです。語弊をおそれずにいいかえれば、スポークは「神様のプラン」をシンボライズしているともいえます。

図 11.1 に示したフルスペクトルのツイストペア・ホイールは、本来ただそれだけのもので、どうみてもいいのですが、「易システム」のバックボーン——世界観として観た場合、どのような様相を呈するのかイメージしてみたのが図 11.4 です。

へたくそな絵でも、時には言葉によるよりも雄弁に物語を語ることもあろうかと思い、マンダラのカタチをとらせていただきました。

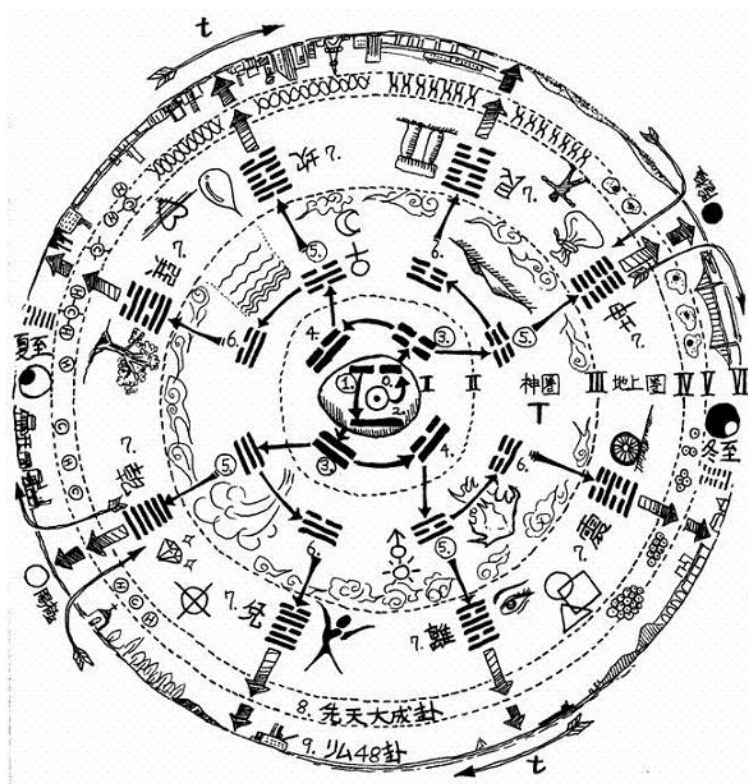


図 11.4 ツイストペア・ホイールのマンダラ

詳説するのは別の機会にゆずりたいと思いますが、あえて舌足らずなコトバを追加するとすれば、たとえば以下のように思います。

1 ☆	両儀	陰	器
2		陽	実質
3 ☆	四象	老陰	受動（うけいれるもの）
4		少陰	變動（かわるもの）
3 ☆		老陽	流動（ながれるもの）
4		少陽	発動（うごきだすもの）
5 ☆	八卦	坤	地（四大）＝うみだす力
6		艮	地、ささえる力
5 ☆		乾	風（スピリット、四大）＝おどる力
6		兌	風、よろこぶ力
5 ☆		坎	水（四大）＝うごく力
6		巽	水、いきわたる力
5 ☆		離	火（四大）＝かえる力
6		震	火、すすむ力

☆：☆印は、前提・本質・まずなければならないもの。すなわち、「用」に対する「体」。
☆印のないものが「用」。

「生命の木」とツイストペア・ホイール

「生命の木」は、ユダヤ教神秘思想である「カバラ」のバックボーンを成すダイアグラムですが、[14]などをみると、万物の構造を説明するフレームとしてとらえることができます。以下、主に同書[14]を参考に、ツイストペア・ホイールと生命の木の対比をみていきたいと思います。

図 11.5 は、カバラにおいて生命の木、以前の領域を示しています。この図はこのまま易システムの母体に対応させることができます。すなわち、「アイン；無」は「本源」に、「アイン・ソフ；無限」は、無極に、「アイン・ソフ・アウル；無限の光」はスピリットに。おおまかではありますが、意味的にも、それらはそのまま相互に対応していると考えてもいいと思います。

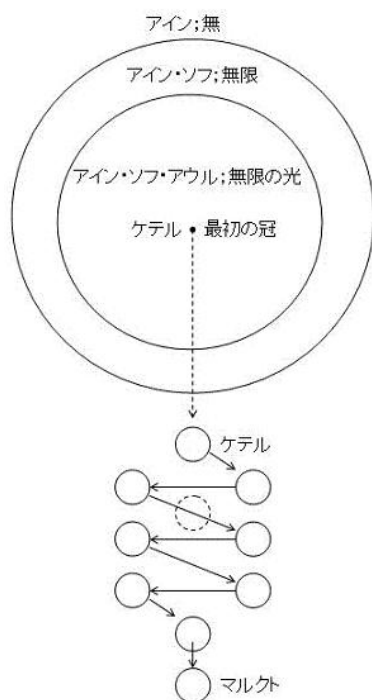


図 11.5 生命の木—アインからマルクトへ ([14] の図をアレンジ)

図 11.5 の中心に点として描かれているケテルから生命の木がはじまるわけですが、この創造過程をツイストペア・ホイールにおける中心からリムへと向かうプロセス、「創造の6ステップ」にあてはめてみると比較的ストレスなく、それぞれのセフィラに易システムの構成要素があてはまることがわかります。

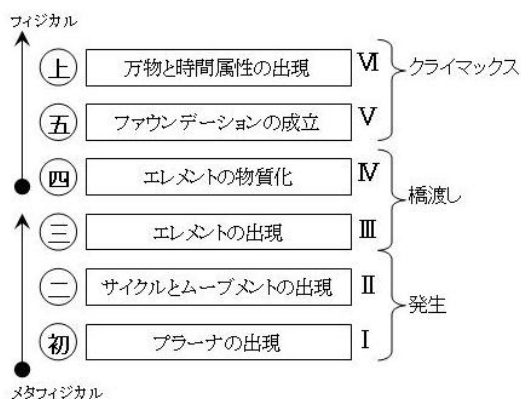


図 11.6 創造の 6 ステップ（銀河ツールにおけるとらえ方を追加）

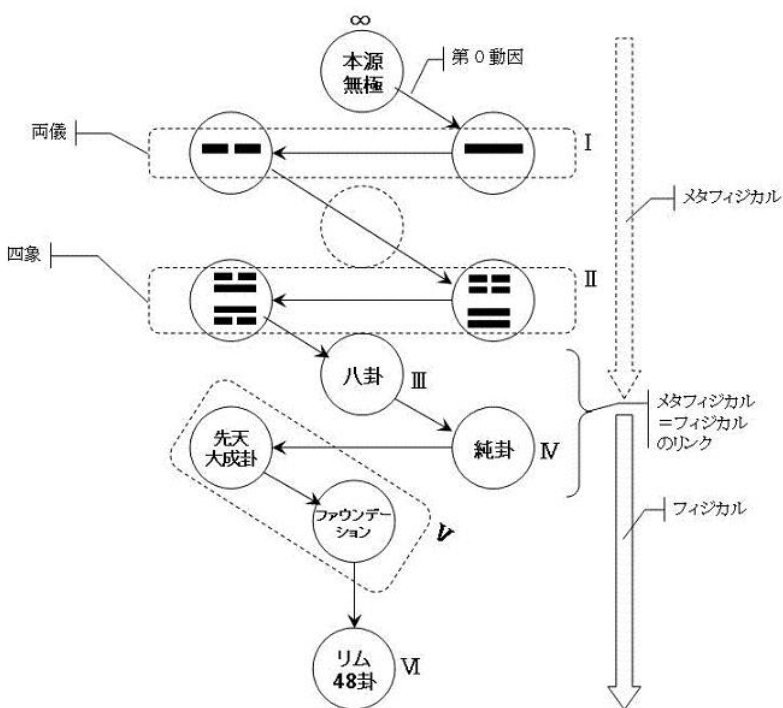


図 11.7 生命の木にあてはめた創造の 6 ステップ（ローマ数字の 1 ～ 6 は創造の 6 ステップ）

図 11.7 に示すように、生命の木の創造のプロセス（流出）そのままに、易システムの構成要素はごく自然に生命の木に組み込むことができます。いささか我田引水的可能性もありますが、このことはつまり、結局はカバラという伝統も易システムも同じものについて語っているという、間接的な裏づけにはならないでしょうか。双方とも同じ宇宙の中にあり同じ宇宙を記述しようとするシステムなわけですから、あたりまえといえあたりまえかもしれません。

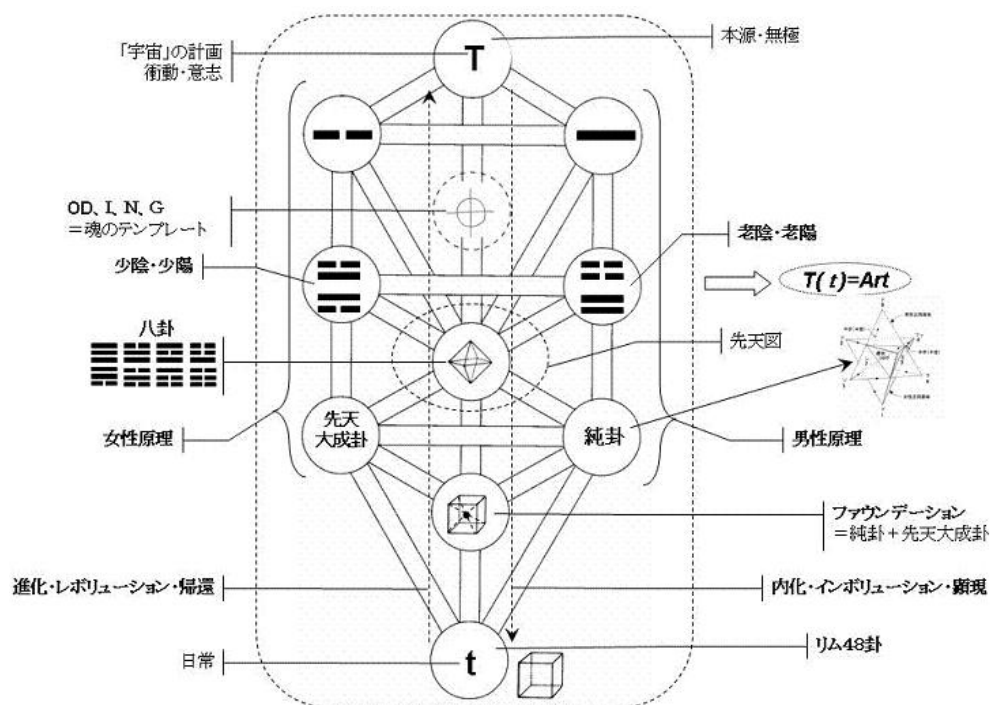


図 11.8 生命の木にあてはめた易システム構成要素

さまざまなベゼル

ツイストペア・ホイールにオリジナルのベゼルをはめ込む ——ベゼル作成の基準

ツイストペア・ホイール上では時間はリム上で初めてあらわれることになっていますが「時間」は各個人の意識の産物であり、「時間」が認識されるのはリム上というよりむしろ、その外側にはめ込まれるリング——ベゼル上であるということになります。リムはベゼルのかたどる鋳型のようなものです。「時間」のカタチは各個人の意識による認識・選択に依存しているため、極端に言えば各個人それぞれのベゼルがあるということが出来ます。以下に示すいくつかのシンプルなガイドラインをおさえておけば、手間はかかりますが、自分自身（の意識に）にぴったりあったオーダーメイドのベゼル——「時間」のカタチを考案することができるでしょう。

- 基本的な前提

以下のガイドラインは、ツイストペア・ホイール上における十二消長卦の配置と並び順を基準にしている。「図 6.49（95 ページ）」を参照。

- 基本周期

ホイール——円周上の一回り、一周＝ひとつの基本周期とする。たとえば、ベゼルが暦ならば、ツイストペア・ホイールの一周＝暦の基本周期＝一年となる。なお、ベゼルは必ずしも暦であるとはかぎらない。たとえば、人の一生であったり、何らかの天文周期であったり、あるいは、ある人のある一日であるかもしれない！いずれにしても、リム全体は時間をあらわすあるひとつのサイクル（単位）をあらわす。リム上には 48 の大成卦があるため、このサイクルは基本的に 48 の単位に分かれることになるが、この単位数はかならずしもベゼル上の 1 周期における単位数とはあわない。たとえば、「13 月の暦」をベゼルとしてとらえる場合、13 月の暦では 1 年（1 周期）は 13 分割されるが、48 は 13 で割り切れないため、なんらかの調整をする必要が生じる。

- 開始点

「84：地雷復」を周期のスタートポイントとする。「図 11.1（384 ページ）」におい

ては、おおむね7時方向に位置する。「84：地雷復」は、十二消長卦における冬至の卦であり、周期——1年の始まりである。

周期は「84：地雷復」にはじまり、その直前（図上では右隣の）「78：山地剥」で終わる。

- 方向

リム上において時間が流れる方向は、ホイール上の十二消長卦が推移する方向に順ずる。すなわち、リム上では物事は右回りに進行していくものとする。「図 6.49 (95 ページ)」参照。

- 節

リムにおいては各ファミリーごとに節（セグメント）が形成される。すなわち、6つの大成卦ごとに全部で8つのグループを形成するわけだが、この節＝グループはかならずしもベゼル上の節とは合わない。たとえば二十四節季においては、一節季あたりふたつの大成卦が対応するため、ひとつのファミリーには三つの節（節季）が含まれることになる。

- 対称性

ツイストペア・ホイール上で向かいあうふたつの大成卦は、それぞれツイストペアを構成している。それぞれのツイストペアはなんらかの関連性をもつものとする。たとえば「お互いに補いあってひとつ」「入力と出力」などの性質を有する、といったようなことである。

リム上でファミリーを構成する大成卦もその上卦において中心から表裏対称であり（「図 6.52」（99 ページ）参照）、対になる大成卦どうしは、上記同様に、なんらかの関連を持つものとする。

もちろん、社会を成り立たせていくためには各個人間で共通な標準ベゼルも必要です。この、社会システムが要求する標準ベゼルと個人の意識におけるベゼル、さらに自然界におけるベゼルが、強制されることなく完全一致した世界は、すなわち、人の心と社会そして自然のリズムが完全に一致したひとつの理想世界ということができるでしょう。

理想はともかく、現代社会においてもっとも一般的なベゼルはグレゴリオ暦というベゼルですが、このベゼルはこれしかありえないという標準ベゼルではありません。とかく人為による不規則性が目立つグレゴリオ暦以外にも、上記ガイドラインにしたがって、たとえば次から示すようなより自然界のリズムに合ったベゼルを考えることができます。

二十四節季というベゼル

純粹太陰曆による日付は太陽の位置と無関係であるため、曆と四季の周期との間にずれが生じて農耕等に不便でした。そこで、古代中国では、本来の季節を知る目安として、太陽の運行を元にした二十四節氣が曆に導入され、二十四節氣による曆と月の運行による曆とのずれが1か月程度になったときに余分な1か月（閏月）を入れて調節するようになりました*5。よくある誤解に、旧曆＝二十四節季というものがあります。旧曆は上記の説明にあるように、月の満ち欠けによる曆（太陰曆）と、太陽の運行、すなわち太陽の黄道における位置による曆を組み合わせたものです。図 11.9 では、冬至（夏至）においては十二消長卦がリム上に現れるので、それらを基準点とし、右回りに1節季あたり二つの大成卦が対応させ、二十四節季をベゼルとして作成してみました。ちなみに図 11.9 は、「7.5 ベゼルから OD を導く（125 ページ）」で示した、二十四節季とリム上の四八卦の対応表とその内容は同じです。

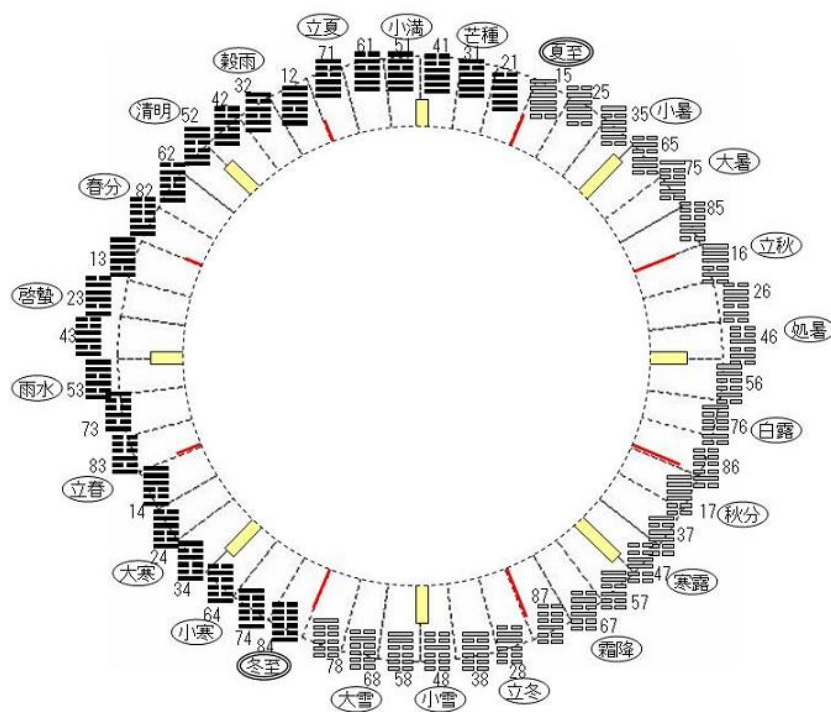


図 11.9 二十四節季というベゼル

*5 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より

地球暦というベゼル

地球暦は杉山開知氏によって考案されたいわば私家版の暦ですが、太陽系をそのまま上から見下ろした形がモデルになっている点でユニークです。この暦における目盛りは、ひとつの昼とひとつの夜であらわされる単位——いわゆる「一日」ではなく（！）、地球の公転軌道を一周 360 度とした「度」です。すなわち、この暦における「今日」は「何月何日」ではなくて、「××度」であるわけです。太陽の運行——天球上において太陽が一年かけて移動する道筋（黄道）は、この公転軌道が天球上に投影されたものです。二十四節季は黄道を二十四等分したもので、そのまま地球暦に組み込むことができます。

以下の点に留意し、地球暦をベゼルとして作成してみました（図 11.10）。

- 開始点と方向

地球暦においては、立春（例年 2 月 4 日近辺）が開始点となっている。その点は矢印で示した。リム上の大成卦は二十四節季の冬至（84：地雷復）から、地球暦にあわせて左回りにツイストペア・ホイール上の卦を並べかえて配置した。

- 目盛り

二十四節季の各日付は例年における平均日付であり、目安である。実際には一日程度前後することがあるので、境界点近くでは注意を要する。二十四節季は地球暦上では一節季あたり 15 度を占める。リム上の大成卦はひとつの卦につきその半分、7.5 度を占める。

- 節（セグメント）

各季節はふたつのファミリーを含む。各季節は創造の 6 ステップ（101 ページ）を構成する（初～上の表記）。各季節の前半と後半をしめるそれぞれのファミリーはさらにその下の階層の創造の 6 ステップを構成する。

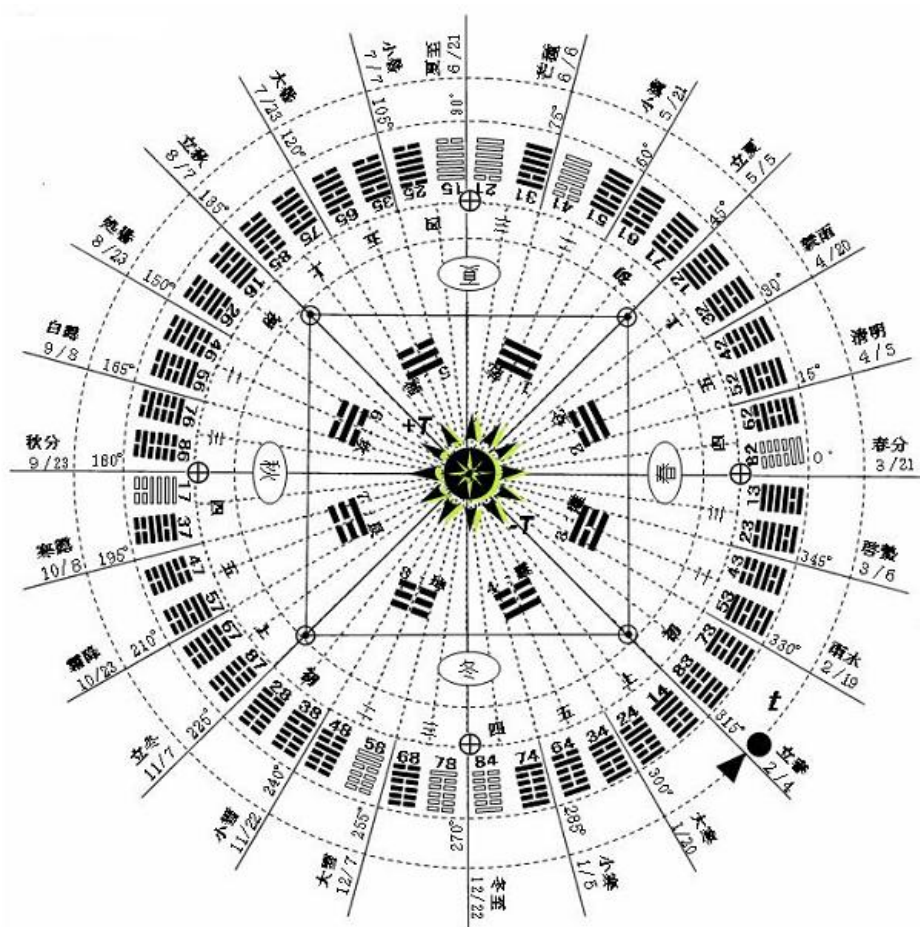


図 11.10 地球暦というベゼル

13 月の暦というベゼル

13 月の暦は、ホゼ・アグエイアス夫妻が考案した「銀河ツール」の一部を成すシステムで、実際の日常生活で使用できる「暦」です。 $28 \text{ 日} \times 13 \text{ ヶ月} + 1 \text{ 日}^{*6} = 365 \text{ 日}$ という 1 年の周期と $20 \text{ (の紋章)} \times 13 \text{ (のトーン)} = 260 \text{ 日}$ というツオルキンと呼ばれる周期を組み合わせたカレンダーであり、1 年という枠組みが地上的なものであり、ツオルキンと呼ばれる枠組みが宇宙的な（天上的な）ものであるとされています。^{*7}

この $28 \text{ 日} \times 13 \text{ ヶ月} + 1 \text{ 日}$ という「地上的な」フレームのみに着目し、それをベゼルとしてとらえ、図案化したものが図 11.11 に示す絵です。

$28 \text{ 日} \times 13 \text{ ヶ月} + 1 \text{ 日}$ というフレームは、銀河ツール全体から見るとほんの一部分であり、このベゼルはそのほんの一部との接点を描いたに過ぎません。 20×13 のツオルキン（調波モジュール）をはじめとする銀河ツールが有する膨大な他の構造との接点はとても考慮しきれるものではないことを一応おことわりしておきます。その上で、図案化にあたった際のポイントをいくつかコメントしておきます。

- 全体

全体は銀河系の形を模している。左腕と右腕の各卦はツイストペアを構成する。13 月の暦は、グレゴリオ暦の 7 月 26 日が一年のスタートになっている。グレゴリオ暦の 7 月 25 日が「時間を外した日」となる。

- 開始点と方向

13 月の暦は、グレゴリオ暦の 7 月 26 日が一年のスタートになっている。リム上の大成卦もこれにあわせて、7 月 26 日から始まる週に「84：地雷復」を配置し、そこから、ツイストペア・ホイール上の大成卦を左回りに並べかえている。つまり、時間は図 11.11 上では左回りに進行する。各月の名称とシンボルは十二消長卦によって示した。

- 節（セグメント）

一ヶ月あたり 4 つの卦が対応する。すなわち一週間にひとつの卦が対応する。中央部の点線で描かれた円の中で、上下左右 4 方位に置かれた卦は還元コドンである。そこから出る 4 つの放射状の領域は各還元コドンの支配領域（各還元コドンと下卦（ファミリー）が一致するグループ）である。ひとつの季節は 3 ヶ月であり、還元コドンの支配領域は季節の変わり目にまたがって、各季節の橋渡しの役割をしている。

^{*6} この一日は「時間を外した日」とされ、カレンダーのカウントには入れない。

^{*7} ツオルキン＝天上的、13 月暦＝地上的、という意味の出典は明らかではない。筆者が知人の 13 月暦ユーザから聞いた話。

- 調整

13 月＝見渡す月と 1 月＝地の月の卦の配当は同じとする。見渡す月は中央のオレンジ色の円にて表現した。

魂のテンプレートとの関連

自分の誕生日の 13 月の暦上の日付から図 11.11 を参照し、OD を導くこともできます。ただし、そうした場合、ある週に生まれた人たちはすべておなじ OD になります。

また、銀河ツールには、すでに、ツオルキンと易卦の対応表としての独自の「コドンコード先天図（20 の銘板）」があり、「7.5 ベゼルから OD を導く（125 ページ）」ではこの対応を尊重し、「コドンコード先天図」を利用して OD を定めています。

この対応を利用して OD を定めると、連続した 4 つの KIN 番号ごと（4 日ごと）に同じ OD となります。

また、誕生日がツオルキン（調波モジュール）の中央に位置する KIN 番号 129～132 だった場合、該当する OD（易卦）がない、ということになります。

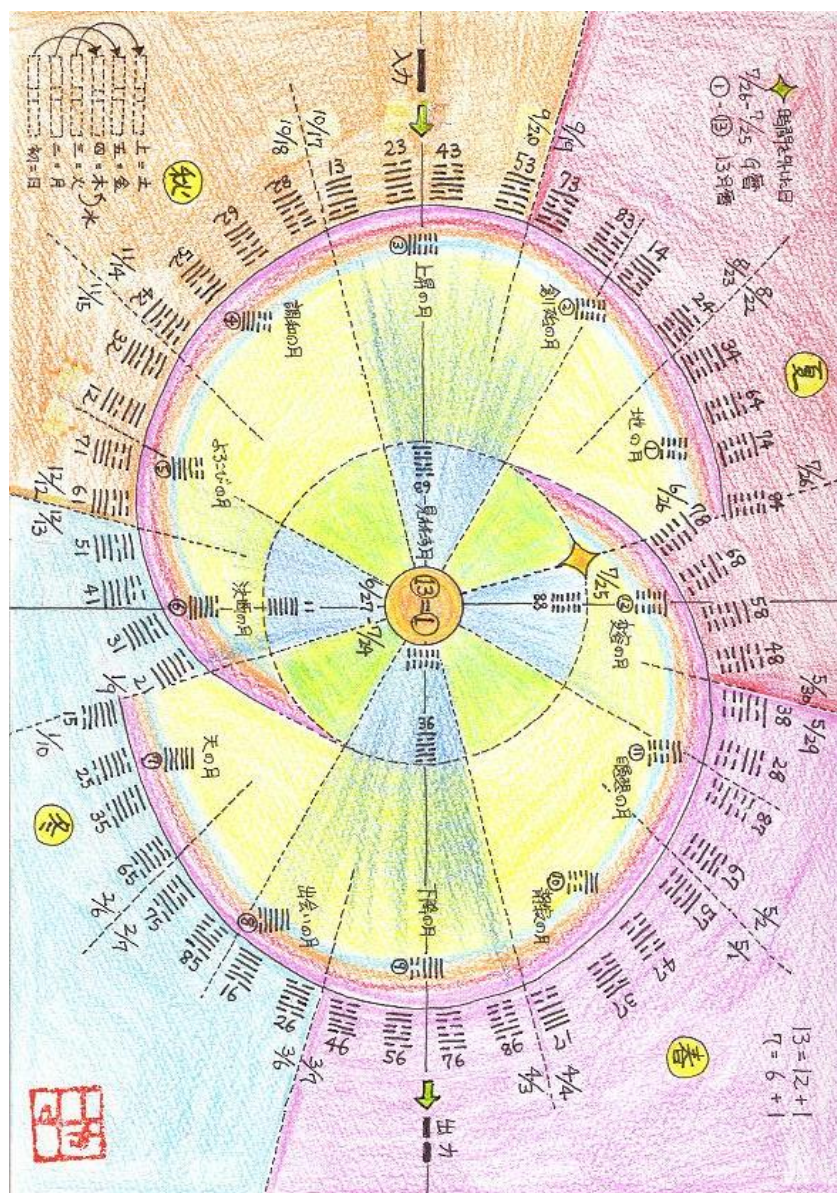


図 11.11 13 月の暦というベゼル

デシジョン・メーカーとしての易システム

占的に対して、YES または NO の答えだけを得たい場合は、たとえば次のような方法を使うこともできます。

問いを立て、大成卦を何らかの方法で無作為にひとつ取り出し（立卦して）、その陰爻、陽爻の数を数えます。その数によって A)～G) の判断をします。

A) YES!	6つの爻全部が「陽」
B) 強い YES	1つの爻が「陰」で5つが「陽」
C) 弱い YES	2つの爻が「陰」で4つが「陽」
D) どちらでもない	3つの爻が「陰」で3つが「陽」
E) 弱い NO	4つの爻が「陰」で2つが「陽」
F) 強い NO	5つの爻が「陰」で1つが「陽」
G) NO!	6つの爻全部が「陰」

また、この方法は得卦の勢い——エネルギー状態を知るための方法として占断の参考にすることもできます。陽爻が多ければ、占的そのものかあるいは相談者自身のエネルギーが強いことを示し（ポジティブ）、陰爻が多ければ、逆にエネルギーが弱いことを示します（ネガティブ）。

ポジティブ・ネガティブでわりきってしまうように見えるため、コイン投げと同じようにも思えますが、この方法では、YES か NO かのツートンカラーでなく7つのグラデーションがあります。

コイン投げと決定的に異なるのは、コイン投げでは YES! または NO! が出る確率は、表か裏かのフィフティーフィフティーであるのに対して、この YES/NO 判断では、明確な YES! または NO! の出る確率はそれぞれ $1/64=1.6\%$ で、非常に少ないことです。同様に、他のパターンも計算してみると、次のようになります。

A) 6つの爻全部が「陽」	1.6 %
B) 1つの爻が「陰」で5つが「陽」	9.4 %
C) 2つの爻が「陰」で4つが「陽」	23.5 %
D) 3つの爻が「陰」で3つが「陽」	31.3 %
E) 4つの爻が「陰」で2つが「陽」	23.5 %
F) 5つの爻が「陰」で1つが「陽」	9.4 %
G) 6つの爻全部が全部「陰」	1.6 %

(小数点第二位以下四捨五入)

回答に 1.6 %～31 %までのばらつきがあり、アンバランスにうつるかもしれませんが、観方を変えると、現実に即した数字のようにも思えます。

たとえば、A)～G) の意味を、以下のように考えてみると……

1. A) と G) = 明確にシロクロ決められること。
2. B) と F) = ほとんどシロクロ決められること。
3. C) と E) = だいたいシロクロ決められること。
4. D) = 簡単にはシロクロ決められないこと。

これに先のパーセンテージをあてはめると、

1. 明確にシロクロ決められること。……………3.2 %
2. ほとんどシロクロ決められること。……………18.8 %
3. だいたいシロクロ決められること。……………47.0 %
4. 簡単にはシロクロ決められないこと。……………31.3 %

となります。

日常生活をふりかえてみると、シロクロきちんと分けられることは意外と少ないのではないのでしょうか。

上のパーセンテージは、どの程度のことがすぐに明確化できて、どの程度のことがそうでないのか……その具体的な比率を示したモデルととらえることもできます。

すなわち、日常生活で出くわす問題の約半分は、おおむね明確にできますが（3）、約3割は時間をかけるとか状況が変わらない限り明確化するのは困難で（4）、最初からきっちり明確化できることはほとんどない（1）、ということが、このとらえ方をした場合、易システムが言わんとしていることである、と考えることもできます。実感は人により様々でしょうが、あなたはどのように感じるでしょうか。もしこのモデルに共感するところがあるのなら、こんなシンプルな方法でシステムに親しむの悪くないでしょう。

上 下	1	2	3	4	5	6	7	8
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								

図 11.12 マスターマトリクス上の三陰三陽卦（(4)に相当する卦）

「20 の銘板」と周易の用語対応

「20 の銘板」は銀河ツール（用語集（429 ページ）を参照してください）の中でも特に易と関係の深いシステムです。「20 の銘板」において、易は、「生命の普遍言語」として位置づけられるシステムの一部分ですが、易におけるシンボル表現は、銀河ツールという文脈で語られるとまた違った色合いを帯び、易を哲理を表現する言語としてとらえる場合においても、占術における解釈をする場合においても、非常に示唆に富んだものとなります。伝統的な易と20 の銘板における用語（表現）の対応を、わかる範囲で以下にまとめてみました。

伝統的易（周易）における表現	「20 の銘板」における表現 ※ページ数は「20 の銘板」ブックレットのページ数
両儀	聖なる創造の計画によって確立された二つの
陰	原初的な座標（coordinates） P138
陽	空間 時間
四象	二項文字（4 つの4 線の二項文字） P129
老陰（冬）	創造の二項言語 P138
少陽（春）	空間 (Space)
老陽（夏）	心 (Mind)
少陽（秋）	時間 (Time) 輝き (Radiance)

伝統的易（周易）における表現	「20 の銘板」における表現 ※ページ数は「20 の銘板」ブックレットのページ数
八卦（小成卦） 乾 正象＝天、卦徳＝剛健、父 兌 正象＝沢、卦徳＝説ぶ、少女 離 正象＝火、卦徳＝麗、中女 震 正象＝雷、卦徳＝奮う、長男 巽 正象＝風、卦徳＝従う、長女 坎 正象＝水、卦徳＝陷、中男 艮 正象＝山、卦徳＝止、小男 坤 正象＝地、卦徳＝従順、母	三つ組み（3線の三つ組み）P129 コドンの三つ組み P139、P148 時間 (Time)、天のしるし P148、創造的な送信、発生、父 P139 喜び (Joy)、海のしるし、魔法使いの歌、普遍の至福、三女 ヴィジョン (Vision)、光のしるし、太陽水晶、普遍の知恵、次女 エネルギー (Energy)、雷のしるし、種のわきおこり、力、長男 呼吸 (Breath)、風のしるし、思考の浸透、霊 (スピリット)、長女 ハート (Heart)、水のしるし、月水晶、普遍生命、次男 神殿 (Temple)、瞑想のしるし、山の門、普遍の心、三男 空間 (Space)、地のしるし、受容的なコード化、母体、母
六十四卦（大成卦）	64 のコドン、コドンの6線 P139 64 のウル・ルーンにひそむテレパシー秩序の機能と生産物 P138 E＝「64 の DNA 周波数」 P138
六爻の正位 初、三、五は陽位（奇数） 二、四、上は陰位（偶数）	第1、第3、第5の線は共振 P139 第2、第4、第6の線も同じ関係 P139

伝統的易（周易）における表現	「20 の銘板」における表現 ※ページ数は「20 の銘板」ブックレットのページ数
三才観（大成卦・小成卦） 天（才能） 人（働き） 地（基礎）	コドンによってあらわされる時空建築に対する固有の内なる力学 P139 クライマックス P148 橋渡し P148 発生 P148
応爻（正応・不応） 初爻と四爻の関係 二爻と五爻の関係 三爻と上爻の関係	第1（発生的な原初の三つ組）と第4（発生的な変容の三つ組）は対応する。 P148 第2（橋渡しの原初の三つ組）と第5（橋渡しの変容の三つ組）は対応する。 P148 第3（クライマックスの原初の三つ組）と第6（クライマックスの変容の三つ組）は対応する。 P148
上卦（四、五、上爻で構成される八卦） 下卦（初、二、三爻で構成される八卦）	上、外側、後期、成長結果、完了、向こう側 P148 下、内側、初期、発芽、形成、はじまりの質 P148
乾（父）＋陰爻＝長女（巽）、中女（離）、少女（兌） 坤（母）＋陽爻＝長男（震）、中男（坎）、少男（艮）	時間の娘たち P162 空間の息子たち P162
裏卦（錯卦：陰陽反転）	インバース
倒卦（綜卦：天地反転）	リバース
初一二三（下卦）、四一五一上（上卦）を各組をひとつの爻と観たてた四象。各組の陰陽はそろっている必要がある。すなわち、乾、坤、否、泰。この観方は伝統的易にはない。	4つのマスター二項コドン P186 乾＝老陽（超・時間の二項文字）：創生、時間が天の文字を書く 坤＝老陰（超・空間の二項文字）：根源母体、空間が地の文字を書く 泰＝少陰（超・輝きの二項文字）：発動、発動＞創生 否＝少陽（超・心の二項文字）：安定化＜根源母体

伝統的易（周易）における表現	「20 の銘板」における表現 ※ページ数は「20 の銘板」ブックレットのページ数
詮卦（大卦、大象） 初一二、三―四、五―上を各組をひとつの爻と観たてた八卦（各組の陰陽はそろっている必要がある）。	8つのゴールドエンコドン P186 意味は三つ組（八卦）に同じ
約象 大成卦の三―四―五爻でできる小成卦（八卦）のこと。 互卦 大成卦の二―三―四爻でできる小成卦（八卦）のこと。通常は約象＋互卦でできる大成卦を指して「互卦」という。	16の内なる還元コドン P186 伝統的易には互卦が16種類の大成卦に限られることに関する認識はない。
互卦のさらに互卦をとる概念は伝統的易（周易）にはない。	4つの根源的な支配力 16の内なる還元コドンそれぞれについてさらに互卦をとると、乾为天、坤为地、水火既济、火水未济の四つの卦になる。この四つの卦の互卦をとると、結果はやはり四つの卦のどれかになり、それ以上集約（還元）されることはない。この四つの卦をシステム全体を統べる4つの根源的な力とする。
「艮が上卦になっている8つの大成卦」をとくにひとつのグループとして扱う認識は伝統的易にはない。	8つのパカル・ヴォタンの神殿コドン 艮が上卦になっている8つの大成卦。

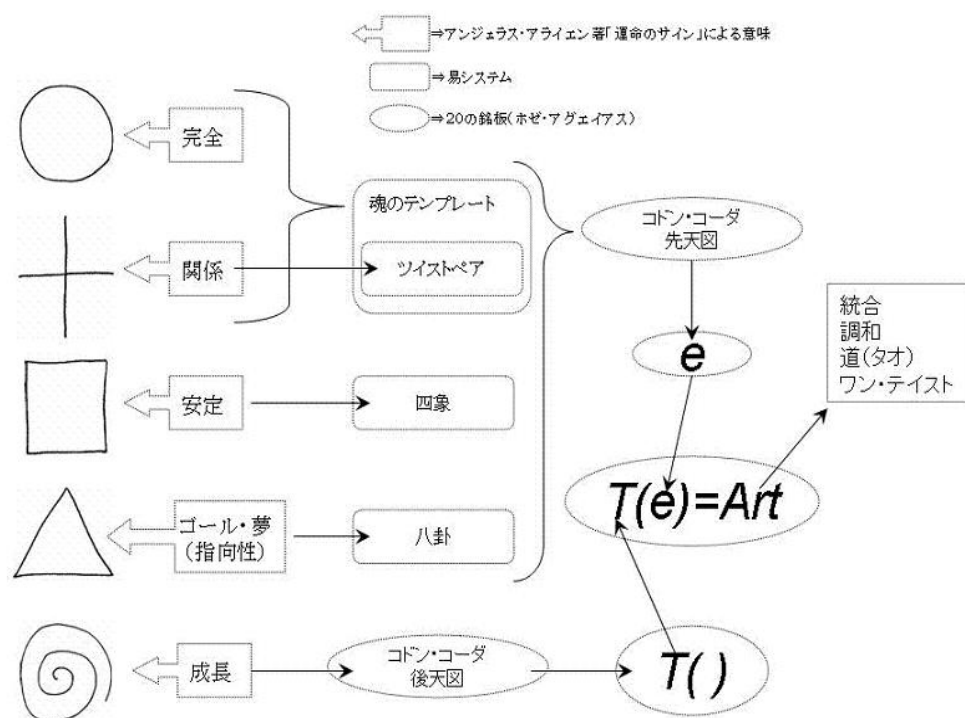


図 11.13 20 の銘板と易システムの対応

遺伝暗号と易卦の対応

オーバービュー——セントラルドグマ

遺伝情報は DNA 上に塩基配列として保存されていますが、この遺伝情報の一部がタンパク質合成に利用されます*⁸。タンパク質合成の概略は以下のとおりです。

まず、DNA 上の塩基配列が RNA 上の塩基配列にコピーされて（転写）、さらに最終的なタンパク質の設計図である mRNA 上の塩基配列がタンパク質上のアミノ酸配列に置き換えられることで（翻訳）、タンパク質が合成されます。DNA 上の遺伝情報を構成する塩基はアデニン（A）、グアニン（G）、チミン（T）、シトシン（C）の4種類です。mRNA 上の遺伝情報のコピーを構成する塩基はアデニン（A）、グアニン（G）、ウラシル（U）、シトシン（C）の4種類で、DNA 上における塩基のうち、チミン（T）がウラシル（U）に置き換わった配列となっています。

一方、ヒトの身体をつくるタンパク質を構成するアミノ酸は20種類で、mRNA 上の4種類の塩基（A、G、C、U）が3つつつ組になったコードにより、20種類のアミノ酸のうちどれかを指定することで、タンパク質構造の基礎*⁹が決定されます。この、mRNA 上の塩基配列をタンパク質上のアミノ酸配列への置き換える作業を翻訳といい、mRNA 上の塩基配列と20種類のアミノ酸との対応を遺伝暗号といいます。

*⁸ 構造遺伝子（シストロン）。タンパク質のアミノ酸配列や RNA のヌクレオチド配列を決定する遺伝子領域。

*⁹ 一次構造。タンパク質のもっとも基本となる構造で、タンパク質をつくるアミノ酸配列を一次構造という。タンパク質の構造はアミノ酸配列だけでは決まらない。このほかに二次構造、三次構造、四次構造がある。

遺伝情報は DNA から RNA、RNA からタンパク質へと伝わり、タンパク質は最終的に生体機能を発現します。遺伝情報は図 11.14 に示した方向へと伝わり、タンパク質側から DNA へと逆方向へは伝わらない——すなわち、生体機能が DNA 上の遺伝情報に影響を及ぼすことはないという原則を、分子生物学のセントラルドグマといいます。

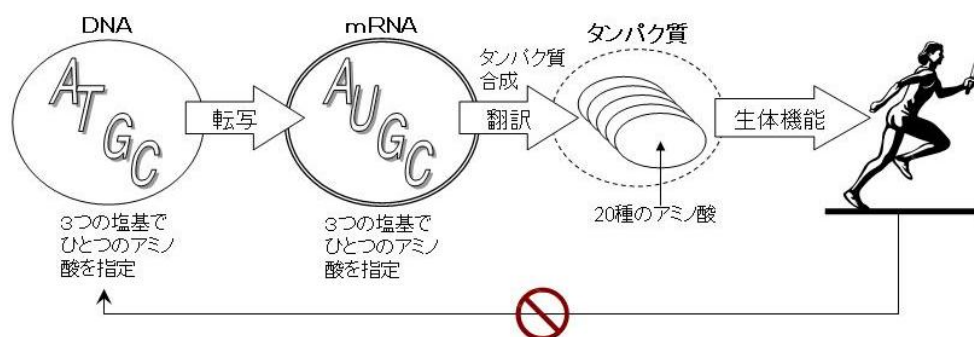


図 11.14 遺伝情報の流れ

また、ゲノムという観点からみると、ヒト・ゲノム^{*10} の場合タンパク質合成を含む遺伝に関係するのは全体のわずか 1.5 % 程度です。残りは Junk-DNA などと呼ばれますが、要するに意味・使途・機能が現在のところは不明ということでしょう。

遺伝暗号

遺伝暗号とは、mRNA 上の 4 種類の塩基、A、G、C、U が 3 つ組合わさってできたコードと、人体のタンパク質を構成する 20 種類のアミノ酸の対応表です。A、G、C、U が 3 つ組合わさってできたコードをコドンと呼びます。コドンのバリエーションは 4 種類の塩基が 3 つ連なったコードの組み合わせですから、 $4 \times 4 \times 4$ で、64 とあります。一方、これに対応するアミノ酸は 20 種類しかありません。つまり、遺伝暗号ではいくつかの例外をのぞき、複数のコドンが同じアミノ酸に対応しており、これを同義語コドンといいます。5' 側塩基^{*11} からの並びが AUG であるコドンは開始コドンとよばれ、そこからタンパク質合成を開始せよという命令です。

開始コドンにはメチオニン (Met) と呼ばれるアミノ酸が一对一に対応していますが、^{*12} 最終的にこのメチオニン (Met) はペプチド鎖から取り除かれることが多いようです。ま

^{*10} ヒト・ゲノムにふくまれる A、G、C、T の塩基対は約 30 億対 $\times$ 2 セット。

^{*11} 【5' = 5 ダッシュ (プライム)】ヌクレオシド中の糖の C 原子につけられた番号。RNA 合成は鋳型 DNA を 3' $\rightarrow$ 5' 方向に進み、RNA 鎖自身は 5' $\rightarrow$ 3' 方向に合成されていく。

^{*12} 他にコドンとアミノ酸が一对一に対応する組み合わせはトリプトファン (Trp) がある。

た、この 64 パターンのうち 3 パターンは、タンパク質合成をそこで終了せよという命令で、終止コドンと呼ばれます。終止コドンはどのアミノ酸にも対応していません。



図 11.15 遺伝暗号とアミノ酸の対応

遺伝暗号と易卦の対応

ご存じのとおり、易卦は陰爻と陽爻という、たったふたつの要素からなるきわめてシンプルなシンボル体系です。シンプルな分、様々なパターンでとらえることができ、たとえば、[51]、[35]などにみられるように、遺伝暗号とのあいだでも様々な対応をとることができます。基本的には四象を A、G、C、U の mRNA 上の各塩基に関連づけるのがもっともシンプルな対応であろうと思われます。

大成卦は四象×3の六爻で成り立っていますから、四象を mRNA 上の各塩基に関連づければ、自動的に大成卦はタンパク質上のアミノ酸に対応した三連塩基（トリプレット）に対応することになります。

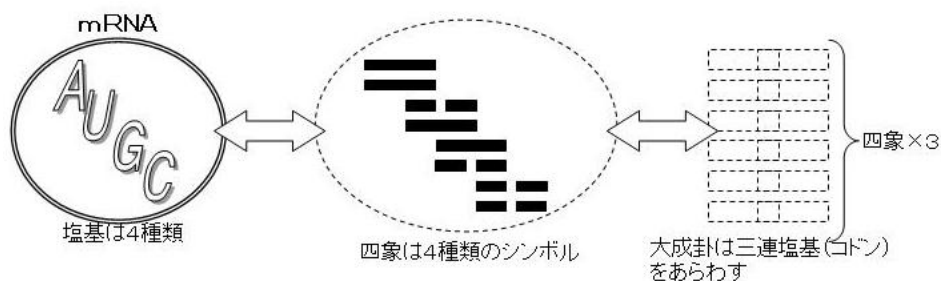


図 11.16 塩基配列・四象・大成卦

とはいえ、それでは、四象と各 A、G、C、U をどのように対応させればいいのでしょ

うか。それによって、三連塩基と大成卦の対応も変わってきます。

これも回答はひとつではありません。本書では「銀河ツール」の開発者であるホゼ・アグエイアス氏の考案した対応を採用し、「六十四卦リスト（215 ページから）」に収録しています。ホゼ氏を日本に紹介した高橋徹氏は [33] の中でこの対応を検証しており、ここではこの対応をホゼ＝高橋氏コードと呼びたいと思います。ホゼ＝高橋氏コードにおける四象と三連塩基の対応を図 11.17 に示します。

 少陽	G
 老陰	U
 少陰	C
 老陽	A

図 11.17 ホゼ＝高橋氏コードにおける四象と三連塩基の対応

$$A : U$$
$$G : C$$

これをふまえると、四象を塩基に対応させるときには、A : U、G : Cの組み合わせで、ツイストペア——陰陽が応じる関係を構成する必要があるということになります。

以上から、四象をA、U、G、Cにあてはめるとすると、以下の二通りのパターンが考えられます。

$$(1)$$
$$A = \text{老陽} : U = \text{老陰}$$
$$G = \text{少陽} : C = \text{少陰}$$
$$(2)$$
$$A = \text{少陽} : U = \text{少陰}$$
$$G = \text{老陽} : C = \text{老陰}$$

「老」と「少」について考える

ここから先は観方次第になります。

まず、DNA 上において、A : T、G : C それぞれの結合はその結合力が異なるということがあります。

A = T (mRNA 上では U) : H 2 つの結合作用 (弱い)

G ≡ C : H 3 つの結合作用 (強い)

であり、A : T 間における結合力のほうが、G : C 間における結合力より弱いといえます。

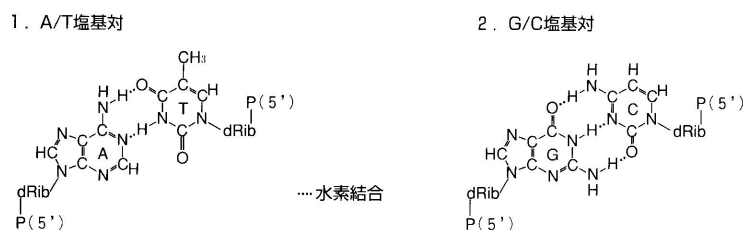


図 11.19 A = T、G ≡ C 結合 ([30] より)

もちろん、TとUでは物質そのものが異なりますが、この DNA 上における「結合力の強さ関係」をA、U、G、Cにもちこみ、さらに、「老」と「少」をその結合力の強弱に対応づけることによって、(1) か (2) の組み合わせを決めることができます。

老陰：老陽、少陰：少陽の各ペアを、各爻個別の対応で観るなら、その結合力は同じです。それぞれを単なるふたつの陰爻と陽爻が応じた組み合わせと観ることができるからです。この場合は(1)、(2)どちらとも決められません。

他方、たとえば、老陰：老陽のペアは、少陰：少陽のペアより結合力が弱いと観るなら、DNA 上では水素原子二つの結合で、結合力の弱いA = Tに相当するA : Uのペアを、老陽：老陰と考えることができ、(1) の配当に決めることができます。

そもそもなぜ、老陰：老陽のペアのほうが少陰：少陽よりも力が弱いと観るのか……

この意味づけは微妙なところです。「老」ですから若い方より老いている方が力が弱い、と考えることもできますし、老陰・老陽は純陰・純陽という極みにある状態ですから、変化しやすい、ひいては結合力も弱い方ととらえることもできます。冒頭にも書きましたが、観方しだいなのです。

配当の根拠は異なるかもしれませんが、ホゼ＝高橋氏コードは(1)の配当になっています。

「初」から「上」へ？「上」から「初」へ？

四象が3つあつまると大成卦ができます。

すでに述べたように、四象をA、U、G、Cにあてはめれば、三連塩基はそのまま大成卦に対応することは自明です。

しかし、mRNA 上における三連塩基の並びには開始と終了の方向があり、それを易卦の初爻→上爻の方向にむかってあてはめるのか、上爻→初爻の方向にむかってあてはめるのかによって、三連塩基と大成卦の対応は変わってきます。

ホゼ＝高橋氏コードでは、mRNA 上における三連塩基の開始→終了を、大成卦における初爻→上爻の、積み上げ式にあてはめており、伝統的な易卦の解釈にのっているものと思われます。

このやりかただとたとえば開始コドン＝AUGは、

G＝五・上＝少陽

U＝三・四＝老陰

A＝初・二＝老陽

で、大成卦全体としては、「山沢損」になり、本書のリファレンスにはこの対応を載せています。

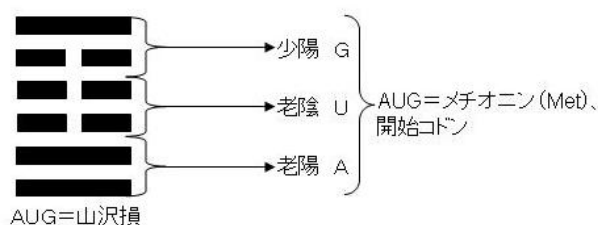


図 11.20 大成卦と三連塩基の対応例

ホゼ＝高橋氏コードにしたがって、マスターマトリクス上の大成卦を三連塩基のコードに置き換えたものが、図 11.21 に示した表です。

上 下	1	2	3	4	5	6	7	8
1	AAA Lys: リジ ン	AAC Asn: アス パラギン	AAG Lys: リジ ン	AAU Asn: アス パラギン	ACA Thr: トレ オニン	ACC Thr: トレ オニン	ACG Thr: トレ オニン	ACU Thr: トレ オニン
2	AGA Arg: アル ギニン	AGC Ser: セリ ン	AGG Arg: アル ギニン	AGU Ser: セリ ン	AUA Ile: イソ ロイシン	AUC Ile: イソ ロイシン	AUG Met: メチ オニン 開始コドン	AUU Ile: イソ ロイシン
3	CAA Gln: グル タミン	CAC His: ヒス チジン	CAG Gln: グル タミン	CAU His: ヒス チジン	CCA Pro: プロ リン	CCC Pro: プロ リン	CCG Pro: プロ リン	CCU Pro: プロ リン
4	CGA Arg: アル ギニン	CGC Arg: アル ギニン	CGG Arg: アル ギニン	CGU Arg: アル ギニン	CUA Leu: ロイ シン	CUC Leu: ロイ シン	CUG Leu: ロイ シン	CUU Leu: ロイ シン
5	GAA Glu: グル タミン酸	GAC Asp: アス パラギン酸	GAG Glu: グル タミン酸	GAU Asp: アス パラギン酸	GCA Ala: アラ ニン	GCC Ala: アラ ニン	GCG Ala: アラ ニン	GCU Ala: アラ ニン
6	GGA Gly: グリ シン	GGC Gly: グリ シン	GGG Gly: グリ シン	GGU Gly: グリ シン	GUA Val: バリ ン	GUC Val: バリ ン	GUG Val: バリ ン	GUU Val: バリ ン
7	UAA 終止	UAC Tyr: チロ シン	UAG 終止	UAU Tyr: チロ シン	UCA Ser: セリ ン	UCC Ser: セリ ン	UCG Ser: セリ ン	UCU Ser: セリ ン
8	UGA 終止	UGC Cys: シス テイン	UGG Try: トリ プトファン	UGU Cys: シス テイン	UUA Leu: ロイ シン	UUC Phe: フェ ニルアラ ニン	UUG Leu: ロイ シン	UUU Phe: フェ ニルアラ ニン

図 11.21 マスターマトリクス上の遺伝コード

グレイアウトした項目は、特殊な意味合いを持ったコドンです。具体的には、タンパク質合成の開始命令である「開始コドン」、タンパク質合成の終了命令である「終止コドン」、および、同義語コドンをもたない——すなわち特定のアミノ酸と一対一に対応したコドンの項目をグレイアウトしています。

全体を見渡してみると、同義語コドンは先頭二文字で同一のアミノ酸を指すことが多いように見受けられる以外、マスターマトリクス上での対称性などのめだった特長——「美しさ」はみられません。

コドンの先頭二文字が共通のグループは、マスターマトリクス上においては同じ行の 8 つある列のうち、前半 4 列、後半 4 列のまとまりとしてあらわれます。

少陰と少陽について考える——多数決？少数決？

さて、以上の考察においては、少陰・少陽は、その名称から暗黙のうちに少陰＝陰、少陽＝陽とみなして考察してきました。老陰・老陽は、その爻から観てもまじりけのない陰

であり陽であるので、老陰＝陰、老陽＝陽ということで問題ないでしょう。問題は前提的、暗黙的に少陰＝陰、少陽＝陽というふうに分類してしまっているものかどうか、ということです。

少なくとも陰爻、陽爻の数からその陰陽を判定することはできません。少陰も少陽もひとつの陰爻、ひとつの陽爻からできていることには変わりないからです。となると、少陰、少陽の意味の側面から観ていくしかありません。

少陰は少ない陰、陽の中にあらわれた陰の「きざし」、少陽は少ない陽で、陰の中にあらわれた陽の「きざし」です。

量の多い少ないで観れば少陰は陽が基盤になっており、あきらかに陰＜陽です。なんといっても陰が「少ない」ということです。

同様に、少陽は陰が基盤になっており、陽＜陰です。

こう観ると、少陰は全体では陽、少陽は全体では陰、ということになります。この観方にしたがうなら、前に示した塩基と四象の対応（416 ページ）は以下のようになります。

(1)

A＝老陽：U＝老陰

G＝少陰（全体では陽）：C＝少陽（全体では陰）

(2)

A＝少陰（全体では陽）：U＝少陽（全体では陰）

G＝老陽：C＝老陰

別の観方もあります。

前述の観方をいいかえると、陰陽の割合（量）の多い少ないで多数決をとり、多い方を全体の性質とする観方ということになります。これに対して、少数決、「きざし」として生じた性質を全体の性質として代表させるという観方で陰陽をわける観方もあります。このわけかたなら、少陰＝陰、少陽＝陽となり、前に示した塩基と四象の対応（416 ページ）における陰陽のわけかたでよいということになります。ホゼ＝高橋氏コードはこちらを採用しているということになります。

ちなみに、伝統的な観方で八卦の陰陽を観る際には、この少数決の観方で陰陽をわけます。すなわち、兌、離、巽は各八卦に含まれるひとつの陰爻で全体の陰陽を代表させて（主爻という）、「陰」とします。震、坎、艮はそれぞれに含まれるひとつの陽爻で全体の陰陽を代表させて「陽」とします。乾と坤は純陽、純陰なのでそのまま陽と陰です。

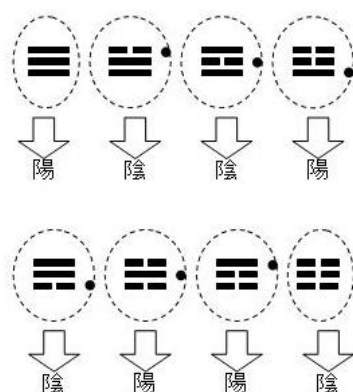


図 11.22 八卦の陰陽

以上は（「8.1 陰陽（160 ページ）」）で述べたように陰と陽はなにを基準とするかにより、さまざまに変化するという典型的な例です。いずれにしても、あるものの陰陽を述べるときには、なにを基準にそれを陰または陽というのか、その「基準」を明確にしておくことが重要です。

7 : 7 : : 7 : 7 の放射子の立方体 と「63 : 既済卦」

陰気と陽気はハート（中焦）で出会う？

銀河ツールそのものではありませんが、銀河ツールを応用するための装置ともいえる[4]の手帳をながめていると、易卦と関連する「コドンの立方体」と「放射子の立方体」というふたつの立方体が目につきます。

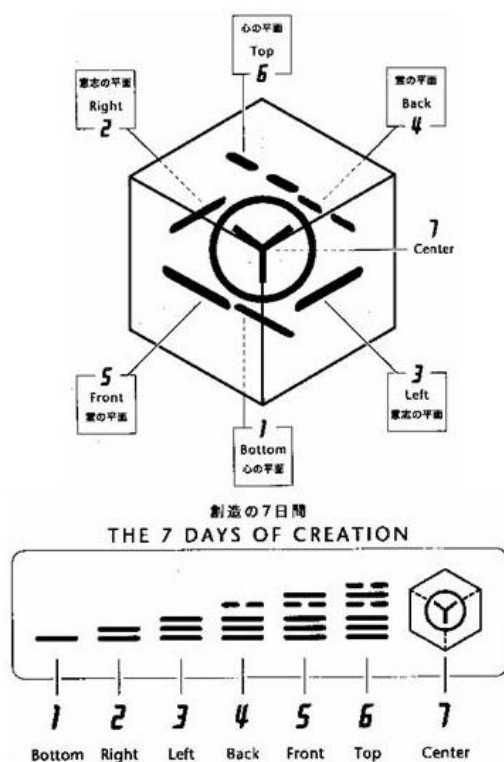


図 11.23 コドンの立方体 ([4] より)

立方体は、まずは、前後左右上下というファクターを有する現実世界のシンボルであり、6つの面があります。易システムに慣れ親しんでいると、「6」は大成卦を構成する爻の数をただちに思い起こさせるものですが、この各爻を立方体の各面という具体的なイメージに結びつけたことは、銀河ツールがもたらしたひとつの成果といえるでしょう。

「コードンの立方体」は、銀河ツールの「20の銘板 [25]」におけるイメージであり、一方「放射子の立方体」は、「7 : 7 : : 7 : 7」（なな・なな・なな・なな）と呼ばれる銀河ツールにおけるイメージです。

「コードンの立方体」では、初爻＝底面、二爻＝右、三爻＝左、四爻＝後、五爻＝前、六爻＝上面に割り当てられています。ある方から、「コードンの立方体」ではなぜこのように割り当てられているかわかりますか？ときかれたのに対し、まちがえて「放射子の立方体」の方の、各面への爻の割り当てについて私見を答えさせていただいたのが、このセクションでのお話のきっかけです。

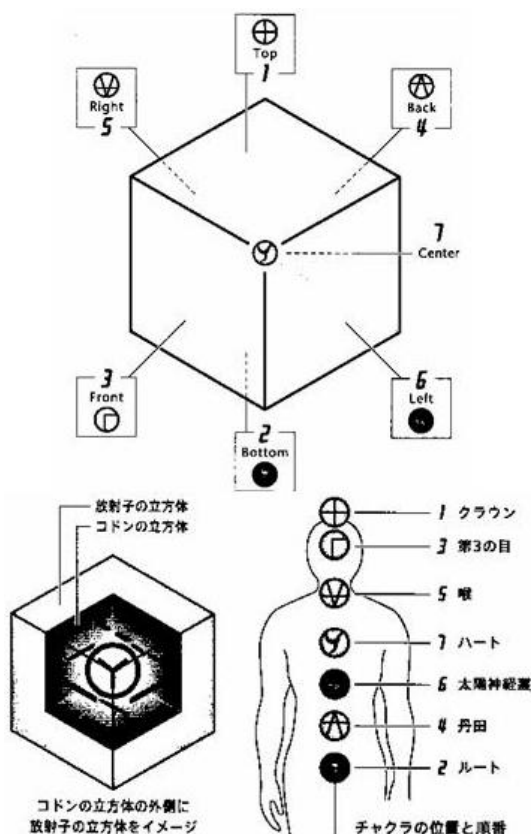


図 11.24 放射子の立方体 ([4] より)

銀河ツールについては、システムがカバーしている範囲が広大かつ多岐にわたっており、とても著者ごときが説明できるものではありません。上記質問の「コドンの立方体」における爻の割り当て根拠についても、初爻＝下（底面）、上爻＝上（上面）はともかく（天地）、中間の四爻についてはなぜそうわりあてられているか、いまだもってよくわかりません*13。

さて、「放射子の立方体」に示されている人体のエネルギーセンターの順番をながめてみると、7のハートを中心として奇数と偶数にわかれています。ということは、「63：既済卦」を放射子の立方体に準じた人体のエネルギーセンターにあてはめると、きれいに陰と陽にわかれるということになります。

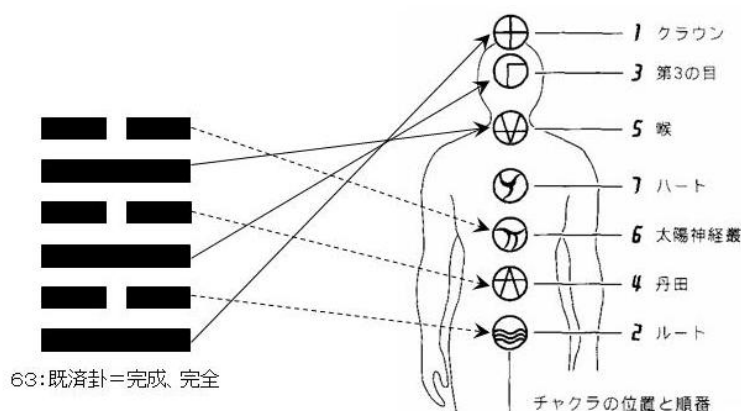


図 11.25 既済卦とチャクラの位置（チャクラの図は [4] より）

*13 おそらくは、立方体の中心で人が両手を広げて、正面 Front=5 を向いて立っている姿……がイメージソースになっている気がします。

既済卦の「完成」という意味からすると、図 11.25 は「完成された人間の姿」ということになるのかもしれませんが。「完成」——既済卦の爻を人体のチャクラの位置に配置しなおすと、陽気と陰気が、ハートで出会うカタチになっているようにもみえます。

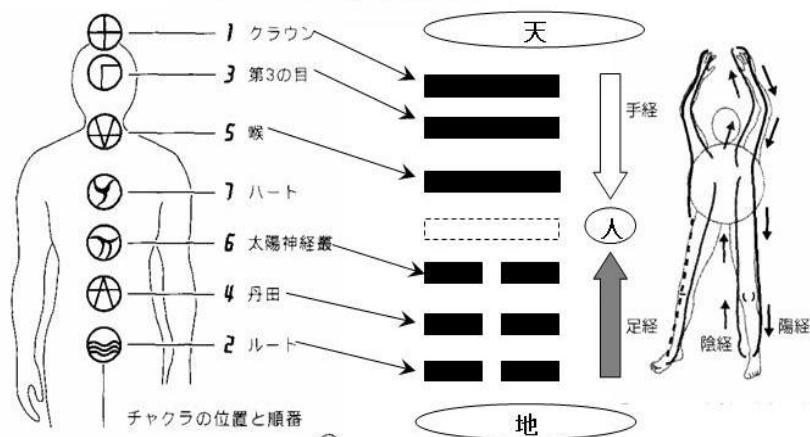


図 11.26 チャクラの位置に配置しなおした既済卦（チャクラの図は [4] より。人体図は [40] より）

陽気は上昇し、陰気は下降するという原則からいけば、図 11.26 ではまじり合わないようには見えますが^{*14}、一般的な東洋医学における流注では、陽経は天にある陽気を、陰経は地にある陰気を、それぞれ人の身体に引き寄せる方向に気を流すとされています（図 11.26、右の人体図）。その働きが健全に機能して、人の身体で陰気と陽気がまじり合います。

天空にある陽気、大地にある陰気、そのままではたしかに何も起こりません。陽気が天に昇り陰気が地に下った状態というのは、これから生命が活動するための「舞台」が完成した段階だとしたらどうでしょう。

その中間に「役者」である生命——人間が登場してはじめて、陽気と陰気がひきよせられ、混じり合って活動——「演劇」がはじまります。この活動こそが、本源がはるか昔からうまずたゆまずおこなってきた創造というプロセスが完成へといたるチャネルとなるわけです。

このように考えると、図 11.26 の中央、卦のカタチは、陰陽がまじりあわない姿、ではなくて、人体に陽が下降し、陰が上昇してきて「陰陽がであったその瞬間」の姿にもみえます。陰と陽はひきあって相混じり、万物を生むわけですが、その縮図が（理想的な）人の身体にも現れる……その直前の姿……でしょうか。この考えがもとになって放射子の立

^{*14} 18 : 天地「否」はカタチのままをとらえて、「陰陽が混じりあわず離れていく」という解釈がなされています。

方体における配置が導かれた……とは思えませんが、銀河ツールにおけるさまざまなイメージはときとして興味深い発見をもたらしてくれます。

チャクラと各爻の対応

さて、大成卦を一人の身体と観るとき、「陰気と陽気はハート（中焦）で出会う？（423 ページ）」で考察した既済卦と「放射子の立方体」の対応は、なにを語ってくれるのでしょうか。どの爻がどのチャクラに対応するのでしょうか。図 11.24 の各チャクラの番号を 1 = 初爻、6 = 上爻として、そのまま爻の位置にあてはめると以下ようになります。

爻位（大成卦）	チャクラ名称	チャクラが位置する人体の部位
上爻	6：太陽神経叢のチャクラ	上腹
五爻	5：喉のチャクラ	首
四爻	4：丹田のチャクラ	下腹
三爻	3：第3の目のチャクラ	額
二爻	2：ルート・チャクラ	会陰
初爻	1：クラウン・チャクラ	頭頂

（チャクラの名称は [4] に準じた。以下同様。ハート・チャクラは割り当てなし）

初爻＝下方、上爻＝上方という原則で大成卦の側を一人の人体として眺めてみると、各チャクラの位置がシャッフルされたようなかたちになってしまいます。残念ながら、どの爻がどのチャクラに対応するかということに関して「陰気と陽気はハート（中焦）で出会う？（423 ページ）」の考察が語ってくれることはあまり多くはなさそうです。しかし、チャクラの数という観点から考えれば、「陰気と陽気はハート（中焦）で出会う？（423 ページ）」の考察も得るところがあるようにも思えます。

大成卦と身体の対応について説明した「身体（167 ページ）」のセクションで、「一般的にチャクラの数は7とされているので、大成卦を構成する六爻ではひとつ足りないことになり、この部分でとらえかたにちがいがでてくるでしょう。」と書きましたが、これは要するに7番目のチャクラをどのようにとらえるかということになります。

大成卦を、あるイベントが起きてそれが完成するまでのひとつのプロセスとすると、7 = 「7 番目の爻」は、そのプロセスの「完成をも超えた」超越的なレベルであるにとらえることもできます。一方、チャクラを人間の発達段階のモデルとしてとらえるなら、超越的レベルに相当するのはクラウン・チャクラですから、これを「7 番目の爻」として、大成卦を構成する爻から外し、初爻～上爻を、身体部位と爻位の対応に従ってルート・チャクラから第3の目・チャクラに割り当てるというのもひとつのやり方だと思います。以下に「身体（167 ページ）」のセクションで説明した、身体部位と爻位の対応を再度示します。

爻位	身体部位	たとえば…の割り当て
一	頭頂	クラウン・チャクラ
上	額	第3の目のチャクラ
五	首	喉のチャクラ
四	胸	ハート・チャクラ
三	上腹	太陽神経叢のチャクラ
二	下腹	丹田のチャクラ
初	会陰	ルート・チャクラ

もうひとつ、コドンの立方体と放射子の立方体が語る重要なことは、大成卦にはあらわれない7 番目の爻はハートチャクラだということです。「7 番目の爻＝ハートチャクラ」とし、初爻＝人体の下方、上爻＝人体の上方という原則で残るチャクラをあてはめると以下のようなになるでしょう。

爻位	身体部位	ハートをセンターにした場合の割り当て
上	頭頂	クラウン・チャクラ
五	額	第3の目のチャクラ
四	首	喉のチャクラ
一	胸	ハート・チャクラ
三	上腹	太陽神経叢のチャクラ
二	下腹	丹田のチャクラ
初	会陰	ルート・チャクラ

配当はともかく、初爻から上爻までの6本の爻は立方体の各面に相当し、7 番目の爻は立方体の中心に相当するというわけです。陰と陽が出会い、創造活動がおこなわれるセンター、陰でも陽でもないハートというポイントこそが上爻をこえる7 番目の爻ということになります。コドンの立方体と放射子の立方体はその中心＝ハートが共有できてはじめて輝きだす……という解釈もなりたつのではないのでしょうか。

用語集

以下の用語集は主に本書独自の用語を中心にまとめてあります。

- 易システム

本書では、易の本体は六爻×六十四卦であらわされるシンボル体系とシンボル間のダイナミズムであるという観点にたっている。シンボル自体はどのようにとらえることもできる。この観点にたてばシンボルそのものの以外のすべては「シンボルに関するコメント」または「観たての例」ということになる。易経本文も（おそらくは最古の）シンボルに関するコメントということになるが、本書そのものも著者独自のシンボルに対するコメントということになる。この「著者独自のコメント」を本書ではとくに「易システム」と呼んでいる。

- エレメント

不可視で微細な要素が可視となる直前の姿。不可視の領域ではもっとも重く、粗大な要素。この要素がさらに重く粗大になるとエレメントは可視になり、実際の物質となったり五感で感じられるようになる。四大や四大の霊、精霊や自然界に働く基本的な「力」といったものを表現するときにもこの言葉がつかわれることがあるが、そういった力も含む。

- 下降（スピリットの下降）

スピリットが自ら有する性質に従って、その姿を物質界（日常世界）にあらわすその過程のこと。

- 還元コドン（銀河ツール）

六十四卦すべての互卦をとると、16種類の易卦が生じる。16種類の易卦のさらにその互卦をとると、その結果は4種類の易卦になる。最終的に生じた4種類の易卦は、互卦をとってもそれより少ない種類の易卦を生じることはなく、互いが互いの互卦をとった結果となる。最終的に生じたこの4種類の易卦を、銀河ツール（20の銘板）では還元コドンといい、易システムでは「先天四正大成卦」という。

（→先天四正大成卦）

- 帰還

スピリットが下降して個別の心を生み出した後、各個別の心が宇宙全体を認識し、すべてにいきわたっているスピリットを再認識する、その過程のこと。

（＝スピリットの上昇）

- 銀河ツール

ホゼ・アグエイアス夫妻による、長年にわたる中米マヤ歴の研究と実践を通してまとめられた「時間の宇宙論」に基づく、時間を学ぶための一連の学習教材。日本語化されたものとしては「ドリームスベル」「テレクトノン」「時間の法則の 20 の銘板」「7 : 7 : : 7 : 7 テレクトノンの啓示」などがある。(以上は「PAN ジャパン・ライブラリー^{*15}」を参考に記述)

- 顕現

不可視のものが可視となり、日常世界における実態となって現れること。(＝スピリットの顕現)

- コード番号

「乾兌離震巽坎艮坤」の順番で、1～8までふられた番号のこと。伝統的な解釈では「易数」または「先天数」と呼ばれる。易システムでは、コード番号は上卦をあらわすコード番号と下卦をあらわすコード番号を組み合わせて、大成卦をあらわすのにも用いられる。たとえば、地風升は上卦：坤＝8、下卦：巽＝5なので、「85」とあらわされる。

- コドン

mRNA 上の三連塩基（トリプレット）のこと。mRNA の塩基配列や、もともなった DNA の塩基配列を遺伝暗号という [30]。コドンには 64 種類あり、それぞれを大成卦と対応させることができるため、銀河ツールにおける文脈では「コドン＝易卦」の意味とされる。

- 三層構造

易システムでは大局的宇宙を、本源、無極、スピリットの三層構造で表現している。同様の構造は他の伝統においてもみられる。人間は宇宙の縮図であるので、人間もまた三層構造であらわすことができる。易システムでは、バックエンド・セルフ、フロントエンド・セルフ、ボディの三層がそれ。宇宙と人間の双方を表すことのできる大成卦というシンボルも、初爻／二爻、三爻／四爻、五爻／上爻というふたつの爻づつの組で三層構造として観る観方もあり、これを三才観という。伝統的な観方においては、地＝初爻／二爻、人＝三爻／四爻、天＝五爻／上爻とされる。道德経（老子）に有名な以下の言葉がある。

「道（タオ）は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じる」

これを易システムの文脈でいいかえると以下ようになる。

「本源は無極を生じ、無極は両儀（陰陽）を生じ、両儀はエレメント（八卦）を生じ、エレメントはリムを生じる」

また淮南子に「物は三をもって成る」とあるそうだが [32]、これを易システムの文脈でいいかえると、「リムはエレメントをもって成る」となる。

「3」という数字は元型的にすわりがよいのかもしれない。

「御者、馬車、馬」（スーフィー [48]）

「ボディ、マインド、スピリット」（精神世界一般）

「発生、橋渡し、クライマックス」（ホゼ・アグエイアス／銀河ツール）

「ターンオン、チューンイン、ドロップアウト」（ティモシー・リアリー）

「ふるいけや かわずとびこむ みずのおと」（一茶）

^{*15} <http://www.panlibrary.org/>

- 上昇（スピリットの上昇）

スピリットが個別化され、各個別化されたスピリットは、自身の本質がスピリットであることを一時的に忘却し、忘却というステップを経た上でふたたびスピリット自身に戻っていくこと。（＝回帰）
（→帰還）

- 女性原理（女性的）

スピリットを構成するダイナミズムには二つの側面があり、そのうちのひとつ。包括的、共役的、静的な性質。

- スピリット

本源から区分された生命活動の器となる部分。万物のエッセンス。万物の核に埋め込まれた傾向の総和。その「傾向」がもつ具体的な性質としては、対称性、自己組織化、自由意志（トライアンドエラー）などがあげられる。私たちのくらすこの宇宙の基盤である「無極」がベクトル化したもの、またはソウル（魂）の器になるもの。

- スパーク

各ファミリーにおける純卦と先天大成卦。ツイストペア・ホイール上で、ハブとリムの間にあるためこのように呼ぶ。

- 先天大成卦

先天図から導かれる八つの大成卦。先天図各方位において、当該方位の八卦を下卦、対面方位にある八卦を上卦として構成される。

- 先天四正大成卦

8つの先天大成卦のうち、「東」「西」「南」「北」の各方位に配当される4つの先天大成卦。

東＝ 63：水火既済

西＝ 36：火水未済

南＝ 81：地天泰

北＝ 18：天地否

（→還元コドン）

- 創造の6ステップ

本源から万物に至る6つの段階。この段階は相似的に万物（創造物）にも組み込まれており、易システムでは大成卦を構成する六爻に象徴される。

- ソウル

本源からわかれた（区分された）生命の実質となる部分。スピリットが形作る器と組み合わせることにより、生命活動が行われる。ソウル自体は時間の観念をもたない。

- 魂のテンプレート

いくつかの易卦によってあらわされる、その人の人生の青写真。このように書くと「またか」とか「にたようなものがほかにもある」と思われる方も多いかもしれないが、易システムにおいては、アプリオリに与えられ変更もバージョンアップも不可能な設計図というと考え方

はしない。テンプレートはベゼル（＝自分の意識）の変更によって自由に選択できるダイナミックな構造である。

- 男性原理（男性的）

スピリットを構成するふたつのダイナミズムのうちのひとつ。分析的、上昇的、動的な性質。易システムでは2倍進数に象徴される。

- 調和原理

男性原理と女性原理の理想的な調和によって構成される、スピリットが上昇していく際の原動力。女性原理に代表される側面が基本の原動力となる。易システムではフィボナッチ数列に象徴される。

- ツイストペア

ツイストペアは、互いが表裏の関係にある、32対の大成卦のペア。マスターマトリクス上では「本源」を中心に放射状に並ぶ。

- ツイストペア・ホイール

ツイストペアを構成する易卦を輪状に配置したダイアグラム。易システムにおいては基本の図——バックボーンであり、わたしたちがくらすこの宇宙全体を象徴している、ととらえる。ホイール＝輪は、元型的なイメージであり、易システムでは、対称性や入力と出力、回歸すること、成長ラセンの二次元的表現、といった意味がある。

- 日常時間（t）

わたしたちがふだんの暮らしにおいて感じる／認識する時間。この時間は時計という機械の動作とは本来無関係な主観的なものである。これが時計の動作と密接な関係があるように感じられるのは錯覚であり、後天的に教育された（刷り込まれた）感覚／認識である。日常時間は、易システムにおいてはツイストペア・ホイールのさらに外側にはめ込まれる「ベゼル」としてあらわされる。「ベゼル」の文化的文脈による相違、それぞれのベゼルが仕組みとしてどの程度洗練されているかにより一概にはいえないが、日常時間の一般的な特質として以下があげられる。

- － 方向がある。
- － 逐次的（リニア、シーケンシャル）である。
- － 出会いと別れ、始まりと終わりがある。

- バックエンドセルフ

三層の自己モデル（ボディ、フロントエンドセルフ、バックエンドセルフ）において、最も内奥にある自己。潜在意識、ハイヤーセルフ、おおいなる自己。

- ハブ

ツイストペアホイールにおける中心部。「本源→無極」、「両儀」、「四象」、「八卦＝先天図」までの領域。

- ファウンデーション

六十四卦の基盤を構成する大成卦のグループ。先天大成卦と純卦、あわせて16の大成卦で

構成されるグループ。

- ファミリー

下卦に共通の八卦をもつ大成卦のグループ。下卦における八卦のコード番号がそのままファミリー番号となる。ただし、純卦は例外的にひとつのファミリーを構成し、そのファミリー番号は「9」である。

- プラーナ

創造の第一原理。「第一」といういいかたは「それ以前」がないことをあらわす。すなわち、それより前はとうだったか、それがおきたのはどこか、といった質問が意味を成さない。「無極」がはじめて「極」を持ち、そのバランスを崩したその瞬間に生じた「なにか」であり、万物を構成する基本要素になっている、その瞬間における特質。易システムにおいては陰と陽でシンボライズされる。両儀。

- フロー

わたしたちがくらすこの宇宙における本質の流れ。スピリットがもつベクトル量そのもの。スピリットが下降し、上昇していくプロセスそのもの。為さずして為す自然の流れ。フローから逸脱するのもフローに乗るのも原則、自由意志による選択だが、フローから逸脱したプロセスはやがて「停滞」という袋小路に落ち着く。

- フロントエンドセルフ

三層の自己モデル（ボディ、フロントエンドセルフ、バックエンドセルフ）において、ボディとバックエンドセルフの仲立ちをする自己。わたしたちが普段、心、とか、意識と認識している部分で、顕在意識とも呼ばれる。

- ベゼル

実際のところ、わたしたちが普段意識する日常的な時間は、ツイストベア・ホイール上では生じない。本文中においては、リムのレベルで日常時間が生じるとしているが、リムにおける十二消長卦があらわす時間の方向と、リム上の大成卦のならびによってあらわされる流れは、わたしたちが普段感じる日常時間の鋳型となる。ベゼルはリムのさらに外縁にはめこまれる各人独自の時間のカタチであり、個別化された各人の意識が宇宙というプロセスをとらえるテンプレートである。ベゼルに相当する具体的なシステムとしては「暦」ということになる。本来はひとはそれぞれ個別に時間のカタチ——暦＝意識のカタチ、を有しているのが実態であるため、ツイストベア・ホイールのさらに外側にはめこまれる着脱可能なリング——ベゼルという概念が生まれた。日常時間はこのベゼルにおいて生じる。

- ホゼ＝高橋氏コード

64 パターンある遺伝コード（DNA コドン）と、同じく 64 パターンある易卦の対応をとるひとつの方法。ホゼ・アグエイアス氏が「銀河ツール」の中で提示し、高橋徹氏が [33] などの中で検証している対応パターン。詳しくは、「遺伝暗号と易卦の対応（411 ページ）」を参照のこと。

- 本源

宇宙の宇宙。「すべて」のはじまり。ここでいう「すべて」とは、わたしたちがくらすこの宇

宙も含めた、他のすべての「宇宙」の大元という意味。

- マスターマトリクス

八卦を、乾兌離震巽坎艮坤の順番にタテヨコに並べ、その組み合わせで構成される大成卦の行列。

- ムーブメント

万物を生むもととなる源初の動き。第一原理の動き。第一原理が動き、サイクルを生み、動きとサイクルが八卦を生じる。フィジカルなレベル（実占上）では、大成卦における上下卦の動き。

- 無極

わたしたちがくらすこの宇宙の基盤として特殊化した、本源の一部。

- ライブニッツ・コード

「伏羲六十四卦方位図」にライブニッツ自身が割り当てたとされるコード番号。陰爻を0、陽爻を1とし、上爻を0ビット目（最下位ビット）、初爻を7ビット目（最上位ビット）とした場合の8桁の二進コード。坤為地は0、山地剥は1、水地比は2……のようになる。

- リム

ツイストペアホイール上の最外縁のこと。または、最外縁に配置された大成卦のこと。各ファミリーから純卦と先天大成卦をのぞいた6つの大成卦が配置される。したがってリムに属する大成卦の数は $6 \times 8 = 48$ 卦である。

索引

異卦同占, 108
 遺伝暗号, 411, 412
 陰, 11, 17, 42
 陰陽可分, 160
 陰陽互根, 160
 陰陽消長, 160
 陰陽対立, 160
 陰陽転化, 160
 陰陽を反転, 184

承ける, 45, 172

易システム, 3
 エマージェンス, 48

応爻, 170
 応じていない, 170
 応じている, 170

外卦, 168
 開始コドン, 412
 卦爻辞, 24
 卦辞, 24, 25
 象, 175
 カテゴリー・エラー, 21
 卦名, 163
 漢易, 177

帰還, 6, 32
 ギャップ, 164
 銀河ツール, 19

空間, 41
 偶然, 21
 位にあたらない, 165
 位にあたる, 165

卦, 9
 繫辞伝, 25
 下卦, 13, 168
 顕現, 6, 32

爻, 11, 17
 爻辞, 15, 18, 24, 25
 後天易, 68
 後天図, 68
 コード番号, 12, 196, 216
 互卦, 186
 五行易, 177

心, 20
 コドン, 412

錯卦, 184
 雑卦伝, 25
 三陰三陽卦, 82, 85
 三才観, 45, 166
 三連塩基, 413

之卦, 182
 四象, 43
 四正, 72
 13 月の暦, 132
 13 の月の暦, 132
 終止コドン, 413
 十二消息卦, 63, 188
 十二消長卦, 63, 188
 十翼, 24
 純卦, 64, 169, 176
 少陰, 44
 上卦, 13, 168
 象辞, 18
 象伝, 25
 少陽, 44
 序卦伝, 25
 女性原理, 34

ストラクチャード・ファンクション, 61
 スピリット, 38
 スピリットの下降, 34
 スピリットの上昇, 34
 スポーク, 89

世界観, 22, 30
 説卦伝, 25
 占的, 159
 先天易, 67
 先天図, 67
 先天大成卦, 83
 セントラルドクマ, 412

綜卦, 185
 創発, 48
 ソウル, 38
 尊位, 164

体, 70
 大卦, 179
 大成卦, 11, 17

魂, 38
魂のテンプレート, 109
断易, 177
象辞, 18, 25
男性原理, 34
象伝, 25

中筮法, 182
中を得る, 164
調和, 34

ツイストペア, 54, 216, 386
ツイストペア・ホイール, 69, 386
ツイストペア番号, 348

定位, 164
ディレクトリ, 108
転写, 411

倒卦, 185
同義語コード, 412
同卦異占, 108
得卦, 119, 159
得卦, 159
トリプレット, 413

内卦, 168

2 倍進数, 33

乗る, 45, 172

派生卦, 182
八純卦, 64
バックエンドセルフ, 36, 38
八卦, 11, 46, 195
ハブ, 89

ファウンデーション, 84
ファミリー, 98
ファミリーナンバー, 98
フィボナッチ数列, 33
不応, 170
伏卦, 182
伏羲, 67
物資, 41
フロー, 36, 38
フロントエンドセルフ, 36, 38
文王, 68
文言伝, 25

ベゼル, 121

ホゼ＝高橋氏コード, 414
ポテンシャル, 31
本卦, 13, 16
本源, 35, 38
翻訳, 411

マスターマトリクス, 56

マンダラ, 31

観たて, 107

無極, 40

約象, 186

用, 70
陽, 11, 17, 42

ライブニッツ・コード, 386

裏卦, 184, 216
立卦, 9
立卦法, 9
リム, 92
略筮法, 182
両儀, 42

老陰, 43
老陽, 43
六十四卦, 48

参考文献

- [1] Translated by Richard Wilhelm. I CHING~Book of Changes. Axiom Publishing, 2001.
- [2] C.G. ユング, R. ヴィルヘルム, 湯浅泰雄・定方昭夫訳. 黄金の華の秘密. 人文書院, 1980.
- [3] PANガイドブックチーム. 13の月の暦・ガイドブック. PANガイドブックチーム, 2005.
- [4] こよみ屋. 13の月の暦・手帳. こよみ屋, 2008.
- [5] アーサー・ケストラー, 田中三彦+吉岡佳子訳. ホロン革命—Janus. 工作舎, 1983.
- [6] アンジェラス・アライエン, 金田広志訳. 運命のサイン~望みをかなえる5つの手がかり. ワニブックス, 2003.
- [7] ウィリアム・リード. マインドマップ・ノート術. フォレスト出版, 2005.
- [8] ケン・ウイルバー, 岡野守也訳. 万物の理論. トランスビュー, 2002.
- [9] ケン・ウイルバー, 松永太郎訳. 進化の構造1、2. 春秋社, 1998.
- [10] ケン・ウイルバー, 大野純一訳. 万物の歴史. 春秋社, 1996.
- [11] シャーロット・バーニー, 丸子あゆみ訳. フナ 古代ハワイの神秘の教え. ダイアモンド社, 2005.
- [12] ジュボーン・ロバーツ, 糸川洋訳. 多面体と宇宙の謎に迫った幾何学者. 日経BP社, 2009.
- [13] ジョン・G・ナイハルト, 宮下嶺夫, 阿部珠理訳. ブラック・エルクは語る. まるくまる, 2001.
- [14] ゼブ・ベン・シモン, 松本ひろみ訳. カバラ入門. 出帆出版, 2002/4.
- [15] ダグ・ボイド, 北山耕平+谷山大樹訳. ローリング・サンダー~メディスン・パワーの探求. 平河出版社, 1991.
- [16] BASHAR+The Association ダリル・アンカ, 関野直行. ニュー・メタフィジックス. VOICE, 1991.
- [17] トニー・ブザン, バリー・ブザン, 神田昌典訳. ザ・マインドマップ. ダイアモンド社, 2005.
- [18] ドランヴァロ・メルキゼデク, 脇坂りん訳. フラワー・オブ・ライフ~古代神聖幾何学の秘密 (第1巻). ナチュラルスピリット, 2001.
- [19] ドランヴァロ・メルキゼデク, 脇坂りん訳. フラワー・オブ・ライフ~古代神聖幾何学の秘密 (第2巻). ナチュラルスピリット, 2005.
- [20] ドリーン・バーチュ, 奥野節子訳. エンジェル・ガイダンス~真のスピリチュアルメッセージを受け取る方法. ダイアモンド社, 2008.
- [21] ホセ&ミリアム・アグエイエス, 中村正明訳. マンダラ (新装版). 青土社, 2006.
- [22] ポーラ・アンダーウッド, 星川淳訳. 一万年の旅路~ネイティブ・アメリカンの口承史. 翔泳社, 1998.
- [23] マークサーストン, 住友進訳. 夢判断入門 (全面改訂新版). 中央アート出版, 2004.
- [24] マンリー・P・ホール, 大沼忠弘訳. 象徴哲学体系2 秘密の博物誌. 人文書院, 1981.
- [25] ヴァルム・ヴォタン&ボロン・イク (ホセ&ロイディーン・アグエイアス). THE 20 TABLETS OF THE LAW OF TIME~Sixteen Year Telektonon Cube of the Law. PAN インフォ

メーション, 2000/7/26.

- [26] 井田成明. 増補・現代易入門. 明治書院, 1980(昭和 55 年).
- [27] 永淵三郎, 永淵道彦, 仙田美智子. 周易試論～原型と活用. 明德出版社, 平成 7 年 (1995).
- [28] 王永平. 奇跡の八卦～あなたの天命を導く中国八千年の叡智. テラコーポレーション, 1997.
- [29] 笠原維信. 現代の周易. 株式会社プロスパー企画, 2008.
- [30] 林淳三監修, 後藤潔 編著, 倉沢新一, 高橋享子, 中村カホル, 平野直美, 南久則. 生化学. 建帛社, 2003.
- [31] 丸山松幸訳, 松枝茂夫監修, 竹内好監修. 中国の思想第 7 巻～易経. 徳間書店, 1965.
- [32] 宮城谷昌光. 歴史の活力. 文春文庫, 1996.
- [33] 高橋徹. 201X 年終末予言の秘密. 日本文芸社, 1994.
- [34] 高田真治, 後藤基巳. 易経 (上下). 岩波書店, 1969.
- [35] 今泉久雄. 易経の謎～2000 年目に解けた「八卦」の秘密. カップブックス. 光文社, 1988.
- [36] 朱宗元, 趙青樹, 中村璋八訳, 中村敏子訳. 陰陽五行学説入門. たにぐち書店, 1990.
- [37] 福江純. そこが知りたい天文学. 日本評論社, 2008.
- [38] 小原大典. 改訂増補版～宇宙の暦は 13 ヶ月. プレアデス出版, 2004.
- [39] 新村出編. 広辞苑第五版 (電子辞書版). 岩波書店, 1998,2002.
- [40] 仙頭正四郎. 標準東洋医学. 金原出版, 2006.
- [41] 鎗田宗准. 梅花心易入門. たま出版, 1997.
- [42] 鎗田宗准. 梅花心易精義. 東洋書院, 2007.
- [43] 池田晶子. リマーク 1997-2007. トランスビュー, 2007.
- [44] 中村璋八, 古藤智子. 周易本義. 明德出版社, 1992.
- [45] 藤堂明保, 松本昭, 竹田昇. 漢字源 (JIS 漢字版) (電子辞書版). 学習研究社, 1993.
- [46] 白川静. 常用字解. 平凡社, 2003.
- [47] 白川静. 新訂 字統 普及版. 平凡社, 2007.
- [48] イドリース・シャー編著. スーフィーの物語. 平河出版社, 1996.
- [49] 北山耕平. ネイティブ・マインド～アメリカ・インディアンの目で世界を見る. 地湧社, 1988.
- [50] 鈴木由次郎. 周易参同契. 明德出版社, 1977.
- [51] 蔡恒息, 中村璋八訳, 武田時昌訳. 易のニューサイエンス～八卦・太極図とコンピュータ. 東方書店, 1989.



AT THE FIRST ORACLE I INFORM YOU

「易システム ハンドブック」 — 私家版易経
Ver 2. 04

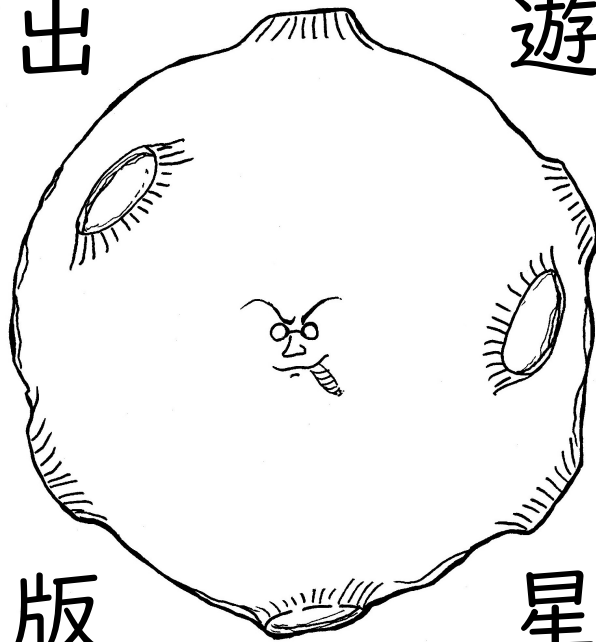
2022年3月25日

白橋 升
遊星出版

<http://athome.la.coocan.jp/index.html>

出

遊



版

星